

公募研究シリーズ

④⑥

協同社会運動の主体形成を促す史的視野の研究：新たな協同社会運動史教育をめざして

篠田 徹

早稲田大学
社会科学総合学術院 教授

全労済協会

発刊にあたって

本報告誌は、2011年度の全労済協会公募委託調査研究テーマ「絆の広がる社会づくり」で採用となった「協同社会運動の主体形成を促す史的視野の研究：新たな協同社会運動史教育を目指して」の研究成果です。

本報告書では、人類の歴史は協同の歴史であり、その根底には「絆の広がる社会づくり」があったとしています。したがって、大転換期を迎える現代の日本社会においては、新たな「絆の広がる社会づくり」の展望が求められているというのがその主張です。

一方、社会的な課題の解決策を講ずる主体として、企業や行政だけでなく、労働組合、協同組合およびNPO等の組織へも期待が寄せられています。本報告書では、これらの組織に共通する特質に着目して「協同社会運動」と定義し、「絆の広がる社会づくり」において主体的な役割を果たすことが期待される組織としています。さらに、これら「協同社会運動」が社会の課題を解決するために、行政や企業とも関わり合いながら、互いに力を合せることは必然であるともしています。共助の組織の取り組みがさらに「協同社会運動」として連帯し、「絆の広がる社会づくり」に一緒に取り組むことが不可欠であり、期待される役割は大きいとしています。

さらに、このような「協同社会運動」は決して新しいことではなく、意識的か無意識かを問わず従来からも実施されてきたとしています。このような社会的な連帯に改めて注目して、過去の大切な教訓を取りまとめたのが本報告書ということになります。

報告書は2部構成となっており、第1部では本研究の計画と実施について記述されています。続く、第2部では、「協同社会運動」による社会的な取り組みについて、労働運動や協同組合の事例や、さらには海外の事例などを幅広く紹介しています。

研究成果を「絆の広がる社会づくり」の歴史についての短編集として取りまとめたユニークな発想による報告書が、労働組合、協同組合およびNPO等、多くの皆様の理解の一助となれば幸いです。

「公募委託調査研究」は、勤労者の福祉・生活に関する調査研究活動の一環として、当協会が2005年度から実施している事業です。勤労者を取り巻く環境の変化に応じて毎年募集テーマを設定し、幅広い研究者による多様な視点から調査研究を公募・実施することを通じて、広く相互扶助思想の普及を図り、もって勤労者の福祉向上に寄与することを目的としています。

当協会では研究成果を「公募研究シリーズ」として順次公表しています。

(財) 全労済協会

第1部 研究計画と実施のあらまし	1
第2部 研究実施のあらましと成果	7
1. “裏声で歌え ‘共和国讃歌’ ” －トランス・パシフィック・サンディカリストという運動系譜－ “Sing in Falsetto ‘Battle Hymn of Republic’ ” : Trans-Pacific syndicalist as a movement family	8
2. 小さな物語が繋がり支え合う大きな世界の労働運動	24
3. 雨の日は映画館へ行こう！心を洗おう、語り合おう、労働文化耕論	51
4. 心をつくる労働運動 －次世代日本を見晴かし－	66
5. 「働くすべての人が主人公になれる社会をめざして」	71
6. なぜ『青森県労働運動史』は大事か。 －地域学における労働運動史の可能性－	76
7. 大阪社会労働運動史講座 講義録	83
8. いまこそみんなの水づくり労働運動に向かって	127
9. なぜいまなお総評なのか	129
10. 連合大学院に期待する人材育成	130
11. 労働運動と協同組合が結ぶ連帯社会への可能性 －なぜいま労福協が大事なのか－	142
12. なぜいまロバート・オウエンなのか	159
13. 国民・市民目線から見た春闘 ～開かれた春闘へ～	164

第 1 部

研究計画と実施のあらまし

1. 研究計画の内容

以下は、研究申請書に基づいて本研究の目指した研究計画の内容を確認する。先ず研究の概要は以下の通りであった。

「『絆の広がる社会づくり』を担う働く人々とその家族や近隣に、彼ら彼女らが自分達の未来構想を自ら実現する歴史的主体であることを想起させ、この運動への積極的関与を喚起出来る協同社会のための新たな運動史教育の有り方を、日本の既存運動史研究教育実践の批判的総括とこの領域で先進的な北米協同社会運動史の研究教育実践の批判的導入を通じて検討し、更にこの新視角から既存の日本と世界の社会労働運動史事例を再吟味し、新たな協同社会運動史教育の教材編纂を準備する。」

又この研究の目的とする処は以下の様であった。

「応募研究者は過去四半世紀余に亘って欧州、米国、日本、アジアの労働運動の現状と歴史を比較研究すると共に、講演等を通じて労働組合の教育活動に関与してきた。これらの経験は応募研究者に、労働運動に関する考え方は時代と場所によって異なり、また各国の運動経験が相互関連して来た事を痛感させ、現代日本の労組、生協、農協等の諸運動の棲み分けを前提にする研究教育手法に限界を感じて来た。この点で、募集テーマである「絆の広がる社会づくり」を協同社会運動と仮称するならば、近現代世界の社会運動は全てそこに含まれ、この総体的視野こそ「大転換期の日本社会の展望」に不可欠と考える。応募研究者は15年前の米国留学以来、労働史を初めとする北米の草の根協同社会運動史研究教育の伝統とそれが現実の運動(再)活性化を促す民主主義のダイナミズムに学びながら、その日本への批判的導入の機会と方途を模索し、その実験的成果を断続的に公表して来た。今回はこれをより包括的・系統的に試み、世界の中の日本協同社会運動通史として学習枠組みを検討し、事例集を含む教材編纂の準備に着手する。」

更に研究は以下の様な内容で計画された。

「本研究は、新たな協同社会運動史の研究教育に関する方法論の検討とそれを適用した事例の検討から構成される。夫々の検討計画は以下の通り。」

第1部 研究計画と実施のあらまし

あ) 方法論

A) 日本における既存協同社会運動史研究教育の批判的概観

- 1) 日本における既存政治社会運動史研究教育の批判的概観
- 2) 都道府県並びに市町村が編纂した地域労農運動史の再評価
- 3) 総合雑誌等における内外の政治社会運動批評と外国政治社会運動記録の翻訳並びに編纂文献が一般読者の世界観及び社会観に与えた影響
- 4) 協同社会的価値教育としての社会科教育、作文教育、図画教育等戦前戦後の学校教育の再検討
- 5) 協同社会的価値教育としての産組・農協、漁協、労組、生協、政党、他結社並びに団体、行政等が農村や職場で実施した戦前戦後の社会教育の再検討

B) 北米協同社会運動史研究教育の批判的概観

- 1) 協同社会運動史言説としての労働史研究教育の再検討
- 2) 協同社会運動史言説としての民主主義運動史研究教育の再検討
- 3) 協同社会運動史言説としての黒人解放運動史研究教育の再検討
- 4) 協同社会運動史言説としての基督教運動史研究教育の再検討
- 5) 協同社会運動史言説としての社会福祉運動史研究教育の再検討
- 6) 協同社会運動史言説としての労働フォークロア、フォークソング、労働児童図書の再検討

C) 総括的課題

- 1) 協同社会的価値教育としての戦後民主主義教育総体の再定義と再評価
- 2) 北米協同社会運動史言説の物語的特異性の抽出と批判的摂取

そして研究の成果は以下の様な形で想定された。

「上記(2)で示した様に、応募研究は新たな協同社会運動史研究教育の方法論とそれに基づく読み物の見本作製が期待される。またこれらの成果はその後継続的に広く社会的共有を目指して以下の様に事業化される事が期待される。

あ) カリキュラム化

- 1) 応募研究者が所属する大学で担当する講義課目でカリキュラム化され、学生に協同社会教育が提供される。
- 2) 小、中、高校での「総合的な学習」での授業素材として、夫々のニーズに応じてメニュー化される。
- 3) 社会教育の一環として地域事例を組み込みながら講座化される。
- 4) 労組、農協、漁協、生協、中小企業組合、信用組合、その他非営利団体における運動学習の一環として供される。

い) 応用事例の物語は、上記の各方面でのカリキュラム化に対応出来る教材化を目指し、新書版等の廉価な出版が期待される。」

2. 研究実施のあらまし

(1) 研究の妥当性：運動史教育への社会的要請と運動史教育革新の必要性

先ず何よりも強調したいのは、この1年の研究が、研究従事者に本研究の必要性を再確認させた事である。

この間幾つかの運動組織並びにその各級関係者と、講演や講義或いは寄稿への反応、又私的な意見交換や会話を通じて再確認した事は、労働運動を始め「絆の広がる社会づくり」としての協同社会運動全体に広がる閉塞感に対して、その突破口の一つとしての運動史への関心が増大すると同時に運動史教育の停滞が嘆かれる一方、従来手法に代わる新たな運動史教育の在り様を求めながらその方向性が定まらない状況であった。その意味で本研究従事者は、上記の研究概要が目指す処が一定程度の社会的共鳴を得られる状況を再認識した。この事は研究従事者が本研究応募時に希望的に予測した事であり、又それ故問題関心として抱いた点ではあったが、今回これが経験的ではあるが、事実として一定程度裏打ちされた事は、非常に重要な発見であると共に研究遂行を促進する積極的な環境要因ともなった。同時に研究遂行上鍵を握るのが、協同社会運動の再活性化に繋がる運動史教育の再興が、既存の経験の反復ではなく革新である事も確認され、その意味で、以下の応募研究テーマの目的の叙述にある運動史教育の現状に関する問題意識にも、一定の社会的要請がある事も確認された事は、本研究の完遂にとって極めて有意義な事であった。

その上で本研究で最も肝要と痛感されたのは、運動史教育を如何に革新するかという問題であり、本研究を通じて研究従事者は、これを既存運動史の再編統合とそれを可能にする新たな運動文脈の設定という問題として把握する事が出来た。この点で幸運であったのは、上記で参照例として挙げた米国の運動史の研究教育並びにその社会的普及の現状視察のために渡米した研究従事者が、同じく上記で言及した80年代以降の新「労働史」に続く新「左翼史」とも称すべき、新たな民主主義史の文脈設定に基づく米国の既存運動史の再編統合の諸実践例に遭遇出来た事であった。それは又以下の検討計画が一定の妥当性を有していた事をも意味し、諸外国を含め関係者との意見交換や日米の図書館や書店での関連文献の渉猟とその耽読という形に拠るこの計画遂行に於いて、研究従事者は、特に上記の方法論に於ける総括的課題で挙げた物語の展開手法について、多くの知見を獲得する事が出来た。以下では上記の方法論に従ってこれらの知見を整理する。

(2) 現段階に於ける研究の達成点：教材化とカリキュラム化の方向に於いて

本研究の一つの特徴は、先の研究概要で、「日本の既存運動史研究教育実践の批判的総括とこの領域で先進的な北米協同社会運動史の研究教育実践の批判的導入を通じて検討し、更にこの新視角から既存の日本と世界の社会労働運動史事例を再吟味し、新たな協同社会運動史教育の教材編纂を準備する」とある様に、それが大きく実践的な点にあり、又「応募研究により得られる期待成果等」で記述した様に、新たな協同社会運動史研究教育の方法論の案出とそれに基づく教材的読み物の見本作製とそれらの社会的共有を目指す即時ないし漸次の公益還元性にあった。

この点で本研究従事者は、この研究期間中に試論の形で、幾つか新たな教材化の素材となる作品を製作した。又公益還元性という点では、上述の通り教材化と同時にそれを用いる多様な協同

■ 第1部 研究計画と実施のあらまし

社会教育のカリキュラム化にも、研究課題として取り組んだ。

【太平洋協同社会運動史】

先ず本研究に於いては既存運動史の再編統合とそれを可能にする新たな運動文脈の設定が大事との認識から、先ず、欧州に於ける統合的市民社会形成を促進する欧州ないし大西洋協同社会運動史の発展、並びに南北アメリカに於ける統合的市民社会形成を促進するアメリカ大陸協同社会運動史の将来的展開という各地での此れ迄の運動及び研究教育状況に鑑み、アジア太平洋地域に於ける統合的市民社会形成を促進して来た太平洋協同社会運動史という文脈設定を行い、この見取り図と事例研究を拙稿「裏声で歌え『共和国讃歌』—トランス・パシフィック・サンディカリストという運動系譜—」梅森直之、平川幸子、三牧聖子編著『アジア地域統合講座 総合研究シリーズ第3巻 歴史の中のアジア地域統合』勁草書房、2012年6月という形で纏めた（第2部参照、なお第2部掲載稿はすべて初校にもとづくもので、出版時の最終稿と文中若干の異同がある）。

又同じ観点から日米労働運動の相似と太平洋運動史に於ける典型としてのそれという論述を、連合傘下の労組関係者が主な読者対象である社団法人国際経済労働研究所月刊誌『Int'lecowk』で、「小さな物語が繋がり支え合う 大きな世界の労働運動その1、2」（2012年10月、2013年2月）として展開した（第2部参照）。

更に上記の太平洋社会運動史という文脈に於いて極めて重要な賀川豊彦の協同社会運動実践を取り上げ、カリキュラム化を試みた。これについては、公益財団法人賀川事業団雲柱社賀川豊彦記念松沢資料館の協力を仰ぎながら、早稲田大学オープン教育設置科目 Trans-Pacific Leadership (助) 渋沢栄一記念財団寄附講座、米国オレゴン州ポートランド州立大学と共催で8月初旬東京開催)、同上社会科学部の2012年度秋季授業「ソシオダイナミクス2 (太平洋労働政治)」、The Japanese of the 20th Century : Work, Culture, and Societyの各授業に於いて、賀川豊彦の経験学習を通じた運動史教育を実施した。特に最後の英語に拠る授業では、米国ミネソタ大学 African American & African Studies/Asian American Studiesの Assistant Professor Yuichiro Onishiの授業、AFRO4105, Ways of Knowing in Africa and the African Diaspora (Fall 2012) と連携し、1930年代の訪米で賀川が主唱した協同組合運動が米国の黒人の間で強い反響を呼んだ史実に基づき、その際賀川が作成した英文パンフレット(邦訳あり) Brotherhood of Economicsを共通教材に学生が書評を交換しながら Trans-Pacific Dialogueを行った。同じ文脈から更に2013年6月に上記あ) 2) に該当する活動として、2013年度夏季秋季学期早稲田大学オープン教育設置科目 Trans-Pacific Leadership (助) 渋沢栄一記念財団寄附講座、米国オレゴン州ポートランド州立大学と共催で8月初旬ポートランド開催)の課題を、「東北に於ける持続可能性のあるコミュニティ復興とポートランド・モデル」とし、このための研究実習として、2013年度春季の早稲田大学オープン教育で開講する「JA共済寄附講座 震災復興のまちづくり」が行う岩手県田野畑村での実習への部分参加とポートランドでの関係箇所訪問実習を行い、その研究成果を学生は論文に纏めた。

【労働文化運動史】

他方既存運動史の再編統合とそれを可能にする新たな運動文脈の設定に関して、研究従事者は、従来政治経済的視点からの叙述が中心だった協同社会運動史に、社会文化的視点の接合が必要との考えから、労働文化の形成発展史の叙述に取り組み、その成果は、日本労働組合総連合会

(連合)機関誌『月刊連合』での対談・解説並びに現在も同誌連載中の「篠田教授の労働文化耕論」(2012年7月～)で、労働運動の教育宣伝教材化が図られている(第2部参照)。又同様の問題意識から、連合総研の月刊誌『DIO』(2013年4月)に寄稿した「心をつくる労働運動一次世代日本を見晴かし」で、経済成長と平和で民主的な戦後日本形成に対する戦後労働運動の文化的貢献について論じた。また電機連合の政策・研究情報誌『電機連合NAVI』(2013年10月)に寄稿した「働くすべての人が主人公になれる社会をめざして」で、戦後日米や農山漁村を含む労働文化の興隆を通じた民主主義の発展を論じた。これらはまた何れも、現在労働運動の中央組織である連合が現在組織を挙げてあらゆる運動面で総合的に取り組む「働くことを中心とした安心社会」の教育宣伝活動に資する事も意図している(第2部参照)。更に大学でのカリキュラム化の一環として、米国メイン州Bowdoin CollegeのAssociate Professor of Government and Asian Studies, Director of Asian Studies Program, Henry C.W. Laurence氏の2012年秋学期授業Japanese Politics and Societyに於いて、ゲストスピーカーとして1930～60年代の太平洋運動文化について講義を行った。

【地方運動史】

既存運動史の再編統合とそれを可能にする第3の運動文脈について、本研究従事者は全国各地の労働運動、農民運動、農地改革史を含む各種社会運動史を比較総覧しながら考察を重ねてきた。特に非工業地帯の協同社会運動史に於いては、労農両運動史の再編統合は不可避であり、現在本研究従事者はこれらをアジア太平洋地域ないし非西欧(東南欧、中南米を含む)地域に広がる奥地の協同社会運動史に於ける一典型として、新たな文脈設定を考えており、この点は2012年秋学期に学生並びに市民を対象とした青森県の弘前学院大学地域学講演で考察を加えた(第2部に添付した講演録はその元となった以前の原稿)。

更に以上の運動史の再編統合とそのための新たな文脈設定に於いて、市民が協同社会づくりの主体としてそうした記憶の戦略的組織化の担い手となる事を企図し、市民参加の運動史講座即ち公共史講座を全国各地で普及させる運動実践の手始めとして、本研究従事者は、社会教育の一環として、大阪社会運動協会の協力を得て大阪社会労働運動史講座を2012年10月から月例で行ってきた(2013年9月迄の1年予定)(第2部参照)。又この公共史運動の重要な担い手として期待する各協同社会運動組織の積極的な参加を働き掛けるべく、2012年12月の全水道の春闘討論集会での基調講演に於いて、運動史学習の再活性化を呼び掛けた。同様の試みは2013年2月の徳島地区労に於ける講演でも検討を試みた(第2部参照)。

【交叉運動史】

既存運動史の再編統合とそれを可能にする第3の運動文脈については、もう一つ隣接する運動の交叉史に注目して、そのことを運動当事者に強調し、実際の運動連携を促進する試みを重ねてきた。それは具体的には本研究期間後、労働運動と生協運動が協同で高等教育機関を立ち上げる連合大学院設立の際の記念講演や中央労働福祉協議会が労働組合運動との連携を再促進する学習集会での記念講演として、結実した。またそれらの運動連携の歴史的淵源の再発見を促す「なぜいまロバート・オウエンなのか」を前掲雑誌『DIO』(2014年1月)に掲載した(第2部参照)。そしてこれらの運動交叉の歴史と経験を踏まえて、同じく『DIO』に「国民・市民目線から見た春闘」(2014年9月)を寄稿し、ここで提言した「地域春闘フォーラム」の開催は、連合の2015春闘方針に盛り込まれた。

【教材作成準備と運動史良書の復刻】

上記方法論の最後に言及した教材化について本研究では、近現代の世界史、日本史、地域史を多様な協同社会運動の集積と捉え、そこから様々な人物や事例を採り上げ、それらを社会の絆を求めて止まない多様な人々の生き方暮らし方のオムニバス（選集）として物語る協同社会史書籍の編纂に向けて、その準備作業を行った。

その際に、多くの復刻すべき内外運動史書籍及び新訳すべき欧米運動史書籍を発見した。これらは今後意欲ある出版先並びに出版事業の後援者・組織を開拓すると共に、その出版事業は出来れば仮称「協同社会運動史選書」等の形でシリーズ化する等、継続的かつ網羅的な編纂態勢の整備に努める事が必要と認められた。

又この作業を含め或いはその前段として位置付けられ、こうした運動史教材を各地の多様な協同社会運動組織や市民集団が主体的に編纂する際の事例選びのヒントとなる様な多様な題材の可能性について、この後第2部で、本第1部のあらましを例示する形で拙稿を掲載する。

【今後の「運動史運動」への活動提言：協同社会教育協議会の設立】

最後に、ここでこの報告書の研究に基づき、一つの提言を行う。すなわち協同社会運動を構成する労働組合、労働金庫、労働者共済、労働者福祉協議会、農業協同組合、漁業協同組合、生活協同組合、商工会議所、商工会、中小企業協同組合、信用金庫、社会福祉協議会、NPO等は、「協同社会教育協議会（仮称）」を都道府県、市町村で結成し、地域の学校、大学、専門学校や社会教育機関、図書館、歴史博物館、関連団体等と広く連携しながら、労働、産業、環境、社会、人権、国際といった、身近な暮らしから地球社会の問題まで関連する諸分野と豊富な接点をもつ協同社会教育の講座開設、講師派遣、授業提供、教材開発等の事業を通じて、また地域で「絆の広がる社会づくり」に貢献出来る運動拠点づくりを行うべきである。この拠点づくり、とりわけそこで協同社会運動の歴史教育を行う講座の開設を促進する一助として、協同社会教育協議会は、今後海外、特に本研究でその先進性を発見した米国運動史研究で活躍する運動史教育、研究の専門家を招聘し、日本の関係者を交えて講演会や討論会を開催すべきである。また地域の協同社会教育協議会は、他国の地域に存在する協同社会教育機関と情報交換や相互訪問を行い、草の根レベルの協同社会教育の交流を行うべきである。

3. 研究成果の取りまとめとしての著作例示

以上で確認した様に、研究実施のあらましとその成果を、文中言及した文献で具体的に例示したのが次の第2部である。なお本掲載の文章と元掲載のそれには若干語句上の異動がある。

第 2 部

研究実施のあらましと成果

太平洋協同社会運動史

1. “裏声で歌え ‘共和国讃歌’ ”
ートランス・パシフィック・サンディカリストという運動系譜ー
“Sing in Falsetto ‘Battle Hymn of Republic’ ” :
Trans-Pacific syndicalist as a movement family
2. 小さな物語が繋がり支え合う大きな世界の労働運動（その1）（その2）

労働文化運動史

3. 雨の日は映画館へ行こう！心を洗おう、語り合おう、労働文化耕論
4. 心をつくる労働運動 ー次世代日本を見晴かしー
5. 働くすべての人が主人公になれる社会をめざして

地方運動史

6. なぜ『青森県労働運動史』は大事か。 ー地域学における労働運動史の可能性ー
7. 大阪社会労働運動史講座 講義録
8. いまこそみんなの水づくり労働運動に向かって
9. なぜいまなお総評なのか

交叉運動史

10. 連合大学院に期待する人材育成
11. 労働運動と協同組合が結ぶ連帯社会への可能性 ーなぜいま労福協が大事なのかー
12. なぜいまロバート・オウエンなのか
13. 国民・市民目線から見た春闘 ～開かれた春闘へ～

1.

“裏声で歌え ‘共和国讃歌’ ”

—トランス・パシフィック・サンディカリストという運動系譜—

“Sing in Falsetto ‘Battle Hymn of Republic’ ” :
Trans-Pacific syndicalist as a movement family

【アジア地域統合講座 総合研究シリーズ第3巻 歴史の中のアジア地域統合】

第1節 太平洋統合史、太平洋左翼、トランス・パシフィック・サンディカリスト

本稿は、多様な域内共同体模索の営為を集積するアジア太平洋統合史（以下特注以外アジア太平洋は太平洋）に於いて特異を成す1950年代の太平洋関係の形成、特にアジア太平洋史の歴史的命題である平等的かつ連帯的な想像的共同体形成と、それに伴う構成各国・人種・民族・階級・ジェンダーを横断する水平的太平洋意識発展の可能性に関する認識形成に、トランス・パシフィック・サンディカリスト（以下TPS）達が果たした役割を、書誌、読書、音楽、ジャーナリズム、文化史並びに知識社会学、民俗学、博物学の交点で叙述する。この叙述を通じて本章は、太平洋統合史における1950年代の特異性とそこに現出した太平洋左翼の存在の有り様とその歴史的系譜への注意を喚起し、太平洋統合史における運動思想或いは思想運動史的視点の重要性を再確認する。

欧州連合（EU）に結実した欧州統合史は又欧州社会主義運動の歴史だ。それは、EUの構成原理たる「社会的欧州」（Social Europe）に結晶化した思想・政策・組織共有に基づく平等的かつ連帯的な想像的共同体の形成史と、それに伴う構成各国・人種・民族・階級・ジェンダーを横断する水平的欧州意識の発展史を意味する（Sassoon 1996）。この社会的欧州史は、19世紀末社会政治（social politics）を牽引した東海岸中心の米国進歩主義（Progressivism）との交流史を包含し、近年は社会的大西洋史（Atlantic History）に迄広がる（Rogers 1998）。

では太平洋統合史はどうか。大西洋と違いそこに顕著なのは左翼史の脱落だ。大西洋と逆に太平洋統合で左翼はその外在的要因とされ、分断解体分子という権力及び対抗勢力の烙印が幅を利かす。又域内左翼自身、共産クレムリンを含む欧州崇拜に苛まれ、大西洋左翼も米州含め太平洋を運動不毛地帯と見た。此処に起因する左翼内の人種主義、帝国主義、植民地主義も太平洋左翼の発見を遅らす。結局域内左翼は長く欧州を基準に発育不全、異端、土着異文化の化身視された。左翼偏西風は依然風ぎぬが太平洋左翼史の樹樹も近年立ち上る。紙幅の制約故その毅然な風景は丹念に書き込めぬが、以下でその梗概を素描する。

太平洋左翼は、日常生活における政治的、経済的、宗教的、文化的権威権力ないし脅威から自由な幸福の追求が、社会的同胞愛に拠って全ての人々の間で公正、公平に実現される社会変革を目指した。大西洋左翼と異なり、太平洋左翼は階級と共に人種を重視し、場合に拠っては前者の連帯を成就する前提として後者をより重んじた。そのため両者の間には植民地主義、帝国主義に対する態度とその支配人種・民族集団と被支配のそれらとの関係で相違が生じた。こうした太平洋左翼は宗教団体から協同組合、急進的労組から新左翼党派に迄広範に存在したが、大西洋左翼、特に欧州左翼と異なり太平洋各国の政治において常に少数派ないし傍流であった。だが人々の生き方暮らし方即ち日常の価値観、社会観、行動様式、人間社会関係を包括する文化変容に対する影響は大きく、それは結果として時に大きな政治変化をもたらした（Kazin 2011）。特定の社

会形成を主導した社会政治勢力連合を歴史的ブロックと呼ぶ (Denning 1996)。太平洋各国の民主政治の批判的支持者として、太平洋左翼は例えば日本の革新勢力、米国のニュー・ディール連合等の歴史的ブロックの文化形成に貢献大だった。

TPSはあらゆる文化手段を用い自由と愛の多様な共感経験を企画する太平洋最左翼だ。その組織的共感空間の多くは小さく脆いが、それらが多様な媒介手段で繋がった想像の共同体は広大だ。又TPSは理想社会を徹底して語り、人々に社会変革の可能性を確信させ、それを文化的記憶で再生産させた。こうした活動家は有機的知識人 (organic intellectual)、戦闘的少数派 (militant minority)、アナーキスト (自主管理社会主義者) 等多様な呼称を持つ。だが既存研究書の言及で多いのはサンディカリズム (労働自主管理社会主義者) のそれだ。従来サンディカリズムを第一次大戦前後を最盛期とする四半世紀程の歴史的存在に限定する見解がある (Van der Linden and Wayne 1990)。他方サンディカリズムを近似類似を含め、近現代史に再三現出する運動ないし活動類型と看做す研究も有る (Holton 1976)。本章は後者の立場だ。TPSは多様な自己認識を持ち矛盾ないし対立する組織に跨る。現住所は異なるが同一の本籍集団の機能名称である。

アンダーソンは想像の共同体がナショナリズムのみならずインターナショナリズムのそれでもあり、一見矛盾する両者は時に一個人ないし集団組織において重なり、それが寧ろ肯定的な表象であると言う (Anderson 2005)。アンダーソンは又想像の共同体形成におけるメディア特に出版物の決定的な役割を指摘した (Anderson 1983)。これを敷衍しカナダ西部の地域主義に関し優れた業績を積むフリーゼンは、出版資本主義の時期を20世紀後半の70年代迄取り、第二次大戦前後の地域的共同体意識形成への左翼メディアの貢献を強調する (Friesen 1996; 2000)。本章は加えてメディア自体が想像の共同体の場に成り得るという見解に立ち、1950年代における太平洋意識とTPSの関係を語る。

本章は筆者が既に発表した「太平洋を越えた運動史」(篠田 2004、2005、2008) という連作の一環を成す。太平洋を越えた運動史は、太平洋とそれを囲む南北東アジア、南北アメリカ、オセアニアの地域を有機的に連環する一つの歴史的時空間と捉え、そこを舞台に平等的かつ連帯的な想像の共同体の形成とそれに伴う構成各国・人種・民族・階級・ジェンダーを横断する水平的意識の発展に向けた、域内間の直接及び間接の多様な連環運動を描写する。この運動史は、先行発展した「大西洋を越えた運動史」を包含する大西洋史同様 (ベイリン 2007)、今後太平洋史 (Pacific history) への発展が望まれる。

以下の叙述は、特定書籍及び楽曲ないし特定範疇のそれらの主に作製過程を研究する書誌学と特定書籍ないし特定範疇のその読者形成と社会関係を分析する読書史、更に運動機関紙誌を含む新聞、雑誌、放送等を包括的に扱うジャーナリズム及びメディア論にまたがると共に、総じて文化史が重複する領域に位置し、又フーコーが謂う言説と読み手の対話性という点で知識社会学の領域にも及ぶ (Foucault 1972)。更にこの叙述はTPSの活動探索録として太平洋左翼の民俗学ないし博物学を構成する。本章に顕著な混濁文体の特異性は以上に起因する。

第2節 太平洋50年代の奇跡

あ) はじまりはごんべさんから

①デジャ・ビュ

それは今から15年程前、米国ボストンで起こった。当地のハーバード大学では毎年明けから3ヶ月、全米の労組役員2～30名程が集まって労働組合講座（Harvard Trade Union Program）が開かれていた。留学先の誼を通じて潜った講義の一つに、1960年代の公民権運動の指導者で、その後産業空洞化で疲弊する中西部を拠点に闘う労働運動を率いてきた伝説的人物 Staughton Lynd による公開講演会があった。相変わらず語学力の欠如に臍を噛んだ1時間程の講演の最後に、それでも彼が「それでは一緒に歌いましょう」という意味の言葉を発したのが聞こえた瞬間、部屋中の老若男女が一斉に起立。肩を組むと左右に波打ちながら、段上の氏と共に朗々と何やら威勢のいい曲を唱和する。錆らしい部分に差し掛かって、“Solidarity Forever” という如何にもな歌詞が聞こえ、それが繰り返された3回目。何と自分の唇が節と一緒に勝手に動き出すではないか。「この曲知ってる!」。その瞬間の驚愕と歓喜の入り混じったおののきの感覚は、その時の部屋の風景と共に今でも脳裏に刻み込まれている。

歌詞は違うがお馴染みのメロディの出元は直ぐに分かった。子供の頃YMCAのキャンプで散々歌った「ごんべさんの赤ちゃん」である。全篇の振り付けを覚えたら、一節ずつ歌唱なしで繰り返す可笑しさと空中に手を上下左右するその異様さで皆興奮して繰り返し遊んだ。だがその後もう一つこのメロディを体に叩き込んだ音楽体験を思い出して些か呆れた。ヨドバシカメラのコマーシャルである。この会社を始めとする今日の家電量販店の隆盛は、四半世紀以上前からの画面露出に始まる。小学生から中学生の頃、日本テレビは平日夕方4時からを当時同局看板の青春ドラマの再放送枠にし、他にやることのなかった子供は夕餉支度前のひと時をテレビに釘付けにされた。そこに来る日も来る日も4・5回流れるコマーシャルで、ヨドバシカメラは社名とこの軽快なメロディを、日本の首都の子供たちに覚え込ませた。それにしても何故僕達は米国の労働歌を童謡や広告音楽で知っているのか、いや取えて言おう、でしか知らないのか。

②共和国賛歌

ハーバードで聞いた労働歌はその名も「連帯よ永遠なれ」(Solidarity Forever) と言う。作詞は20世紀初頭の米国を席卷した急進的なサンディカリスト組合、世界産業労働者同盟 (Industrial Workers of the World, IWW, 通称ウォブリーズ) の活動家、ラルフ・チャプリン (Ralph Chaplin)。この組合は入会と同時に会員証と歌集を渡し、人里離れた酷寒の森林や酷暑の穀物畑、果ては時化に翻弄される船倉で、共に絶唱しながら自分達を鼓舞したことで有名だ (Renshaw 1967)。だがこの歌は革命的労働運動の独占歌ではない。試しに検索してみたWikipedia (<http://en.wikipedia.org/wiki/Solidarity/Forever>) によると、オーストラリアの労働党 (現政権党) やカナダの新民主党 (現筆頭野党) の大会歌、果てはアメリカの協同組合運動歌であるともいう。出典が不明なため、確かなことは言えぬが、IWWがカナダ、オーストラリア、イギリスでも組織されていたことは事実で (レンショウ 1973, Burgmann 1995)、上記の社民主義政党や協同組合組織の左派にウォブリーズの薫陶を継ぐ者が決していないことは考えにくく、強ち端から疑う必要もなからう。日本ではロシア革命以来共産主義運動の独占歌の観もある「インターナシヨナ

ル」が労働歌の定番だ。が故なのか、ベルリンの壁崩壊後その歌は歴史化しつつある。一方「連帯よ」は、英語圏ではアナーキストから現実的社民主義者や協同組合主義者迄、協同社会（cooperative commonwealth）を目指す運動の共通歌であり、現代のフォークやロックシンガー、ヒップホッパーも歌い継ぐ。

この「連帯よ」の人気と長命の秘訣はこの歌の淵源に由来する。実はこの歌の原曲は、1850年代半ばにキリスト教会の集会等で広まった黒人霊歌「ジョン・ブラウンの屍（John Brown's Body）」だ。ブラウンは白人キリスト教徒の急進的な奴隷廃止論者で、1859年に仲間とバージニア州の連邦武器庫を襲撃失敗し死刑に処せられた。この歌はブラウンの信望者達が作り、南北戦争中は行進中の北軍兵士が歌った。この行進歌に感動した一人に、ボストンの著名な奴隷廃止論者で社会活動家のジュリア・ウォード・ハウ（Julia Ward Howe）がいた。彼女はその歌詞を北軍兵士を讃える内容に変え、「共和国讃歌」（The Battle Hymn of the Republic）として当時の人気雑誌に発表すると、忽ち北軍の代表的行進曲となった（ハウはその後女性解放運動に尽力する）。そしてこの歌が更に歌詞を替え「連帯よ」になる。他方「讃歌」も、「9 1 1」以降は愛国歌「神はアメリカを祝聖す」（God Bless America）が圧倒的とはいえ、今日迄米国民の間で愛唱され、政府や軍の式典等でも吹奏される。つまり「連帯よ」は、奴隷廃止運動に端を発する近代の世界協同社会運動史の主題歌の変奏だった。

③「義勇軍行進曲」

「共和国讃歌」は早くから日本に来ていた（石原 1988）。1900年にクリスマスの子供賛美歌として紹介された後、2年後には日本軍の軍歌集に収録。更に1907年には野球応援歌として『早稲田歌集』に載った。何れも日本人の訳詞に拠る。大正期には恋愛歌詞が付され、演歌士が歌った「薔薇の唄」は女学生に流行った。昭和期は「お玉じゃくしは蛙の子」「ごんべさんの赤ちゃん」「ともだち讃歌」等専ら童謡として子供の人口に膾炙した。だが明治の初期社会主義から戦後の労働運動迄、夫々に協同社会を目指した日本の様々な政治社会運動は、決してこの曲に己が思いを託さなかった。何故日本の活動家達はこの協同社会運動の主題歌を正調で歌わなかったか。何故この国では童謡や軍歌や歌謡でしか、その曲を聞けなかったか。本当に日本人は皆その精神を共有せず、「共和国讃歌」を歌い続けたのか。或いは誰かは多くが聞き落とす歌い方をしていたのか。心に浮ぶ疑問は隣国の国歌を聞きその由来を知って更に膨む。

「起て、奴隷になるのを望まぬ人々よ。我等の血肉で新たな長城を築くのだ」で始まる中華人民共和国の国歌、その名も「義勇軍行進曲」だ。作詞田漢、作曲聶耳。元々1935年上海で作られた抗日映画「風雲児女」の主題歌だ。田漢は第一次大戦中東京高等師範学校に学んだ劇作家で、32年には既に中国共産党員だった。早くから左翼系映画演劇に楽曲を提供した聶耳も33年に入党。「義勇軍」は獄中の田漢が密かに聶耳に歌詞を送り、逮捕を逃れ渡日、曲を書き終え鶴沼海岸で水死した。この曲を聞くと、前述冒頭句が「ジョン・ブラウン」「共和国讃歌」「連帯よ永遠なれ」の精神に重なる。又「義勇軍」の最終節「前進前進進」は前二者最終節が「marching on」だった事を思い出す。期くして先の疑問は太平洋を挟む日米アジアの三角関係という不幸の歴史に行き着く（于文 2006）。

い) 左翼シェルターとしての日本

④第三の道

周知の如く、日本の近代は明治の脱亜入欧（米）に始まり、大正から昭和に掛けてアジア主義が台頭、結局それは無残な破局を迎える。戦後はその脱亜入欧とアジア主義への十分な再吟味が為されぬ儘、親米と反米という脱亜と入亜の二項対立の更新を続ける。事は左翼を含む協同社会運動総体でも同じでなかったか。この二つの通奏低音の対立は、太平洋を取り巻く取分け日本とアジア（主に中国と朝鮮韓国）と北米（主に米国）の間に不協和音、それも日本のそれを際立たす。では日本では、この太平洋を取り巻く不協和音を協和音に近付ける試みがなされなかったのか。例えば政治的関係等現実の不和を思想や文化による架空的連帯即ち想像の共同体という裏声（井上・山崎 1982）を使っても、「共和国讃歌」を三部唱させようとした人々がいなかったのか。脱亜入亜、親米反米の二項対立を止揚する第三の道を模索した人々がなかったのか。

⑤『中国の歌ごえ』

それがいたのだ、1950年代に。しかもそれは日本が米国太平洋左翼の文化シェルターになる形でだ。まずは歌の話から始めよう。話は1930年代後半から40年代前半に遡る。当時米国には中国の抗日報道、特に中国共産党の解放区報告で有名となった一群の戦争ジャーナリスト達が居た。それ迄その社会の有様を絶望視されていた中国に、それらの解放区ルポルタージュは米国同様の民主主義が育っていることを伝え、米中の絆を強めた。その中にアグネス・スメドレーがいる。彼女の著作は戦後多く邦訳されたが、その嚆矢に『Battle Hymn of China』がある。1943年に米国大手出版社から出されたこの本は、真珠湾攻撃直前の国共合作下の抗日風景を描き出し好評を博した。そして邦訳の『中国の歌ごえ』が発刊されたのが1957年、訳者あとがきの冒頭はこう綴られる。

この本は、1943年にニューヨークのアルフレッド・ノップ書店から出版されたBattle Hymn of Chinaの全訳である。題名は、文字通りに訳せば「中国の戦闘聖歌」で、著者の頭のなかには、おそらく、田漢が作詞し聶耳が作曲した「義勇軍行進曲」があったであろう。「起て！ 奴隷となるな、民衆！ われらの血肉で築こう、万里の長城！」という言葉ではじまるこの歌は、はじめ東北抗日義勇軍にうたわれていたが、抗日戦中に全中国の民衆のあいだにひろがり、民族統一戦線の大きな力となった。この本のなかでも、いたるところでうたわれている。この「義勇軍行進曲」は、1949年の9月に、「中華人民共和国国歌」に制定された。この題名をつけたときの著者の頭のなかには、同時に、「共和国の戦闘聖歌」Battle Hymn of the Republicのことがうかんだにちがいない。それは第4章末尾の文章からあきらかである。この歌は、1861年から65年までつづいた南北戦争の2年目に、J・W・ハウという婦人がつくった愛国歌で、北軍の兵士たちによってさかんにうたわれた。それは、「神、われらを聖ならしめんとて死にたまいたれば、われら解放のために死なん。」というような歌詞のある歌で、文字通りの聖歌であった。アグネス・スメドレーは、中国の「義勇軍行進曲」のなかに、アメリカの祖父たちを自由のために戦いに駆りたてた歌とおなじ意味を汲みとったのであろう。そのようなニュアンスを日本語でどう表現するか、さんざんに迷ったが、結局「中国の歌ごえ」にきめた。日本語としての呼びやすさと全体的な印象をとって、原題への忠実をやや犠牲にしたわけである（スメドレー 1957、421頁）。

義勇軍行進曲と共和国讃歌のオーバーラップ。ここにもう一つの解放区ルポの古典エドガー・スノー『中国の赤い星』の訳者松岡洋子が、米国民主義の再生を目指したニュー・ディーラー

達が「同志」として中国を再発見した瞬間がある（スノー 1995）。だからこそ彼らは民主抗日である中国の工業合作社運動を支援した。

⑥うたごえ運動

ではこの本のどこに日本はあるか。それは「戦闘聖歌」の訳語替え、即ち「歌ごえ」である。当時日本を席捲した「うたごえ運動」である。「うたごえ運動」は、組織的には戦前に左翼運動に身を投じセツルメント等で子供の歌唱指導をした声楽家関鑑子が1948年に中央合唱団を結成したことに始まるが（知性増刊 1965、関鑑子追想集編集委員会 1996）、当初は共産党系の文化工作活動の一環の色彩が濃かった（国民文化調査会編 1956）。これが1955年に総評と正式に連携することで、それまでに知識人と労働者が協力して戦後各地に広げた草の根のサークル運動とこれを基盤に革新政党と労組が展開した憲法擁護や全面講和を掲げた中央のカンパニア組織と結び付く。斯くしてうたごえ運動は「平和と民主主義」を時代の感覚構造（Williams 1992）の鋳型にした国民文化運動の晴舞台に躍り出る。そこで日本の幾百万の老若男女は、「平和と民主主義」の戦闘聖歌即ち讃歌を唱和した。彼ら彼女らが手にした歌集は、黒人霊歌も収める（乾・渋谷 1960）。その「平和と民主主義」の運動はこの後、南北戦争や抗日戦争同様、1960年の安保闘争と三池争議で、樺美智子と久保清という運動の殉難者を出す。「共和国讃歌」と「義勇軍行進曲」を裏声で「うたごえ運動」で繋ぐ。エロシエンコの訳業等エスペランティストとして有名な訳者高杉一郎らしい詩（詞）的連帯を目指した瞬間だ。

⑦「上を向いて歩こう」

「うたごえ運動」は、日本の非知識人の老若男女が共に歌う伝統を再生した。この集合的な自己回復の営みである運動文化（Goodwyn 1976）として歌を民主化したのが「うたごえ運動」ならば、その歌を人々の日常即ち生活の時空間を作るポピュラー・カルチャーとして更に徹底したのが永六輔だ。永六輔・中村八大コンビによる坂本九の「上を向いて歩こう」は安保と三池の挽歌であり、永が歌を皆のものにすることで「平和と民主主義」の運動文化の継続に一縷の望みを託した一曲だ。それが2年後「スキヤキソング」としてブラック・ミュージックを始め次第に非白人化する米国ヒットチャートの頂点を極めるのは、日米運動文化関係を考える上で示唆的だ。

永は1960年代半ばから、「上を向いて歩こう」と同じ想いを託した「見上げてごらん」の作曲者いずみたくとシリーズ「にほんのうた」を作る。ここでいずみたくが歌ごえ運動出身である事は偶然ではない。彼らは「うたごえ」が目指した新しい人々の歌即ち日本の「新しい民謡」作りを目指した。そして「いい湯だな」「女一人」等のヒット曲を生んだ「にほんのうた」を4年程続けた1968年、新たなうたごえ運動世代フォークシンガーが登場したことで、自らが継いだバトンを渡す様に永は作詞家を止める（永・矢崎 2006）。

⑧ピート・シーガー

日本のフォークシンガーの草分けである岡林信康や高石ともやが、米国のフォークシンガーのコピーからそのキャリアを始め、彼らが最初にコピーしたフォーク・ミュージシャンにピート・シーガーがいた事は良く知られる（なぎら 1999）。だが今やフォークの神様としてピート・シーガーを伝説人扱いする日本は、60年代の後半に、満員の聴衆を魅了したニューヨークのマジソンスクエアガーデン始め名立たる場所でのフォークコンサートや自らも運動参加者として仲間の士気を鼓舞した公民権運動やベトナム反戦集会で、シーガーがバンジョーを掻き鳴らし、うた

第2部 研究実施のあらましと成果

ごえ運動の人気作「原爆を許すまじ」を歌っていたのを知っているか (Shinoda 1999b)。

シーガーのフォークシンガーとしてのキャリアは1930年代に遡る。当時ニュー・ディールの追い風に乗って労働運動は猛然と組織化に取り組み、幅広い文化活動を含め労働者が集う場面を積極的に作り出した。中でもIWW以来労働歌が中心のフォークソングは、この団結の文化形成に大きく貢献した。シーガーは同僚のウッディ・ガスリー等と職場や争議現場に駆け付け、歌で労働者を鼓舞する「歌う労働運動 (singing labor movement)」の指導者となり、その影響は独自のレコード販売を含むポピュラー・カルチャーにも及んだ。だが戦争が終わってその状況は一変する。大戦終了後空前のゼネスト攻勢の反動と冷戦の接近はシーガーらの活動を難しくし、彼らが積極的に関わった、ルーズベルト政権で農務、商務、副大統領を歴任し自他共に彼の後継者と見られていた進歩党ウォレス候補が、48年の大統領選で頼みの労組からも見放され空前の惨敗を喫した後は、愈々彼は事実上の活動停止状態に追い込まれる。落胆と失意の中にいた彼が再び元気を貰ったのは、仲間が伝えた日本のうたごえ運動の隆盛と「原爆を許すまじ」だった。期くして東西の雪解けムードが出て来る50年代後半以降、米国の音楽シーンにも段々自由が戻る中、黒人の公民権運動の高まりと共に彼は復活し、その活躍はWe Shall Overcomeなどの運動歌と共に日本にも伝わる (Shinoda 1999a)。この話は50年代中頃の日本が、シーガーら米国太平洋左翼難民に安らぎの場と栄気を養う機会を与えた事を伝える。この左翼シェルターに避難して来たのはシーガーだけでなく、又道案内さえいた。

う) 米国太平洋左翼難民とバンドン日本

⑨石垣綾子とスメドレー

先程の『中国の歌ごえ』にはこんな訳者あとがきがある。

一冊の本ができあがるまでには、どんなにたくさんのひとたちの援助が必要であるかということがわかった。まず、翻訳権について好意のある同意をして下さったエドガー・スノー氏と、ミルフレッド・コイ女史に感謝しなければならない。コイ女史を紹介して下さったのは、石垣綾子氏であった。巻頭にかかげた原著者と「小鬼」の写真は、故尾崎秀実氏の弟さんである尾崎秀樹氏の好意によった。中国の風俗習慣、俗言、罵言、古い詩、その他については、次の方々に教えて頂いた。一東京都立大学中国文学研究室の松枝茂夫、竹内好、今村与志雄、伊藤敬一の諸氏、東京大学の小野忍氏、神戸大学の山口一郎氏。静岡県「郷土をよくする会」の前島貞男氏。インド関係の固有名詞や風俗などについては、駐日インド大使館のヴェル夫人に教えて頂いた (スメドレー 1957 423頁)。

ここに出てくる名前や顔ぶれだけでも、この訳業が1955年のバンドン会議が象徴した時代精神を体現したものであると同時に、それが戦前からの引き継ぎだったことが伺えるが、注目は石垣綾子の存在である。石垣は戦前裕福な名門家族に生れながら、早くから社会と政治に目覚め、この儘では日本で先が危ういと家族が判断、米国大使館勤めの姉夫婦を頼って20年代後半に渡米した。だがニューヨークで左翼画家の石垣栄太郎と出会って一緒になると、ラディカルのメッカ、グリニッジ・ビレッジを根城に産児制限運動のマーガレット・サンガーを始め、女性運動や様々な進歩的グループと接しながら、日本の中国侵略に批判を強める左翼やリベラルの運動にも関わっていく。綾子がスメドレーと知己を得るのは40年代の初めだが、そもそも栄太郎とスメドレーは未だ彼女がインド独立運動に関わっていた第一次大戦後からの知り合いだった。

その後綾子は、第二次大戦後中国共産党シンパとして次第に風当たりが強まるスメドレーを必死に支えていく。そしてスメドレーは49年、訪米した旧知のインド首相ネルーと再会し、黒人とインド人の苦悩の共通性を確認した後、執筆中だった中国人民解放軍司令官の朱徳の伝記『偉大なる道』の原稿を携えロンドンへ去り、その翌年マッカーシズムの攻撃が名立たる中国専門家に及ぶ中、心労重なり病死。石垣夫妻も米国政府から追われるように51年、日本に帰国する。

スメドレーの『偉大なる道』が雑誌『世界』で阿部知二訳で連載され始めるのが、1954年1月。紹介したのはアメリカのリベラル雑誌『ネーション (The Nation)』のロンドン特派員のアンドリュー・ロスらしい。この頃から『世界』に世界情勢、特にアジア、アフリカのそれをどしどし送り始める記者だ。連載は13回に及び、回を重ねる毎に好評を博し、翌年岩波書店から単行本として公刊される。ちなみに連載第1回目にはスメドレーとの思い出を綴って綾子の文章が併載された。『偉大なる道』が日の目を見たのは日本が初めてで、米国は無論英国でもスメドレーに対するレッテルが出版の邪魔をした。つまり『偉大なる道』は矢張り日本に避難したのであり、それもまるで先回りした様に綾子が帰国し、アグネスの遺作が逃げて来るのを待ち構えた。それは綾子にとっても、今は亡き愛おしい「私の米国」即ち太平洋左翼のそれであり、その「米国」が見た愛すべき「中国」であった（石垣 1951、67、72、88、96）

⑩もう一つの『世界』

それにしても1950年代の『世界』の頁を50年代中頃まで捲ると、深まる米ソの東西冷戦の中で苦悩しながら、次第にアジア、アフリカの勇気に促されバンドン時代の機関誌となっていく姿が伺えて興味深い。例えば51年1月号は南原繁の「民族の危機と将来」が巻頭にあり、その全面講和と人類の理想を謳う高邁な抽象さが却って現実選択の苦悩を裏書きする。さりとて同年3月号掲載の太平洋問題調査会に提出されたオーストラリアのマクマホン・ボールによる「アジアにおける民族主義と共産主義」は、日本がアジアに生きることにも用心を与える。これが変わるのがスターリンが死去する53年中頃。まずは4月号の小特集「アフリカは動く」とアジア社会党会議報告、続いてインド首相ネルーの「平和を求めるインド外交」は6月号だ。

『偉大なる道』連載開始の54年1月号には再びネルーが「アジアの運命とともに」を寄稿。54年5月号には一インド人の筆名で「米ソの中間地帯」を掲載。55年1月号は事実上の新中国特集。「周恩来会見記をよんで」の各界著名人のコメント集、中国訪問団報告公演会の「中国の新しい姿」、更に中国土産話三題。続いて2月号は「アジアと平和五原則」特集に「ハノイ解放の日」のグラビヤが加わる。3月号は、グラビヤ「アフリカは動く」と共に「次はアフリカの番である」特集。4月号は周恩来と会った村田省三を囲む座談会。6月号は巻頭特集で「新しき歴史ここに始まる」、スカルノの「新しいアジア・アフリカを誕生させよ」と周恩来の「われわれの運命をわれわれの手で」、グラビヤのアジア・アフリカ会議が眩しい。そして10月号は特集「冷戦の終結へ—アジアの発言」でネルーが「体制の相違を越えて」と訴えれば、「諸国民の相互信頼のうえに」と周恩来が返す。この『世界』に現れた日本の翻身、即ち東西両陣営と異なる「もう一つの世界」への跳躍と寄り添うように、この間ずっと連載が再開された野上弥生子の『迷路』が、丁度悩める主人公省三が最後に八路軍に向ってひた走り、この戦禍の後に新しい時代の到来を予期させる所で物語が終わる。前述の如くこの開き直る日本は太平洋左翼の避難所となるが、それは同時に太平洋左翼が用意したのであり、又更に飛翔させられて行く。

⑪ マンスリー・レビュー

スメドレーの『偉大なる道』が世界に先駆け日本で出版された翌年、米国で漸く出版の日の目を見るが、それはマンスリー・レビュー（Monthly Review）社に拠った。この出版社の看板雑誌『マンスリー・レビュー』はハーバード大学教授でマルクス主義経済学者のポール・スウィージーと左派組合のベテラン活動家のレオ・ヒューバーマンが1949年にニューヨークで創刊した。ファシズムの欧州席捲後、人民戦線で第2期ルーズベルト政権以降欧米最大の勢力と影響力を築いた米国共産党が第二次大戦後大きく後退する中、左翼の活路を開くべく船出したマンスリー・レビューだったが、その矢先から50年代前半を通じて赤狩り旋風に翻弄された。そんな中彼らの出版物は日本で大好評を博す。特に岩波書店はヒューバーマンの『資本主義経済の歩み（上下）』（1953）、『社会主義入門（上下）』（1953、54）『アメリカ人民の歴史（上下）』（1954）を岩波新書として続々発刊、特に『資本主義経済の歩み』は相当期間ベストセラーを続け、又『アメリカ人民の歴史』はその類稀に堪能な書法で読者を魅了した。確かに資本主義、社会主義、人民史観の左翼本は戦後直ぐに共産党系の出版社を中心に広く版を重ねた。だがその殆どはインテリ、黨員、組合員の読物であり、別世界への知識欲と好奇心は旺盛だが「組織」に素人で政治アマな読者には距離があったろう。思うにこれらの新書は、普通の日本人に左翼の福音を簡便に説き広く受け入れられた戦後本の走りではなかったか。つまりこの時期革命中国とダブらせながら、日本人の多くは左翼の物の見方考え方をアメリカから学び、更にアメリカ人が左翼のだと知るのだ。但しそれは太平洋左翼のそれだが。斯くして50年代中頃、日本がアジア、アフリカに左から開き直ったその時、ヒューバーマンを始めなお米国で居心地の悪い左翼人が、自分達の声に耳を傾ける日本に続々とやって来る。

え) 部落とブラック

⑫ 雪山慶正の太平洋を越えた階級的人種交叉連合

ヒューバーマン達「避難」左翼は日本に来ると、『世界』等で本国では聞いて貰えぬ思いの丈を述べただけではない。彼らは又日本の太平洋左翼の同伴で国内各地を案内され、母国では彼らを避ける大学人に歓待された。その同伴に専修大学教授でマルクス経済学者の雪山慶正がいる。雪山はヒューバーマンの著書の多くを訳し、彼等の友情は労働運動を中心に草の根で太平洋左翼の絆を強めた。1956年、スコットとヘレン・ニアリングの『今日のアメリカ』が雪山訳で岩波書店から出る。スコット・ニアリングは戦前日本でも知られた米国左翼知識人で、その後夫妻で片田舎の生活を送った後、戦後変貌する米国を歩き綴ったのが本書だ。訳書の出版後程なく夫妻は日本各地を訪れる中、京都で隆盛する「平和と民主主義」文化の知識人組織だった平和問題懇話会の大学人と歓談し、更に夫妻は希望して懇話会に集う部落問題研究所員の案内で京都駅近くの未解放部落を訪ねる。この時東京から随行し、欧米のユダヤ人や黒人差別以上の部落民の悲惨な境遇への深い心痛を夫妻と共有した雪山は、直後研究所所員となり部落問題を猛然と学ぶ一方、黒人問題と対比した論文を研究所月刊誌に精力的に寄稿する。

戦前から部落運動を主導した水平社は戦後部落解放同盟となり、その実質的な機関誌として1949年に創刊された月刊誌『部落』は当時迄、米国黒人運動の指導的知識人デュボイスや黒人女流詩人ヒューズの紹介や南部の人種差別教育を違憲とした最高裁判決の解説等数本を掲載した。だが以下一覽の如く、京都体験後始まる雪山の米国黒人運動関連寄稿群は1963年頃迄連綿と続く。

1. “裏声で歌え ‘共和国讃歌’” —トランス・パシフィック・サンディカリストという運動系譜—

(著者名なしは雪山)

松本治一郎「世界は大きく動いている」 56年5月

S. V. シャー・西村関一「インドにおける賤民の解放」 56年6月

「エメットティル少年のリンチ」 57年4月

「アメリカの人種差別法」 57年5月

ハーバート・アプテカー (雪山訳)「アメリカ帝国主義と白色排外主義」 57年9月

「ニグロ解放運動の新段階」 57年7月

「アメリカにおけるニグロ労働者の発展」 57年9月

「差別待遇とたたかうアメリカ労働者」 57年10月

「暴力に抗して民主主義をまもりぬけ」 57年11月

大沢基「ヒューバーマンのみた部落」 57年12月

「平等な機会をもとめて」 58年1月

「ニグロ人民に対するアメリカ政府の犯罪(上)」 58年2月

「ニグロ人民に対するアメリカ政府の犯罪(中)」 58年3月

南清彦「書評 H・ヘイウィッド「黒人解放」」 58年4月

レオ・ヒューバーマン (雪山慶正訳)「二つの国民・白人と黒人」 58年6月巻頭論文

竹内好「沖縄から部落へ」 59年1月

李東準「在日朝鮮人の帰国問題をめぐって」 59年4月

「特集・婦人の問題」 59年5月

北川鉄夫「黒人混血児とアイヌ」 59年5月

「特集・沖縄と差別」 59年7月

今掘誠二「原水爆時代の部落問題」 59年8月

「人種的偏見の代償—ニグロ問題に関する沖仲士倉庫労働組合の意見」 59年8月

ルイス・E・バーナム (雪山抄訳)「ミシシッピ州のリンチをめぐって」 59年10月

《続ニグロ解放運動物語》②「アメリカのニグロ問題」 59年11月

「特集・在日朝鮮人」 59年12月

アン・ブラーデン (雪山訳)「アメリカにおける人種関係」 60年3月

アール・コンラッド (山田沢男訳)「ハリエット・タブマンの半生(上)—南北戦争時代におけるニグロ戦士とその協力者たちのものがたり—」 60年4~6月

エリザベス・ローソン「サディウス・ステイブンス—戦闘的民主主義者にしてニグロ解放の闘士」 60年7~9月

田中織之進部落解放同盟書記長・雪山対談「解放運動の新しい方向」 60年10月

サミュエル・シレン (山田沢男訳)「ドレイ制度とたたかった婦人たち」 60年11~61年8月

《本棚》ヒューバーマン・スウィージー「キューバー—一つの革命の解剖」フィデル・カストロ「わがキューバ革命」クワメ・エンクルマ「わが祖国への自伝」 61年1月

「黒人問題研究の一年間」 61年3月

「特集・水平社創立四十年記念」 61年4月

「部落解放同盟訪中団の便り」 61年4月

井上清「部落問題と労働者階級」 61年4月

松本治一郎「全国民とともに—請願運動への支援と共闘の要請」 61年8月

高橋徹「人間性復活の叫び—黒人文学全集の発刊」 8月(139)号

「特集・請願大行進の総括」 61年12月(143)

■ 第2部 研究実施のあらましと成果

池上日出男「黒人解放と文学」 7月（150号記念特別）

「アメリカの暁闇—アメリカのニグロ解放運動の動向」 62年11～12月

レオ・ヒューバーマン（雪山訳）「ミシシッピー事件の背景」 63年1月

アイラ・リード・奈良本辰也「対談 黒人差別と部落問題」

山本幹雄「黒人と人権」 64年1月

大沢基「アフリカーA・A諸国連帯会議から帰って」 64年8月

雪山が動かさんとした山は大きい。米国公民権運動を部落解放運動と連動させ、両者と労働運動の連帯を強調し、それを国民主義的な一国平和主義に傾斜する戦後民主主義文化が背を向け始めた反帝反植民地主義と自律的非白人連帯というバンドン精神へ結び付け、そこに集う多様な主体を国内外に開かれた階級的人種交叉連合という太平洋左翼の花道へと迫り上げる。だが彼は一人の愚公ではなかった。水平社以来の指導者松本治一郎は同じ頃「全世界水平運動の旅」に出、各国の人種差別反対運動との交わりを綴った。解放同盟は米国の労黒連帯から学びながら、勤務評定反対闘争を皮切りに三池闘争迄労働運動との共闘を深める。ヒューバーマンの黒人差別に関する『マンスリー・レビュー』の論文が『部落』の巻頭を飾る58年には、この階級的差別反対共闘の環は沖縄、在日韓国朝鮮人、被爆者へと拡がる。60年には雪山は、綱領改正の歴史的な大会開催中、同盟書記長と対談し、差別を助長する資本主義との対決を内包した全人民的解放運動の一翼を担う決意が確認される。同時にこの頃からアジア・アフリカ・ラテンアメリカの階級的民族解放運動の動向が意識される。斯くして世界に繋がった国民運動を目指す部落解放運動は、米国で人種差別撤廃を謳う公民権法が公布された翌1965年、部落問題は人類普遍の原理たる人間の自由と平等の問題であり、日本国憲法が保障する基本的人権の課題であり、その解決は国の責務と同時に国民的課題だという同和対策審議会答申を引出す。

もっとも雪山が綴った米国公民権運動報告の力は必ずしも現地のそれではない。彼の報告した労黒連帯は少数左翼で、労働、黒人双方の主流的運動ではない。又黒人運動のバンドン意識も一般的でない。労黒共に人種差別的資本主義下での改革の限界を自覚し、双方の連帯への挑戦が進むのは60年代だ。キング牧師が清掃スト支援のメンフィスで凶弾に倒れるのが68年（Boyle 1995；Honey 2007）。ブラックパンサー等黒人のアフリカ連帯や毛沢東シンパが目立つのも60年代。では雪山はどこで太平洋を越えた階級的人種交叉連合の靈感を得たか。

⑬ 高野総評と太平洋左翼

その運動は一方では、再軍備反対、基地反対・MSA反対の運動となり、他方では平和や全面講和への要望となり、労働組合員の闘争というよりも再軍備の斂寄せにかかる民衆全体の闘争という形で展開され、さらに、他方では、中小企業労組の結成や、零細農民、小商人漁民と組合との結びつき、そしてまた、闘争の仕方としても、ゼネスト方式から「地域ぐるみ」、「町ぐるみ」の闘争や「家族ぐるみ」の闘争による組合闘争力の補強の試み、そうした新しい戦術を用いながら、或いは地域共闘の形で横断的に、或いは家族組合の形で背後から、個々の企業別組合の支柱をつくってゆこうとする。（中略）日本の労働組合、とりわけ総評のような連合体は、アメリカ流の「労働組合」（labor union）でもなく、さりとてイギリス風の「労働組合」（trade union）でもなく、「企業別組合」を中心とする一種の民衆組合的なモノだという点を認識することである。

これは1955年『世界』9月号に載った大河内一男の「総評論」の一節だ。大河内は日本の代表的な労働経済学者で、欧米労使関係モデルから逸脱する当時の総評に批判的であったが、その時

代適的な機能実態はちゃんと認めた。この総評を50年代前半を通じて率い、「企業別組合を中心とする民衆組合」に育てたのが事務局長高野実だ。彼は連帯の福音を唱える預言者であり伝道者だった。人民服に身を包む求道者然とした風貌で、失業せし者を汝自身と想い、海の彼方で日々の糧のために額に汗する者を隣人と思い、それらと深く語り、共に闘い支え合い、この地上の津々浦々に働く民の王国を築けと語り、労働運動に平和を願う民族の苦悩を背負わす。その伝道は海を越える。中国総工会と組んだアジア・アフリカ労組懇談会はバンドン会議の前年だ。高野は人々を繋ぐ文脈を幾重にも築いた。大連帯こそ明日を開くという時代の雰囲気をつくり出した。雪山に部落とブラックを繋げて読ませたのはこの空気ではなかったか。だが次の高野学校同窓の回想は、これも迂回した太平洋左翼の仕業だと教える。

私はつくづく感じるんですが、猪俣さんの教えを受けたと同じように、アメリカ共産主義だと、私は言うんです。アメリカ共産主義というのは、アメリカにおけるサンディカリズムの台頭におけるその精神を引きついでいるんですね。それがあればこそ、総評を軸とする産業別統一というあの人の理屈がでてくるわけです。同時にそれがあればこそ、やはりあの人の「ぐるみ闘争」というのもでてくるわけです（高野実没後20年の集い 1995）。

第3節 トランス・パシフィック・サンディカリストは何処から来て何処へ行ったか

冷戦下の太平洋地域の政治的気圧配置は基本的には東西の高気圧が大きく張り出した中、50年代にはそれに押し出される形で太平洋左翼の低気圧が、なお東西高気圧が充分張り出せぬ不安定な等圧線下にあったアジアで発達し、そこに東西の勢力安定を脅かす政治的暴風雨をもたらし、日本は台風の目となった。即ち東西両者に与しない自己の存在証明を求めていた日本はこの不安定状況を創出し、その不安定状況に誘導し又されたのが、30年代後半以降根拠地となっていた米国と中国で運動難民となり新たな根拠地を探していた太平洋左翼だ。この太平洋左翼の蛇行をもたらしたジェット気流の役割を果たしたのがTPSだった。

これは国際政治経済学の資源動員論と政治的機会構造論ないし経路依存性論更に国際政治論の国際権利擁護論（Keck and Sikkink 1998）で説明する事も出来よう。今本章筆者にその用意はないが本章事例の理論的貢献の可能性だけは主張する。勿論それには尚事例集積が要り故に此处で纏めも兼ねTPSの時期区分を示す。

TPSの発生時期はいつか。その開墾播種期としてインドでセポイの反乱、中国で太平天国の乱等反植民地主義反帝国主義運動が顕在化し、他方米国がペリー来航等一旦太平洋進出を図りながらジョン・ブラウンの反乱、南北戦争、ダコタ戦争、再建等で米国外交史で唯一逆コースを辿り、その間で日本が幕末明治維新を通じ脱亜入亜の史的二律背反に陥る1850～70年代は見逃せない。

次に太平洋の白人帝国主義の拡大とそれへの代替案等各地の対応選択肢が構造化される1880～90年代は、清西と米日の新旧帝国交代という太平洋の権力構造移行を背景に、孫文、宮崎滔天等が絡むアナキストとナショナリストの国際革命志士網が形成され、民国革命、自由民権、人民主義等組織的運動も日米中等で発展し、そこで政治新聞や小説を始め運動メディアも群生することから、太平洋左翼の運動インフラが整い始める。此处迄がTPSの助走期だろう。

1900～20年代にはTPSが自覚的に始動する。平民社の反戦運動と第2インターでの片山プレハーノフの日露反戦表明も大事だが、日中初めアジア系北米移民コミュニティでのTPSの海外根

第2部 研究実施のあらましと成果

掘地形成も見逃せぬ。幸徳等の西海岸 I WWとの日米アナキスト交流、当時世界のラディカルメッカ、ニューヨークのグリニッジ・ビレッジで片山が始めた在米社会主義団、本章の石垣ガイドや猪俣津南雄を経たTPS集団高野総評形成は此处からだ。この国際交流網を前期以来の太平洋左翼の識字教育進展と国際左翼メディアの太平洋市場形成が支えた。

1930～40年代には前期後半に登場する共産党組織網を加え前期国際交流網が多元化し、太平洋TPSの間接運動共有が広がり、抗日での米中や反戦での日中日米等一部で直接運動共有も進む。この時期は人民戦線も有り、TPSの属性と活動は多様化する。特に後述する太平洋TPSの文化活動は飛躍的に進む。

20世紀前半は本章2節で言及した太平洋の三角関係と付随する太平洋左翼の発展力学の形成期だ。例えば同時期でも場所に拠って左翼の社会的有様が異なる、即ち空間移動に伴う意味変容という位相を利用し運動言説を融通する。これに長けたのがTPSで、本章事例はその一つだ。他にも30年代の米国左翼の人種言説が50年代の日本左翼の民族言説に転用されバンドン受容に繋がる。

50年代の更なる特徴に、左翼シェルター等太平洋左翼の水平的な直接運動共有がある。又同時進行した既成左翼の溶解も太平洋左翼の自立、特にTPSの遊撃行動を促した。これが60～70年代太平洋左翼を独自形成する。日米既成左翼が福祉国家推進で脱亜入欧する一方、近代化、植民地、帝国主義、人種差別への対抗を旗印にベトナム反戦と文革支持がTPSの太平洋統合事業となる。

確かに80年代以降これ等太平洋左翼とTPSの動きは鈍化したかの様だ。だが90年代以降今日の社会運動的労働運動、反グローバリズム運動、派遣村、ウォール街占拠運動等の運動事象は、TPSを含む太平洋左翼史の終焉を疑わす。

最後に論点の一つ。中国の太平洋左翼は誰なのか。共産党が太平洋左翼かは一先ず措く。例えば第二次国共合作を促し抗日統一戦線を演出した所謂民主派知識人だ。それ以上に彼らは太平洋文化オルグとして堂々のTPSだ。茅盾、鄒韜奮、陶行知、章乃器らが36年に編んだ『中国の一日』には民衆が抗日生活を活写した3,000のルポが集まった。茅は文学の生活化で魯迅以上だ。陶は生活を教育の根幹にした。鄒は人気雑誌で生活民主主義を鼓舞し、主宰するその名も生活書店で茅や陶を後押しした。この中国の民主的生活文化運動は、同時期ニューデールで雇用促進局が石垣夫妻を含む失業文化オルグを動員した米国の労働文化運動と相似する。実際両者は本章解放区報道を含め抗日で繋がった。

この民主的生活労働文化運動が米中で中頓挫する50年代、民主的生活文化運動の中国共産党版である大衆路線を信奉実践した高野総評下に居を移す。2節言及の歌ごえ運動と並び全国に浸透した生活綴り方運動の指導者国分一太郎は戦時中陶から大いに学んだ（篠田 1998）。高野総評後この読み書きを生活に根付かせ全ての権威権力から自由な精神を受け継ぐのが、俊輔、良行等鶴見一家が象徴する60～70年代の筑摩文化だ。例えば60年代の名企画『日本の百年』は生活綴り方の精神を引く。60年代末の企画『現代革命の思想』はTPS活動の見本だ。自身日米で運動関与者の武藤一羊編8巻『学生運動』で中国、米国は無論世界中の運動文献の間に日大東大全共闘の文書が昂然と並ぶ。ベ平連で米国活動家と肩を組む小田実編4巻『第三世界の革命』では、ゲバラ、ファノン、マルコムX、カブラルら現代TPSを「アランの歌（金山）」、「三十三年の夢（宮崎滔天）」、「われらのアメリカ（ホセ・マルティ）」らレジェンドが囲む。鶴見俊輔編5巻『アメリカの革命』は自身米国TPS代表ハワード・ジンの太平洋左翼的アメリカ史の決定版People's History of the United Statesの構想を10年早く先取りした。後に鶴見良行は「われらの」アメリ

カを日本を愛するが故に「かれらの」両者に抗うTPS魂を「日本人ばなれ」と考えアジアを歩く。

この『現代革命の思想』3巻『中国革命』の編者は当時秀逸な文革評論を書く科学史家の山田慶児だ。何故科学史家が中国革命それも文化大革命なのか。40年代に科学文明の源を中国に見た異端英国化学者ジョセフィ・ニーダムの巨著『中国の科学と文明』はパラダイム転換する60年代世界を揺すった。山田もその一人だ。山田がTPSなら彼の背後に山がある。当時世界の中国革命研究の最高峰はアジア経済研究所に拠った中国農業学匠だ。彼らは中国革命を近代産業の礎たる二千年に亘る世界農業文明への挑戦と見た。熊代幸雄の『斉民要術』天野元之助の『中国農業史研究』は、戦前中国農業史研究者と共同で始め60年代前後に日本で完成する農書研究で、文革以降中国研究者が再発見する。60年代日本は高度成長で棄農した。アジ経の中国関連研究会はそれを憂えた農政関係者の熱気が溢れた。だがそれは戦後的現象ではない。アジ経農業族の一人で当時農林省農業総合研究所中国室の山本秀夫は戦前の満州協同重農主義者橋樑を蘇らす。アジア主義者で片付けられない彼の論考を魯迅ら抗日知識人は困惑しながら貪り読んだ。ソ連の農業集団化を横目で見ながら協同組合教育のため賀川豊彦を米国南部へ招いたニューディーラー、長征や抗日遷都で奥地での一時凌ぎではない中国文明の再鑄造を夢見る毛沢東や民主派知識人、帝国主義に抗する非白人の自立的経済を目指したガンジーと賀川と共に希望の星みた米国黒人運動の巨匠デュボイス。橋もこの30年代農村ユートピアに生きた。結局19世紀半ば以来、都市中心の近代工業が背景の白人帝国主義に抗した太平洋左翼が夢見た太平洋統合の原風景が此の辺にないか。国連救済復興機関のトラクター技師だったヒントンの異色の解放区ルポ『翻身』を72年にアジ経農業族の若手、東大東洋史学科卒の中公編集者、鶴見良行も務めた国際文化会館企画部長、そしてベ平連事務局長が共訳したのは偶然ではない。

《引用参考文献》

- Anderson, Benedict (1983) *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, London: Verso.
- — (2005) *Under Three Flags: Anarchism and Anti-colonial Imagination*, London; New York: Verso.
- ベイリン、バーナード (和田光弘・森丈夫訳) (2007) 『アトランティック・ヒストリー』名古屋大学出版会。
- Boyle, Kevin (1995) *The UAW and the Heyday of American Liberalism, 1945–1968*, Ithaca and London: Cornell University Press.
- Burgmann, Verity (1995) *Revolutionary Industrial Unionism: The Industrial Workers of the World in Australia*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 知性増刊 (1956) 『日本のうたごえ：愛唱歌集』東京：河出書房
- Denning, Michael (1996) *Cultural Front: The Laboring of American Culture in the Twentieth Century*, London and New York: Verso.
- 永六輔、矢崎泰久 (2006) 『上を向いて歩こう—昭和歌謡の自分史』東京：飛鳥新社
- Foucault, Michel, Translated from the French by A. M. Sheridan Smith (1972) *The Archaeology of Knowledge*, London: Routledge.
- Friesen, Gerald (1996) *River Road: Essays on Manitoba and Prairie History*,

■ 第2部 研究実施のあらましと成果

- Winnipeg : University of Manitoba Press.
- — (2000) *Citizens and Nation: An Essay on History, Communication, and Canada*, Toronto : University of Toronto Press.
- Holton, Bob (1976) *British Syndicalism, 1900–1914: Myths and Realities*, London : Pluto Press.
- Goodwyn, L. (1976) *Democratic Promise: The Populist Moment in America*, Oxford and New York : Oxford University Press.
- Honey, Michael K. (2007) *Going Down Jericho Road: The Memphis Strikes, Martin Luther King's Last Campaign*, New York and London : W. W. Norton & Company.
- 井上ひさし・山崎正和 (1982) 「《対談》 国家への二重感情—『裏声で歌へ君が代』の魅力—」丸谷才一『裏声で歌へ君が代』付録、東京：新潮社
- 乾孝・渋谷修編 (1960) 『1961年版 につぼんの歌』東京：淡路書房新社
- 石垣綾子 (1951) 『二十五年目の日本』東京：筑摩書房
- — (1967) 『回想のスメドレー』東京：みすず書房
- — (1972) 『さらばわがアメリカ』東京：三省堂
- — (1988) 『海を渡った愛の画家—石垣栄太郎の生涯』東京：お茶の水書房
- — (1996) 『石垣綾子日記 上下』東京：岩波書店
- 石原恵子 (1988) 「日本における賛美歌の果たした役割—「リパブリック讃歌」の変遷を追って」『創立20周年記念論文集』東京：国立音楽大学大学院
- 于文 (2006) 「中日を結んだ天才音楽家 聶耳」北京：『人民中国』、2006年7月17日、(<http://www.peopleschina.com/maindoc/html/200607/15zhuanwen38.htm> 2015年5月31日ダウンロード)
- Kazin, Michael (2011) *American Dreamers: How The Left Changed A Nation*, New York : Alfred A. Knopf.
- Keck, Margaret E. & Sikkink, Kathryn (1998) *Activists Beyond Borders: Advocacy Network in International Politics*, Cornell University Press, Ithaca and London.
- 国民文化調査会 (1956) 『左翼文化戦線—その組織と活動』星光社
- なぎら健壺 (1999) 『日本フォーク私的大全』東京：筑摩書房
- Renshaw, Patrick (1967) *The Wobblies: The Story of Syndicalism in the United States*, Garden City : Doubleday & Company
- レンショウ・パトリック (雪山慶正訳) (1973) 『ウォブリーズ—アメリカ・革命的労働運動の源流』社会評論社
- Rogers, Daniel T. (1998) *Atlantic Crossings: Social Politics in a Progressive Age*, Cambridge and London : The Belknap Press of Harvard University Press.
- Sassoon, Donald (1996) *One Hundred Years of Socialism: The West European Left in the Twentieth Century*, London and New York : I. B. Tauris Publishers.
- 篠田 徹 (1998) 「東方に相似あり—普遍としての日米中「30年代文学」」蘆田孝昭教授退休記念論文集編集委員会編『蘆田孝昭教授退休記念論文集 二三十年代中国と東西文芸』東京：東方書店
- Shinoda, Toru (1999a) “We Will Overcome: Pete Seeger's ‘Singing Labor Movement.’” an unpublished paper.

- Shinoda Toru (1999b) “The Reincarnation of ‘Trans-Pacific Radicalism’?: Singing Labor Movement in Japan and the United States,” a paper presented in the 21st Annual North American Labor History Conference, October 21–23, 1999, Wayne State University, Detroit.
- 篠田徹 (2004) 「グローバル・レーバ—連帯の可能性を求めて (1~12)」『生活経済政策』87~99号
- (2005) 「“企業別組合を中心とした民衆組合” とは—社会運動的労働組合としての高野総評に関する文献研究 上下」『大原社会問題研究所雑誌』第564、565号
 - (2008) 「なぜ日本社会主義同盟は大事か—太平洋を越えた運動史への想い—」『早稲田社会科学総合研究』第8巻第3号、3月
- Smedley, Agnes (1943) *Battle Hymn of China*, New York : Alfred A. Knopf.
- — (1956) *The Great Road: The Life and Times of Chu The*, New York : Monthly Review Press.
- スメドレー、アグネス (高杉一郎訳) (1957) 『中国の歌声』東京：みすず書房
- スノー、エドガー (松岡洋子訳) (1995) 『中国の赤い星 上下』東京：筑摩書房
- 関鑑子追想集編集委員会 (1996) 『大きな紅ばら 関鑑子追想集』東京：大空社
- 高野実没後20年の集い (1995) 「高野時代の労働運動を偲ぶ」『労働経済旬報』6月下旬号
- Van der Linden, Marcel and Thorpe, Wayne eds. (1990) *Revolutionary Syndicalism: An International Perspective*, Aldershot : Scholar Press.
- Williams, R. (1992), *The Long Revolution*, London : The Hogarth Press.

2.

世界の労働運動

小さな物語が繋がり支え合う大きな世界の労働運動

(社)国際経済労働研究所 月刊誌『Int'lecowk』(2012年10月、2013年2月)

小さな物語が繋がり支え合う大きな世界の労働運動(その1)(2012年10月)

(以下左側に「バベルの塔」のイメージ、右側に「天の川」のイメージ)

それからしばらくたってよだかは
はっきりまなこをひらきました。
そして自分のからだがいま
隣の火のやうな青い美しい光になって
しづかに燃えてゐるのを見ました。
すぐとなりは、カシオペア座でした。
天の川の青じろいひかりが、
すぐうしろになってゐました。

宮沢賢治「よだかの星」

1. 平等とよりよき未来に向けた小さな物語とは

本稿は、前号新川論文の結語、「労働運動再生の道は、、、平等とよりよき未来に向けた小さな物語をいくつも編んでいくなかにある」との予言を細やかに証す。新川曰く「労働運動の再生にとって重要なのは、やはり平等化や社会的進歩の物語である。ただしそれを普遍性として語る事はもはやできず、あくまでローカルな文脈依存的なものとして語られる必要がある。それはいわば一つの大きな物語ではなく、無数の小さな物語である」。大きな物語の像を仮に旧約聖書に登場する「バベルの塔」の天を衝かんとする巨大な構造物に見立てるなら、無数の小さな物語は天空の星座か。確かに夜空に輝く星々は賢治が語る様に、何処の誰もが目指せる。

「バベルの塔」の物語は共通言語の喪失だ。自らの強大な力を誇示せんがためバビロンの人々が建設せんとしたそれこそ神を恐れぬおおけない壮挙は、コミュニケーション能力の剥奪なる天罰でいとも容易く崩れ去った。意思が伝わらぬ現場は成り立たない。労働運動にせよ社会主義にせよ或いは革命にせよ民主化にせよ、近代の大きな物語は、「歴史や社会を、概念的に説明可能な諸法則を中心に構成されている理解可能な全体性として提示」(ラクラウ・ムフ 1992)した。100年以上に亘って無数の人々を同じ方向に導いて来たこれらの共通言語は、前世紀末以降大勢にとって意味不明となり共同幻想と化した。ならば幾多の地場の小さな物語で人々は如何に連なるのか。

新川は云う「小さな物語こそが、切れ目のない、閉じられた世界に亀裂を走らせ、一条の光をもたらす」。これを聞いて、半世紀前、欧州社会主義や中ソ共産主義等マルクス主義を中心とする大きな物語の正統派と常に一線を画しながら、ベ平連を拠点に世界の平和運動を股に掛けた小田実なら、こんな話をするだろう。

2. 小さな物語が繋がり支え合う大きな世界の労働運動

「ブラックパンサー」(60~70年代の米国黒人解放運動：篠田)の活動家の一員が日本にやって来たとき、彼がもっとも感銘を受けたのは三里塚の農民たちだったというのだが、それはかれらのなかに自分と共通のものを見出したからだったにちがいない。彼は実際あとでそんなふうに語ったのだが、同じことが農民の側にも言えたのではないか。私には、三里塚の農民たちのほうがニューヨークの商社員よりも商社員の奥さんよりも、黒人が判り、黒人のたたかいが判り、ひいてはアメリカ社会そのものが判ったのではないかと思えてならない。たとえかれらが英語を一語も知らず、それまで外国人などに出会ったことがなかったにせよ、それはそうなのになにがいないと私は思うのだが、理由は簡単だろう、「ブラック・パンサー」も三里の農民も権力の身勝手に対してたたかっているというもっとも根本的な一時において一致し、共通していたからなのだ。ことばをかえて言えば、かれらは、たたかいという同じ「現地」をもっていたのだ(小田 1970)。

つまり新川の言葉に戻れば、平等とよりよい未来に向かうことを自分の問題として突き詰める「現地」の物語ならば、たとえ一見内輪の小さな事柄でも、時空を遠く超えた異なる状況の「現地」で、だが同類の営みを続ける者の目には、その輝きがよだかには隣に見えたカシオペア座の様に励ましとなって映り、他の数多の小さな物語と一緒に、天の川のロマン宜しく後の運動の語り部達が自分の名を呼ぶのを想像出来るということだ。もっとも小さな物語が繋がり支え合い大きな世界を形造るのは小田の想像に留まらない。

2. 小さな物語が繋がり支え合って大きな世界を造る国

19世紀後半から20世紀末迄、労働運動や社会主義或いは革命や民主化で大きな物語を創り、それを最も大事にして来たのは欧州だと言えば大方が頷く処だろう。

そういう言説世界で米国の政治運動、社会運動なかんづく労働運動に拘るのは、矢張り「よだか」ならぬ似て非なる物の愛好者として変り者視されても仕方あるまい。だが欧州の大きな物語の効験が薄れる前世紀末辺りから、米国労働運動、特に社会運動化する部分に運動世界の注目が集まり始める。早い話が新川が前号で言及した社会運動ユニオニズムの語は多くは米国研究者が流行らせ、事例も米国の場合が少なくない。最近のウォール街占拠運動(Occupy Wall Street)への注目も同様の文脈と言える。

新川はその理由が奈辺にあるかを思案していた者の背中を押す。確かに米国で欧州同様の労働運動や社会主義は終ぞ現出しなかった。「何故米国社会主義は育たないのか」は100年以上前から米国の政治経済、社会文化言説の十八番の問答だ。その正解は「欧州の様な階級社会ではないから」だ。事は真偽の問題ではなく信念に近い。欧州を逃れ欧州でないのを目指した米国で欧州の大きな物語は受け入れられない。だが勿論それは平等とよりよき未来を目指す物語が米国になかったことを意味しない。

実は19世紀以来米国には「改革伝統」と呼ばれる運動系譜がある(Messer-Kruse 1998)。それは人種的、階級的、性的平等と民主主義と市民的諸権利の最大化を目指して宗教や土地改革、協同組合からコミュニティ活動迄ありとあらゆる運動が育んだ物だ。この米国の運動系譜は、欧州で同様の目標を担った労働運動や社会主義運動が、主として19世紀以来課題を次々と吸収しながら進化していったのと対照的に、18世紀後半の米国革命の自由と平等の精神を体現した憲法(修正条項を含む)理念の未完の事業として、或いは19世紀の奴隷解放や人民主義(Populism)の巨大な集合運動が垣間見せた理想への繰り返される挑戦として今日迄受け継がれている。

ちなみにポピュリズムという語やその言説は、欧州や日本では負の意味合いが強い。だが米国

特に草の根活動家の間ではこの人民主義運動との繋がりをしばしば含め寧ろ正、それも正義の動きと解される。実際「右翼」の茶会（Tea Party）運動も「左翼」のウォール街占拠運動も、実数としてのみならず理念としても、米国市民社会の主体たる人々（people）の側に立つ多数派を代表するとその系譜を自負或いは少なくとも匂わせる。

今奴隷解放や人民主義を指して巨大な集合運動と呼んだが、実際それらは元奴隷の黒人小作から新移民の白人産業労働者、中小商店主から宗教家迄多様な人々から構成された様々な運動の諸連合であり、それらの集会では夫々の問題や解決策が共有され、極少の特権者達に立ち向かう圧倒的多数の勤労国民間の協力協同や連携提携が積まれる。この謂わば小さな物語が繋がり支え合う大きな運動は、近年反グローバリズム運動や日本の反原発運動に見られる「諸運動の運動（A movement of movements）」（Klein 2000）「諸連合の連合（A coalition of coalitions）」（Mertes 2004）と同類だ。そしてこの小さな物語が繋がり支え合って紡ぐ物に運動文化がある。

此処で謂う運動文化（Movement Culture）とは人民主義運動の草の根段階の連帯を考察したローレンス・グッドウインの言葉で、個人の自由は他者との協力なしに享受出来ないと考え振る舞う生き方を指す（Goodwyn 1975）。前述の通り、米国は建国から建前は自由と平等の社会で、個人の自立自助が強調されるが、それを十分享受出来ない集団には、その事を自分達で解決すべき問題と受け止め、実質的な自由と平等のため行動するには、協同組合等の連帯活動で個人の限界を同じ境遇にある他者との協力で乗り越えながら、個々の自尊心の回復と集会的なアイデンティティ形成が相互に進むことを知る学習過程が不可欠な事を示したのが人民主義運動だった。グッドウインはこれを米国社会の平等とよりよい社会を目指す運動全般の在り様として一般化した。それは正に米国で小さな物語が繋がり支え合う大きな運動の在り様でもある。

3. 小さな物語の「現地」

グッドウインの著作が公刊されたのが1975年。これを謂わば先途に米国では、60年代初頭にケネディ大統領の登場で政治に目覚め、その後公民権運動、ベトナム反戦運動、学生運動等を経、それ迄封印されてきた米国の運動文化のパンドラの箱を開けたベビー・ブーマー世代の活動家達は、「叛乱の季節」が暮れる中、この頃から今後の運動方向を過去の運動経験に学ぼうと、小さな物語が繋がり支え合って大きな世界を創る米国運動の歴史的な在り様を様々に再現していく（グリーン 2003）。

そうした努力は80年代に入り続々と成果を得る、例えば先のグッドウインの人民主義運動研究に大いに触発され、そこに見出された運動文化の議論を米国運動史においてより敷衍せんと試みたのが歴史家のサラ・エバンズと政治学者のハリー・ボイトだ。

従来民主主義を強化し、市民社会を深化させる議論は、法律や条令、選挙制度や行政組織等政治制度の仕組みを巡って行われるのが大方の常だった。だが民主主義や市民社会の目標は、そうした民主主義や市民社会を拡大進化させるための制度的整備に留まらない。同時にそれは、個々の市民が己が生の日常として自身がその進化拡大の過程に関与するのに必要な物の見方、考え方、振舞い方、即ち他者の発言に耳を傾け、己が意見を相手に伝え、職場や地域等己が生の世界の直近の場でその成員にとり善と考えられる事を共に為す、そうした共生の術を学ぶ場を創出し増大する事でもある。だとすれば、民主主義を強め市民社会を深める議論の際にこれまで当然視していた用語とそれが用いられる文脈、例えば「政治」や「公的活動」と「仕事」や「私生活」等の語群間に半ば公然と横たわっていた溝、或いは「公」と「私」の世界の間の相互の疎外感の

意味をもう一度考え直さざるをえない。何故政治や行政の日常が「他人事」や「彼ら彼女らのこと」で、そこに自分達の声は聞こえず顔も見出せないと思うのか。

つまり、己が日常の生活経験での個々の思いが繋がり支え合って社会の集合的な希望や可能性と成って行く過程、又そうした過程を経て自分達が共有するに至った社会の目標に向かって、個人や家族が日常の職場や地域の生活で行う仕事や活動や余暇等が、それらを実現していくため自分達の間で担い合う行為として、どんな意味を持ち如何に繋がって行くものなのか具体的に思い描けなければ民主主義は画餅に終る。

エバンズとボイトが出発した問題意識は約めて言えば此の様なことではなかったか。ここから先ず、実際に草の根の様々な運動に直接関わりながら米国の民主主義を強め市民社会を深める在り様を観察した二人は、同時にグッドウィン等先輩の著作や同輩後輩等の研究に触発されつつ米国の社会運動の歴史を入念に読み返し、そこで創出された多様なコミュニティの中に、新しい自尊心の形とそれと繋がったより深くかつ確信に満ちた集合的なアイデンティティを見出した人々が、共生のための社会的なりテラシー、他者と協力する事の大事さ、更に市民として成員と共同善を成すのを学ぶ事が出来る「公共空間」があるのを見つけ、それを「解放区 (Free Space)」と名付けた。別言すれば、解放区とは、市民が自尊心と自立心と想像力を以て、「良い社会」に生きたいと行動するための、私的生活と社会的機構の間に設けられた舞台装置だ。

エバンズとボイトに拠れば、そういう場は此れ迄多くの場合、宗教組織、社交クラブ、自助や相互扶助のための団体、社会改革のために働くグループ、隣人同士、市民同士、あるいは同郷同士が作る会、そして他の地域生活を織りなす様々な集団等、開放的で参加しやすい自発的な結社の中で現出して来た。もっとも解放区は、最初からそのためだけに作られたり現われたりするのではない。実際にそれは、自由と民主的な参加を求める階級や人種やジェンダーや他の社会的争点集団の動きと合体しながら様々な登場の仕方をするのであり、その時代と場所によって解放区を形造る顔触れやそれが族生する場所、そしてその発生を巡る社会的な力学は変わって来る。

つまり同じ運動や組織がその環境に適合しながら一貫してそうした場となったり、在る時や場所ではそうであったりなかったりと、解放区の歴史は運動横断のそれなのだ。例えばアフリカン・アメリカンの教会は、南北戦争によって彼ら彼女らが奴隷の身分から解放される以前から、そして解放後間もなく人種隔離政策等別の形の人種差別を再び受けた後第二の解放を目指した1950年代、60年代の公民権運動迄、アフリカン・アメリカンの人々にとって大事な解放区を提供し続けて来た。又農民運動では前述の19世紀後半、中西部を中心に広く米国をおおった人民主義運動が、又しばしばそれと行動を共にした労働騎士団 (Knights of Labor)、或いはウォブリーズの名で親しまれ下層底辺労働者の間に支持を広げた世界産業労働者同盟 (Industrial Workers of the World)、更に1930年代にニュー・ディールと共に登場し当時近來の東南欧移民やアフリカン・アメリカンの労働者が殺到した産業別組織会議 (Congress of Industrial Organization) 等の労働組合は、労働者達にとって夫々解放区となっていた。更に女性達も、彼女達が中心になって進めた運動、例えば禁酒運動や婦人参政権運動は無論、先に紹介した物を含め様々な社会運動に関わりながら、その中で自分たちの解放区を見出して行った。

この米国の改革伝統を受け継ぎながら、運動文化を育む「現地」としての解放区の歴史から、平等とよりよい未来に向かうことを自分の問題として突き詰める「小さい物語」の合奏が聞こえないか。ではこのおそらく最初は調子っ外れな音合わせを、やがて時には立派な交響曲の大音響を奏でる迄に、「小さな物語」たちに練習を積ませたのは誰なのか。

4. 「小さな物語」を繋ぎ合わせる人々

このエバンズとボイトの新しい運動史研究と並走共鳴していたのが、80年代以降米国歴史研究で一世を風靡する新しい労働史研究だ。この新しい労働史研究の担い手も、エバンズとボイト同様米国の民主主義と市民社会の在り様を過去の運動経験に学ぼうとしたベビー・ブーマーの活動家達の一群だが、この集団のリーダー格に、ニュー・ディール後期から第二次大戦直後迄強い労組の活動家を経験し、50年代の反動の時代に逸早く過去に未来を探した活動家学匠のデイヴィット・モントゴメリーが居る。昨年惜しくも亡くなった彼の山脈の如き労働史研究は今もその輝きを失っていないが、中でも所謂「戦闘的少数派」と彼が呼ぶ末端活動家への注目は、この文章で謂う、運動文化の現地に解放区を創り、そこで人々が運動文化を紡ぐのを手伝いながら、彼ら彼女らの小さな物語を大きな世界に繋げる大事な役割の担い手についての重要な指摘だ。

「多くの労働者は、毎日の出来事や世の中で繰り返される彼ら彼女らへの明け透けな扱いの違いを目の当たりにし、一つの大事な事を学んで来た。即ち確かに世の中には、個人として社会的な影響力を揮う事が出来る人達がいるけれど、自分達労働者には、一致協力して行動する他に自分達の生活で欲しい物を手に入れる事は出来ないのだという事を。家族の絆、移民同士、若い女工、職人、スト仲間、投票者、暴徒等々、労働者が一緒になって動く時そうするには夫々色々な理由があって、一括りにする事は難しいけれど、それでも個人主義という物は生れ育ちの良い金持ち達にしか関係のない事だと、固く信じている点では一緒である。階級意識というのは、日常生活の中から自然と生れ出る物ではない。そこには働き掛けというものがなくてはならない。労働者階級の活動家達、或いは他の階級の出身ではあるけれども、労働者の運動に大いに触発され活動家となった人達、これらの人達は、働く人々の間に、一緒に何かをする感覚とそこに共に目指すべき物があるという意識を持たせようと、弛まぬ努力を続けて来た。そのためにこれらの活動家達は、或る者は労働者に語り掛け、ピラを撒き、ストライキを手助けし、集会を行って来た。又或る者は、読書会を開き、軍隊式の教練を催し、ダンスや運動、コーラスのクラブを作り、協同組合を興してお店をやって来た。これらの活動家達にとって、これらの活動はそれ自体をうまくやろうと思っていたのは勿論、出来得ればそれらを通じて参加する労働者やその家族、そしてコミュニティ全体が、社会という物の見方、「労働者の解放」に至る道程についての考え方を分ち合えるようになることを望んだのである。（この頃盛んに言われる一般民衆の動向やその背景に注目する：篠田）「下からの歴史」(history of bottom up) に夢中になったり、合いも変わらず偉大な指導者の功績に拘っていると、20世紀のサンディカリスト達が「戦闘的少数派」(Militant Minority) と呼んだ人々、即ち職場の同僚や近所の住人を、自分達が何をすべきかを自覚した労働者階級へと繋ぎ合わせようと必死に頑張った彼ら彼女達のこうした決定的な役割というものがほやけてしまう。」(Montgomery 1987)

長い引用で申し訳ないが、たとえこれ以上の分量で自筆してもこれに勝る雄弁さは得られない。最後に出て来る「サンディカリスト」は深く考えなくて宜しい。かの産業民主主義の泰斗ウェッブ夫妻も、サンディカリストとは労働運動の現状に不満な人々の総称と喝破する。寧ろここは、労働運動の核心は労働者が自身の体験共有から学ぶ集合的自己教育にあると考える人達が、その重要な担い手として「戦闘的少数派」という草の根活動家を大事にしていたと解せば良からう。それよりこの文章で思い起こすべきは、此れ迄言及した運動文化や解放区の運動横断性だ。つまりモントゴメリーはこの文章を労働運動史の文脈で綴ったけれど、それは英国から新たな労働史を世界に発信し、モントゴメリーもその強い影響下にあったE. P. トムソンの労働者階級とは本人達の自覚の産物でありそれは時と場所で変わるという階級の可塑性という考え(トム

ソン 2003) に則った新労働史であり、その意味で労働運動史は必ずしも労働組合運動史ではない。その延長上として、彼ら彼女らが形成を助けた物が先の解放区の創出であり、運動文化の陶冶であり、改革伝統の継続に当たるものである事を認めるならば、こういう戦闘的少数派の存在は農民運動にせよ、公民権運動にせよ、女性運動にせよ他の運動領域にも広範かつ数多に見られる筈であり、それらが繋がり支え合う世界は所謂労働運動を超えて広大であったろう。

この事は、この「戦闘的少数派」が、イタリア左翼の指導者であり理論家であったアントニオ・グラムシが1世紀近く前からより普遍的かつ歴史的な存在として指摘した、欧州の大きな物語ではこれ迄必ずしも諸手を以て歓迎されてきたとは言い難い活動家群即ち「有機的知識人(Organic Intellectuals)」の米国的有り様だということが思い起こされて来る。モントゴメリーの批判的後輩の一人ジョージ・リプジッツの言を聞こう。

グラムシによれば、有機的知識人は、「知識人」として公けの地位や雇用を得ている訳ではない。けれども有機的知識人は、みずからが属する階級が持つ諸々の思想や熱望を方向付けている。その有機的知識人が行なう活動の中で欠かせないのが、社会へ働き掛けるため行動することである。有機的知識人が行なうのは、世界を分析し、解釈することだけではない。有機的知識人は、社会に向かって主張する中で己が思想を形造り、それを多くの者に語り掛ける。グラムシは言う。「この新しい知識人は、その場限りの煽動のためにただ雄弁であればそれでいいというものでは最早ない。この新しい知識人は、運動の建設者として、組織者として、そして「永遠の説得者」として、人びとの実際の生活の中に深く関わっていかねばならない」。後援者や大学、あるいは文化団体に支えられている伝統的な知識人という者は、この人びとの実際の生活というものから離れて居られる。けれども有機的知識人は、世界を変えようとして初めて世界を学ぶのであり、又自分が属する社会集団には何が必要で何を欲しているのかという観点から、世界を学んで初めて世界を変えるのである (Lipsitz 1988)。

前に小田実が指摘した、離れた場所でこれ迄互いの存在を知らないのに、一目会って同じ闘いの現地を持った仲間として互いを見出したブラック・パンサーや三里塚の人々とは、こういう人達ではなかったか。

5. 「小さな物語」が集う処

確かにこれまで言及した70年代半ばに始まり、前世紀末辺り迄盛んであった運動史は、90年代半ば頃からはまる米国労働運動の社会運動化を促す上で大きな影響力を持った。だがその中核を担うべく期待された米国労働組合運動は、しかしながらここ数年親労働政権をワシントンに戴いたにも関わらず失速が否めない。米国労働組合運動の現状は又稿を改めて述べる必要があるが、組合への社会的支持が過半を割り、組織率の低下は止まらず、その中の過半を占める官公労への攻勢が、世論を背景に程度の差はあれ共和民主両党から仕掛けられ、今秋の大統領選で共和党候補が勝利すれば、労組の凋落は釣瓶落としといわれる中、労働運動の行方は奈辺にあるのか。

そんな中この2年程の間に、米国の書店では硬派だが一般読者向けに興味深い本が陸続と並ぶ。例えばフィリップ・ドレイ『組合には力がある—アメリカにおける労働の叙事詩的物語』(Drey 2010)、ジョーン・ニコラス『「S」ワード—社会主義というアメリカの伝統についての略史』(Nichols 2011)、マイケル・カズン『アメリカンの夢追い人達—左翼は如何にこの国を変えたか』(Kazin 2011)、イー・エー・ディオニス『引き裂かれた我々の政治的ハート—不満の時代のアメリカ的思想を巡る闘い』(Dioone 2012)だ。

第2部 研究実施のあらましと成果

これらの作者は皆基本的には米国言論界の主流であるリベラルだが、立ち位置は様々で又作家や学者もいれば新聞のコラムニストや政治記者もいる。にもかかわらず著書の最後は何れも、この文で縷々綴った「小さな物語が繋がり支え合って形造る大きな運動世界」への信条吐露とその伝統への帰依の告白で締め括られる。例えばこうだ。

これらの若い人達は社会主義についてそんなに知らないかもしれないが、高い失業率と空前の経済的不平等の時代に資本主義を経験している彼ら彼女らは資本主義に取って代わるものに心を閉ざすことはなかった。もっともこれら若い人達が資本主義に取って代わるものを求める時に意識しているのは、外国のイデオロギーを受け入れるつもりはないということだ。彼ら彼女らが考えているのは正にアメリカ「イズム」であり、呼び名は違っても現実には建国以来我々の経験の一部になって来たものだ。一世紀半前、南部の人間の隷属状態と北部の賃金奴隷に最も激しく反対した者達は、自らを「社会主義者」或いは「共和主義者」と呼んだ。一世紀前、公民権、市民的自由、平和の擁護者達、そして米国にかく在るべしと反植民地主義の精神を再び呼び起さんとした闘士達は、矢張り自分達の事を「社会主義者」と称した。50年前、仕事と自由と「貧困との闘い」のために立ち上がった著述家や組織活動家やそれらを求める行進に加わった者達は、「社会主義者」と自称した (Nichols 2011)。

1954年、ルイス・コーザーとアルヴィン・ハウは当時発刊された雑誌『Dissent』に寄稿し、専制的な支配者と彼らの思想への命取りな帰依から理想社会の考えを守ることを望む。そこで彼らは、「社会主義は我らの願望」とレオン・トロツキーが神への思慕を語ったのを文字って述べた。彼らは、社会主義者に未来があるとすれば、それは彼らが多くの労働者を自らの解放へと駆り立てる場合のみだと強調した。そして彼らは、いずれの階級であれ政治のために生き或いはそのために民族や人種集団、宗教、更にはスポーツ・チームへの忠誠さへ諦めようとする者が僅かしかいない事実を歓迎した。米国において急進主義的な民主主義者が非常に不遇を囲った時代に、コーザーとハウは、「社会主義に似たものを望めば定義を巡っていつも苦闘しなければならず、それは殆ど苦痛を伴う行為だが、何かを創造する時に付き物の痛みだ」と認めた。これまで社会主義は殆どのアメリカ人にとって自分達の夢の社会のために選択する物では決してなかった。そして今日多くの人々がそういう社会が実現可能なのか或いは望ましいか疑っている。けれどもそれを何と呼ぼうともそういう平等理念の様なものなしには、現実の世界を変えることはこれまで以上に難しいだろう (Kazin 2011)。

何れも「社会主義」が、欧州の大きな物語のそれとは対照的に、長きに亘って「平等とよりよき未来に向けた小さな物語をいくつも編んでいくなか」で互いに会ったこともない人々が集う想像の共同体への「合言葉」であったことが分かる。同時に、建国当初から階級なき社会と自己規定しその実質化に向け、多様な出自を持つ運動によって幾重にも更新されてきた米国の「社会主義」運動には、欧州の大きな物語が拠って以て立つ処とは異なる思想的源泉がある。それ故欧州中心の大きな物語が終わっても、米国労働運動がこの伝統に拠るならばその行方に然程の心配は要らず、寧ろ心しておかねばならぬのは、それを星空の中に見出すこちらの眼力に掛かっていることだろう。因みに以下の末文にある様に米国には既にその眼力を備えた人がその在り処を探す目印を皆に教えている。

勿論この本で触れた人達や他の何百万の人々が成し遂げた事の真の記念碑は、図書館に収まっている訳でもなければ名誉の飾り板に刻まれる訳でもない。それは我々が今日当然の事としている理に叶った労働時間、職場の安全、福利厚生、従業員は自分達の労働の価値を交渉する権利を持つという根本概念といった権利や保護こそにある。それは又そうした諸権利が誰かから手渡されたり、出来合いの物として配られたのではなくて、労働者自

2. 小さな物語が繋がり支え合う大きな世界の労働運動

身によってそうした諸権利を巡って組合が結成され、交渉相手に要求され、勝ち取られた物だという知識にある。「組合は力を求めん、人間たることを褒め称える力を」。200年近く前、サラ・バグリーがニュー・イングランドの女性労働者に贈った旗にそう記してあった。そうした伝説の遺物が決して捨て去られず、今もアメリカの何処かで我々と共にあることを願いたい。勿論サラも彼女の意思が今も生きているのか、彼女が入念に推敲した言葉が変わらぬ儘なのか知りたがっていることだろう (Drey 2010)。

ここに出て来るサラ・バグリーは、1840年代前半ローウェル女性労働改革協会の創設者。彼女は当時産業革命の先端を走っていたマサチューセッツ州ローウェルの近郊農家に生まれ、地元で教師をした後30歳で着の身着の儘紡績工場に女工として就職。その後様々な改革運動が湧き上がるニュー・イングランドで活動家として更に運動言論家として頭角を現す。当時結成され始めた労組も殆どが「ローカルな文脈依存的なもの」で、職場の組織化よりも土地改革や時短法制や協同組合等の地域の「諸運動の運動」に忙しかった。だが次第にこれら小さい物語は超地域で繋がり支え合い大きな世界の運動を造る。当時組合等は既に専ら白人男性の専有物であったが、「諸運動の運動」の中では異人種、異性、異目標の連帯行動が盛んに見られた。例えば1860年にニュー・イングランド全域で2万人が参加した大靴工ストで、女工組合は猛吹雪を衝いてデモの先頭に立つ。彼女達が捧げる連帯旗には「体は負けても気持ちは負けない。我らの父、夫、兄弟と肩組んで、正義の闘いにいざ進まん」の文字が躍った。此れ迄アフリカン・アメリカンの歴史を書き数々の賞を取った筆者は、この772頁に及ぶ米国労組史の大著の最初と最後をこのサラ・バグリーの物語に捧げる。

そしてよだかの星は燃えつゞけました。
いつまでも燃えつゞけました。
今でもまだ燃えてゐます。

【参考文献】

《邦文著者姓五十音順》

小田実 (1970) 「第三世界と私、私たち」 小田実編『現代革命の思想 4 第三世界の革命』筑摩書房

グリーン、ジェームス (篠田徹抄訳) (2003) 『歴史があなたのハートを熱くする—労働運動をよみがえさせたければ忘れてしまった闘いの過去を思い出せ』教育文化協会 (第一書林発売)

トムスン、エドワード・P. (市橋秀夫、芳賀健一訳) (2003) 『イングランド労働者階級の形成』青弓社

ラクラウ、エルネスト・ムフ、シャンタル (山崎カヲル、石沢武訳) (1992) 『ポスト・マルクス主義と政治—根源的民主主義のために』大村書店

《英文著者姓アルファベット順》

Dionne Jr., E. J. (2012) *Our Divided Political Heart: The Battle for the American Idea in an Age of Discontent*, Bloomsbury.

Dray, Philip (2010) *There is Power in a Union: The epic story of labor in America*, Doubleday.

■ 第2部 研究実施のあらましと成果

- Evans, Sara M. and Boyte, Harry C. (1986) *Free Space: The sources of democratic change in America*, Harpar & Tow Publishers.
- Goodwyn, Lawrence (1975) *Democratic Promise: The Populist moment in America*, Oxford University Press.
- Kazin, Michael, (2011) *American Dreamers: How the Left changed a nation*, Alfred A. Knopf.
- Klein, Naomi (2000) *No Logo: No space, no jobs, taking aim at the brand bullies*, Flamingo.
- Lipsitz, George (1988) *A Life In The Struggle: Ivory Perry and the culture of opposition, revised edition*, Philadelphia : Temple University Press. 文中引用は、Quintin Hoare and Geoffrey Nowell Smith eds. (1971) *Antonio Gramsci, Selections from the Prison Notebooks*, International Publishers. から。
- Mertes, Tom, ed. (2004) *A Movement of Movements: Is another world really possible?*, Verso.
- Messer-Kruse, Timothy (1998) *The Yankee International: Marxism and the American Reform Tradition, 1846-1876*, The University of North Carolina Press.
- Montgomery, David (1987) *The Fall of the House of Labor: The workplace, the state, and American labor activism, 1865-1925*, Cambridge University Press.
- Nichols, John (2011) *The "S" Word: A short history of an American tradition...socialism*, Verso.

小さな物語が繋がり支え合う大きな世界の物語（その2）（2013年2月）

1. 平等とよりよき未来に向けた小さな物語とは

本稿は前稿「小さな物語が繋がり支え合う大きな世界の労働運動」の続編だ。同時に本稿は、前稿で述べた小さな物語が支え合う大きな世界の労働運動としての米国労働運動の物語を、日本のそれに重ね合わせる事を試みる。先ずはこの小さな物語が繋がり支え合う大きな世界の労働運動という考え方を思い出そう。元々これは、本誌前々号の本連載初回で、労働運動再生の道について新川敏光氏が述べた予言に由来する。

労働運動の再生にとって重要なのは、やはり平等化や社会進歩の物語である。ただしそれを普遍性として語る事はもはやできず、あくまでローカルな文脈依存的なものとして語られる必要がある。それはいわば一つの大きな物語ではなく、無数の小さな物語である。

これを筆者はこう解した。労働運動の再生には平等とよりよき未来に向けた物語が必要だ。だがそれは最早、19世紀後半から20世紀末迄欧州が主編した共産主義や社会主義の「大きな物語」に基づかない。又それは歴史や社会を法則で理解し、その物差しで世界を先進後進に分けない。更に体系だった構想に則り、地球大の組織建設を目指さない。そうではなくてこれからは、平等とよりよき未来に向かうことは先ず自分の問題として受け止め、それを追求する場を身の回りに創っていく物語こそが大事だ。そしてこの一見内輪な運動現地の小さな物語同士は、平等とよりよき未来を地場で目指すという志で繋がり合える。この「大きな物語」と「小さな物語」の成り

立ち方は、前者が個々が部品と化す巨大な構築物、例えていえば旧約聖書の「バベルの塔」なのに対して、後者は夫々が独自に光を放ちながらその輝きが集まって美しい景色を織り成す星座の様だ。そして米国の労働運動の物語は、この後者の運動原理で理解出来るとの見立てで説明を試みたのが前篇だ。そして今回は同じ観点でそれを以下日本で試す。

2. もう一つの小さな物語が繋がり支え合って大きな世界を作る国

「社会民主主義のワクをはみ出した社会民主主義的政治勢力」には独自の世界史的使命があるように感ぜられてならない。もちろんこのような政治勢力が大きく成長しうる条件をもった国は少ない、、、そうしたなかで常に引合いに出されるのは日本とイタリアくらいのもとのさえ言われている、、、とするならば「社会民主主義のワクをはみ出した社会民主主義的政治勢力」と言ってみても国際的には寥々として暁天の星の如きものではないかと言われるかもしれない。だが、戦後世界の政治と経済は各種の国家類型を生み出す可能性をもつ。現に新興独立国群のなかには81カ国の共産党・労働者党代表者会議の声明に「民族民主国家」と呼ばしめるような国家類型を生み出した、、、戦後日本の社会民主主義運動は日本社会党の運動によって代表されてきた。そして西欧社会民主主義の主流とは異なる道を歩み、異なる道を歩み続けたが故に日本の社会民主主義運動の代表勢力となり、日本の革新勢力の中核としその政治的多数派の地位を確保してきた、、、その主たる原因は戦後の世界、戦後の日本の特殊条件のなかにあることは言うまでもない。日本社会党は、、、統一された政治性格を持たず、上部は非共産社会主義諸派の政治連合であり、首脳部の構成はより前時代的な派閥連合とさえ見ることができる。だが戦後15年にわたってこの党の組織と活動を支えた中堅分子、とくに青年党活動家は現代西欧社民思想でもなく歴史的伝統的意味の社民思想でもない。筆者のいう「社会民主主義のワクをはみ出した社会民主主義類型」の人たちである。【清水慎三（1961）『日本の社会民主主義』岩波書店】

日本の政治経済や社会文化が他国の政府や民の範や羨望の対象となったことは、米国程ではないにせよそれ程稀有な事ではない。だが労働運動や社会運動の世界、取り分け欧州が流布した労働者階級を中心とした平等と社会進歩の大きな物語では、米国同様或いはそれ以上にずっと後発国ないし異端児扱いだ。戦後労働運動の作戦参謀を長く務めた清水慎三は、それを「はみだし」と表現する。が、興味深い事に彼は後発国の後ろめたさは微塵も見せず、これを「独自の世界史的使命」と任じた。本書の発行は少なくとも時代認識の上では高度成長前。何らかの「坂の上の雲」を仰ぎ見ていた筈だから、労働運動の目標としては、少なくとも字づらの上では欧州のそれと然程違いなくとも、その実現でその大きな物語とは異なる道程を模索していた様で興味深い。

この清水が労働運動の作戦参謀として最も活躍したのが所謂「高野時代」、即ち1950年代前半に高野実事務局長に率いられた総評が、本連載初回で新川が労働運動再生戦略として指摘した社会運動ユニオニズム、即ち

労働運動が社会的に一部の恵まれた層（なかならず正規雇用労働者）の利益を守るものにすぎないという批判に対して、環境運動や消費者運動など、いわゆる新しい社会運動と連帯し、協調行動を繰り広げることによって、新たな支持を獲得し、社会的承認を得ようという戦略

宜しく、全ての労働者のため、ひいては様々な苦悩に喘ぐ人民のために、平和運動や護憲運動等当時の新しい社会運動と連帯し、労働運動の存在感と社会的承認を国民の間に広く深く獲得した時代だ。もっともその運動戦略、取り分け企業や役所に閉じ籠りがちな組合を一般組合員や他の

第2部 研究実施のあらましと成果

社会運動に出来るだけ開いて公共財にせんとしたそれは、労働運動の則を踏み外す物と主要組合の幹部連には不評だった。そのため彼らの批判を一般組合員や友好団体の強力な支持で暫く凌いだものの、1955年には事務局長の座を追われる。但しその間「社会民主主義のワクをはみ出した社会民主主義類型」として高野総評を最も批判した人が、実は高野総評の最大の理解者であった事は興味深い。その批判の主とは近代日本の労働経済学者を代表する東大教授大河内一男で、その理解の下りが高野退陣前後に雑誌『世界』に書いた総評論の最終部だ。

総評は、明かに、結成以来、一年毎に、「左旋回」をとげながら、その活動の舞台を拡大してゆくとともに、内部分裂の傾向を濃くして行ったが、これは、明治、大正を通じての、日本の労働運動にとっての宿命のようなものである。戦後の労働運動のほうはいたる流れは、もはや組合エゴイズムに居すわる余地を残さなくなってしまい、その運動は一方では、再軍備反対、基地反対・MSA反対の運動となり、他方では平和や全面講和への要望となり、労働組合員の闘争というよりも再軍備の敏寄せのかかる民衆全体の闘争という形で展開され、さらに、他方では、中小企業労組の結成や、零細農民、小商人漁民と組合との結びつき、そしてまた、闘争の仕方としても、ゼネスト的方式から「地域ぐるみ」、「町ぐるみ」の闘争や「家族ぐるみ」の闘争による組合闘争力の補強への試み、そうした新しい戦術を用いながら、或いは地域共闘の形で横断的に、或いは家族組合の形で背後から、個々の企業別組合の支柱をつくってゆこうとする。こうした多彩な闘争は、しばしば、労働組合本来の粘着力のある折衝と交渉やそれへの訓練などを軽視する傾向を生み出しやすいが、それにしても、こうした組合の必然の動きは、サンフランシスコ条約後における日本の「基地経済」的実体と広範深刻な国民の窮迫が必要をもたらしたものであって、個々の指導者の考え方や個人的指導理念の差異などに由来する問題ではない。総評はまだまだ内部での対立を深めるだろうし、今後さまざまな誤謬をおかすだろうが、それでもその指導者が、総評というものの実体が労働組合であることを忘れて浮き上がることさえなければ、日本の指導的連合組織として、国内的にはもちろん、国際的にも、それこそ「中立」の、特殊な地位を占めることができるだろう。大事なことは、日本の労働組合、とりわけ総評のような連合体は、アメリカ流の「労働組合」labor unionでもなく、さりとしてイギリス風の「労働組合」trade unionでもなく、「企業別組合」を中心とする一種の民衆組合的なモノだという点を認識することである【大河内一男「総評論」『世界』1955年9月号所収】。

従来、この大河内の「企業別組合を中心とする一種の民衆組合」という高野総評理解は、労働組合として有るまじき物というニュアンスで、その後も長く受け留られて来た。けれども此処迄の本稿の文脈に置いた時、この企業別組合を中心とした一種の民衆組合という理解は、実は労働組合のもう一つの有り様、即ち小さな物語が繋がり支え合って大きな世界を造る労働運動のそれに近い事に想い至る。それは又時空を越えて共有されていた。

1945年後のフランスとブリテンとの平和運動の対比は、とりわけ解明にやくだつ。なぜなら、それを説明するのに、伝統の諸要因以外の他のなんらかの要因をみいだすことは困難だからである。フランスは、自然発生的な大衆的平和運動をもったことがなく、唯一の例外は、共産党が、核反対のうったえを支持してその精力をそそぎ、したがって、ひじょうにおおくの署名をあつめた局面である。ブリテン人は、核戦争反対の世論をすすんで動員しようとする、あるいはそうすることのできる、重要な政治組織をもったことがない。「世界平和運動」と共産主義とのあいだの緊密な関係は、おそらく、ブリテンにおける広範な基礎をもつ大衆的平和運動の出現を、「冷戦」の最悪のヒステリー症状の終結後までおくらせた。他方、非公式な民衆グループが、暗に平和主義的な核非武装運動を即座につくることができた。そしてそれは、おそらく日本人のそれを例外として、世界におけるもっとも巨大な核反対運動、および（あまり成功していない）外国の模倣者たちの模範となっただけでなく、

2. 小さな物語が繋がり支え合う大きな世界の労働運動

せまいそれ本来のしごとをこえて、ブリテンの政治における主要勢力となった【ホブズボーム、E. J. (鈴木幹久・永井義雄訳) (1998)『イギリス労働史研究』ミネルヴァ書房】。

54年、日本の漁船第五福竜丸の乗組員がアメリカのビキニ環礁における水爆実験により被爆したことから原水禁運動が始まり、一般大衆が知識人の指示を仰がずとも自立的に爆発的エネルギーを発揮するようになり、彼らの運動は政治をも動かす一大勢力を形成することになった。

民衆が持つ反戦感情のパワーは、いかなる知識人の説く平和論の影響力をも凌駕するものであった。主にリベラル派の著名知識人が結成した平和問題懇談会は、49年と50年代初頭に討論を重ね、マルクス主義的思想と切り離し、極力党派性を排した論法で全面講和推進と平和憲法の順守を呼びかけた。しかし国民の多くは、平和問題懇談会のメンバーを左翼シンパとみなして信用せず、メディアも彼らの主張が理想主義にはしり非現実的であるとして冷淡であった。しかしそれとは対照的に、ビキニ事件で噴出した反核・反戦感情は国民的規模で広がり、その後の日本人の戦争・平和観の基底として定着した。戦時中の悲惨な体験と、今現在の不穏な政治・社会情勢にかきたてられた将来おこるかもしれない戦争への恐怖は、学者が説く平和論よりはるかに強力に民衆の心をとらえた【山本真理 (2006)『戦後労働組合と女性の平和運動—「平和国家」創生を目指して』青木書店】。

ホブズボームは英国の歴史家。『市民革命と産業革命』『資本の時代』『帝国の時代』『20世紀の歴史—極端な時代』等の著作の邦訳で日本でも有名。恐らく過去100年で世界の歴史家の何本の指に数えられる人。引用した『イギリス労働史研究』は、英国を含む欧州の社会労働運動における伝統の有り様を縦横に語り、60年代に既成左翼の「大きな物語」に挑戦した名著。そこで言及された平和運動に関わった多くの労組の有り様は、先に大河内が指摘した「イギリス流の労働組合」とは異なる。そしてここで英国同様「広範な基礎をもつ大衆的平和運動」を築いた日本人達を束ねたのが高野実だ。更にこの「平和主義的な核非武装運動を即座につくることができた」非公式な民衆グループの存在に注目し、そのエネルギーを汲み取った高野時代の労働運動を女性の平和運動という観点から再評価したのが、当時から半世紀後に英国オックスフォード大学で学んだ日本人だった。それは恰も誰かが高野総評とその世界性について我々の忘れた記憶を呼び醒す為、それを思い起せる場所に彼女を送ったかの様に。

この日英に共通な社会労働運動の有り様は、前篇で筆者が、米国の社会労働運動の有り様、取り分け元奴隷の黒人小作から新移民の白人産業労働者、中小商店主から宗教家迄多様な人々から構成された様々な運動の諸連合であった人民主義運動のそれを例に指摘した「諸運動の運動」或いは「諸連合の連合」型の、もう二つの事例と考えて良からう。この表現は、元々1990年代に世界各地で族生した先進各国の政財界指導者が集まる国際的な経済会合に抗議する直接行動の総称たる反グローバル化運動の有り様を述べた言葉だ。そしてこの運動表象を用いて反グローバル化運動の原型として、日露戦争前夜に非戦論を訴え同時に社会主義思想の宣伝に努めた新聞を発行し、当時の国内外の多様な社会主義運動と開かれた連携を模索した平民社を描いたのがベン・ミルトンの「平民社とグローバリズム—「下からのグローバル化」という未完のプロジェクト」だ。この論文が収められた梅森直之編『帝国を撃て—平民社100年国際シンポジウム』(2005)論創社は、平等とより良き未来の大きな物語にありがちだった発展段階論的思考や欧州中心主義的視点、更に近代と伝統についての二項対立的発想や非欧州間の運動連携への盲目等を批判。小さな物語が繋がり支え合う大きな世界の社会労働運動というもう一つの運動史の構築に、力強いエールを送る。

この点でもう一つのエールが同じ平民社を論じた40年前の名著からあった。松沢弘陽『日本社

■ 第2部 研究実施のあらましと成果

会主義の思想』（1973）筑摩書房だ。

日露戦争前後に於ける平民社の空気は、明らかに『万朝報』によって企てられた理想団の延長であった。……理想団といふのはいふまでもなく、現社会に対して何等かの改革意見をもった男女の雑然たるあつまりで、仏教徒も居れば、キリスト教徒も居る。社会主義者も居れば、社会改良家も居る。音楽家も居れば、画家も居る。文士も居れば、詩人も居る。資本家も、労働者も、医師も、教員も、弁護士も、坊主も、神主も、官吏も、軍人も、有りとも有らゆる生活層から一風変つた人間を網羅した社交団体だった。イギリスが北米大陸の開拓に着手した初め、幾団かの清教徒が……理想郷の建設を試みた。理想団及びその延長である初期の平民社といふものは、先ずそんな心持ちのものであった。……かくいへば、平民社の連中が如何にも古いユートピアンであつたやうにも聞える。しかし……平民社の空気がユートピア的であつたといふことは、必ずしも平民社の中心人物までがユートピアンであつたといふことにはあたらぬのだ。堺、幸徳、安倍、西川等諸氏の間には、この時すでにマルキシズムに関する重要文献は悉く網羅されて居り、その熱心な研究も起つて居た。

この本の冒頭「はじめに」で、平民社の生き残り白柳秀湖が1934年のマルクス主義の盛時も過ぎかかった頃、当時の社会主義観に基づく平民社理解に抗弁した件を引いた後、自らの所信を開陳する。

問題がまず、平民社の「中心人物」とそれを繞るおよそ多種多様な人々との重層性にあることが、うかがわれよう。社会主義の世界に未だ一義的に公定されたオーソドクシィが形成されない時代だったから、「万国社会党」を範とする「中心人物」のほかに、蘆花が「自家の社会主義を執る」と宣言したように各人各様自己流の社会主義を奉じるものから、社会主義を部分的に支持するもの、さらに社会主義には必ずしも共感しなくても社会主義者のパーソナリティや「同志相交」の雰囲気をもつて集まる者までさまざまだった。そこには後の世代の社会主義像をはみ出さざるをえぬ、その意味で「意外な姓名」（堺利彦）が多く含まれていたのであり、こうした重層性は眼を東京の「平民社」から全国にむければさらに著しい。

ここで上述の平民社の特徴が、前篇で述べた「諸運動の運動」「諸連合の連合」としての米国社会労働運動に通底する改革伝統と見事に重複し、又「平等とよりよき未来に向けた小さな物語をいくつも編んでいくなかで」で互いに会ったこともない人々が集う想像の共同体への「合言葉」として在った米国の社会主義の様と全く相似するのに驚くのも良からう。だが高度成長前に清水が戦後日本の社会労働運動について使った「はみ出し」という表現を、高度成長末に明治末期の日本の社会労働運動の有り様に用いたことにも、矢張り驚かされないか。

3. 小さな物語の多彩な「現地」

上記の平民社についての2つの記述は、明治末期に既に、平等とよりよい未来に向かう事を自分の問題として突き詰める「現地」が、各地に数多存在していた事を示している。更に明治中期に近代日本の社会労働運動を様々な形で胚胎した自由民権運動の仔細な研究、例えば自由民権期の結社研究を牽引した新井勝紘が編んだ『日本の同時代史 22 自由民権と近代社会』（2004）吉川弘文館は、それらが更に明治中期には形成されつつあったことを明らかにする。そして我々は今それらの現地を、そこでやがて互いに繋がり支え合って大きな世界を創ることになる夫々の小さな物語を紡いだ人を、その人となりと一緒に垣間読むことが出来る。1997年に日外アソシ

エーツから刊行された『近代日本社会運動史人物大事典』のお陰で。

全5巻、4,200頁余に及ぶ本書は、1868から1945年迄を対象に、1万5千人のこれら紡ぎ手とその現地在が記載されている。この膨大な作業は、1976年6月に在野の思想史家のしまねきよし、戦後平等とよりよき未来の大きな物語に違和感を覚えて、寧ろ名も無き人々の小さい物語が詰まった大きな物語を紡がんと、その在野史観に基づく調査運動を展開した思想の科学研究会が出す同名雑誌で、「日本社会主義人名事典」を作りたいと声を上げた事に由来する。やがて56名の編集委員と375名の執筆者を集めたしまねの企画は、以下の37の範疇、

両毛騒擾、自由民権、政党事始・普選、無産政党、労働組合、農民運動、学生運動、青少年運動、都市化問題、消費組合、アナキズム、水平社、右翼、救援会、医療運動、教育運動、文化・文学、思想・哲学、宗教・反宗教、ジャーナリズム、実業家、反戦平和運動、女性解放、鉱山運動、沖縄人、アイヌ、海外活動、エスペランティスト、在日朝鮮人、在日外国人、初期社会主義、在日台湾人、在日中国人、在ソ「被肅清者」、無産者運動（無産政党・労働組合）、奄美、風俗・芸能、城西消費組合、茨城共産主義運動

の下、1万5千の「現地人」の物語を綴った。それは又既刊の「左」の大きな物語に基づく人名事典に対する挑戦状でもあった。

実はこうした挑戦的な綴り方運動はこれが初めてではない。この人名事典発刊に先立つ事1989年に、『思想の海へ [解放と変革]』全31巻が社会評論社から出された。8名の編集委員会で34名の各巻責任担当者が集ったこのシリーズは、「近世・近代日本300年間にわたる生きた思想の記念碑的なアンソロジー」を編む事を目指した。各巻の内容は以下の通りだ。

「百姓の義一ムラを守る・ムラを超える」「方法の革命＝感性の解放一徳川の平和の弁証法」「江戸期の開明思想一世界へ開く・近代を耕す」「民の理一世直しへの伏流」「倒幕の思想＝草莽の維新」「明治草創＝啓蒙と反乱」「自由自治元年の夢一自由党・困民党」「社会主義事始一明治における直訳と自生」「大正デモクラシー一草の根と天皇制のはざま」「近代文明批判一「国家」の批判から「社会」の批判へ」「アジアと近代日本一反侵略の思想と運動」「思想の最前線で一文学は予兆する」「個の自覚一大衆の時代の始まりの中で」「芸術の革命と革命の芸術」「危機の時代と転向の意識」「反天皇制一「非国民」「大逆」「不逞」の思想」「土民の思想一大衆の中のアナキズム」「水平＝人の世に光あれ」「日本番外地の群像一リバータリアンと解放幻想」「愛と性の自由一「家」からの解放」「女性＝反逆と革命と抵抗と」「自我の彼方へ一近代を超えるフェミニズム」「フェミニズム繚乱一冬の時代への烽火」「谷中村から水保・三里塚へ一エコロジーの源流」「島々は花綵一ヤポネシア孤は物語る」「海外へユートピアを求めて一亡命と国外根拠地」「歴史の思想一誰が歴史をつくるのか」「無産政党と労農運動」「天皇制国家の透視一日本資本主義論争Ⅰ」「世界農業問題の構造化一日本資本主義論争Ⅱ」「戦時下の抵抗と自立一創造的戦後への始動」。

基本的に運動思想に焦点を当てながら、既存の「大きな物語」に対するもう一つの視点を提供せんとする意気込みは、上記のしばしば挑戦的な題名と共に、原典を選択した各巻編集者の解説からも十分伝わる。

一方この国には、あらゆる運動現地とそこでの大小の物語を、一定の空間に於いて時系列で追い掛けようとする営みも存在する。大阪社会運動協会の『大阪社会労働運動史』がそれだ。1986年の第1巻を皮切りに2009年迄に9巻を数える。明治期から最近までの大阪の社会労働運動で公刊された文字媒体から網羅出来る社会労働運動の動向を、綿密な時代背景の記述を付しながら、

第2部 研究実施のあらましと成果

争議から選挙、そして文化活動に至る迄を詳細に綴る記録は、各巻を時には1,300頁余りに迄膨らみます。確かに日本では様々な運動史の資料が数多編まれて来たが、これ程の総合的で徹底的な壮挙は空前絶後と言って良からう。同時に本書は大阪という運動現地とそこでの物語の特異性を見事に著わしてもいる。

今から10年程前にBlair Rubelという米国の歴史家が Second Metropolis: Pragmatic Pluralism in Gilded Age Chicago, Silver Age Moscow, and Meiji Osaka, (2001) Cambridge University Pressという著作を出した。セカンドメトロポリスとは首都を凌ぐ経済力と政治社会文化に活力を備えた大都市を指し、19世紀末から20世紀初めの米国、ロシア、日本からシカゴ、モスクワ、大阪を取り上げた。これらの街の旺盛な力の源泉は、「実践的多元主義 (pragmatic pluralism)」と筆者が呼ぶ、国家や地方政府を含め如何なる勢力もその他全てを圧する力を持たない、極めて多数のアクターが競合し互いに柔軟に連携し合う状況だという。例えば大阪の場合、その一端は以下の『大阪社会労働運動史 第2巻戦前篇 (下)』の目次によく見える。

第12章 「非常時」と運動の混迷 (1931～33年)

第1節 「満州」事変と労働運動、国家社会主義運動の分出 1 「満州」事変の影響 2 無産政党的動揺

3 国家社会主義新党の結成

第2節 国家大衆党・大日本生産党 1 国粋大衆党 (1) 国防社と雑誌『国防』 (2) 国粋大衆党の活動

(3) 国粋航空連盟 2 大日本生産党

第3節 大阪府会議員選挙(1931年)・総選挙(32年) 1 大阪府会議員選挙(31年) 2 無産党議員の府会活動

3 総選挙 4 杉山元治郎代議士の議会活動

第4節 社会大衆党の結成とその運動 1 社会大衆党(社大党)の結成 2 1932年の活動 3 1933年の活動

第5節 総同盟大阪連合会・社会民衆党 1 総同盟大阪連合会・社会民衆党 2 大阪金属労働組合

3 大阪合同労働組合 4 シンガー・ミシン会社争議 5 関西紡績産業労働組合大阪支部連合会

6 通友同友会・通友自治会 7 電線工組合・大阪印刷出版労働組合 8 大阪海友同志会

第6節 官業労働総同盟 1 行政整理反対・共済組合年金獲得闘争など 2 大阪市従業員組合(大阪市従)

3 大阪煙草労働組合

第7節 全国労働組合同盟(全労) 1 日本労働倶楽部排撃派の分裂(1931年～12月の運動) 2 1932年の運動

3 1933年の運動

第8節 関西労働組合総連盟

第9節 日本労働組合総連合 1 総連合と新日本国民同盟(新国同) 2 大阪連合会 3 反トーキー・劇場

争議

第10節 関西民衆党・日本労働総連盟

第11節 日本交通労働総連盟(交総) 1 大阪市電気局従業員局闘同盟 2 大阪自動車従業員組合など

第12節 合法左翼労働運動 1 全国労働組合同盟日本労働倶楽部排撃分裂反対同盟(排同) 2 日本労働組合

総評議会(総評議会)の活動 3 全労統一全国会議(統一会議)

第13節 「非常時」下の共産主義運動 1 8・26事件より熱海事件(32年10月末)まで (1) 日本共産党・共産

青年同盟 (2) 日本労働組合全国協議会 2 熱海事件後の再建

第14節 プロレタリア文化運動 1 日本プロレタリア文化連盟(コップ)大阪地方協議会 2 加盟諸団体の活

動 (1) 演劇同盟(プロット)大阪支部 (2) その他の団体

第15節 アナーキズム運動 1 分裂解消、全国労働組合自由連合会への再統一 2 各組合の動向 3 運動

の消滅

2. 小さな物語が繋がり支え合う大きな世界の労働運動

- 第16節 メーデー・愛国勤労祭 1 メーデー(1932・33年) 2 愛国勤労祭(1933・34年)
- 第17節 1933年の市町村会議員選挙 1 この選挙の特徴 2 堺市会議員選挙 3 大阪市会議員選挙
4 無産党大阪市会議員の議会活動
- 第18節 泉州地方の労働運動 1 総同盟泉南地方協議会 (1) 大阪陶業労働組合 (2) その他の組合の活動
2 その他の組合
- 第19節 農民運動 1 全農総本部派大阪府連合会 2 全国会議大阪府連合会
- 第20節 未組織労働者の労働争議、小作争議 1 1931(「満州」事変以降)～33年の労働争議 (1) 31年(「満州」事変以降)～32年の争議 (2) 1933年の主要争議 2 小作争議
- 第21節 部落解放同盟 1 高松地方裁判所差別糾弾闘争に拠る運動の活性化 (1) 全水大阪の衰退 (2) 大阪での差別裁判糾弾闘争 2 公道会の融和運動
- 第22節 その他の社会運動 1 消費組合運動 (1) 新設消費組合 (2) 消費組合の連帯活動 2 無産医療運動 3 学生運動 (1) 右翼学生運動の展開 (2) 学校紛争・左翼学生運動 4 婦人運動 (1) 無産婦人運動・職業婦人団体 (2) 全関西婦人連合会の右傾化 (3) 国防婦人会 (4) 南地・芸妓のストライキ 5 住民運動 (1) 公害反対運動 (2) 小売商人の商権擁護運動 (3) 対市、受益者負担軽減要求運動
- 第13章 軍需インフレ下の運動の高揚と弾圧の激化(1934～37年)
- 第1節 日本労働総同盟大阪連合会 1 大阪連合会 2 大阪金属労働組合と大阪機械工作所争議 (1) 大阪機械工作所争議 (2) 大阪金属労働組合の活動 3 大阪合同労働組合 (1) 大阪合同労組の活動 (2) 映画演劇同盟・全関西映画演劇同盟 4 関西紡績産業労働組合など (1) 関西紡績産業労組 (2) 大阪市現業員同盟 (3) 逓友同志会・大阪逓信従業員会連合 5 日本港湾従業員組合大阪支部など
- 第2節 全国労働組合同盟(全労) 1 1934年の運動 2 港南地方全労・総同盟合同運動と全日本労働総同盟の結成 3 日本労働組合同盟大阪地方協議会 4 全労の1935年の運動 5 全労の1936年の運動
- 第3節 官業労働運動と弾圧 1 官業労働総同盟の活動 (1) 大阪市従業員組合 (2) 向上会 2 日本労働総連盟の活動 (1) 総連盟映画従業員組合 (2) その他の総連盟の運動 3 大阪官業労働組合の結成と崩壊
- 第4節 日本交通総連盟(交総)系組合の運動 1 大阪市電気局内戦線統一運動 2 私鉄労働者の動向
3 大阪自動車従業員組合
- 第5節 社会大衆党 1 1934年の活動 2 1935年の活動 3 1936年の活動 4 日本俸給者協会
- 第6節 日本労働組合全国評議会(全評) 1 全評の結成 2 総評議会・統一会議加盟組合の活動
3 全評関西地方評議会と35年の活動 4 大阪地方無産団体協議会 5 全評の1936年の活動
6 全評の1937年の活動と弾圧
- 第7節 泉州地方の労働運動 1 全日本労働総同盟 2 日本労働組合全国評議会(全評) 3 その他の組合
- 第8節 第15・16回メーデーとメーデーの禁止
- 第9節 大阪府会議員選挙(1935年)、総選挙(36年) 1 大阪府会議員選挙 (1) 無産派の選挙選 (2) 無産党府会議員の議会活動 2 総選挙(36年) (1) 選挙選 (2) 大阪選出社大党代議士の議会活動
- 第10節 共産主義運動 1 日本共産党関西地方委員会・党中央再建準備委員会 2 朝鮮人共産主義者の運動
3 日本労農救援会(労救)
- 第11節 国家社会主義・日本主義労働運動 1 日本労働同盟 (1) 労働同盟と政党問題 (2) 大阪連合会の活動 (3) ゼネラル・モーターズ大阪工場での活動 (4) 臨時工解雇手当請求訴訟 2 日本労働組合総連合(総連合) (1) 複雑な動向 (2) 大阪連合会の活動 3 日本労働祭・日本産業祭 4 その他の団体 (1) 神武会大阪支部 (2) 青年日本同盟大阪支部 (3) 日本産業軍大阪連合会
- 第12節 農民運動 1 全会派大阪府連の全国農民組合(全農)への復帰 2 34～37年前半の全農大阪府連の活

第2部 研究実施のあらましと成果

動 3 皇国農民同盟(皇農)

第13節 未組織労働者の争議と府下の農村事情、小作争議の態様 1 労働争議(1934~37年) (1) 1934年の主要争議 (2) 35年の主要争議 (3) 36年の主要争議 (4) 37年(日中戦争まで)の主要争議 2 府下の農村事情、小作争議の態様

第14節 部落解放運動 1 水平社運動 2 大阪府公道会

第15節 その他の社会運動 1 労働者教育運動 (1) 大阪労働学校 (2) 労働学院その他 2 無産者医療運動 3 消費組合運動 4 文化運動 (1) 新劇運動 (2) 児童演劇・人形劇運動 (3) 文学運動 (4) 思想運動 (5) エスペラント運動 5 住民運動 (1) 公害反対運動 (2) 大阪駅前区画整理立退き問題 (3) 関西大風水害対策要求運動 (4) 郊外電鉄踏切問題 (5) 百貨店進出反対運動

この時代、上述した大河内一男が1970年に著した岩波新書『暗い谷間の労働運動：大正・昭和(戦前)』で、社会労働運動の不遇時代として描いた時期だが、大阪の社会労働運動はどのようにして多彩で活発であった。例えば、第12章8節の関西労働総連盟は小さいながらも在日朝鮮人労働者と被差別部落出身労働者との連帯を戦前に運動目標として謳った数少ない組織である。又同章22節(4)の南地・芸妓のストライキは、労働条件低下を迫られた芸者衆が関西の聖山の一つ信貴山のお寺に籠って要求を実現した事例であり、こうした宗派を問わず宗教勢力と労働運動の繋がりは戦前大阪で頻繁に見られた。更に13章2節の港南地方全労・総同盟合同運動と全日本労働総同盟の結成 6節4の大阪地方無産団体協議会は、戦前日本における反ファシズムの人民戦線結成に繋げようと大阪から動きが始まった事を示しており、大阪の社会労働運動が地方運動の一つに留まらぬ影響力を持っていた多くの事例の一つだ。実際36年、37年、即ち戦前の議会制民主主義が息を引き取る寸前の各種選挙は、ファシズム勢力を含めてではあるが、労農勢力が全国でも過去最高の成績を取めるが、大阪は民政党を抜き第二党の地歩を築かんとする勢いを誇った。他にも数多の瞠目すべき事象が綴られており、本書は小さな物語が繋がり支え合う大きな世界の運動現地史として、是非とも一読を勧める。

4. 「小さな物語」を繋ぎ合せる人々の系譜

前節では巨著『大阪社会労働運動史』に描かれた、「セカンドメトロポリス」と呼ぶべき、民衆のエネルギーがその地の政治経済、社会文化の水準を世界都市の一つに迄押し上げた「民都」大阪で、社会労働運動が如何に広範かつ横断的であったかを、目次からその溢れんばかりの様子を垣間見た。そしてもう一つ、この本文を読むと目立つのは、この広く深くかつ錯綜する社会労働運動空間を、縦横無尽に動く数多の活動家の存在である。同時にしばしば単純な争議やデモ記事を暫し熟考すれば、容易に想像し得る地域の多岐重層な運動基盤、即ち現場でその時々運動需用に合わせて、党派や組織以上に濃密な人間関係に頼りながら、物心両面に亘る運動資源を調達する彼等彼女等の驚くべき運動兵站網(ロジスティック・ネットワーク)の存在である。言い換えれば大阪の豊穡な運動空間は、これら地域の現場活動家のネットワークの事であり、彼らが日常的に紡ぐ運動ウェブの集積に他ならない。

こうした運動世界とそこで生起する事象は勿論の事、その原因を構成する政治経済や社会文化更には技術に迄及ぶ広範な専門知を兼ね備え、様々な運動関係者間の橋渡しが出来たコーディネーター型の活動家というのは、それこそ前節、前々節で言及した自由民権運動から平民社型運動の地域的波及を経て、1910年代後半から30年代後半には大阪を筆頭に、全国で多かれ少なかれ

2. 小さな物語が繋がり支え合う大きな世界の労働運動

見られた運動風景だった。それは又戦後それこそ前篇冒頭で、日本が自信と誇りを持って欧州が牽引していた世界の社会労働運動の「はみだし」者たらんとしていた時代にも、引き継がれていた。

この時代が作り上げたプラス遺産として、職場活動家層を末端で、つまり職場次元で次々に生み出していったことを評価すべきです。この職場活動家層の誕生については産業別、企業別の極端なアンバランスが確かにありますが、労働運動全体を見ると、こういう層がしだいにこの時期に形成されていったことを重視すべきでしょう。この職場活動家層には、社共在籍の人もおりますが、数的には無党派型の職場活動家が非常に多く誕生したといえると思います。……このような職場活動家層がしだいに登場してくると、地域共闘といったところにも眼が向いてきます。折から原水禁運動をはじめ、50年代前半に芽生えたいわゆる“平和と民主主義”型の国民運動から次々に各種のテーマが出てくる。地域活動家の必要も増大する。こうした状態のなかで、地域活動家にはこの職場活動家層のなかで地域活動のほうにより関心を持つ人が横すべりした人も確かに相当数あります。またこの時期の地域活動家には、共産党でパージされた人、あるいは残っていた人たちもかなり多く、はじめのうちは地域活動のイニシアはむしろここにあった。50年代前半の終わりがごろぐらいになると両者が合流するようになったと私には見えました。」【清水慎三「50年代前半の労働運動（高野時代）は何であったか」47～48頁】

清水が高野時代が育んだ地域のコーディネート型活動家群について語った部分だ。高野総評の内外において、全国の職場や地域で、様々な活動を通じて労働者は勿論周囲の人々の間に、当時高野が唱導した「労働者のモラル」、即ち労働運動が全ての国民の幸福追求に関わっていくという高い志とその担い手として労働者の生き様に誇りを持つという気構えを浸透させるために、大きな役割を担った現場活動家集団。この存在に着目した清水の言は、当時から今日に至る迄、企業別組合幹部論や産別幹部論を含めて日本のユニオン・リーダー論が幹部クラスに集中している中、異色を放つと同時にそれ即ち、幹部層ではなく現場活動家層に支えられた高野総評の「はみだし」ぶりを表している。同時にこうした橋渡し型の現場活動家集団は、高野総評が県評、地評、地区労や各種のカンパニア（課題別活動・闘争）組織を立ち上げる事で、活躍の場を次から次へと与えられていった。そして平和運動から地域の助け合い運動まで、労働者の文化活動から子供の教育を考える父兄の集まり迄、これらの組織を通じて活動家達が、労働者のみならず、国民大衆の日常生活のありとあらゆる場面を捉えて、労働者のモラルの伝播に繋げようとしていったところに、高野総評の真骨頂が発揮されていった事も確かだ。

ただ清水は、これにつづく文章で、高野総評を斯くの如く支えた現場活動家集団の拠って来る処について、興味深い言及を行っている。

「いわゆる高野派集団は、組合幹部派閥としての高野派は別として、だいたいこの地域活動家層に、それも組合の地方組織を主たる場としながら全体の系譜としてはそちらに流れて行った人が、より多かったのではなかったかと思われます。ということは、高野さんの最後のころいちばんたのみにしたのは、活動家層なんです。それをまず職場活動家層としてつかみ、そして訓練し、育てるということはしないで、彼の表現でいう「イニシアチブ・グループ」、つまり革命主体としてとらえ、それによって突っ走ろうとした。高野思想でいえば、猪俣津南雄直伝の横断左翼・機能前衛の考え方にこれを直結させておったように思われます。」【清水慎三「50年代前半の労働運動（高野時代）は何であったか」49頁】

「革命」という単語に驚く必要ない。現代用語で言えば「運動」という意味であり、何かを変

■ 第2部 研究実施のあらましと成果

えようとしない運動はあり得ない。それよりも気になるのは「イニシアチブ・グループ」であり、「猪俣津南雄直伝の横断左翼・機能前衛」と「直結」とするという件だ。これはどういう意味なのか。そこで清水同様矢張り高野のブレンだった高島喜久男に訊こう。

高野のイニシアチブ・グループという考え方について、書いておかなければならない。当然、高野は、そういう考え方のヒントを猪俣津南雄に得ている。猪俣、「あらゆる組合の中に見出されるべき先進分子が、おたがいの闘争の応援、お互いの運動の協議、連絡のためにとる行動は、おのずから（労働者相互のあいだの）一つの新しい結合の端緒となる。」（『現代日本研究』所収「統一戦線と前衛結成——その交互作用の促進」）こういうひとつの「端緒」として、イニシアチブ・グループはあった。そこには、いわゆる共同闘争というだけでなく、高野がのちにいう、“街ぐるみ”ということもあったし、また争議団同士、とくに小争議団の相互の結合ということもあった。……このようにして、進歩的労働者は、「プロレタリア運動の、全体……どの組織のなかをも貫いて、真の左翼傾向を代表して」、「全運動を貫いて、しかも、そのひとつひとつ、ひとりひとりが、大衆の中にあり、かつ、大衆的基礎を有するが故に、全戦線を統一にまで高めていくところの、楨桿となり、楔となる。」（猪俣前出書）ひとりひとりの労働者が、楨桿、楔としての、そういう役割をはたすものとなる。しかも、それが、なんらかの組織の組織的発動によってではなく、ひとりひとりの労働者が、自分で考え自分で発動する。高野の、のちの言葉でいえば、自分ひとりの行動をつねに天下にかかわらせて見、世界の動きのなかの一部としてみる。労働者がそういうものとなるべき可能性をもった、その萌芽、一部となる。高野は、そこに、イニシアチブ・グループの意義を見ようとした。【高島喜久男『戦後労働運動私史 第2巻 1950-1954』東京：第三書館、1993年、135～136頁】

猪俣津南雄は戦前非共産党系社会主義者集団の労農派に属した学者だが、労働運動のみならず農民運動にも造詣が深く、又早くから中国革命との連帯を唱導する等、同集団でも異彩を放っていた。高野実は1921年の早大在学中から当時早大政経学部で農業経済を講じていた猪俣の知己を得、その後も固い運動師弟関係で結ばれ、前節大阪運動史で言及した人民戦線迄一心同体とも呼べる連携で、戦前社会労働運動における下からの統一戦線行動で創造性を発揮した。そして高島が述べる如く、猪俣・高野という師弟が得意とした彼等の労働運動モデルには、当然戦前戦後を通じて連続性があったのだが、高野の言葉で云う「イニシアチブ・グループ」、そして猪俣の言葉で云う「横断左翼」「機能前衛」によって描かれた現場活動家の有り様は、正に前述の地域におけるコーディネート型或いは橋渡し型の現場活動家それであり、それらは当時の共産党系組織や非共産党系社会主義運動のモデルから、「はみだし」ていた。

恐らく、ここで描かれた労働運動モデルに最も近い歴史的用語を強いて当て嵌めれば、サンディカリズムであろう。それは、運動経験から端を発した自主的な勉強会を含めて、個々人の体験に基づいた自発的な活動を最も大切に、そうしたグループが無数に広がりながら対等に共存しつつ、時に連携しながら全体で一つの意思を持つ事が出来、そのため前衛党組織を必要としない。実はここに、猪俣・高野の思想的ルーツが、思い起される必要がある。米国左翼との繋がりである。戦後労働運動の高野の批判的寮友、新産別の指導者三戸信人は言う。

私がつくづく感じるんですが、猪俣さんの教えを受けたと同じように、アメリカ共産主義だと、私は言うんです。アメリカ共産主義というのは、アメリカにおけるサンディカリズムの台頭におけるその精神を引きついでいるんですね。それがあればこそ、総評を軸とする産業別統一というあの人の理屈がでてくるわけです。同時にそれがあればこそ、やはりあの人の「ぐるみ闘争」というのもでてくるわけです。【「高野時代の労働運動を偲ぶ」

『労働経済旬報』1995年1月下旬号、第1528号、16頁】

ここでは、未だ地域別や業種別組合組織が併存していた時代に高野が打ち出した「総評を軸とする産業別統一」「の理屈」が、すべての産業を網羅した、20世紀初頭のアメリカン・サンディカリズムの「一大組合」(One Big Union)構想と重なる。また高野が提唱した一つの争議を従業員の家や地域の住民全体で支援する「ぐるみ闘争」が、アメリカン・サンディカリズムの代表組織、世界産業労働者同盟(Industrial Workers of World)が応援した1912年のローレンス・ストライキ等に見られる、出身地の違う労働者やその家族と地域住民が、街をあげて長いストライキを打ち抜く光景と重なる。

興味深いのは、前篇で紹介したエバンズとボイトが命名した「解放区」、即ち市民が自尊心と自立心と創造力を以て、良い社会に生きたいと行動するための公共空間の系譜に、この世界産業労働者同盟が入っている事だ。又高野時代に族生繁茂し、労働運動のみならず他の社会運動の基盤となった様々な自主的サークル活動も、この解放区の特徴と共通する。更にやはり前編で述べた労働者等が解放区を設け、そこで他者と一緒に自立するという運動文化を紡ぐのを手助けした「戦闘的少数派」を、米国社会労働運動史上最初に多用したのが、元々サンディカリストでその後米国共産党の指導者となるウィリアム・Z・フォスターであり、彼がその活動家像を育んだ経験を自省的に綴り、ベストセラーとなった『大鉄鋼争議とその教訓』の原著は、正に高野が猪俣に初めて会った際労働運動に関わりたいと述べると、手渡された本だったとなると、この間前篇後篇で長々と説いた日米の間の「労働運動」の赤い糸が、偶然でない事が分かって来る。だとすれば、ここでこれまで同じ小節を使って叙述して来たこの日米の特色ある歴史的運動経験を、現代の文脈において、つまり市民社会と民主主義の関係に於いて、もう少し普遍化してみてもいいだろう。即ち市民社会の社会運動としての「小さな物語が繋がり支え合う大きな世界の労働運動」についてだ。

5. 「小さな物語」が集う処は今何処に

例えば労働社会学者のポール・ジョンストンに倣って、市民社会を、個々人が互いに対等な立場で有機的な社会関係を持ち、その上で各人がそこでの合意形成に等しく参加出来、そこで決定された公共サービスを等しく受ける、そういう権利を保障された公共空間を持つ社会だと考えよう(Paul Johnston, "The resurgence of labor as a citizenship movement in the new labor relations environment," *Critical Sociology*, 26, 1/2)。この公共空間は、つい今しがた言及した「解放区」、即ち市民が自尊心と自立心と創造力を以て、良い社会に生きたいと行動するための生活空間の現実に掲げた運動目標やもたらした運動成果により重点を置いた表現とも言えよう。ここで問題は、市民社会は最初から全ての人々の生活を遍く覆っている訳ではないという点だ。それ故本論文の前提でもある平等とより良い社会に向かうべく、全ての人々に多様な幸福追求の機会が等しくもたらされる様に、市民社会を拡大進化させるためには、先の公共空間が未形成な生活空間の存在を人々に知らしめ、そこを市民社会化する努力へ人々を誘う、別言すればそういう市民社会前にある或る生活空間の存在を、社会の問題として人々に認識させ、そこを公共空間化するのに必要な制度や組織を整える意思決定とその履行の発議と実施過程に多くの人々を参加関与させる、即ち市民社会の社会運動が日常的に必要なとなる。

実は従来こうした議論は、利益集団論或いは圧力集団論の文脈で語られることが多かった。だ

がそれらはしばしば上述の市民社会論後段の「公共サービスを等しく受ける」「権利を保障された」という点に関心が絞られ、前段の「個々人が互いに対等な立場で有機的な社会関係を持ち、その上で各人がそこでの合意形成に等しく参加出来」という「解放区」の部分は等閑視されてきた。だが近年米国の社会学者ロバート・パットナムが行った現代米国の結社参加調査（その成果は『孤独なボーリング—米国コミュニティの崩壊と再生』（2006年に柏書房から柴内康文訳で邦訳刊行）で、2世紀近く前に『アメリカの民主主義』を書いたトクヴィルの議論を復活させたソーシャル・キャピタル論の様に、市民社会には他者と良く生きるのに不可欠な結社生活における参加関与が重要であり、それこそが民主主義の基盤であると説かれることが増えて来た。

そして日本でも2000年代後半以降「非正規労働者問題」が顕在化し、「派遣村」等の社会運動が現代日本の「無縁社会」状態を社会的議論の俎上に載せ、更に東日本大震災以降「社会的絆の再構築」が人々の間で強く認識される一方、前世紀末の阪神淡路大震災以来日常化した市民のボランティア活動に、多様な関係者の間を橋渡しするコーディネーター型の活動家が求められる様になって来た。これらの内外の市民社会における社会運動の有り様への関心の変化増大は、今我々に新たな民主主義の構想を求めている。それはアソシエーティブ・デモクラシーとも呼ぶべき考え方だ。

この構想は、ロンドン大学の中で長年高質な労働者教育を提供し、数多の傑出した労働研究家を輩出して来たバーベック校で社会理論を教授していたポール・ハースト (Paul Hirst) が、1994年に英国のPolity Pressから刊行した*Associative Democracy: New Forms of Economic and Social Governance*で展開した議論に触発され、書名を其の仮拝借した。本書はベルリンの壁崩壊後西側が東側に対する勝利宣言を謳った正にその渦中で、両陣営に共通であった大量生産、中央集権、行政国家の問題が早晩行き詰まることを想定し、1980年代頃から石油危機以降不安定化する世界経済の中で、経済社会ガヴァナンスの方式として注目された政労使協調を基調とする団体統合主義（コーポラティズム）の批判的検討を目指すと同時に、同じ頃から世界各国で存在感を増す非営利団体の活動に着目して代替システムの構築を検討していた一群の指導的欧米政治、経済、社会学徒との果敢な議論の成果である。

彼は本書で、自身の結社民主主義構想を、近代以来の政治、経済、社会思想並びに理論の系譜の中に位置付け、そこに見られる結社連合論の現代的再生による福祉国家の再編という具体的な構想で、当時世界的に転換点にあった雇用と社会保障の問題に新たな経済社会ガヴァナンスの青写真を示した。そして本書刊行から十余年、日本を含め雇用と社会保障の問題が以前に増して深刻化し、議論の方向性が繋がり支え合って働く社会を如何に再建するかに益々収斂して行く今日、本書の意義は増している。

又最近日本の文脈に引き寄せても本書の意義は大きい。彼は最近僕らがこの国で喧しく耳にする政治主導や既得権益という名の下、労組や農協、各種業界団体等所謂中間団体批判に真っ向挑む。即ちこれらの批判は、団体は政治に対する人々の意思の反映を妨げると主張するが、そもそも民主主義の本義は、選挙や多数決より寧ろ治者と被治者の間の常日頃の情報交換とそれによる両者の合意と協力にあり、従って自発的な自治団体こそ経済・社会問題の民主的な解決にとって何よりの手段だと。ここにはハースト自身が認める様に、近代結社論の始祖の一人、フランスのブルドンやその学徒であったデュルケム、そして前篇で触れたホブズボームが言及した英国の民衆の自発的結社の伝統とその運動文化の系譜を引くコールらが強調した、民主主義とは働く人々の集団と公共の意思を代表する機関との間の働き方を巡る公正や正義についての双方向のコミュニケーションであり、意思決定の質のことだという、後に日本の社会学者川喜多喬が「社交

主義】『社会・友愛・自治—社交主義の一鉦脈』『現代思想』1978年5月号』と名付けた考え方がある。

勿論ハーストは既存の結社や団体の有り様を諸手を挙げて肯定してはいない。問題は民主的なガヴァナンスに寄与出来る様、団体取り分け既存組織における構成員の参加関与の質を如何に向上して行くか、働き方やそれと不可分な生き方を巡る公正や正義を政策として実現する議論で、当該政策領域の対象でありながら既成団体に所属していないために、従来その声の中々届けられにくかった人々に効果的な発言機会を如何に与えるかだ。この問題は今日日本の団体の有り様を巡る論点と大いに重なる。つまり本稿の文脈で言えば市民社会の社会運動として、「小さな物語が繋がり支え合う大きな世界の労働運動」をこれまで述べて来たその伝統を生かしながら、如何に現代に再生するかだ。

確かに企業別組合を束ねる連合は、止まらぬ組織率の低下と社会的影響力の減退に苛まれ、漸く自らの代表性の危機を組織として認めた。「組合が変わる、社会を変える」(第9回大会、2005年)、「全ての労働者のための労働運動」(第10回大会、2007年)等近年の変化する大会スローガンの語調はそれを示す。問題は組合という特定構成員の共助共益組織と活動を開いて、繋がり支え合って働く社会という公助公益組織の形成との間でどう相乗効果をもたらせてゆくかだ。

この求められる変化に向けては既に胎動がある。例えば団体の有り様とその行方をフランスと米国で見つめ続けてきた労働法学者の水町勇一郎とその仲間達が、関係労使や他分野の研究者も交えて連合のシンクタンクである連合総研と編んだ『労働法改革』だ。多様化する働き方とその新たなルール作りという繋がり支え合って働く社会を形成するのに喫緊な課題に対して、社会的公正と経済的効率を両立させつつ、労使対話の新たな基盤づくりを模索したグランドデザインの書だ。この中で労働関係ネットワークにおける仲介者についての提起がある。ここで仲介者とは、

「職場内部で自主的に形成されていく問題解決プロセスと、これを促していく一般的な法規範」の「橋渡しをする専門家」のこと。というのも、単に企業の自主的な取り組みに委ねるだけでは、改革に向けたインセンティブが十分にはたらかず公的な規範意識が欠落することになりかねない。逆に法的な義務づけだけで、企業が自主的な対応をとることに至らなければ、それぞれの企業の多様で複雑な問題状況に応じた文脈的な対応・改革を進めていくことができないからである。そこでこの法規範と企業実務とを橋渡しし、情報の提供・流通、問題の発見・分析、そして問題解決のサポートをする専門的な仲介者の存在が重要になる。このような役割を担いうる存在としては人事労務管理コンサルタント、産業心理コンサルタント、弁護士、非営利調査・研究団体、労働組合・従業員組織、保険会社などが挙げられている。これらの非政府組織や職業的ネットワークが担う役割は、①実効的で説明責任を果たしうるシステムを機能させていくために必要な能力と組織を構築すること②事例の情報を広く収集し、それを批判的に評価していくこと③実効的な規範をつくり出していくこと④この前向きで内省的な調査・研究を支える事例のコミュニティを構築していくこと。【水町勇一郎(2010)「労働法改革の基本理念—歴史的・理論的視点から」水町勇一郎・連合総研編『労働法改革—参加による公正・効率社会の実現』日本経済新聞出版社、39】

とある。従来労使関係に携わる研究者や実践家、取り分け労組は、これは自分達の仕事だと思っていた。だが近年の女性や非正規労働者の問題を始め、企業内外で多様な働き方や生き方を望む或いは迫られる人々に労組の手が回らず、多くの働く人々が困った時の相談を組合以外に持ち込む様になって久しい。もっともこの仲介者の役割は世話役と称して元々労組が得意とした分野

だ。それこそここで何度か紹介した戦前から戦後に掛けて職場と地域を股に掛けて存在したコーディネート型現場活動家網の。だがそれが力を弱めると、会社の人事だけでなく企業外の専門家と協力して問題解決に当ることに不慣れになっていく。では水町達の提言を活かすにはどうしたらいいか。

先ず労組も企業内外で眠っていた組合への関心を呼び起すため、原点に戻って新しい状況に立ち向い組合役員を中心に積極的に仲介者の役を引き受けるべきだ。仲介するのも非組合員にも広げよう。地域ではそれを待ってる人が大勢いる。実はこの仲介者に似た役割は、最近労金、労済、生協など労働者の各種協同組織の集まりである労働者福祉協議会の地方組織で、ワンストップ・サービスと称して仕事や生活に関する萬相談とそこから関係箇所に紹介する事業として試みられている。更にそれは長年地域でコーディネート型の現場活動家として生活困難者を助け、数年前派遣村を組織した後内閣府参与に就任した湯浅誠氏らの奮迅の働きで、複合的な困難を抱えている人たちへの個別的・継続的・包括的支援を掲げるパーソナル・サポート・サービスとして継承された。

ちなみにこうした繋がり支え合って働くための多元主義的なアプローチは、既に労使関係のノン・ユニオン化が進んだ米国で以前から提起実行されている。この動きをアソシエーション・ユニオニズム (associational unionism) と呼称したチャールズ・ヘクシャーに拠れば (Heckscher, Charles, 1988, *The New Unionism: Employee Involvement in the Changing Corporation*, Basic Books) それは以下の4つの特徴を持つ。即ち①全ての従業員に保障される普遍的諸権利に基づく②仕事の中味や、組織上の位置、地理、ジェンダーや人種などに基づいた様々な従業員集団を含む③これらの様々な属性集団間で合意に至るための多面的な交渉メカニズムを提供する④その活動は、個々の仕事の仕組みや仕事生活の質についての関心と一般的な労働政策の諸争点の双方を対象とする。ここで興味深いのは、問題状況の多様化に対応して従来の労使二者間交渉から関係多者間交渉になっているという意味では associational なのだが、交渉参加者間、とりわけ使用者側と被使用者側の力関係に落差があるのを前提に、規範が交渉において効力を発揮するため組織的圧力を担保するために組合の団結力は尚必要で、その意味では unionism で在り続けるべきなのだ。

こうした現代に小さな物語が繋がり支え合う大きな労働運動を再建するため、労働組合を共助共益組織から公助公益組織へ変えて行く上で、日本の労働運動は実は非常に貴重な制度資源を有している。それは今や政策制度要求と一体化した春闘だ。確かに春闘については終焉論が語られて久しい。実際賃上げは以前に比べれば、10年前から然程見るべき物はない。だが今日春闘は人事院勧告から最低賃金更に生活保護に至るまで、日本の全ての人々の賃金のミニマム保障に関わっている。又経営側も個別企業の能力を越えた労働条件の向上に反対するものの、毎年春に全国の労使が経済や経営について話し合う事を否定しないばかりか、実際には従業員との大事なコミュニケーションの機会として重視している趣さえある。

連合は一昨年前から春闘を「すべての労働者のために」と位置付けている。成程例えば下記の2012春季生活闘争方針(項目抜粋)を見れば、そのための策が色々と講じられている。春闘は現在通年化している。10月には事実上翌年度の方針検討が始まり、年末には交渉が始まり、それは6月迄続く。そして7月から9月に掛けて集計と評価が行われる一方、その結果が様々な毎年更新の最低賃金や生活保護基準に反映される。だがその準備過程や実施過程、更に総括の過程は有組合企業の労使のみに閉じられている。組織率が2割を切っている状況で、それは矢張り「掛声倒れ」と言われても仕方あるまい。連合は最近1,000万を目指す新しい組織化方針を決定した。だがそこには、1,000万は飽くまで通過地点であり、最終目標は5,500万の全ての労働者の組織化

だと言う。但しそれは通常の組合員化のみならず多様な方法で実現することが示唆されている。だとすれば春闘を全ての労働者に開く手立てを講じるのは喫緊かつ有効な方策ではなかろうか。

かつてそれこそ高野総評は、春闘の他にも様々な政治経済、社会文化の課題を提起しては全国キャンペーンを展開し、地域で関係団体と共闘集会や様々な催しを開き、そこに組合員以外の人々の参加関与の空間を開き、そこでの共有体験が職場や家庭にフィードバックされ、運動課題が夫々の人々の生活文脈の中へ咀嚼されていった。又ストライキが尚珍しくなかった時代は、たとえ一時的にネガティブな事象であったとしても、その事で間接的に影響を受けることが、自身も運動の一端に居ることを感じさせて、そう受け留める事で自分の中に運動文化が育まれている事に多少の誇りを持った事は、春闘の交通ストで学校が休みになった高校時代の一つの思い出だ。勿論今日の状況で、ストやデモが春闘を開くことになるとは限らない。要は組合員以外の人々、それも労働者に限らず全ての国民に春闘を自身の問題と感じさせる機会を出来る限り多くかつ多様に、地域で創造する事が肝心だ。

更に言えばこれだけ企業活動がグローバル化している今日、新たなインターナショナリズムを春闘の中で試みる事も大事だろう。実際製造業を始め国際分業が水平化し、更に経済水準や生活様式が平準化していく今日、国内外で同じような仕事がなされれば、同一労働同一賃金の原則は労働側より経営側に有利に働く。そうした時に春闘を国内に閉じる事は、労働側にとって不利な場合もあろう。勿論これには、日頃からの労組間や労働者間の連携を含めて、時間が掛かる作業が山とあろう。だが春闘が始まって10年程で国民の年中行事化していった歴史を振り返り、今日の交通手段や通信手段の飛躍的進歩を考えれば、「全ての労働者のために」を国境を越えて実現しようとする事は、決して絵空事とは言えまい。

過程を組合以外に開くことは、政策制度要求活動に於いては一層もとめられる。それは今日春闘以上に関係個別企業や産業の事情に左右され、しかも一般組合員には縁遠い物となっている。更に民主党政権下で実現可能性が高まった分、選択と集中が進み、以下の政策制度要求の内容を見ても、議論すら殆どされていない課題も見受けられる一方、実現に向けての関連省庁並びに政治家との協議は一層不透明さを増している。政策制度要求活動は現在春闘と同期化し、事実上通年化している。にもかかわらず組織内討議の時間は短く、それは春闘以上に閉じられている。言うまでもなく政府や自治体の政策は組合員のみならず全ての国民や市民、ひいては人類全体に及ぶ問題も含んでいる。当然にも関連する集団や団体の数は多く、又議論の余地も広い。だからこそ政策制度要求活動は地域に開かれねばならない。例え意見が異なっても広範な議論を可視化された状況で行う事が重要だ。

近年マニフェストを始め立法作業を政治家に「お任せにしない」態度が国民の間に芽生え始めている。又NPO等様々な結社や活動主体の増大で、まちづくりや福祉等の面で、行政や企業に頼らず自分達で自分達の問題解決を図る試みが増えている。こうした状況は、政策制度要求活動を省庁、役所、政治家に対して物を言う活動から、市民が自分達の問題を議論し、そこから政策の有り様を考える、即ち市民と一緒に自分達の生活の有り様を考える絶好の機会にする可能性を持っている。そして春闘と共に今そこで最も求められているのが、本稿で縷々述べて来た「小さな物語の現場」が集う処にすることであり、それらの物語を繋ぎ合わせる人々、此処で云う地域におけるコーディネートの現場活動家の輩出である。それは又連合が昨年決定した運動目標である「働くことを軸とする安心社会」の中で、労働運動自らの役割として自覚しているものである。そして本稿がずっと説明して来たように、それは決して新しい課題ではなく、この国の労働運動、そして社会運動が一世紀以上に亘って培ってきた伝統を再生することであり、それは又米国

第2部 研究実施のあらましと成果

を始め同様な運動を育ててきた地球の此処彼処の仲間と、「小さな物語が繋がり支え合う大きな世界の労働運動」をこれからも続けていく営みに他ならない。

【はじめに】

「働くことを軸とする安心社会」の実現へ向け、「2012春季生活闘争」と「2012政策・制度実現の取り組み」を運動の両輪としてすべての労働者の処遇改善に向けて、連合本部、構成組織、地方連合会、それぞれが一体となった運動を展開する。

【取り巻く情勢】

【2012春季生活闘争の考え方】

1. 2012春季生活闘争のポイント
2. すべての組合が取り組む課題（ミニマム運動課題）
3. 2012春季生活闘争の展開
 - 1) 賃上げ要求について（賃上げの取り組み、企業内最低賃金の取り組みの抜本強化、一時金水準の向上・確保）
 - 2) 規模間格差の是正、中小の取り組み
 - 3) 非正規労働者の労働条件改善の取り組み
 - 4) 男女平等参画社会実現に向けた取り組みと均等待遇の実現
 - 5) ワーク・ライフ・バランス実現のための取り組み
 - 6) ワークルールの取り組み
4. 「運動の両輪」としての「政策・制度実現の取り組み」

【闘いの進め方】

1. 闘いの進め方の基本的考え方（相場波及効果を高める情報開示と重層的共闘体制構築による社会的賃金水準形成、非正規労働者や成果配分追求のために社会的キャンペーン、政策・制度実現の政策協議、政労協議、大衆行動と運動）
2. 効果的な相場波及に向けた取り組み、態勢の強化
 - 1) 共闘連絡会議の機能強化（回答引出組合の集中化、共闘内情報交換の緊密化、先行組合の情報開示、中小共闘への運動強化）
 - 2) 中小・地場共闘の強化と連携（中堅組合も含めた共闘展開、地方共闘連絡会議の設置、地域ミニマム運動の強化）
 - 3) 闘争態勢・日程（中央闘争委員会・戦術委員会の設置、要求提出、ヤマ場への対応）
 - 4) 闘争行動（非正規労働者に関わる「職場から始めよう運動」等の取り組みや社会的キャンペーンの展開、経団連や経済同友会とのトップ懇談会、日本商工会議所、中小企業団体中央会等との協議、産業政策課題についての社会的合意形成、産業レベルの労使協議・対話、国家公務員制度改革関連4法案への対応、春季生活闘争を通じた組織拡大・強化の取り組み、情報公開体制の強化等）

日程

- 12月1日 第61回中央委員会（春季生活闘争方針決定）
14日 経団連との首脳懇
1月下旬 経団連との首脳懇
2月10日 闘争開始宣言
3月6日 春季生活闘争政策制度実現集会
3月8日 国際女性デー

2. 小さな物語が繋がり支え合う大きな世界の労働運動

3月9日 共闘連絡会議全体会議

4月3日 共闘推進集会

以下は2012～13年度（2011年7月～2013年6月）政策・制度要求と提言の目次（一部字句修正）である。（篠田）

1. 持続可能で健全な経済の発展（経済政策、税制政策、産業政策、資源・エネルギー政策）
2. 雇用の安定と公正労働条件の確保（雇用・労働政策）
3. 安心できる社会保障制度の確立（福祉・社会保障政策）
4. 社会インフラの整備・促進（国土・住宅政策、交通・運輸政策、情報通信政策）
5. 暮らしの安心・安全の構築（環境政策、食料・農林水産政策、消費者政策）
6. 民主主義の基盤強化と国民の権利保障（政治改革、行政・司法改革、人権・平等政策、教育政策）
7. 公正で持続可能なグローバル社会の実現（国際政策）

横断的項目（男女平等政策、中小企業政策、非正規雇用に関わる政策、地方分権・地域活性化に関わる政策

※上記1～7の政策課題の中から上記の4分野に関連するものを整理しまとめている）

災害復興・再生に向けた政策

日程

2010年秋の構成組織・地方連合会アンケートを参考に骨子作成

政策委員会、関係各委員会等で討議を重ね政策原案を策定

2011年3月11日 中央執行委員会で原案を組織討議に付す事を確認

その後「災害復興・再生に向けた政策」を策定

2011年4月25～26日の政策・制度中央討論集会での議論を踏まえ修正・補強

2011年6月2日の中央委員会で最終決定

同時期に組織討議に付した「連合新21世紀社会保障ビジョン」「第3次税制改革基本大綱」も確認・決定

「働くことを軸とする安心社会」

連合はすべての働くものの拠りどころとして、その力を結集し、「働くことを軸とする安心社会」を築くために全力をあげる。すべての働くものとは、正規、非正規、あるいは組合員、非組合員を問わないすべての現役の労働者であるが、労働の第一線から退いた退職者、これから労働の世界に入ろうとする子どもたち、そして労働者の家族を含めば、日本の国民のなかの圧倒的多数派である。安心社会とは、ディーセントな雇用が保障され、病気、失業、子育て、老後など、人生のすべての段階におけるあらゆるリスクに対応できる制度が確立され、人と人との良好な絆が培われている社会である。連合は、みずからの活動の質と量を向上させ、傘下の労働組合の合意を得つつ、かつ志を同じくする労働者福祉事業やNPOなど多くの団体や個人とネットワーク型の連携をつくり上げて、「働くことを軸とする安心社会」の確立をめざす。

目次

「働くことを軸とする安心社会」を実現しよう

第1章 なぜ今、改めて目指すべき社会像の提起か

1. 脅かされる社会の持続的可能性～不安の社会を越えて
2. 築き上げて来た「雇用社会」日本とこれからの生活保障システム
3. 21世紀連合ビジョンと目指すべき社会像

第2章 「働くことを軸とする安心社会」のかたち

1. なぜ働くことが軸か
2. みんなが働き、つながり、支え合う

第2部 研究実施のあらましと成果

3. デイセント・ワークの実現

【仕事の価値に見合った所得】

【職場コミュニティとそれを支えるワークルールの確立】

【ワーク・ライフ・バランス】

4. 雇用の質的強化と社会創出

5. 希望につながる安心・切れ目のない安心

第3章 「働くことを軸とする安心社会」を支える基盤

1. 有効で分権的な信頼のおける政府を

2. 公平な負担による分かち合いの社会

3. 企業の社会的責任と健全な労使関係

4. 持続可能性の前提となる地球環境保全とグリーン・ジョブの創出

第4章 労働運動に求められる役割と責任

1. 労働運動に求められる社会運動の軸としての役割

2. 地域で顔の見える労働運動

3. 労働運動が大切にしてきた価値の継承・発展と次世代育成

4. 世界につながる労働運動の必要性

労働運動は、「働くことを軸とする安心社会」実現のために、国民的合意形成の中心的役割と広範なネットワーク形成のコーディネーターの役割を担わなければならない。労働者福祉事業団体、経営者団体はもとより幅広い市民層との対話を進めながら、ビジョンを磨き、国の、あるいは地域のビジョンとして共有化していくことが必要である。そして、労働運動は、目的意識を共有する多様な団体、組織、ネットワークと連携しつつ、幅広い連帯を築き、政策実現のために社会運動の軸としての役割を発揮していく必要がある。また、女性の参加、青年の参加は労働運動の活性化に必須であり、参加促進、参加を促す条件整備などは喫緊の課題として取り組んでいかなければならない。社会参加を保障することを軸とする活動はすなわち、人と人との絆をつなぐものである。労働運動はその絆を再生する使命を持っている。こうした労働運動の力は、働く者一人ひとりの主体的で自発的な参加と行動によってこそ真価を発揮することを忘れてはならない。

3. 雨の日は映画館へ行こう！心を洗おう、語り合おう、労働文化耕論

連合 月刊「連合」6月号 特集1

「職場や地域で活動している労働組合の役員、組合員にぜひ観てほしい映画がある」。2ヵ月ほど前、そんな話が、ひとつならずふたつも本誌編集部に舞い込んだ。大林宣彦監督作品『この空の花—長岡花火物語』、ロベール・ゲディギャン監督作品『キリマンジャロの雪』だ。試写会に足を運んで納得！ それぞれの監督を迎えての、ふたつの対談が実現した。

『キリマンジャロの雪』（ロベール・ゲディギャン監督、2012・6・9 公開）

【対談】ロベール・ゲディギャン監督×篠田 徹 早稲田大学教授

ロベール・ゲディギャン監督の最新作、『キリマンジャロの雪』は、フランス南部のマルセイユ港の埠頭で、労働組合が会社と合意に至った「人員削減」の対象者20名を選ぶためのくじ引きを行うシーンから始まる。労組委員長ミシェルは、くじが最も公平だと考え、自らも敢えてくじを引き当てるのだが、それは思いもかけない事件を引き起こし、公平とは何か、連帯とは何かを、彼に問いかけることになる。私たちは、今何を取り戻さなければならないのか。ゲディギャン監督と労働映画に詳しい篠田徹早稲田大学教授が語り合う。

篠田 お会いできて光栄です。私は『キリマンジャロの雪』を試写で2度観ました。最初に観たあと、ゲディギャン監督の他の作品が観たくなって、『マルセイユの恋 (MARIUS ET JEANNETTE)』（1996年）と『幼なじみ (A LA PLACE DU COEUR)』（1998年）のビデオを探し出して観ました。そうしたら、もう一度『キリマンジャロの雪』が観たくなって…。いずれも南仏の光あふれる港町マルセイユを舞台にした映画ですね。

ゲディギャン 日本では公開されていないのですが、実は1980年に同じマルセイユを舞台にほぼ同じキャストで作った映画があるんです。今回の作品では、当時20代半ばだった主人公たちが、結婚30年を迎えて、もう一度人と人とのつながり、「連帯」の意味を見いだしていく姿を描きました。

篠田 マルセイユを舞台にしてきたのは？

ゲディギャン マルセイユは、私の生まれ育った町で、古くからの工業地帯でもあります。そして私の父は、映画に登場する男たちと同じ船の修理工でした。マルセイユの男たちは、ほとんど港湾労働や造船、鉄工などの仕事に従事してきたし、私は、その労働者としての誇りある生き方を見て、その影響を受けて育ってきた。それが私の映画の根本にあることは間違いありません。そういう意味で、私が映画を作るようになったきっかけは、やはり父の存在が大きい。父はアルメニアからの移民でフランス語の読み書きができなかった。だから、私は父に代わって、ものを言う、表現するというスポークスマン的な役割を映画を通してやってきたのだと思います。ただ、映画の舞台となる「場所」へのこだわりはないんです。映画とは、より普遍的なものであり、重要なのはどういう人たちが物語を紡いでいくのか。どこかの場所で撮らなければいけないから、自分がよく知るマルセイユを選んでいただけで、場所を変えたとしても、私は同じストーリー、同じテーマの映画を作れると思っています。

●子どもが親より豊かになれない時代

深刻な世代間ギャップが生じている

篠田 なるほど。実は、私が『キリマンジャロの雪』を観てもっとも強く感じたのは「世代間ギャップ」だったんです。前作、前々作では、子どもたちが親の働く姿、生きる姿をよく見ていて、親世代の考え方をごく自然に受け継いでいる。ところが、今回の作品では、世代間、階層間の格差の拡がりという背景の中で、いくつもの考え方や価値観のズレがクローズアップされてくる。これはまさに、時代の大きな変化を映し出すグローバルで普遍的なテーマですね。

ゲディギャン 私は、自分のすべての作品について、その時代の状況を反映させ、その状況を自分なりにどう把握するかという「時代を見る視点」を投げかけてきました。私の父の世代が社会の中心だった1960年代から70年代は、きつくて危険な労働ではあったけれども、「仕事」はあった。貧しくても、子どもたちの時代にはもっと豊かな暮らしができるだろうと信じる事ができた。家族の中でも、親と子のつながりは強かったし、「世代間ギャップ」が強く意識されることはなかった。しかし今、私たちは、かつて想像もできなかった時代を迎えています。グローバルな経済危機の下で若者を中心に「仕事」が失われ、おそらく近代社会が成立して以来初めて、子ども世代が親世代よりも豊かになれないことが歴然としている時代。そういう中で、人々のつながりが希薄になり、深刻な世代間ギャップが生じている…。

篠田 本当におっしゃる通りです。でも、その事実気づくことは、もう一度つながりや連帯を取り戻していくきっかけにもなりうる…。

ゲディギャン そうであってほしい。父の時代、労働者たちは、より良い未来を労働運動、社会運動に託しました。その夢は断ち切られたように見えるけれども、それまでに灯されてきた「火種」のようなものを、私は自分の作品の中で守ってきたつもりです。「火種」は、今はくすぶっているだけだけど、いつかまた炎になって燃え上がる可能性を秘めているはずだと…。

篠田 その「火種」とは具体的に？

ゲディギャン とても単純なことですが、働くことを通じて人々はつながってきた。互いに思いやり、団結し、連帯してより良い未来への夢を紡いできた。それがソーシャリズムの思想となって、貧しき労働者たちを奮い立たせ、権利の獲得へと導いた歴史がある。そういう、労働文化、連帯という価値観にもう一度立ち返れるような「火種」です。

篠田 印象深い場面があります。主人公のミシェルが、自宅のベランダで、若い人たちが通から自分たちを見上げるのをみて、「彼らは、自分たちをなんて思うだろう？ 多分プチブルだと思っだろう」とつぶやく。それに対して妻は「私たちはだれも傷つけてこなかったし、みんなの世話をしてきたじゃない」と訴える。つまり、物の豊かさだけを追い求めてきたのではなく、労働者として助け合い、分かち合いという価値観を大切に自分たちは生活してきたのではないかと。それが監督が描いてきた「労働文化」の重要な要素なのではないかと思ったのですが…。

ゲディギャン その通りです。加えて、その場面で、ふたりは、自分たちが今まで大切にしてきたことを、若い人たちに伝え継承してこなかったことによろやく気づくのです。ミシェルやマリ＝クレールの世代は、自分たちの権利を擁護し、生活を守ることに精一杯で、その行動のベースにある価値観や考え方を若い人たちに伝えるということに時間を割けなかった。小さいながらも家族が憩える家を持ち、子どもや孫、友人と語らう時間があり、予期せぬ失業を支えてくれる制度もある。そうしたミシエルの今の生活は、みずから労働組合の委員長として、権

利と生活向上を求めて行動し、勝ち獲ってきたものなのに、若い世代からは「恵まれたリタイア世代」に見えてしまう。労働運動は、もちろん成果ばかりではなかった。労使交渉のなかで苦汁をなめたことも、妥協したことも何度もあった。でも、そういうことも含めて、次の世代、子どもたちの世代に、きちんと伝えてこなかったという強い後悔の念がミシェルを揺さぶるのです。

●富が一部の企業や個人に集中している

「どう分かち合うか」を考えなければ

篠田 ミシェルと共に解雇された若い同僚にも、そういうことをしっかり伝えていたら、不幸な事件は起きなかったかもしれない…。

そう考えていくと、この世代間のギャップ、あるいは若者を覆うある種の絶望感というものは、その「火種」とどう結びついていけるのか。「若者雇用」は、どの国でも深刻な問題になっていますが、どうすれば、若者たちが「働くこと」に希望を持てるようになるのか…。

ゲディギャン 一つのカギは、ソーシャリズム（社会主義）です。もちろん19世紀の社会主義思想を現代にそのまま再生するのは難しいでしょう。でも、現実を目を向ければ、キャピタリズムが徹底され、社会資本が民営化されていく中で、富はごく一部の企業や個人に集中し、貧困は自己責任とされるようになってしまった。本当にそれでいいのかということを、まず明確に自覚する必要があると思います。そして、富の分配や社会資本の所有のあり方を、今の時代に即して考え直していくべきだと思います。ソーシャリズムというと、かつてのソビエト体制のイメージが今も強いのかもかもしれませんが、それとはまったく違う。私の理解では、ソーシャリズムの根本にあるのは「どう分かち合うか」。例えば、エネルギー、あるいは医療・教育・交通手段などの公共財は、みんなで分かち合うべきものであるはずですが、そういう意味で社会主義的な思想を放棄してはいけないと思っています。

篠田 『キリマンジャロの雪』には、ミシェルが尊敬する先人として、19世紀の社会主義者ジャン・ジョレス（Jean Jaurès 1859-1914）の言葉が随所にちりばめられています。ジョレスは、日本では「穏健派」とみなされ、あまり注目されてこなかったのですが、調べてみると、南仏プロヴァンス地方の出身で、つねに労働者のそばにあって彼らを励まし勇気づけてきたヒューマンイズムの活動家だったんですね。

ゲディギャン ジョレスは、第一次世界大戦に反対したことが原因で1914年に暗殺されました。フランスでは、「戦争反対」を唱えた数少ない知識人として有名ですが、哲学を修めた知的な政治家であり、また優秀なジャーナリストでもありました。彼の力強いスピーチは、多くの若い労働者を魅了したと言われていますが、彼がいつも言っていたのは「現実を即して理想を追求しなければいけない」ということ。現実を目を背け、ユートピア思想だけを振りかざしたりするようなことは決してありませんでした。

●喜びも心の痛みも分かち合う

困っている人がいれば手を差し伸べる

篠田 もう一つ、今回の作品で印象深いのは女性の強さです。労働組合や労働運動を描こうとすると、どうしても「男の世界」になりがちですが、監督の作品は違う。女性がとても重要な役

割を果たしていますね。ミシエルの妻、マリ＝クレールは、ごくあたりまえのこととして、お金や物だけでなく、心の痛みも喜びも分かち合う。誰かが傷つけばみんなで助ける。困っている人がいれば手を差し伸べる。そこには微塵の疑念もない。そういう女性たちの、しかも生活の場における互いの支え合いこそが、「連帯」の基礎なのだ、私は受け取りました。

ゲディギャン そうなんです。「連帯」ということに関していえば、女性たちは抽象的な言葉ではなく、すでに生活の中で具体的に実践している。それは、イデオロギーや政治とはまったく別物で、彼女たちは、家族の中でも、隣人との関係でも、常に周囲の人たちとのつながりを考えながら生活している。彼女たちの日常では、「集団性」がとても具体的なものとして根付き、それゆえ「連帯」もまたより具体的になっていくのだと思います。そういう意味で、フランスでは、女性は男性よりも常に正しいし常に先を行っています。

篠田 日本で「連帯」というと、非日常的で極限的な描かれ方が多かったのですが、この作品を通していろいろな形があるのだとわかりました。先ほど監督は、マルセイユという場所にこだわりはないとおっしゃいましたが、しかし、クレーンの音が響き、潮風が吹き抜ける風景は魅力的です。そして、そこで、ふんだんな海の幸を生かした料理をしながら会話をする、美味しい食事をしながら、お酒を飲みながら、心が触れ合う会話が交わされる。豊かな人間関係がそこにあれば、食べることも、飲むことも、いろいろなものをシェアできるのだということも学ばせてもらいました。

ゲディギャン 実は、それぞれの登場人物の家を探るとき、どの家からも港とクレーンが見えるロケーションを探したんです。ミッシェルとマリ＝クレールの家も、子どもたちの家も、クリストフが住んでいるアパートも…。彼らは、全員労働者で裕福な階層ではないが、その中でもステータスが分かれています。そのことを意識しながら、クレーンは労働者を象徴するものとして、すべての家から見えるように配置しました。食べることは、イエス＝キリストが弟子たちにパンとワインを分け与えたように、「分かち合える」ものの中で最も基本になるものです。そして人と人が会話を交わすために必要なものは、場所と時間。それが整って、食べる物があれば、デモクラティックな会話が行き交うのではないかと思います。

篠田 日本では「労働映画」と言える作品が本当に少なくなっているのですが、日本の働く人たち、あるいは労働組合へのメッセージをいただけますか？

ゲディギャン 確かに労働や労働者、あるいはその文化がモチーフとして出てくる作品は少なくなっていますね。『キリマンジャロの雪』は、欧州、南米を中心に39カ国で公開の予定ですが、アジアでは、残念ながら日本と韓国だけです。私はずっと労働者とその家族の物語を映画にしてきましたが、この30年を振り返ると、「労働者」の外観はすごく変わったと思います。労働の形態が変わり、ごつごつとした「労働する手」を持つ人も、がっしりとした体格をもつ人も少なくなった。それでも、やはり働く者として、「自分は労働者である」という自覚を持ち、労働文化として培われてきた連帯や平等、博愛という精神を共有し、そして、より良い社会にしていこうという意識を持ちながら日々の仕事をしていくことが大事だということをお伝えしたいと思います。

篠田 もうひとつだけ、最後にトリビアなクエスチョンを。強盗に押し入れられたミシエルのキャッシュカードの暗証番号は、「1936」と「1972」でした。1936年はファシズムに抗してレオン・ブルムの人民戦線内閣が成立した年、そして1972年は社共共同政府綱領がつくられた年ということですか。

ゲディギャン その通りです。私自身も心に刻みたい歴史的なイベントの年を取り入れたりする

ことがあります。

篠田 本当に細部に至るまで何度でも観たくなる映画です。三度めは学生たちと観てみたいと思います。今日は本当にありがとうございました。

『キリマンジャロの雪』解説

労働映画と聞けば人は、例えば『蟹工船』といった労働争議の映画を思い浮かべるかもしれない。もちろんそれでも構わないが、労働の解釈は広く柔軟であっていいと思う。例えば勤務する大学で数年続けた労働映画の授業の課題はこうだ。「ジャンルを問わず5本の映画を使って、あなたが考える労働を論じなさい」。

興味深い事に学生が考える労働解釈は大体同じ辺に落ち着く。「たとえ離れていても又会った事がなくとも、していることに誰かと繋がり支え合う意識があれば、それは労働」「目の前の相手に或いは隣で働く人とも繋がり支え合う感じがしなければそれは労働ではない」。働く事に生き甲斐を欲する若者達の気持だ。

学生の労働映画論をゲディギャン監督の映画と対談での発言が後押しする。

繋がり支え合って働く者とその家族や仲間達に幸あれ。あなた方が時代を創るのだ。働かねばならぬ境遇と格闘し、繋がり支え合って働く自分達を誇りに思う者達の映画。誰もが働く現代の観客に自分達のポジティブな生き方を見、過去から現代に繋がる自分達の歴史を思い、未来を作る自分達の力を感じてほしい。

『キリマンジャロの雪』は、30年前から同じキャストで撮った連作の最新版という意味で、ゲディギャン監督がこだわる労働映画のライフワークの一環であると共に、それは又フランスの働く人々の過去30年の家族史の今であり、更に同じ国際趨勢の下、多少の差こそあれ基本的には同様の30年を経た日本を含む先進国の労働史の現在であるという点で、興味深い幾重もの文脈を持つ。

もちろんそこには1950年代前後に生まれ、60年代後半から70年代前半の労働者や学生による激しい抗議運動と80年代から90年代前半の社会党政権の間に、社会的連帯の増進に邁進した戦後世代が、90年代後半以降の経済のグローバル化、新自由主義、新保守主義、移民問題、高齢化、若者の失業等の中で一旦喪失した社会的連帯をいかに再建するかという一貫したテーマがある。

確かにここには労働者こそが社会の問題を解決し、より平等で公平な社会を創り出す事が出来るという19世紀以来の社会主義の考え方への拘り、それも特にフランスで強かった労働者主義という思想的信念を指摘する事も出来る。だが同時にそこには、古くから働く人々の地域社会があったマルセイユの労働者魂や、労働者達やその職場、家族、地域社会に自分達の生き方に誇りを持たせてきたところの地域に根差した労働運動の伝統の強さの様なものも感じられる。

そして監督が言う様に、マルセイユの過去30年の働く人々の体験は、ある種の普遍性がある、それはここ日本でも例えば評者を含め50年代前後に生まれ、60年代後半から70年代の激しい抗議運動を経験し、又80年代から90年代前半のバブル崩壊辺り迄、広範な中間層意識を人々に享受させてきた労働運動を持っていた同世代の社会連帯経験に関する日仏比較も可能であろう。

さらにマルセイユが日本の何処になるのかは直ちに見当がつかないが、ゲディギャン監督同様労働映画にこだわって来た日本の監督として、例えば空前絶後の連作である『男はつらいよ』と共に、『下町の太陽』から『家族』『同胞』『息子』『学校』迄半世紀、日本各地の様々な風景を背に、働く者とその家族や仲間、そして地域社会の多様な連帯を世に示した山田洋二の事は直ぐに頭に浮かぶ。

「キリマンジャロの雪」で印象深いのは、フランスでも日本同様世代間ギャップがあり、特に

■ 第2部 研究実施のあらましと成果

年長世代の左翼的言辞に共感よりはむしろ既得権益者のノスタルジーとして反感さえ感じる若者世代の存在だ。又それが記憶の喪失と伝承の欠落によって引き起こされたという認識も日本と同様で、日頃特に左翼において対照的なイメージを持たれてきた日仏が同様の連帯問題を経験していた点だ。

さらにその問題を紐解く糸口は、労働文化という連帯の生き方考え方が今どこに息づいているかを探す事という問題提起だ。それは正に数年前の派遣村辺りに始まり、大震災以後絆という形で再浮上した日本の連帯問題と本質は一緒だ。

それは働く人々の運動や組織、政策や制度を創り出す社会基盤としての、連帯に関わる心の習慣や時代の感覚構造への改めての注目であり、日常の生活様式を形作るインフラポリティクスとしての労働運動がいかに大事かを再確認する。

労働運動には賃金、住宅、労働時間、社会保障といった労働生活条件に関わる部分とそれを生み出す特定の価値観・世界観に基づく政治的社会的土壌に関わる労働文化の部分の両輪が必要だ。だが日仏共押並べて前者に比重が掛かる80年代を境に、後者への関与減退と共に世代間断絶が生じた事は否めない。

ではこの労働文化の再生はどこに求められるか。一つは人間の良心にこだわるヒューマニズムだ。『キリマンジャロの雪』の原作が『レミゼラブル』で有名なビクトル・ユゴーであり、作中名前や言辞が何度も登場するジャン・ジョレスはヒューマニストとして名高い社会主義者だ。ここにはそれぞれ差別を排し参加を促す労働者の豊かな関係構築指向の日仏労働運動、社会主義運動の伝統も入る。

もう一つは隠れた女性の労働運動だ。彼女達は日常の具体的な事柄と付き合いで喜怒哀楽を分け合う。誰かが痛めば皆で助け、困れば手を差し伸べ、それを当然視する。男達は長くそれを労働運動と認めなかった。だが今こういう女性達の生活の場での支え合いこそ、再生すべき連帯の基盤だとうまく気づき始める。

更に豊かな人間関係に裏打ちされた生活の豊かさだ。映画には晴れた港の風景と旨そうな酒食とユーモアな会話が溢れる。これまで連帯と言えば非日常的な悲愴感が漂った。だが分ち合いは日常の衣食住の在り様に始まる。贅沢でなくとも家族や仲間と美味しい会話と食事に舌鼓みを打つ瞬間こそ連帯には大切だ。

こういう働く人々の毎日の中に、或いは忘れてしまった昨日の日常の一齣に、そしてこれまでもすると見過ごされがちだった当り前の暮らし方に、明日の連帯のありかを探る事。これも今労働運動に求められる大事な事の一つだろう。教室でこの映画と一緒に観、又学生と労働映画について語るのが今から楽しみだ。

【篠田教授の「労働文化」 耕論第1回：「労働運動は、いま再び「労働文化」に行き着いた」 （『月刊連合』2012年7月号）】

これから暫くの間、労働文化について映画や音楽や小説等所謂ポピュラー・カルチャーを題材に僕の考えをあれこれ述べてみたい。労働文化は昨年連合が採択した提言『働くことを軸とする安心社会』の「3. 労働運動が大切にしてきた価値の継承・発展と次世代育成」の中に出てくる。そこでの論旨はこうだ。

労働運動は長く職場の内外で働く者の繋ぎ役を果たし、職場や生活を改善し、数多の人達の仕事や人生への願いを叶え、様々な社会運動の軸も担って来たと同時に、そうした運動や活動を通

じ社会に繋がり支え合う「労働文化」の価値観や精神風土を培って来た。この意味で労働運動は社会を持続させる大事な社会資本であり、そういう労働運動を今後も継承し強化しなければならない。

ここでいう文化は、僕らが直ぐに想う知的で芸術的な活動だけでなく、社会に広がり継がれる行動様式、技術、信念、制度を含む或る社会やコミュニティに特有な人々の生き方暮らし方その物でもある。従って「労働文化」は社会に深く浸透する働くことの価値や理念やそれに基づき形成されて来た慣行やルール、組織制度、更には労働で得られた物心双方の成果全体を含むが、だとすれば、僕らの生き方暮らし方の中には労働運動が培った、或いはそれを継承し次代に再生させた価値観、精神風土が「労働文化」という形で存在することになる。

では何故今労働運動は労働文化に拘るのか。そこには今再び労働文化に行き着いた労働運動の道程がある。労働運動は働く人々とその家族とコミュニティが繋がり支え合うための諸運動総体だ。確かに労働組合の主な役割は労働条件の維持向上だが、それを論じた英国のウェップ夫妻は、労働組合と労働党と協同組合と女性運動を合せて労働運動と呼んだ。つまり労働条件の維持向上は労働組合を含め、これら諸運動が社会に培う労働文化を前提にして発展した。

日本も同様だ。日本の労働組合は隣人愛に基づくキリスト教に育まれた。鈴木文治を始め多くの労組指導者はクリスチャンであり、後に国際共産主義運動の指導者となる片山潜等その後コミュニストやソーシャリストもキリスト教を経、又双方を両立させた。その中で賀川豊彦は労組、労済は勿論生協から農協、漁協迄日本の全ての協同組合組織の設立発展に関わった。戦後婦人運動や消費者運動も労組が後押しした。こうして日本の労働運動も連帯運動総体を構成し、又或る時はそれを代表しながら、繋がり支え合う労働文化を根付かせていった。

この諸運動が共生した労働運動は、過去半世紀程の間にその繋がりが緩み解け、相対さえる。そして労働運動は自他共に労働組合の利益代表活動と同義語化する一方、経済社会変容の中で労働条件の維持向上は難しくなり、組織自体縮減して行き、多くの働く人々とその家族やコミュニティが置き去りにされる。同時に繋がり支え合う労働文化もこの間形骸化し、経済のグローバル化と新自由主義は世代を始め様々な社会集団の間に入った亀裂を拡大して行った。

だがこの労働運動の危機は又再生の機会となった。数年前の派遣村のニュースがメディアで大きく取り上げられた頃から、様々な連帯運動が草の根レベルから労働組合へと広がり、それ迄自己責任だった貧困が社会的救済の対象となった。

連合がこの間全ての労働者のための運動を唱えたのもこの繋がりに支え合う労働文化の復活の兆しだ。この連帯の再興を更に強く促すのが東日本大震災である。

絆という言葉が人々の合言葉となり、繋がり支え合う社会の再建が叫ばれる。

この「ポスト3・11」の労働運動の課題は、何よりも解けてしまった社会の様々な絆を、多様な機会を捉えて結び直すことであり、そのためには今年の国連協同組合年の共同事業に従来の枠を越えて幅広く参集した連帯セクターを、社会連帯の重要な推進勢力にし、その中で労働運動が総体性を回復し、諸運動と一緒に労働文化を再び社会に埋め込む教育宣伝組織活動を強化する事である。

その時大事な事は、本誌前号で映画『キリマンジャロの雪』を巡る対談と解説で強調された「忘れられた労働運動」、即ち働く人とその家族やコミュニティが織り成す豊穰な人間関係とそれに裏打ちされた日常を大切に、特にそこで繋がり支え合う女性の価値観や行動様式に注目する視点を思い出すことである。

だからこそこの連載ではポピュラー・カルチャーに現れた労働文化を考えたい。というのもポ

■ 第2部 研究実施のあらましと成果

ピューラー・カルチャーはその時々の子会の価値観や精神風土に彩られる日常を反映する鏡であり、そのメッセージは人々に能弁に影響する。

そもそもポピュラー・カルチャーの歴史は労働運動のそれでもある。尚も文学や芸術が特権階級に独占され、社会の価値観や行動様式を彼らが決めていた19世紀後半に登場して以来、労働運動は働く人々の文化空間を構築するべく、職場や家庭や地域で独自のメディアや教育宣伝手段を開発し、知的・芸術活動を含め自分達の文化生活を広めて行った。この動きは20世紀前半以降の消費生活の爆発的拡大とマス、ソーシャル・メディアの飛躍的發展によって、ポピュラー・カルチャーと呼ばれる今日日常生活を圧する程の社会空間を作り出し、それは働く人々が大きく関わったという意味で正しく「人民の文化」であった。

この空間は人々の生活の不可欠な領域として社会文化的にも重要なだけでなく、その担い手や内容次第で人々の意識が変わるという意味で政治経済的にも重要であった。戦闘的なハリウッドの俳優組合の委員長であったレーガンがその後共和党の人気大統領となり新保守主義を世界に広げたのはその例でもある。

確かにポピュラー・カルチャーから労働運動の明示的な関与が消えて久しい。だが派遣村の頃戦前プロレタリア小説の『蟹工船』がリバイバルした事に労働文化の普遍性を再確認出来るし、スマップの『世界に一つだけの花』にポスト3・11の連帯の有り様を読み込める。ポピュラー・カルチャーの中に労働文化の伝統を如何に見出すかは僕ら次第だ。それは労働文化の豊かさを再発見する営みでもある。という訳で次回は大学の授業で見せた労働映画を取り上げる。

【篠田教授の「労働文化」 耕論第2回：「三池争議、労働者が主人公の社会を夢見て」

（『月刊連合』2012年8月号）

勤務する大学で「ポピュラー・カルチャーと社会科学」という講義を始めたのが10年程前。これを思い付いたのは、米国留学中に「アメリカのポピュラー・カルチャーと政治—1940～現在」と題した学部の人気授業に出たのが切っ掛けだ。

戦時体制、冷戦、公民権運動、ウーマン・リブ運動等戦後米国政治の重要局面に流行った映画を見せ、そこから時代の争点を読み取り議論する。レポートの課題は家族や友人に好きな音楽や映画を尋ね、何故それが好きになったのかをあれこれ聞き取りながら、その時代の人々の生き方考え方を探り、当時の政治経済や社会文化の事件や事象との関連を考える。

授業では70年代に『ロッキー』や『ゴッドファーザー』が大ヒットした背景に、60年代の黒人の公民権運動や学生の反戦運動に対する当時の白人労働者の反発を読み取り、マッチョなアーノルド・シュワルツネッガーが妊娠する『ジュニア』やダスティン・ホフマンが見事に女装して笑わず『トッツィー』にウーマン・リブ運動や中絶の問題を考えたり、正面から争点を取り上げず、娯楽性満点でも十分政治的であることが新鮮だった。「政治学よりこっちの方がずっと政治の話をしているよ」との担当教授の言に深く頷いた。

折しも、前回論じたように、労働運動を連帯運動総体の骨格と捉え、そのメッセージが長く人々の生き方暮らし方に反映していることを学生に論じたいと思っていた。時代の鏡として映画を用いる先の授業の手法は、この連載でいう労働文化を論じるには打って付けの教授法だと思い、早速教授会に2限ぶち抜きの講義形式を認めて貰い、「労働映画」なる造語を副題に付け、「ポピュラー・カルチャーと社会科学」の授業を始めた。

本誌前々号で『キリマンジャロの雪』のゲディギャン監督が、「労働映画」を「労働や労働

者、あるいはその文化がモチーフとして出てくる作品」として語っておられ、我が意を得たりの思いだったが、この講義を始めてから暫くは、「労働映画」といってもその意味する処にもう一つ自信がなかった。そこで学生と一緒に考え教えて貰おうと、授業の課題は「私の労働」と題して、洋邦新旧問わず如何なる映画でもいいから、自分が考える労働の意味を示すのに有用な5本を選んで、それらを題材に論じる様にとお願いした。

もっともいきなりそんな課題を出されても戸惑うのは必定なので、見本ではないが「言出屁」として、授業では一つの参考例として以下の5本を取り上げ「私の労働」を論じた。

NHKスペシャル『戦後50年その時日本は・第3回・三池争議 激突「総資本」対「総労働」』(1995)『リトル・ダンサー (邦題)』(2000)『ブラス (邦題)』(1996)『キューポラのある街』(1962)『フラガール』(2006)。

日本と英国に跨り、公開年も幅があり、題名を見ても余り連環が感じられない5本だ。試しにウィキペディアで調べても、直ぐに例えばこれらの作品を還流する繋がり支え合って働く社会の物語を頭に思い描くのは難しかろう。もっとも5本に共通性がない訳ではない。それは何れの作品にも労働組合が大事な役回りで登場することだ。特に4本は合理化閉山に関わる炭鉱ストが背景だ。ではこれらをどう論じたか。ご覧になってない読者もおられると思うので、作品の中身も若干紹介しながら此处では3回に亘って再現しよう。

まず1)の『三池争議』だが、これは組合役員の方でご覧になった方も少なくないのではないか。当時組合関係者の間では結構話題になった作品であり、その後間もなくNHK出版会から本になった。NHK特集の定番通り、当時の記録や関係者に当って事件を再現するというものであり、三池争議自体も労働運動のみならず戦後史の分岐点として既に詳細な記録や多数の著作がある中で、米ソの当時極秘の外交文書を含めその当った記録と生存する政労使関係者への聞き取りの内容、更に私作私蔵を含め当時の貴重な記録フィルムや臨場感溢れる再現シーンに、半世紀前『ウルトラQ』で震えた石坂浩二のゆっくりだがずっしりなナレーションが重なり、それはそれは秀逸だった。

それにも増してこのドキュメントを感動的にしたのは、インタビューに登場する関係者の中に今も確実に生き続ける争議である。第2組合結成の報に触れた時の思いを尋ねられた第1組合の関係者が、思わず落涙しカメラに「申し訳ない」と必死に歪んだ顔を立て直そうとして出来ない場面に大教室が息を呑んだ瞬間は今も忘れられない。

このドキュメントの一つの特徴は三池争議を「労働者が主人公になる社会」を夢見て「資本」に敢然と立ち向かった体制選択の決選だったと見る視点であり、その根拠を三池に別の文化圏が出来ていたとする描き方だ。授業で注目するのはその労働文化の在り様だ。「首になった者と首にならなかったものが心を一つにして闘った」と分会役員が満面の笑みで回顧する「私の生涯で最高」だった炭住の暮し方とはどんなだったか。

番組は先ず歌に注目する。争議中仲間や家族と到る所で歌われた労働歌「炭掘る仲間」を組合の文学青年達と作った人物は、同時に全国の三井鉱山労組の連合会の役員であり警官隊との対峙では現場の行動隊長だった。こういう活動詩人は当時沢山居たのだろう。10年の歌声運動が労働の運動文化として根付いた証左と言っていい。

さらに画像文化だ。先の分会役員は自分の8ミリ映写機で争議場面をつぶさに撮り、それに音楽と語りを付けて膨大な闘争記録を残した。こういう活動監督は沢山居たのだろう。こういう自主記録映画運動の歴史は1920年代に遡る。そもそもそれらの映像を幾つも使ったこのドキュメント自体も、その延長と言えなくもない。

■ 第2部 研究実施のあらましと成果

そして主婦会である。三池労組主婦会が三池争議の守護女神であった話は有名だ。ドキュメントはそれを連帯基盤として改めて注目する。九大教授向坂逸郎が自身のマルクスの『資本論』の訳業を捧げた主婦会は彼が現地で開いた向坂学校の一番弟子だ。そこで男は社会主義社会という夢を見、女は貧乏を恥じるなど教わり、仲間の大切さを学んだ。

【篠田教授の「労働文化」 耕論第3回：「労働者の戦闘精神は時に全く姿形を変えて蘇る」 （『月刊連合』2012年9月号）】

前回末尾で三池の労働文化、広げて50年代日本に形成された労働運動の文化力の行方について問題提起した。その際の鍵言葉が、『三池争議』の終結集会で演説した分会長が語った「後に続く者を信ず」。「後に続く者」とは誰なのか。「後に続く」そして其の者を「信ず」とは如何なる行為か。これを考えるため、今回は『プラス！（原題Brassed Off）』と『リトル・ダンサー（原題Billy Elliot）』の2作を取り上げる。

前者は1996年、後者は2000年に夫々公開された英国映画。邦題原題から俄かには想像が付かぬが、前者は1990年代半ばの英国北部、後者は1984年の英国北部の共に炭坑町が舞台と多少時空間が前後上下するも、共に80年代冒頭から90年代半ば迄続いたサッチャー・メイジャー保守党2政権で、強烈的な民営化と労組攻撃の矢面に立った当時最強と謳われた炭鉱労組が、閉山合理化阻止を掛けて町ぐるみ家族ぐるみで闘った果てに敗北する中、夫々一風変わった物語が展開する。

『プラス！』は、高額退職金と引換に会社の閉山提案を呑むか炭鉱存続に賭け提案の断固拒否かの組合員投票を目前に、全国大会優勝を目指す百年の歴史を誇る地元プラスバンドの炭鉱マン楽団員と指揮者そして家族らが繰り広げる、悲しくも勇敢でそれでいてユーモラスな物語だ。全編バンドが奏でる見事な演奏もこの映画の魅力だ。

『リトル・ダンサー』も又、炭鉱マンの父と兄が合理化反対ストに加わり、警官隊や会社が差し向けるバスで就労を強行する非組合員との睨み合いが日常化する緊張状態の中、バレエ・ダンスに魅せられた中学生の主人公の自己と周囲との葛藤が織り成す矢張り激しくも暖かい、時に笑いを誘うドラマだ。数多のブリティッシュ・ロックも心を揺する。

興味深い事に2つの作品の物語の構造は『三池争議』のドキュメントと似る。炭鉱住宅や学校、プラスバンドやクラシックバレエ等元々会社が従業員を慰撫懐柔するため又権力が己が奢侈のため紡いだ文化を、労働者が夫々立向う強者への対抗文化に転用する。例えば『プラス！』では、全国大会で優勝した指揮者がロンドンの会場に集う中上流階級の聴衆に「イルカの命は助けたくても労働者の運命には関心なからう」と啖呵を切った後、観光2階建てバスで英国第2の国歌たる「威風堂々」を凱旋演奏する。

この他にも3作は、1) 女性達が家族やコミュニティの連帯を支え、2) また先の与えられた文化を己が対抗文化に転ずる際に、外部の大学教員、技師、ダンス教師等中産階級の戦闘的少数派が介在し従来の仲間内に波紋を起こすが、それが契機となってより大きな仲間を発見する、3) 更にその過程で知識を得、上手に奏で、踊りの技を磨くという本来個人の自助と栄達が、仲間の助けで共同体の誇りとされる点等で類似する。

そして今回2作は『三池』の問い即ち戦闘精神の行方について重要な示唆を与える。確かに3作共ある種のハッピーエンドで終わる。だが『三池争議』は激しい争議にも関わらず或いは争議があったからこそ、その後の労使協調に拠る高度成長があったとの教訓説だ。ここでは三池に顕現された戦後労働運動の戦闘精神の鎮魂として労使協調の高度成長が謳われる。つまりその戦闘

精神は行き場を失い封印されたことになる。

ところが今回2作は違う。例えば『プラス!』では、それまで組合員投票は他人事で音楽一途だった指揮者が、二者択一を迫られた労働者の実情がバンドの存亡迄脅かす事に気付き、閉山決定後分裂した労働者の絆を再び紡ぐべく、謂わばコミュニティの弔い合戦として全国大会に乗り込み、そして先の啖呵と凱旋演奏に繋がる。つまりここでは労働者の戦闘精神が恰も其れ迄対極にあったかのプラスバンドに乗り移ったことになる。

この乗り移りの構図は『リトル・ダンサー』の場合もっと象徴的だ。主人公の王立バレエ学校への合格通知がスト敗北の知らせと一緒にあった後の場面で、地底の掘削現場へ向かう父と兄が仲間と共に乗り込んだ炭鉱エレベーターの薄汚れた蛇腹のドアが閉まって行く。次の瞬間閉まったエレベーターのドアは近代的な地下鉄のガラスドアに変わり、開いた扉からよそ行きの外套を着込んだ父と兄が出て来、上りエスカレーターを急ぎ階上へ。

座席に滑り込む際父が案内係に二人が来ている事を伝えて欲しい旨頼むと、横を見た兄が父に顎を杓った先に、かつて女装に興じた息子の親友が同性愛者と思しき様相で黒人の相手と会釈している。「白鳥の湖」のクライマックスに向かって流れる旋律と共に、舞台の袖に転じたカメラは鷹揚に進み出る大柄のダンサーの背中を大写し、父と兄が来ている事を告げられ、全身柔軟体操するダンサーを後輩達が仰ぎ見る。そして皆が固唾を呑む中、成人した主人公が舞台中央へ力強く跳ね上がった処で映画は終わる。

戦闘精神は時に全く姿形を変えて蘇る。クラシック・バレエの「白鳥の湖」の物語然り。特にこのシーンではずっと女性だった主役に男性を振って大当たりした新版「白鳥の湖」のアダム・クーパーを、其の俣成人した主人公として舞台に送った。労働争議とは無縁の最も保守的と思しき芸術の世界に炭鉱労働者の子が家族や仲間の想いをぶつける。つまりこの映画は、階級、人種、性の壁に闘いを挑む生き様が世代継承される物語だ。

宣伝文等を見ると、日本で『プラス!』と『リトル・ダンサー』は夫々男の子がバレエ・ダンサーを目指す或いは炭鉱マンのプラス・バンドが困難に打ち勝つ家族愛や仲間愛の映画になっているらしい。それは間違いではないが、これらが労働運動の敗北をその戦闘精神の「転生」或いはその生き様の次世代継承という物語で明日に繋げた点を見逃すと、この時期の英国労働映画の勘所を見失う。ポピュラー・カルチャーが一見別の物語の中でかつて労働運動が培った心の習慣を転写する。事は日本の戦後労働運動やそれが紡いだ労働文化とポピュラー・カルチャーの関係でも同じではないのか。そこの処を次回は『キューポラのある街』と『フラガール』で考えてみたい。

【篠田教授の「労働文化」耕論第4回：「一人の五歩より、五人の一步」のリアル】

(『月刊連合』2012年10月号)

ポピュラー・カルチャーは一見別の物語の中でかつて労働運動が培った心の習慣を転写する。この命題が日本の戦後労働運動やそれが紡いだ労働文化とポピュラー・カルチャーの関係でも当て嵌まるか。これを『キューポラのある街』と『フラガール』で考える。これが前回の宿題だった。ご承知の様に前者は1962年公開で、ブルーリボン賞作品賞、主演吉永小百合は同賞主演女優賞、浦山桐郎監督は日本映画協会新人賞を夫々受賞。後者は2006年公開で、キネマ旬報ベストテン邦画第1位、日本アカデミー最優秀作品賞に輝く。つまり半世紀を挟み、両作品はポピュラー・カルチャーとして人々の間に最も受容された訳で、先の命題の時空を超えた効験を測るの

第2部 研究実施のあらましと成果

に好都合だ。

先ず『キューポラのある街』だが、原作は1959年から雑誌『母と子』に1年連載、61年に単行本化され翌年児童文学協会賞を受賞した早船ちよの同名児童文学。因みに著者は戦前から女学校卒業後働きながら童話や児童文学の作品作りに励み、小学校教師で児童雑誌本の作家で編集者だった夫と生活綴り方運動の一翼を担って来た。人気労働児童書が直ぐ様人気労働映画になる。要するにこの原作と映画は、戦前以来日本の労働運動が紡いで来た労働文化の豊穡な収穫期におけるコラボ作品だ。

主人公の少女ジュンは文武に長けた中3。担任も地元公立名門校合格を楽観。鋳物職人の父が突然解雇され、母の出産や弟の揉め事等があっても貧しく変化のない労働者生活からの脱出を目指し彼女は進学を諦めぬ。だが父の再就職の失敗や母の捨身の転職を目の当りにし一旦は進学を断念、自暴自棄に陥るも周囲の助けで働きながら定時制に通うんだと、高度成長で賑わい始めた大手電機メーカーの生産ラインに立つ。

この話はおそらく、例えば最近迄横行した「勝ち組」「負け組」説話で考えれば、差し詰め後者じゃなかろうか。当時でもその理解は在りだ。だが映画は、「新しい門出」というジュンの台詞の如く明らかにハッピーエンドで終わっている。その鍵言葉が担任がジュンに手向けた「一人の五歩より、五人の一步」(元々組合のスローガン)。その前の彼の論旨「働きながら勉強し、自分の意見を持つ」も大事だ。ここには一緒に働き、一緒に学び、一緒に悩み、一緒に伸びる労働者生活の前向きな共同性が謳われる。それは国も人も「一人の五歩」を目指す今日の自己責任論へ至る長い道程のとば口に屹立したもう一つの生き様だった。

この映画が興味深いのは、このもう一つの生き様が具体化した点だ。当時東京北東に集積した大手家電工場で大量の女性工員達が、共にトランジスタ部品(と思しき)を組立、大食堂で昼食を取り、庭でバレーボールに興じ、歌声運動に馳せる。当時の女性としては高い収入を貯金し、夜は高校に通って自分を磨く。このもう一つの自立の姿は、産業革命の時代の紡績工場の女性工員の時代から、貧困家庭の女性の憧れだった。但しかつての女工生活の暗部を労働運動が好転し共同自助を加えた処が味噌だ。

この頃流行ったのが坂本九の「上を向いて歩こう」。作詞の永六輔曰く、この歌は「安保」に負けて出来た。悲しみを堪え前に進む。泣きそうな男の子が歯を食い縛る感じだ。同じ頃「三池」でも敗北に組合員や家族が泣き、活動家は後続を求めて絶叫するが、後世の歴史家はここが天下の分れ目と敗因を詮索し、最後は時代の流れで押し切る。だが人々は「五人の一步」という組合言説を、女性工員を始め夫々の生活で胸を張るリアルな選択肢として解した。勿論「一人の五歩」を選択した者は多い。だが「もう一つ」がリアルな分だけ、立身出世せぬ生き様に誇りが備う。「キューポラ」が大好評を博したのはその共感では。ここに一つのデモヤストの帰趨に簡単に左右されぬ、人々の心に埋め込まれた労働文化の証があり、それを写すポピュラー・カルチャーの在り様を見る。

さて『フラガール』だ。後輩達の行方が震災後も話題になる程だ。既観者も多かろう。筋紹介は省くが、背景が60年代半ばの全国的な炭鉱合理化とそれを巡る労使争議だということは覚えよう。もう前号読者ならこの炭鉱労働映画の肝はお分り。炭鉱がハワイアンセンターに転じる地域再生の立役者達の物語を、当初貧しく変わらぬ生活からの「一人の五歩」的脱出方途だったフラダンスが、最後は同じ生活の場で新しい「共同性」に裏打ちされたもう一つの生き方を可能にする「五人の一步」のそれになったと解する処だ。

同型とは言えほぼ現在の労働映画だ。『キューポラ』と比較して半世紀の時空は感じる。例え

ば『フラガール』で組合の存在は遠い。赤旗や集会や役員の姿が度々前面に出るのにだ。しかも話の転機は、それ迄娘がフラガールになるのを炭鉱仲間への裏切視する組合婦人部長だった母親が、娘のフラガールに自分達の新しい未来を賭けて組合に背く場面だ（『リトルダンサー』の父がスト破りする場面が重なる）。この点『キューポラ』は不思議だ。赤旗も集会も役員の姿も出て来ない。けど最後に父が再就職出来るのも、隣の中卒工員がジュンを励ますのも、担任が「五人の一步」を教えるのも、皆背後に労働運動の空気と労働文化の息吹が感じられ、もう一つの生き方に明るさを保証する。

だが『フラガール』で彼女達がコミュニティを再建していく姿を労働運動に対する人々の願望と考えたらどうだ。実際彼女達は途中からは「五人の一步」のために踊っているものであり、その価値観は『キューポラ』のそれと然程違わない。寧ろそれが、今日的な遠い存在の組合のアンチ・テーゼとして半世紀後も表出される事が驚きだ。つまりポピュラーカルチャーはこの間ちゃんと労働文化を転写し続けながら、人々が最早労働運動にそうした価値観の体现を認めなくなった後もその保存場所になっていたのだ。しかも人々が再び「五人の一步」的生き方の大事さに気付き始めた頃に、それを新たな装いで思い出す作品がまだまだそうした生き方がなお力を持った時代の設定で作られ、それが当然の如く人気を博し、あまつさえ逆説的乍その立ち位置への帰還迄労働運動に喚起するとは。

ここで両作品に共通する隠し味に触れたい。「マイノリティ文化」だ。『キューポラ』でジュンが「五人の一步」に気付くのは、「あなたともっと話したかった」という差別なくば「帰還」はなかった在日朝鮮人同級生の言葉だ。『フラガール』の制作会社は『月はどっちに出ている』『パッチギ』と同じ李鳳宇のシネカノン、監督は『青』の李相日。『キューポラ』の在日連帯関係は、女性の共同的自立同様現実というより理念に近かろう。だが当時の労働文化がそれらを理念とした処が重要だ。半世紀後再び「無縁」時代に在日文化が女性の共同的自立とそのコミュニティ再建への効験を訴える。これも戦後労働運動やそれが紡いだ労働文化とポピュラー・カルチャーの関係だ。

【篠田教授の「労働文化」耕論第5回：「戦後民主主義をポジティブに讃える、労働音楽」

（『月刊連合』2012年11月号）

今回は米国労働映画を語るつもりだった。でも山下達郎のベスト・アルバム Tatsuro Yamashita OPUS ALL TIME BEST 1975-2012が発売になり、急遽予定を変えた。元々山下達郎は何時か論じようと思っていた。矢張り物事には時季がある。今彼が旬だ。では何故この連載で山下達郎なのか。だって彼は現代日本の労働音楽家と思うから。

労働運動が民主主義を広め、労働文化が民衆の生き様に誇りを持たせた日本で、労働音楽は歌い手と聞き手の間の垣根を払って来た。労働歌と呼ばれた戦前からうたごえ運動後の戦後迄、労働音楽は運動音楽だった。坂本九の「上を向いて歩こう」は安保闘争の敗北から生まれた。フォーク・ソングは反戦歌であり更なる音楽の民主化だ。

だがその後楽界は「業界」「マーケット」になり資本主義化が進行。歌い手と聞き手の関係は売り手と買い手の関係に変る。残った共有空間も天井のない広場の集会からプレミア・チケットのコンサートやカラオケ、ウォークマンからipodへと閉じて行く。歌の中身も僕等からわたしとあなたへ、世の中から本当の世界を求めて己へ己へと内向する。

確かに山下達郎もこの音楽の消費化を生き、今や彼の代名詞たる「クリスマス・イブ」を始

第2部 研究実施のあらましと成果

め、数々のコマーシャルやテレビドラマと「タイアップ」して来た。だが彼は消費されなかった。音楽の職人たる山下の楽曲は風物詩となった。37年の彼の職歴を辿った今度のアルバムもその証左だ。それはその儘この間の我々の生き様に誇りを持たした。

山下の歌は高質の音楽性が支えるメッセージ・ソングであり戦後民主主義讃歌だ。彼はかつての労働歌やフォークソングとは違う形で愛と人生とそれを育むコミュニティと自然を唄った。今回懐かしい曲に耳を鎮め分厚い歌詞集の字面を追い、その音と初めて出会った10代の想いが蘇った。音楽はまず愉しむもの。そしてそれを包み込む僕等の生き方を味わう。団塊世代の後、筆者より5つ上の彼の歌に、彼等の後塵を拝しながら、彼等より遅く民主主義の世界に生きる大袈裟に言えば戦後文明の誇り高い表白を感じた。

「意地悪 する子がいたって 最後は 仲良くなれたよ あの子は どうしているだろ 今でも 大事な友達 みんなで 力を合せて 素敵な 未来にしようよ どんなに 大人になっても 僕等は アトムの子供さ」。例えば91年の「アトムの子」だ。山下にとって、「アトム」を始め戦後民主主義のエートスを作品に託した手塚治虫を如何に継承するかが詞題だった。戦後漫画職人の「指針」を引き継ぐ音楽職人の使命感が胸を撃つ。

戦後日本の民主主義文明のポジティブな顕示は、それをネガティブに試み頓挫した前世代と踵を接する山下と先輩である「ハッピーエンド」等音楽仲間の本能的命題だ。この音楽による文明の顕示で山下がぬきこんでるのは空間描写だ。「風景一つちゃんと書けない詞では、愛や人生を謳うまともな音楽は作れない」が多分彼の矜持だろう。

「七色の黄昏降りてきて 風はなんだか涼しげ 土曜日の夜はにぎやか 街角は いつでも 人いきれ それでも陽気なこの街 いつでもおめかししてるよ 暗い気持さえ すぐに晴れて みんな うきうき Down Townへくり出そう Down Townへくり出そう Down Townへくり出そう」「まどろむ様なピンクの明りは 浮かれ騒ぎにとってもお似合い 通りにあふれる虹のかけらを あなたに一つ僕にも一つ ごらん!!パレードが行くよ ごらん!!パレードが行くよ カーニバルのパレードが カーニバルのパレードが」。出発点の「Down Town」(75)も「パレード」(76)も聴いて直ぐ印象に残るのは、横文字と「軽音楽」に合せて目に浮かぶ下町の祭りの風景だ。

山下は販促で出た民放ラジオで秒刻みの進行表に興じる職人だ。だがそこには世の中で一番偉いのは毎日コツコツ働く普通の人々だという彼の強烈な労働倫理がある。例えば「遠く翳る空から たそがれが舞い降りる ちっほけな街に生まれ 人混みの中を生きる 数知れぬ人々の 魂に届く様に 凍りついた夜には ささやかな愛の歌を 吹きすさんだ風に怯え くじけそうな心へと 泣かないで この道は 未来へと続いている 限りない命のすきまを やさしさは流れて行くもの 生き続けることの意味 誰よりも待ち望んでいた さみしさは琥珀となり ひそやかに輝き出す 憧れや名誉はいらない 華やかな夢も欲しくない 生き続ける事の意味 それだけを待ち望んでいた To find out the truth of life! たそがれが下りて来る 歌声が聴こえて来る」。88年に子供を授かった時書いた「草氓」だ。「自分の音楽人生にとって最も大事な一曲は」「生きることに対する価値観が固まる年齢になって」「浮かんで来た」と山下は解説で振り返る。

この曲もそうだが山下のラブソングは男と女の愛の物語以上の大きさを持つ。それはしばしばジェンダー・フリーであり、エイジレスであり、隣人愛である。あの「クリスマス・イブ」は中世ドイツの教会オルガン奏者パッヘルベルのカノンが下敷きなのを思い出そう。又それは、「淋しげに夜の街一人きり歩けば 本当の悲しみを知っている人に会う 二度と会えない素直な愛に さよならをする人など居ない だからいつまでも顔を曇らせ つらい日を送る事はない

3. 雨の日は映画館へ行こう！心を洗おう、語り合おう、労働文化耕論

SOMEDAY 一人じゃなくなり SOMEDAY 何かが見つかる」と「いつか」で唄った連帯愛になる。そして四半世紀の愛の遍歴の末、10年の「街物語」で彼が見出したのが様々な愛を育みその愛のお陰で生き続けるコミュニティだ。

路地裏の 子供たちは 知らぬ間に 大人になって 本当の 愛のことを 少しずつ
知り始める たそがれに ときめいて 雨音を さみしがる あいまいな 季節さえも
たまらなく 今 いとおいしい めぐり逢い 惹かれ合い 「幸せになろうね」って
ささやいて この街の 物語になっていく 不器用な恋の記憶 AND THE LIFE GOES ON
AND THE LIFE GOES ON …

さよならは 終わりじゃない 思い出は 消せないから この道で 二人して
小さな空を見上げていた きらめきが 色あせても ぬくもりは 残っている
アスファルトに 君の影が 焼き付いたまま 潤んでいる 手を振って ほほえんで
「幸せになってね」てっ つぶやいて 僕はまた もう一度歩き出そう
この街で生きていこうAND THE LIFE GOES ON AND THE LIFE GOES ON …
君のこと 忘れない 大切なこと もらった 本当の 愛のかたち 今はまだ見えなくても
物語は続いていく めぐり逢い 愛し合い いつかまた 晴れていく 手探りで でも
胸を張り 僕はまた歩き出すよ この街で生きていくよ 物語は続いていく
物語は続いていく … AND THE LIFE GOES ON AND THE LIFE GOES ON …

下町情緒を描いたこの曲や東北の自然を唄った「愛してるって言えなくたって」、そして囃らずも3・11後の絆の唄となった「希望という名の光」を含むアルバム『Ray of Hope』は、その意味で山下が40年近く追い求めた戦後日本の民主主義文明の顕示における頂点と言えよう。

4. 心をつくる労働運動 —一次世代日本を見晴かし—

連合総研 月刊誌『DIO』（2013年4月）

ふりだしの49年総選挙

本稿執筆にあたって編集部から尋ねられた論考の中身は、「2度の政権交代を経験して、労働組合と政権与党、政治との関わり等、改めて労働運動の役割、課題とは何か」についてであった。考え甲斐のあるお題ではあるが、やはりこれを論じるのは容易ではない。そこで此の頃筆者が拘っている運動史を振り返り、日本の労働運動にとって似た様な時期はなかったかとあれこれ当たっていると、国立国会図書館調査立法考査局が出す『レファレンス』の2005年4月号に、間柴泰治、柳瀬晶子の両氏の手になる「主要政党の変遷と国会内勢力の推移」という資料に出会った。これをつらつら眺めるに、どうも1949年1月の第24回総選挙というのが、今回の論考の参照点になりはしないかと思えた。もちろん筆者は日本政治史の専門家ではないし、日本の政治発展における今回の選挙結果の意味については、その適任者によって別稿が用意されると伺っているので、これはあくまで筆者の頭の体操上思い至った事だと先ずは断わっておく。

権力と向き合う労働運動

と、この後続く独自の解釈の言い訳をしておいて話を進めると、ちなみに1947年4月に行われた第23回というのは、社会党が143議席ながら辛くも前与党自由党を含む他党をかわして比較第一党になった総選挙であり、ここから片山、芦田内閣と労組が推す社会党が政権与党となる。そして49年1月に実施された第24回総選挙で、社会党は48議席と惨敗を喫し、民自党が264議席で与党に返り咲く。ちなみに民主党も69議席を獲得し、共産党の35議席という大躍進を除けば、左右の割合とその激変ぶりは今回の選挙結果に相通ずるものがあるといってもよからう。

では敗戦直後に労働運動が再建されてこの時期までの凡そ3年半とは、労働政治的に言って如何なる時期であったろうか。最早70年も前のことなので、本誌の読者の多くを占めるであろう労働運動関係者にしていても、占領軍の介入で幻に終わった2・1ゼネスト位は聞いた事があるが、後は世上同様非常に騒々しかった事を覚えておられるのが精々かもしれない。もっともここではそれで十分で、この時労働運動は正に騒々しかった。只敢えて言えばそれは、占領期という大きな制約はあったが、この間騒々しく試みられた政労使の協調体制にせよストライキや生産管理等の直接行動にせよ、労働者と労組や政党等彼等を代表する組織は、政治権力、経済権力に直接肉薄し、それを奪取、或いは其処迄はいかなくともせめてそれを共有し、政府や会社の政策や制度を変える事によって、どん底にあった勤労家庭の生活を少しでも改善する事を目指した時期ではなかったか。そしてこの点、もっと遙かに穏やかかつ静かな形ではあったにはせよ、この間の民主党政権の成立が現実味を帯びて来た時期から昨年末の選挙迄、労働運動と民主党政権が考え続けて来た事は、流石に生活状態が大いに異なるとはいえ、基本的には同様の事ではなかったか。

心と向き合う労働運動

上述の本稿の課題に則せば、問題はその後労働運動がどうしたかであろう。結論から言えば、戦後労働運動はここから軸足をそれまでの政治経済戦線から、「戦後」或いは「冷戦」という時代状況の中で形造られて来る社会文化戦線に移した。そして政府や議会、職場や地域で政策や制度等の物事の仕来たりを決める処に直ぐ様影響を及ぼそうとする以上に、そういう決め事が自分達の生活や生き方にどのような意味を持つのかを説き、又一緒に考える機会や場を、労働者やその家族と共に、そして彼等彼女等が生きる地域で持った。こうして戦後日本の形が決まって来る1950年代以来、労働運動は次から次へと出て来る新たな政策制度の諸課題を捉えては、老若男女幅広い人々にそういう経験を出来るだけ沢山して貰う事で、物事に対する人々の考え方や感じ方、或いは在るべき生き方、暮らし方、それが引いては社会として国の内外に生起する様々な事件や事象への対処の仕方や国民として持つべき態度に影響を与えようとした。つまりこの時労働運動は、戦後日本人が心の習慣を作るのに大きな役割を果たした。

むろん戦後労働運動で、どの運動が具体的にどんな心の習慣をもたらしたかを確かめるのは無理な話である。寧ろ此处で言いたいのは、それらの運動の積み重ねが直接間接に、この時代にこの国に生きた全ての人々が吸った、「戦後民主主義」の空気を作るのに少なからぬ影響をもたらしたという事だ。そうして労働運動は、そういう時代の空気を通して政治権力や経済権力の決め事を陰に日向に方向付けていったという事だ。つまり戦後労働運動はこの時期から、権力に直接向き合うことによって、在るべき社会や国の在り方を実現しようとする事に於いてよりも、人々の心に向き合う事に拠って、人々が自分達で在るべき社会や国の在り方を考え、何よりも自分達の生活や生き方、働き方に於いて、その在るべき姿を追い続けられるような時代環境を作る事に於いて為した事の方が多かった。

戦後日本人の心の習慣

では戦後日本人の心の習慣とは、具体的にどんな風にこの国や社会を作り、そこで生活する人々、とりわけ働く人々の生き方を形作って行ったのか。例えば戦後日本と言えば、「平和と民主主義」と「経済成長」が二大看板だったことは、それに対する好き嫌いは先ずは置いて、多くの人が一先ず頷く処だろう。この2つは言うまでもなく切っても切れない関係にある。いや寧ろ後者は前者の一つの表現形態、或いは前者の精神を体現した暮らし方の一つと考えても良い。つまり一方で「平和と民主主義」という空気を吸いながら、他方でそういう国に生きる生産者或いは生活者としてその誇りを毎日の生活や長い人生に於いてどうやって表現していったら良いかを、時折でも考えるという心の習慣を育むうちに、戦後日本人はそういう世界で最も大事な事であろう、「より良いものを、より沢山の人が使って、生活を良くする」ことが出来る毎日をこの地球に作り出す事を自らの使命にして、軍需ではなく民需、それも日用品という平和と民主主義のための経済活動で世界貢献する事を目指して来た。そのある種の「経済伝道」は、次第にただ作った物を日本の内外に送り出すだけでなく、その作った物を活かせる生き方、暮らし方を考えながら作るようになり、或いは作った物が又更にそれを一層活かせる生き方、暮らし方を生み出し、又更にその作り方や作る事そのものをも、世界の人々と共有するために工場や会社がそこで働く

第2部 研究実施のあらましと成果

人々や家族と地球の色々な所に出て行ったりした。

そこにはこういう時代の空気、或いは心の習慣中でも最も根本にあったであろう原則、即ち「人は強くなければ生きていけない、でも優しくなければ生きる資格がない」とでも表現出来る集合規範が人々を捉えていなかったか。戦争を経て、戦後日本人は後者に一層重きを置いた生き方を選んだ。それが謂わばこの人々の生活を豊かにする価値あるものを創って世界を平和で民主的な世界にする、或いは今風に言えば経済に拠る国際貢献の道という事ではなかったか。

戦後日本経済の強み

こういう戦後日本人の心の習慣を考えると、戦後日本経済がなぜ強かったかも自ずと分かって来る。恐らく戦後日本経済の強みは、これは自分達が生きていくための金稼ぎではなく、みんなを幸せにする「ものづくり」だという処にあったのではないか。つまり戦後日本人は、経済活動に於いていつもそこで作った製品や施設や、或いはサービスを前にして、笑顔を溢すであろう、多くは未だ見ぬ、或いは一生会う事はないが、でも自分と同じ様に家族や地域の人達と平和に豊かに暮らしたいと思う遠くの人々の事を思ってきた。そういう働く人々の想像力がなければ、戦後日本製品の高い品質は絶対になかったであろう。

戦後日本経済の「強さ」は、正にその経済活動にこういう何のために、誰のためにそれを作るのか、もてなすのかという「意味」をいつも見いだそうとして来た事だったと思う。日本の自動車製品や家電製品の強さは実はそういう願いがデザインや機能や価格に反映されていたからではなかったか。勿論こういう考え方は戦後日本人にしかわからないものではない。スティーブ・ジョブスは、ソニーのウォークマンから製品が人々の生活を豊かにする底知れぬ力を感じてアップルを立ち上げた。iPhoneやiPadは遠くに住む子供達や孫達、そして離れ離れになった友達と誰よりも会いたがっていたシニアの人達の生活を一変させた。そういえばビル・ゲイツはコンピューターやインターネットを、自分の親がそれを使えたらどんなに良いだろうと思って始めた事が、マイクロソフトに繋がった。

戦後日本人に生きる希望与えた戦後民主主義

そしてこの広い意味で、世界の中で日本が働く意味を与える事に携わって来たのが、国内外に亘る平和や職場の内外に民主主義を広げようとし、平和や民主主義を大事にしたいと思う人が作るものは違くと信じて来た戦後労働運動であり、それが大事な屋台骨となっていた戦後民主主義ではなかったか。もっともここで言っている戦後労働運動や戦後民主主義は、特定の党派や組織、或いは特定の運動や活動を指しているのではなく、それら全てを包みこむ労働運動総体や民主主義総体を考えている。だからこれまでそういう意味で評価される事が少なかった自民党政権やそれを支えた人々、或いは経営者の中にも沢山の戦後民主主義者がいると思っているし、今まで余りそういう見方をされなかった生産性運動も戦後労働運動の一つの表現だと思っている。

おそらく戦後民主主義、取り分け戦後労働運動の最大の功績は、こういう働く意味を含めて、人々に生きる希望を与えて来た事ではないか。もう戦争はないんだ、また戦争になりそうになったらそれをさせないんだ、或いは戦争をしている人達がいたら、何とか止めさせるんだと思う事、

思える事が、どんなに人々の明日を明るくし、そこに生きる喜びを味わおうと人々が毎日を前向きに暮らすようにさせたか。もう考えてはいけない事や知ってはならない事ややってはならない事がないと思える事が、どれほど人々にそれがどんなに困難な事であっても挫けずに頑張るというやる気を引き出させた事か。自分が除け者になる事はおかしな事であり、皆が幸せになれなければそれは正しい世の中ではなく、そして何よりもそう思っている人が他にも沢山いるんだと信じれる事が、どれほど人々に自分の思いを皆に伝える勇気を与え、そうしようとする人に手をさしのべ、一緒に手を繋ぐ喜びを思い知らせたことか。

戦後日本人はこれらの希望の空間をただ頭の中に思い描いていただけではない。毎日の生活の中で、デモやストライキのみならず、組合の集会や労組関連の様々な情報媒体を通じて、そこで語られ議論され主張されている中身や溢れる世界事情の詳細は分らなくても、或いは関心はなくても、少なくともそういう希望を持つ事が守られる時空間がある事をはっきり目の当りにする事が出来た。又そういう所で人々がいつもとは違った顔と声で、より自由で平等な人間関係を作れる事が、たとえ短い間でも感じれる事が出来た。こういうそれが実現できるかどうか多少自信がなくても、あるべき働き方、暮らし方、生き方を求める事は決して無駄な事ではないどころか、生きる喜びそのものであるという信念と想像力こそが、戦後日本経済の信念と想像力の経済を生んだのであろう。

失われた20年

こうして考えてみると、所謂「失われた20年」や最近の企業を始めとした日本全体の地球的後退或いは世界に関与する事柄から引き籠る理由も分って来る。それは政府や企業の政策以前に、日本人がこの間世界の中で生きる意味、働く意味を見失ってしまったからであり、それは又そういう意味を確かめる事が出来る民主主義なり労働運動の在り様が、非常に見えにくい物になったからではないのか。或いは80年代辺りから戦後労働運動や戦後民主主義の土壌は耕されることが減り、その後は土中の養分で食い繋いでいたのが、最早それも尽きたのかもしれない。それと労働運動自体、前に述べた権力と向き合うことに軸足を移す助走を80年代には始めている。

その結果この国の人々はこの20年、これもまた先にふれた戦後日本人の心の大原則である「人は強くなければ生きていけない、でも優しくなければ生きる資格がない」でいえば、前者に重きを置き始め、結局「自己責任」或いは「勝ち組」「負け組」の言葉に象徴される様に、後者に非常に否定的な習慣を培ってきた。それは人が変わった訳ではなく、今述べたように、後者の働き方、暮らし方、生き方への希望を持ち続ける努力がなされてこなかったからである。学生と話していて驚くのは、しばしば「優しくなければ生きる資格がない」という部分が、意味はもちろん日本語としても理解不能な反応を示す時である。ただ人を幸せにする良い仕事がしたいと思う気持ちは、多くの日本人と同様彼等彼女等も持っている。問題はそれが出来るという希望をこの社会で持てない事にある。

戦後日本人の次世代形成

もちろん権力と向き合う労働運動は必要である。人々の生活に於ける企業や地域や家族の力が

■ 第2部 研究実施のあらましと成果

衰えるに従い、又市場や非営利セクターがそれらに取って代わる事がなければ、政治に拠って人々の生活が左右される事が前以上にはっきりして来るこれからはもっと必要だろう。けれども心と向き合う労働運動もこれから非常に大事になって来ると思う。それは戦後日本人の心の習慣が枯渇したからだけではない。ましてや一度や二度の選挙結果で言っている訳ではない。急速に変わりゆく世界の様子を見ていてそう思うのである。ここで日本とそこに住む人々が、世界の中で生きる意味を見出せなかったら、恐らく日本経済の再生はないし、日本社会の持続可能性自体も危ういと思うからである。

ただそれは戦後日本人との別離ではなく、再会する事で可能となるだろう。言い替えれば戦後日本人の次世代形成に労働運動がどう関るかという問題である。最早紙幅も尽きたので、ここではその繋がりについて一例だけ触れておく。今の地球社会のキーワードと問われればそれは英語でいう diversity ではないか。これは経営の世界では最早大前提となっている様だ。この今やカタカナにもなっている言葉の意味は、多様な人々が自分の個性を生かしながら共に働くという事だ。これは先の戦後日本人の心の大原則に通ずる所が在るどころか、先取りしていたと言ってよかろう。もっと言えば、色々な人々をあの手この手で束ねながら目標に向かって共に働けるようにするのは、労働運動その物、或いはその日常だとも言える。こういう心の習慣を培うことに於いて、戦後労働運動引いては戦後民主主義は類稀な想像力と創造力を発揮した。世界の中で生きていくダイバーシティな日本とその心の習慣を身に付けた日本人、そしてダイバーシティな世界に生きる人々の生活を豊かにする物とサービスを提供するそれこそダイバーシティな日系企業、更にこうした地球で様々な困難と向き合う多様な境遇にある人々に寄り添い、その解決に力を貸そうと世界中に散らばる日本人とそれを支える日本社会、こういう戦後日本人の次世代形成にとって、戦後労働運動並びに戦後民主主義の運動史は宝の山である。

5.

特集1：日本社会と労働組合に期待すること 働くすべての人が主人公になれる社会をめざして

電機連合 『電機連合NAVI』（2013年10月）

今回本誌編集部から執筆を求められた課題は、日本の労働運動、社会運動はどのようにその歴史を歩んできたか、またその歴史の中で日本社会はどう変わったかあるいは変わらなかったかを考えることである。また両者の関わりを踏まえて、今後労働組合は何をすべきかを述べることである。

もちろんこうした課題に応えるのは決して簡単ではない。ただ筆者は全労済協会2012年度公募研究「絆の広がる社会づくり」で、「協同社会運動の主体形成を促す史的視野の研究：新たな協同社会運動史教育を目指して」と題した調査研究を行った。その目的は、働く人々に、これまでも又これからも皆で繋がり支え合って共に生きてゆく社会の主人公である事を、思い起させることができる運動史教育のありかたを考えることだった。そこで日本の労働運動のみならず他の社会運動や他国のそれらにも目を配りながら、その歴史の伝え方を考える調査研究を行った。

具体的にはこれら社会、労働運動について、これまで出された膨大かつ多岐にわたる出版物に目を通し、伝え方を比較考量し、かつそこから自分なりの伝え方を実験的に色々な所で書いたり話たりしてみた。その最終報告書は間もなく刊行される。ここでは本稿の課題に関係して、この調査研究で知った書籍を紹介しながら、考えたことの一部を読者と共有したい。

アメリカのハーバード大学の歴史学教授であり、日本の労働史、労使関係史の世界的第一人者の一人であるアンドリュー・ゴードン氏が、最近『日本労使関係史 1853～2010』（二村一夫訳、岩波書店、2012年）を出版した。その内容は本稿とも大変関係しており、また非常にいい本なので、是非一読を勧めたい。その本の中でゴードン氏は、日本の労働史、労使関係史とは、経営者と労働者と官僚があるべき労働あるいは社会正義をめぐる関わり合った歴史であり、その社会労働正義とは職場や企業そして社会で労働者をそれらの正規構成員（メンバーシップ）として認めることであったと述べている。これはまた本稿の課題に対する筆者の答えの出発点でもある。では社会、労働運動はどうやって働く人々とその家族や周囲の人々をこの正規構成員にしようとしたか。すでにこれについては、これまでゴードン氏を始め沢山の著書論文が書かれてきたが、ここでは著者なりの仕方で整理してみたい。

まず戦後の日本社会を考えた場合、労働者が正規構成員として認められたのは職場や企業においてである。その場合すぐに思い浮かぶのは、それまで正規構成員と認められなかったブルーカラー層を含めて、日本の会社が終身雇用制や年功制、あるいは企業内熟練などの様々な仕組みを通じて、正社員の間でのより公正、公平な処遇や待遇の実現に取り組み、その中で企業別労働組合が大きな役割を果たしてきたことだ。

そこで労働者が職場や企業の正規構成員であることを、経営者を含め自他共により確かなものにしたのは、いわゆる労働者参加を通してであろう。労働者参加はまた経営参加ともいわれてきたが、それは労働者が労働組合と経営側との協議や自主管理活動などを含む従業員組織を通じて職場や企業のさまざまな問題に発言することである。

この労働者参加については、日本の労使関係の特徴として、また日本企業の強さとして、1980年代をピークに色々な調査が行われ、研究者を中心に沢山の本が出た。代表的なものとして、小池和男『職場の労働組合と参加』（東洋経済新報社、1977年）、同上『労働者の経営参加—西欧の

■ 第2部 研究実施のあらましと成果

経験と日本』(日本評論社、1978年)、日本労働協会編『80年代の労使関係』(日本労働協会、1984年)、仁田道夫『日本の労働者参加』(東京大学出版会、1988年)などがある。いずれも研究書だが、一般の人でも読めないことはなく、また労働組合に関わっている人ならば、身近なこととして非常に参考になるだろう。

ところがそれ以降およそ20年ほど、こうした調査が行われなくなり、書籍も刊行されなくなった。この時期はちょうどいわゆる「失われた20年」と重なる。バブル崩壊、経営不祥事、生産工程の失態、安全衛生の緩み、不法な派遣や派遣切り、非正規労働者の問題、メンタルヘルス、いじめ、ブラック企業。それまで日本の成功の秘訣の現場とされた教育と同様、職場や会社も荒れ果てた時代である。労働者参加への関心が薄れたことと職場や企業の荒廃の間に関係がないのだろうか。

さらに興味深いことに、派遣や非正規労働者のことが社会問題としてみなされはじめた2007年頃から、それまでの数年間批判されることの方が多かった終身雇用、年功序列、企業別組合を柱とする日本的経営に対する再評価の動きもみられる。ここで注目されるのが、以前この日本的経営で労働者参加を積極的に評価した研究者やそれを実践した元活動家などによる、その意義を強調する本が続いて出だした。

例えば当時から熟練という言葉で、また最近では人材形成という観点から、日本企業の強みである労働者参加の意義を最も強調してきた小池和男氏が、最近海外に進出した日本企業における中堅従業員が発言についての調査研究を行っている(『海外日本企業の人材形成』東洋経済新報社、2008年)。さらに小池氏は最近著『高品質日本の起源』(日本経済新聞出版社、2012年)で、グローバル経済を生き抜く日本企業の道として高品質の財やサービスづくりを強調し、それを支える労働者参加を「発言する職場」づくりとして注目している。そしてこの本では、その歴史的淵源を戦前の全日本労働総同盟系の組合活動に求めている。

期せずして2001年に始まった政策研究大学院大学のオーラル・政策研究プロジェクトのオーラルヒストリー・シリーズはこの間、その一環として戦前の総同盟を戦後継承した同盟系の組合指導者の聞き取り調査の成果を出している(天池清次『労働運動の証言 天池清次』日本労働会館、2002年、慶応義塾大学産業研究所選書『戦後労働史研究 早矢仕不二夫 オーラルヒストリー』(2008年)『戦後労働史研究 金杉秀信 オーラルヒストリー』慶応義塾大学出版会、2010年)。これら指導者はいずれも「発言する職場」づくりに邁進した経験を多く語っているが、その中で必ず出て来るのが日本生産性本部の運動である。

筆者も20年ほど前に生産性本部、特にこの運動を組合と共に現場で担ってきた労働部の話を聞くことが多かったが、それから今日まで、ここが「発言する職場」づくりの運動に積極的に関わってきているという話は聞こえてこない。小池氏が海外や戦前の経験に言及し、戦後最も積極的に関わった組合関係者の聞き取り結果が出されるというのは、やはりこの間日本における「発言する職場」づくりや労働者参加が、制度はあっても実質がともなわず空洞化していることを示唆しているのではないだろうか。

確かにいま労働組合にとって最大の課題は非正規労働者の組織化の問題である。だがそれに努力しながらも、組合員であろうとなかろうと、さまざまな立場の労働者が一緒に働く職場や企業で、立場が違ってそれらの人々の問題を取り上げて経営に発言していくことも、労働者を正規構成員にする上に大事な課題ではないだろうか。仕事について誰もが「発言」できる環境にし、職場や企業を再び繋がり支え合って働ける場所にする、すなわちコミュニティにすることも、今企業別組合にとってすぐやらねばならない課題であるだろう。

5. 働くすべての人が主人公になれる社会をめざして

それでは日本の社会運動、労働運動、とりわけ労働組合は、働く人々とその家族や周囲の人々を、どう社会において正規構成員にしようとしたか。いま述べたように、正規構成員になった職場や企業は社会を構成する大事な場所であり、そこを通して働く人々が社会の一員として認められてきたことは、労働運動がこれまで果たした大きな成果である。

だが戦後日本の労働運動をふりかえると、1945年の敗戦直後から石油ショック後の1970年代末まで、その時代の人々の物の考え方や感じ方の底に、働く人々を含めそれまで日本社会の正規構成員として認められてこなかった人達（当時の言葉でいえば「民衆」）こそが、これからの社会を作っていくという心構えを、職場や企業を含め色々な機会を通じて埋め込んでいく運動があったことが思い出される。それはこれまで「戦後民主主義」の時代として覚えられてきたが、それは人々に世の中の出来事を理解し自分の生き方を考える時に、社会の正規構成員として自分達はどうすべきかという「取り組み方」を習慣にさせる、いってみれば「心をつくる労働運動」の時代でもあった。

同時にこの時代の社会、労働運動を語る時、「平和と民主主義」という言葉がよく使われる。それは戦争はもうこりごりで、戦前のような形で戦争になってはいけないという、やはり心構えであり、この心構えが、憲法9条を自分達の誇りにし、それを日常にした。高度成長が民需だけで行われ、日本の技術は生活を楽しみにし、楽しむために使われ、それで作られた物で変わっていく生活は、同時に家族や友人、職場や地域の人たちとのかけがえのないものになっていった。

だがこの暮らしはなおも社会とつながっており、例えば政治や経済、社会や文化で「戦前のような形で戦争になる」気配を感じると、人々はすぐさま反応し、会社を含め色々な場所での意思決定がそういう気持ちに陰に陽に影響を受けた。そしてこういう人々が戦後民主主義的な反応をする場所に労働組合がいた。デモや集会だけでなく、何気ない日常の風景や会話の中にその存在が見聞きできた。しかもそこには組合という組織よりも、組合員やその意見に同調する人々の輪として、そして平和と民主主義を大切にすることを思い出させてくれる独特の瞬間として経験された。たとえていってみれば、それは様々な人たちがひいきのチームの試合に一喜一憂する球場にいるようなもので、そこでは互いの性や人種や階級や出身の違いは関係ない。

確かに戦後の労働組合の組織率は長く3割余りであったけれども、官庁や公共交通、学校や役所、中央地方の主な産業の大きな会社で組織されたことは大きい。これらは人々の暮らしと常に接点があり、戦後民主主義にとって伝声管のようなものであった。

こういう支持政党が政権にほとんど付いていなくても、あるいは会社や近所でいつも力をふるう存在でなくても、労働組合は戦後民主主義という時代を象徴する思考や行動様式を代表する社会勢力の大事な担い手として、働く人々を始めとするそれまで社会の主人公とみなされてこなかった民衆を、社会の正規構成員にし、その人々が望む社会を自分達で育て守れるように努力した。

こういうことは戦後日本に限った話ではないようで、David Plotke, Building a Democratic Political Order: Reshaping American Liberalism in the 1930s and 1940s (Cambridge, New York, Melbourne : Cambridge University Press, 1996) を読むと、戦後民主主義の対語であるリベラリズムが社会にあふれた1930年代前半から1970年代後半のアメリカでも、同じようなことがあった。

この時代確かにアメリカは労働組合が支持する民主党が長く政権にあったけれども、この期間の3分の1は共和党政権である。またアメリカの組合は長く人種差別の温床となってきたけれ

ど、この時代移民労働者が労働運動を通じて生活と地位の向上を果たし、また公民権運動と連携して黒人の権利回復に努めたことも確かである。その意味で従来無視された民衆をアメリカ社会の正規構成員にし、市民としてより良い社会のために貢献する機会を与える上で、この時代労働組合が果たした役割は大きかった。だがこの心をつくる労働運動も日米ともに70年代後半から末にかけて衰え、兆しはあるが復活する程ではなく今に至っている。

「失われた20年」を経て最近顕著になっている失われた日本を取り戻す動きが盛んだが、問題はどの日本を取り戻すのかということである。メディアは東京の動きを追うことに忙しいが、その陰で農山漁村で失われたもう一つの日本をとりもどそうとする動きがある。

農山漁村はかつて日本の生活の多くを占めてきたが、そこに住む人々や暮らし方は長く忘れられてきた。戦後民主主義はここにも大きな力を与え、50年代前半までは日本社会の正規構成員として、未来を自分達で切り開く気概に満ちていた。だが農地改革以降一応その目的が達成されたかのごとく農民運動は衰え、50年代後半以降は高度成長で若い人は村を離れ、60年代以降は政府による米の生産調整で村の離農が続いた。こうして都会と政府と大企業による開発主義は、農山漁村の人々から自らの労働で自分達が望む地域や社会をつくっていく機会を奪ってゆき、村で自然と共存共栄する人々とその暮らしと数百年にわたって培われたその膨大な知恵は再び日陰に追いやられていく。

ところが最近これまでの成長指向を見直す動きが各方面で起こり、それが農山漁村のありかたやそこでの生き方暮らし方に人々の関心を向かせている。その背景には環境や食糧の危機、深刻な高齢化や過疎化、孤独や自殺、非正規労働や貧困の問題、安全や安心への願いがあるだろう。またそれに東日本大震災も拍車を掛けている。一方「スロー・ライフ」と呼ばれるように、個々人の生き方に関わる分、その裾野は広く根は深そうである。また巨大な市場や産業や科学技術が支配する中で物質や人間との関わりが無機化、無縁化するのに抗して、先ず主体的、創造的に働くことで自然やコミュニティと絆を持って生きていこうとする思想性もある。

この農山漁村と戦後民主主義の問題を調べると、非常に興味深いことが分かった。一つは戦後民主主義、とりわけ平和と民主主義の運動では労働組合と労働運動と知識人が車の両輪であり、これらによる文化運動が、人々の「心をつくる」のに非常に大きな役割を果たした。だがこれらの運動が担い手の性格からどうしても都市部に偏る中、小中学校の先生達が子供達と取り組んだ生活綴方（作文）運動は、農山漁村にも広がり、それまで社会に「発言」する機会のなかった両親や祖父母にかわって、子供達が自分達が抱える問題と未来への希望を綴り、それが多数公刊され、全国の人々にそれが伝えられ、子供同士で共有された。

こういう農山漁村民衆の書かれざる働き方、暮らし方、生き方を綴る動きは、柳田国男や折口信夫らが戦前から発展させた日本独自の学問である民俗学の若手世代に引き継がれた。最近の散歩や地方再発見の旅ブームと重なって有名になった宮本常一らは、この頃から全国の農山漁村を徹底的に歩き回り、成長と開発の波間で益々「忘れられた日本人」の暮らしの営みを聞き掘り、写し撮って記録しながら、それを続々と出版していった。

こうした出版で非常に大きな役割を果たしたのが農山漁村文化協会（農文協）や家の光協会の農協系出版組織である。元々戦前から農林官僚と農会は農民の技術生活指導に熱心で強力な草の根指導員網を築いたが、戦後もそれは農林省と農協に引き継がれた。興味深いことに、国民文化協会などそれまで活発だった労働運動系の文化運動がマスコミ等に完全に取って代わられる70年代頃から、農協系文化運動が全国の農書の復刻事業等を皮切りに、先進技術や近代生活の情報提供とともに、農山漁村の長年培ってきた生産生活知識を発掘保全し、それを当時生まれた成長開

5. 働くすべての人が主人公になれる社会をめざして ■

発主義に代わって日本や世界がめざすべき持続可能な社会への知的財産として世に問い始める（農文協『日本農書全集』）。それと同時にその関係組織である上記協会は、こうした考え方を支持する農協組合員や持続可能な社会づくりに色々な形で関心を持ち関わりを持つようとする人々の主体的な教育文化運動と連携して、市場原理と異なる協同メディアネットワークを草の根レベルで発展させてきた。

お陰で今では大手出版会社から販売されなくなった日本発の持続的成長に関する思想書や手引書などの多くが、これらの組織で流通されるようになってきている（農文協『人間選書』）。また地域再生が日本社会の今後の鍵を握ることが常識化されつつある中で、農協がそこでの自らの運動展開をより地に足の着いた内容で展開するための包括的な議論の場を提供している（農文協『シリーズ 地域の再生』『戦後日本の食料・農業・農村』）。こうした動きに興味のある方は、是非農山漁村文化協会編『農家に学び、地域とともに 農文協出版史で綴る農家力・地域力』（2011年）を一読されることをお勧めする。いま働くすべての人が主人公になれる社会をめざす運動もここから多くを学べるだろう。

6. なぜ『青森県労働運動史』は大事か。 —地域学における労働運動史の可能性—

弘前学院大学地域学講演（2012年秋）

1. はじめに

今日私がここで皆様にお話させて頂く事を一言で表せば、なぜ30年余りに青森県が発刊した『青森県労働運動史』という本が私にとって大事なのか、ということに尽きるかと思えます。白状しますと、私はまだこの本を十分に勉強したとは言えません。寧ろ勉強中と申し上げるべきでしょう。ですから今日のお話は、私が見つけた地域学のためになりそうな本をご紹介します、皆さんにも興味を持って頂いて、出来れば今後機会がございましたら一緒にこの本で勉強させて頂きながら、色々ご教示頂きたいという願いをするためのものとお考え頂ければ真に幸いです。このお話をするためには、まずは私の研究者としての自分史から始めねばなりません。遠回りな様ですが、今日の私のお話を理解して頂く為にもまずはお聞き下さい。

2. 自分史：私の労働運動についての視点形成

【私の比較労働政治研究とは】

私は比較労働政治という研究を専門にしています。比較労働政治研究とは平たく言えば、ある特定の時間と場所に起こった労働運動を他のそれと比べて、どのような類似や相違があるか、それがどこに起因するのか、そこからそれぞれの労働運動が意味する物は何か、そしてつまる所、労働運動とは何かを考える事だと思っています。そこで私の研究で大事な事は何かと問われれば、労働運動に初めから特定のモデルを当て嵌めず、それぞれの時間と場所には、それぞれに特徴のある労働運動があるはずで、その特徴は比べてみると相当違っていて、それは当然の事と考えた方がいいという態度だと言えるかもしれません。

【現代中国、オーストリア、北九州】

こういう労働運動に対する私の相対的な見方は、おそらく私が労働運動を研究するようになった経緯とその後の研究遍歴が、相当関係していると思います。

私は東京生まれ、東京育ちで、教員の家生まれ育ちました。親は教員組合とはおよそ縁がなく、私の周りには労働運動との接点はなかったといえましょう。

只子供の頃からユートピアのような理想郷に強く惹かれていた事は確かで、高校時代は当時日本の新聞でも盛んに喧伝された中国の文化大革命の実験に随分と関心を持ちました。勿論ご承知の様に、文化大革命には打ち上げられた華々しい理想とは反対に、時に悲惨とも言える極めて厳しい現実があったわけで、その評価は大きく分かれる所ですが、その時以来私が労働運動を含めて社会運動や政治運動に関心を持ち続けてきた事は確かで、研究者になったのもそこが原点かもしれません。そして運動に対して常に余りにも理想或いは思い入れが強いと申しましょうか、ロマンチストであり続けたのもこの辺から来ています。

労働運動を本格的に勉強し始めたのは、大学院生の時でした。修士論文ではオーストリアの政府と経営者団体と労働組合による政治経済の協調体制について書きました。私達にとってオーストリアと言えば、芸術文化の都ウィーンがすぐ思い出されますが、この国は第二次大戦後、日本同様高度経済成長と社会的安定を誇り、それをもたらしたのがこの協調体制だった訳です。この国は第一次大戦までハプスブルグという中東欧の一大多民族国家だったのが、第一次大戦後に解体され、その後小さくなった国内では左右の対立で内戦まで経験し、最後はナチス・ドイツに併合されます。ですから政労使の協調体制は、何よりもこの歴史から学んだ、オーストリアがオーストリアであり続けるための知恵であり方策だったわけです。そんな云わば国家的事業に強力な労働組合が大きく貢献する。それまで闘う労働運動しか知らなかった私には、こういう労働運動もあるのかと感動したものです。国が違えば労働運動も違うという事です。

大学院での勉強を終えて最初に赴任したのが北九州市立大学という所でした。

北九州と言えば日本史で覚えた官営八幡製鉄所の街です。背後には筑豊炭田を控え、戦前は大陸への玄関口であった門司港もあります。つまり北九州は様々な所から人々が仕事を求めて集まってきたブルーカラーの労働者の街だった訳です。当然そこは戦争や技術革新、景気変動がもろに街の生活に影響し、労働問題が社会問題に直結していました。私が北九州に居たのは1980年代の終わりですが、その頃から今で言う「貧困」の問題がありました。でも私がそれまで居た東京はこれからバブル経済に突入しようという頃で、そこでは労働運動も、そうした豊かな時代の個性を大事にするホワイトカラーが中心の時代にどう対応するかを専ら議論していました。ですから北九州と東京を往復すると、労働運動でも一つの国に別の時代がある様で、ここでも時間と場所による運動の違いという物を強く感じました。

【「裏日本」、米国中西部、オバマ政権】

この頃からでしょうか。そういう違いをもたらす地域の歴史やそこで労働運動が辿ってきた道に自然と関心が移ってきました。労働史を勉強し始めたのもこの頃です。当然。その頃丁度今春闘等のニュースによく出てくる労働組合の全国組織である連合という新しい団体が出来て、その調査で色々な地方を回っていました。そこで特に私が遅ればせながら気付いたことは、一言で言えば労働運動にも「表日本」のそれと「裏日本」のそれがあるという事でした。この「表」「裏」というのは一般には云わば「格差」の問題として理解されていますが、私は今はこれは「異なる暮らし方」の問題だと考えています。例えば「ものづくり」一つ取っても「表日本」のオートメーションの世界に対して、「裏日本」のそれは職人の世界です。当然働く人達の生活の仕方も違う。それは長年に亘って培われてきたそれこそ文化です。つまりそこには、「進んでいる」とか「遅れている」という価値観とは違う物差しで計られねばならない事があるのだという事です。

そうした私の夫々の地域に生きる人々の個性を現す鏡或いは手段としての労働運動という考え方を決定的にさせたのが、米国中西部労農運動の歴史でした。

私が初めて米国を訪れたのは今から20年程前の事です。丁度北九州大学から今の職場に移ってきた頃です。その時偶々立ち寄ったのが中西部のミネソタ州でした。米国の真ん中でカナダと国境を接する寒暖の激しい農業州です。中高年以上の方は以前NHKが何度も再放送した「大草原の小さな家」という番組を覚えていらっしゃるかもしれません。あの物語の舞台がミネソタです。この辺は実は米国特有の民主・共和の二大政党に伍して、第三党が時に州政府を握ったり地方議員を沢山当選させたり、地域の政治に強い影響力を発揮する所です。その勢力の中心は農場や工場や街で働く普通の市民で、そういう第三党の動きの背景には、この人達の日頃の思いが託

第2部 研究実施のあらましと成果

された形で、いつも農民運動や労働運動の発展があります。

この大平原で知られる中西部は、麦やトウモロコシ等単品の商品穀物の一大生産地で、また木材や石炭、鉄鉱石等の天然資源の豊富な所です。その生産を助けるために農機具や掘削機等の機械工業やトラック輸送等の運輸業が発達した所でもあります。これらの生産は大変な重労働を要する一方、市場の相場に非常に左右され易い。つまり汗水垂らして働いても、投機筋の打算的な動きで、儲けはあっという間になくなるどころか、借金まみれにもなってしまう。何だか最近起こった金融危機のような話ですが、昔から中西部の農民や労働者は、穀物相場や輸送代金、銀行の利息等で市場をコントロールする資本家が集まる東海岸の大都市に強い猜疑心と敵愾心を燃やして来ました。それが時に激しい農民運動や労働運動となって噴き出します。その時彼らは何をするかという、協同組合や州政府が運営する金融機関や補助金制度等を作って、自分達のための産業や政府づくりを始めるのです。つまり自分達の暮らし方を守るために運動を始めるのです。言ってみれば真面目にコツコツ働く者が報われる社会づくりです。

この労働中心の生活哲学こそが、農民運動や労働運動によって体現された中西部の真骨頂とも言っていていいでしょう。実際、一所懸命と創意工夫の労働を通じて良い社会をつくるのが人間の本能だと主張した20世紀前半の米国の有名な経済学者、ソースタイン・ヴェブレンはこの中西部の典型的な労働哲学者でもあります。ちなみに彼の最も有名な著作の一つに有閑階級に関する本があります。また1929年の大恐慌を克服するためにルーズベルト大統領が打ち出したニューディール政策とは、一言で言えば働く人々の自信と意欲を回復させ、その力で米国経済を復活させようとした物でした。言ってみればニューディール政策とはそのための環境づくりです。だから政府は労働組合や協同組合を奨励し、若者にボランティアを勧め、公共事業を沢山起こし、芸術家達にそういう働く人達の姿を様々な形で描かせました。皆働く人達を社会の主人公にするためです。このニューディール政策を最も象徴し、当時農務長官、副大統領、商務長官を歴任し、ルーズベルトの後継者と目されたヘンリー・ウォレスという政治家も中西部の人です。そして今グリーン・ニューディールを始め労働組合奨励や国民皆医療保険の整備等を通じて、働く人々の元気を取り戻し、米国経済の復活を目論むのがオバマ政権です。彼も中西部のシカゴ出身の政治家です。

要するに中西部の農民運動や労働運動とは、こうした地域の生き方、暮らし方を表現する手段であり、それは時としてそういう生き方、暮らし方を脅かす動きに対して、強力な反対表明であり逆提案にもなりうるということです。例えばこの間の世界を覆ったグローバリゼーションという経済の動きには、そういう人々が慣れ親しんで来た生活に変更を迫る側面があったのは確かでしょう。もしオバマ政権がそうした動きに対する反対表明、逆提案の流れの一つの成果だとすれば、この政権の誕生を世界の多くの人々が我が事のように喜んだのは非常に興味深い。つまり世界には同じ様な考えを持った人々が地域を超えて存在するという事を示しているからです。

3. 東北学、津軽学から『青森県労働運動史』へ

【東北学、津軽学】

さてそこで東北です。津軽です。もうおわかりかと思いますが、私は先程述べました「裏日本」、とりわけ東北そして津軽の生き方、暮らし方、またそれを体現する労働運動を中西部のそれに重ね合わせて考えたいのです。ご存知の方も多いかと思いますが、山形の東北芸術工科大学を拠点

にもう10年以上になるでしょうか。『東北学』という在野的な研究雑誌が出ています。地域学の草分け的な雑誌と言ってもいいと思いますが、この雑誌は東北の様々な歴史や民俗を掘り起こしたり見直したりする論考や座談会を掲載して、東北についての知識や見聞を学問的な見地を含めて深めていく上で、今やなくてはならない雑誌になっていますが、実はこの雑誌にはもう一つ野心的な狙いがあります。それは新たな東北像の形成を通じた日本観、世界観の再構築とでも言えましょうか。つまりこれまでの京都中心、東京中心に対する地方、周辺、或いは辺境としての、それこそ「遅れた裏日本」という東北観を脱却し、世界に開かれたそれ自体普遍的な価値を持つもう一つの東北像を作り出そうとしている訳です。

網野善彦という歴史学者をご存知でしょうか。中世が専門の人ですが、古代と近世の間に挟まれ、王朝・幕府中心史観からすれば戦乱の続く「暗い」時代として、一般の人々のイメージを含めて、余り芳しい評価のない時代ですが、網野さんは独自の徹底した資料調査に基づいて、多様で生き生きとした暮らし方をするこれまでとは対照的なパワフルな中世民衆像を、非常に旺盛な仕事を通じて活写して来ました。その中でも最も重要な仕事は、明治の近代国家以降、天皇制を軸に富国強兵策を推進する中で村的な共同体に定住する稲作農民を中心にした日本人像という物が、私達のアイデンティティとして定着している状況に対して、それは民衆の一部であって、私達の先祖はその他に様々な生業に就きながら必ずしも村等に定着せず地域を巡り歩きながら、権力から相対的に自由な公共空間を作り出してきた事を主張して、その様々な人々の暮らしが織り成す多様な地域のあり様という物を示して来た事です。だから網野さんは日本史という「国史」を否定し、私達の歴史を日本列島の歴史と呼んで、それが「いくつもの日本」から出来て来た事を繰り返し訴えて来ました。

東北学に拠る人達も基本的にこの網野さんの考え方を共有しています。そこで彼らは、柳田國男や宮本常一といった民俗学者や文化人類学者が丹念に調べて明治以降の日本列島の近現代史において「忘れられた」日本や日本人を探し当てた様に、また東北において過去にそうした事を試みた人達の跡を追って、「もう一つの東北」探しをその範囲をアジアにまで広げて続けているところです。『東北学』は今までのところ、例えばその成果は西日本の言わば征服文化である弥生時代の前の、云わば東北アイデンティティの重要な部分を成す縄文時代とアジアを中心としたその文化的連関の見直しにおいて、大きな成果を挙げています。その意味でこの地域総合文化研究所も積極的に関わっている青森県での縄文遺跡の発掘作業の意義は、考古学上のそれのみならず「もう一つの東北」探し、或いは「忘れられた東北」探しにおいても大変重要な意味を持って来ると私は思っています。

【「地域」づくりとしての労働運動】

この『東北学』は、最近より草の根的な東北学の発展を目指して東北各地での地域学の発展をサポートしています。そういう意味では、この地域総合文化研究所の活動とも連携する可能性が、今後十分ありうる訳ですが、弘前では今このローカル・イニシアティブの一環として『津軽学』という雑誌が出ています。

この雑誌の2号で弘前大学の作道信介先生が「津軽人の人生の背景」という論文を寄稿されておられます。そこで津軽或いは青森の労働運動を地域の生き方、暮らし方の一つの表現とする私の考え方に大変参考になる事を書いておられます。その論文の中で先生は、「実践がつくり出す地域」という考え方を示され、「地域というのは、我々が日々そこで暮らしたり人生を歩んでいく中で、一つのまとまりとして経験されていくもの」と述べられています。つまり地域というの

第2部 研究実施のあらましと成果

は最初から地理的な意味においてのみ存在するものではなく、そこに住まう人々が独特な形で日々の生き方、暮らし方を重ねる事で、社会的、文化的な存在として形成されて来る物でもあると捉えられている訳です。ちなみにその号の『津軽学』は、大変興味深い寄稿が幾つも掲載されていますが、その中に出稼ぎに行く人達に色々聞き取りをした話が出て来ます。皆さんよくご存知のように津軽は全国でも出稼ぎの大変多い地域で有名ですが、実は出稼ぎに行った人達は大体いつも建設現場で過し郷里の人が多く泊まる馴染みの宿舎で過すそうです。そして出稼ぎを長年続けていった人々には、現在まで残る東京タワーや霞が関ビルディング等の戦後日本の経済発展を象徴する大都市のランドマークの工事に幾つも関わって来た方が多く、この人達はそうした建造物を見る度に、戦後日本を作ってきたのは自分達だという自負を確認するそうです。これは正に先程触れました米国中西部の一所懸命働いて良い社会づくりに貢献するという労働中心の生活哲学と重ならないでしょうか。出稼ぎというと私達、特に都会の人間は、冬場は東北の農村に仕事がなく家族を養うために仕方なくするのだという、一種ネガティブなイメージで捉えがちです。確かにそういう側面は否定出来ないのかもしれませんが、実は出稼ぎをする人達には、日本を造るという一種の使命感にも似たポジティブな行為として、それを考えているということも忘れてはならない訳です。私はそれは少なくとも津軽に独特の一つの労働運動だと思うんです。

またそこにはこんな事も書いてありました。出稼ぎに行く人達の中にはもう何年も行きっ放しの人もいて、家族や故郷の人々と離れ離れの期間が長い人達も結構いるそうですが、そういう人達の家族や親戚は出稼ぎに行った人達がいつ戻って来てもいいように日頃から色々準備しているそうです。そして事実最後には帰ってくる人達が決して少なくないそうです。つまり物理的な距離は離れているけれど、心の距離は近いんですね。つまりここで言う津軽は、やはり地理的な空間を指すだけでなく、皆が互いを思いやる気持ちの中に存在している。歴史学の大変有名な本でベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』がありますが、正にこれは想像の共同体と言っていいでしょう。そしてこれも津軽の生き方、暮らし方を守ろうとする、あるいはそれ自体を体現する労働運動と言ってもいいのではないのでしょうか。

『東北学』も含めて地域学がこういう近現代の問題に触れることは珍しいのですが、そういう意味で『津軽学』は非常に大事な取り組みをされていると思います。特に聞き取りといった皆で記録を残そうする試みは、地域の生き方、暮らし方を体現しようとする運動にとって、云わば運動文化継承への営みに多くの人達を巻き込む集団労作としての「運動史」づくりであると思います。

【『青森県労働運動史』】

地域の生き方、暮らし方を体現しようとする労働運動にとって、こうした集団労作としての労働運動史が重要であることは言うまでもありません。そこで最後に漸く辿り着きましたが、『青森県労働運動史』です。『青森県労働運動史』は第1巻=明治大正編が1969年に、第2巻=昭和戦前編が1971年に発刊されました。数百ページに亘る大部な物です。30年以上も前の発刊ですが、今でも青森や津軽の大きな公共図書館で誰でも閲覧出来ます。この本でまず大事なことは、青森県の民生労働部が編んだという事です。つまり行政が創った本です。後ろの編集後記の様な所を見ますと、担当部局では発刊の数年前から随分入念な準備がなされたようです。関わった役所の人達も相当の数に上る様です。また地域の図書館や大学を含む研究機関、そして関係団体の人々も多く協力しています。関係する資料も随分集めて整理し、良く読み込んだ様です。ちなみにこの本の前に、青森県の労働運動史年表も作られた様です。つまりこの本は行政が云わば世話

役になって様々な形でこれまでの調査研究や関係者の力を集めた訳です。だからこの本の発刊は、青森県の労働関係者の一大プロジェクト、即ち運動史の集団労作の貴重な成果だったと言う事が出来ます。

実はこの時期、他県でも同様な労働運動史が幾つか編纂されています。労働省では戦後間もない頃から『資料労働運動史』等の事実経過の記述が中心の云わば全国版の労働運動史が出ており、それは厚生労働省に引き継がれて現在まで続いています。年輩の方はご承知かと存じますが、戦後日本の労使関係は1970年代中頃まで、大変不安定な状況にありました。労働運動についても色んな考え方の人々が居て、労働組合も随分鎬を削る状況にありました。日本で労働組合の結成や経営者との団体交渉、そしてストライキ等の争議行為が国民の権利として認められたのは敗戦直後です。それから日本の労働者と経営者は、企業における民主主義と管理の自分達に合った関係をそれぞれ試行錯誤で模索して来ました。労働省とその出先機関である各県の民生労働関係部局は、その渦中で労働者の方に多少とも肩入れしながらも、労使関係の安定のために云わば外交官の様に労使の間を取り持ちながら日夜様々な努力を続けて来ました。労働教育と呼ばれる事業もその中の重要な一環で、労働運動史の編纂もその大事な仕事でした。そこには基本的には労使が戦前も含めて辿ってきた安定した関係づくりの変遷を、その帰趨に多大な影響を受ける市民も含めて、社会に開示し今後の糧にしておこうという意図があったと思います。とりわけ60年代から70年代に地方で労働運動史が編纂されたのは、この時期漸く各県の労使関係とそこの行政や市民の基本的な関係が形成される一方、今後予想される政治経済の変動に備えて、労働運動の社会的な重要性について今一度確認しておこうという狙いがあったとも考えられます。

これが基本的には全国的な流れですが、青森県には当時この運動史編纂の意味が特別な意味を持って来る事情がありました。当時全国的な趨勢として、福祉国家への流れがあり、大都市圏を中心に革新自治体という社会党や共産党が事実上の政権参加をする状況が出て来ました。青森県は決して大都市圏ではありません。ところがここに当時東北でも初めての共産党の国会議員が誕生する事になります。もっともそれは共産党が一人抜きん出たというよりも、それまで難しかった共産党の国会議員を出す程青森県の労働運動と政治は包容力の点で成熟したと考えた方がいいと思います。それはまた青森県の生き方、暮らし方についての新たな自己主張の仕方であったとも言えるでしょう。

この点を証明するのが、『労働運動史』に入れられている関係者の座談会です。

参加者は社会党、共産党、民社党という労働運動に関係する党派の議員と知事です。もっとも議員とは言っても皆さん労働運動に長いご経験があるベテランの方々です。ここで極めて興味深いのが保守系現職知事の参加です。しかも只ご挨拶程度の参加ではない。座談会を中味に深く分け入って切り盛りしている。しかもそれは俄勉強では決してない、生身の見識に基づいています。実はこれらの人々は、政治、経済、社会、そしてとりわけ教育や文化にまで亘って広く枝葉を伸ばした青森労働運動の「同志」です。確かに共産党議員から保守系知事まで、その時の肩書きはともとも同志とは言えない物ですが、それは言ってみれば当時の「現住所」で「本籍」は皆広い意味での青森労働運動の活動家で、皆どこかで接点があります。だから座談会は時に家族や親族といった内輪の話になったり、相手が忘れた事を他の人が思い出させたりしている。「同じ釜の飯を食った仲間」でなければ出来ない座談会です。座談会の中味も大変興味深いのですが、それ以上に座談会自体が青森県労働運動の何たるかを示して真に面白い。逆に言えば、この時期強まってきた青森県の勤労家族の人達が培ってきた自分達の生き方、暮らし方に対する自信に、『青森県労働運動史』という格好の表現媒体が与えられたとも言えるでしょう。

第2部 研究実施のあらましと成果

【青森県の労働運動の特徴】

さて時間もなくなって参りました。今後の私の研究課題を整理する意味で、荒川章二さんという法政大学大原社会問題研究所の方が、数年前に他の方と一緒に出された『地方社会運動史・労働運動史研究の現状』の中の「地方労働運動史研究の現状(1)」の章で纏められている青森県労働運動の特徴を挙げておきましょう。なおこれはあくまで一般的な労働運動理解で必ずしも私のそれと同じではありませんが、手掛かりとして非常に貴重な物なので見ておきたいと思います。

荒川さんによると青森県はまず第1に、戦前全国的労働運動発展の契機となった米騒動が無風で、普選運動も低調でした。荒川さんはこれがその後の県民政治意識の成長を阻害する要因となったと指摘されていますが、ここは議論がある所だと思いますが、今はこれ以上は述べません。また青森県の特徴の第2点として、工場労働者が極めて少なかった事を挙げられ、これを労働運動の成立が難しかった原因とされ、その結果青森県の労働運動は「周囲の農村にふかぶかと根をおろす」ことになったと述べられています。さらに荒川さんは、人夫、沖仕等非工場労働者が組合や争議の重要な担い手で、労働組合は知識人、職業的運動家、階級意識の高い労働者等の闘士集団で同郷の中央活動家との固い結び付きを保ち、秋田県との運動の結びつきが強かった事の3点を挙げられております。荒川さんは、基本的には近代的な大工場の労働者を中心にした極めてオーソドックスな労働運動を念頭に置いておられるようで、そういう観点から見れば、青森県の労働運動はアブノーマルでどこかマイナーな物と映るのでしょうか。もっとも私にはこの農村と結びつき、移動性が高く見聞に富み、幅広い交友に恵まれた労働者が活動家となり、狭い地域性を乗り越える機動力を兼ね備えた労働運動こそ、青森県の個性であり強みだと思うのです。そしてこれは最近オーソドックスな労働運動観に変わる新たな視点として、実践家や研究者の間で社会運動的労働組合主義という概念が議論されていますが、これはまさに荒川さんが挙げられた青森県の運動環境に適合的な考え方なのですが、これは又の機会のお話と致します。

ちなみにこの点で最後に申し上げたい点として、第二次大戦終結で終わっている先の『青森県労働運動史』にさらに書き足す際に、青森県労働運動において基督者が果たした重要な役割にぜひ注目すべきだと思います。ちなみに20世紀初頭に起こった八戸（当時は尻内）を基点にした鉄道ストライキは、日本の近代的なストライキの最初の物とされていますが、それをリードしたのは八戸の基督者達です。この近代ストの発祥が青森で、その組織者が基督者であったという事は、当時の基督者が社会的福音という考えに非常に影響され、それが主に米国帰りの活動家達が喧伝したものだということも含めると、青森県労働運動の広がり、特に世界との繋がりを考える上で重要な手掛かりになると思います。いずれにせよこれらの点も含めて今後研究を進めていく所存ですので、今後とも皆さんのご指導ご鞭撻を頂ければ真に幸いです。長時間のご静聴、有難うございました。

7. 大阪社会労働運動史

大阪社会運動協会 大阪社会労働運動史講座（2012年10月～2013年9月）

大阪社会労働運動史 第2回 講義録（2012年12月9日 於：エルライブラリー）

前半は地方労働運動と社会労働運動史という、私がこの1981年から1995年の間していたことからお話をさせていただくと。もうひとつ、2番目の方は何故中之島図書館には『グレート・スティール・ストライキ』が複冊所蔵されていたのかということで、前回 I WWのお話をさせていただきましたが、それに続いて少し話を膨らませて、時期的には1920年代ですが、少し前半との関連も含めてお話をさせていただきたいと思います。

いずれにしても、私なりに振り返りの作業を今しております、かなり生煮えというか、多分話が…2日の講義内容とかなり違っていませんか（笑）。ズレが生じると思いますが。まあ、考えながらやっているということでお許しいただければと思います。

第 I 部 地方労働運動と社会運動労働史（1987～1995）

- あ) 異なる世紀の共存（北九州20～筑豊(田川)19～福岡21)
- い) 連合参議院と地方連合の高揚
- う) 地方行脚と個性ある地域労働の発見（中国、関西、北信越、中部、東京、北関東、東北）
- え) 革新王国福岡と北米大平原 radical (nonpartisan, famer labor party, CCC)
- お) 既成の時空観念を超えた想像の共同体としての地域労農運動

I-あ) 異なる世紀の共存（北九州：20世紀～筑豊(田川)：19世紀～福岡：21世紀）

1981年、これはちょうど私が北九州市立大学というところに赴任した年でありまして、それまでずっと東京生まれ東京育ちで出たことなかったんですが、北九州という場所に移ってですね、まあ、全く違う世界であるということを感じたんですね。ご承知のように北九州市っていうのは五市合併ってですね、40年前ぐらいに、門司と小倉と八幡と戸畑と若松…とにかくあの辺の市をですね、5つばかり合併して北九州市っていう政令指定都市にしたんです。で、それぞれ性格が違うんですね。北九州の象徴である「重工業」という意味では八幡、なんですが、門司というのは戦前までは、日本最大の国際港…「ハブ」ですね、飛行機がない時代ですから、全部貨物ですから、船、鉄道、全部門司です。門司を通らないものは余りたいたことはなかったんじゃないかと思いますが、確かに横浜・神戸というのは太平洋に向っていましたが、ご承知のように戦前の最大の行き来は中国大陸ですから、こちらの方が圧倒的に大きいと。良く言われたのは門司港でジッと見ていると戦争が近いかどうかは解かると。つまり軍の移動は全部門司ですから。やたらと軍隊が行ったりきたりし始めると戦争が近いだろうと。それぐらい解かるところだったんですね。

小倉というのは、昔の小倉藩ですから一種の…連隊も有りましたし政治都市ですね。

でー、戸畑は積み出しですね。

第2部 研究実施のあらましと成果

そういう一種の「合成都市」みたいなところでして、そういう意味では、元々八幡というのは何もない漁村に製鉄所を作ったところで、むりやり日本の近代史の中で作り上げた、そういう意味では日本の近代史の色々な矛盾が孕まれている様な街ですね。

実はこんにち、新日鐵・住金と合併しましたが、八幡製鉄所のほかにですね、小倉駅の裏側に住金の結構小さい製鉄所があったんですよね。街はいたるところそういう工業のにおいがする街であると同時に、あそこに製鉄所ができたのは日清戦争で中国から鉄鉱石を取れることになったのと、もちろん筑豊の炭鉱地帯ですね、そこへ大量の人々を日本やアジア中からかき集めたわけです。地元がないんですね。結果として在日－韓国朝鮮人－の方々も一杯いらっしゃいますし、被差別部落の方々もいらっしゃいますし、中国人の方もいらっしゃいますし、本当に混成旅団もいいところですね。正直言ってそういうところでどうやってコントロールするかといえば暴力です。ご承知のように炭鉱自体が暴力でコントロールしていたわけですし、従って私が北九州市に行くときも、あるいはこんにちもそうですが、そういう暴力に関する話が何時も出るんですね。何時もニュースは、撃ちあいがあったとかですね、暴力団の抗争とかいう話「だけ」抜かれるんですが、「なぜ」そうなのかということを考えれば、あそこが、近代史の様々な矛盾を孕んだところであり、暴力が不可欠なところであったということのある種の名残というか…。そういう暴力がコントロールしていたものが全てなくなってしまったわけですね。製鉄所とか閉鎖まで行きませんが、圧倒的に…かつてあそこは一時就業者を7万人抱えていたんですよ、八幡製鉄所。今3千とか2千ですからね。下請け関連を含めればインパクトはどれだけ大きいかお分かりになると思います。ましてや筑豊の炭田も全部終わりですから。要するに暴力で支えていた部分のものが全部なくなって、しかもその代替物がないわけですね、サービス業があるわけでもなければ。たしかに周辺に最近自動車産業が来ましたが、それではとてもまかなえないし、自動車産業はむしろ技能工…非常にスキルを必要とする、まあ暴力ではコントロールできないという部分もあって、そういう意味では「暴力だけ残っている」という状態ですね。

そういう意味では非常に私にとってはショッキングな状態で、「異なる世紀の共存」と書きましたが、そういう意味では、混成旅団の状況というのは、同時にそれぞれの舞台が象徴する時代が違うんですよね。で、北九州市っていうのは明らかに20世紀の重工業の時代を象徴するんですが、その後ろに筑豊があるわけですが、たまたま私は非常勤で筑豊にその時期行っていたことがあって、電車に乗って1時間するとですね、19世紀の世界が広がっているんですよね（笑）。農村地帯と…なんていうんですかね、炭鉱…炭鉱は19世紀から有りますから。九州の方はお分かりだと思いますけど、明らかに北九州、筑豊、そして福岡…博多ですね。博多は21世紀でした、もう。はっきり言って、較べるとですね。従ってバスと鉄道で1時間ずつ乗り継ぐとですね、3世紀分（笑）感じられるんですよね。普通、地元の方はそういう動き、絶対しませんから（笑）。あの一、私だけ異様な動きだったんですけども、そのおかげで、非常にそういうギャップがわかりましたね。いかに北部九州というのは近代史の色々なものを孕んだ、極めて濃密な時間が流れているところかと。

そういう意味では東京で労働問題を研究している、東京で労働問題を論じている“無意味さ”とまでは言わないまでも、あの一、あれ一っていう感じですね。いまでも大体東京発の雑誌ばかりですから、労働問題とかそういう問題は、結局は東京で起こっていることを無理やり敷衍して、語っているだけなんです。例えばこんにち言われている、労働問題が社会問題に直結する問題ですね、「格差」や「非正規」やあるいはそれにとまなう「シングルマザー」の問題とか、福祉にこんにち至っている生活保障の問題とかそういうことは、実は北九州では25年前にはもうあり

ました。つまり、さっき言った、北九州市を支えていた産業は全部なくなっただけです。だからと言ってそこから抜け出せない人々がいるわけです。抜け出せる人たちは、高い教育を受けてですね、それなりの中産階級の人たちはみんなどっかいつちやう訳ですよ。私たちの大学も共通1次の会場になったんですが、びっくりしたのは、共通1次の会場に来る人たちは、日頃見ないんですよ。日頃見るのはコンビニの前でナントカ座りしている方々ばかりなんです（笑）、そんな人たちは来ないんです、共通1次に。で、共通1次に来るのはその辺の学校なんです、みんな塾とかに行っているんで、出てこないんですよ。だから見ない…あれって言うくらい全然別の人たちが来てて、先輩に聞いたら「この人たちはどうするのか」「いや、みーんな東京・大阪の大学へ行って帰ってこないよ」っていうんです。炭鉱がつぶれた後、政策転換闘争とかですね、産業政策で、じゃぶじゃぶとお金を流したんですね。で、結局は新しい産業を持ってこなかったために、こんにちに言われる生活保護の問題とか、そういう人たちをどうやって職種転換させて就労させるかっていう問題がもう25年前から、もっと以前から1960年代から有ったと言っているんですよ。私の妻が産休教師をやっていたんですが、子供たちを連れて家に来たんですが、その時に狭い市の官舎…2DKぐらいの官舎ですね、25年ぐらい前でもカラーテレビ、普通ありますよね。ところがそれを指差してですね、子供が「先生んちは金持ちだ」と。カラーテレビがあるじゃないかと（笑）。もう本当にシングルマザーと貧困の問題がその頃からありました。

したがって、興味深いことに、我々は北九州市とかそういう地方は遅れていると思っているわけですが、実は社会問題の点で言えばこちらの方が先だった、進んでいたんですね。むしろ東京や大阪がやっと追いついたと（笑）。どっちが先進か、どっちが後進かなんていうのは非常に相対的なもんだなというのを今も非常に強く感じています。こういうことを東京で言っても誰も聞いてくれないんで（笑）、ぶつぶつ独り言を言うしかないんですが（笑）。そういう経験をしてしまいますと、なんていうか…友達いなくなりますよね、今日に至るまで（笑）。違うように世界が見えてしまうんで、東京にばかりいるとやっぱり違うなあと思います。

I-1) 連合参議院と地方連合の高揚

こういう時に実は「連合」ができたんですね。連合についても、色んな見方があるんですが、私があの方に非常に面白かったのが、当時「連合参議院」っていう、参議院選挙のこんにちにいるねじれのきっかけを作った、労働組合の選挙への関与ですね。あんときに会長が会長ただけに（笑）、政治的にも非常に積極的に打って出て、連合参議院つくって楔を打ち込もうとしたわけですが、あの時連合って何だとか連合参議院って何だとかいうことで、テレビの選挙番組がこういうことわかるやつがないのかと言って、たまたま生涯一度だけです、テレビにでたのは。3分間だけ説明してくれませんかといわれて（笑）、出たんです、TBSですけどね。妻と一緒に「これは背広を買わなきゃ」と（笑）。買いに行ったらですね、3分間が1分間になっているし、後ろの席で足元しか写っていないんですね。背広代返せって言いたくなる（笑）。こんなもんだよなと思いましたけれど。

面白かったのは、選挙番組よりもその選挙番組の前に特番の人たちが、地方を見に一緒に行ってくれませんか。「絵」が必要なんですよ、連合参議院が何をしているかというね。一緒に行ってくれませんかと言って、色んなところに行きました。興味深かったのは秋田に行ったんですよ。秋田は実はこんにちまでそれは続いているんですが、あの頃ぐらいから組合候補を立てないんです。組合以外の人を立てるんですね。あの時は地元のホテルマンを立てました。要するに地

■ 第2部 研究実施のあらましと成果

元の経済界でもニューフェイスですね。商工会議所とか偉い人じゃなくて、ニューフェイスの人を立ててました。その後も秋田っていうのは割合とそういうのが好きですね、見てると。但し秋田を馬鹿にはしていけなくて、秋田はそれこそ第一次大戦の頃から文芸雑誌『種撒く人』とかですね、非常に社会運動では先走っていた所ですね、しかもフランス仕込みです。あのへんのもっと昔のことを言えば、流通や経済から言うと北方経済圏の…港町ですから秋田っていうのは、アイヌとかそういうところとずっと一緒にやってきたところですから、ある意味東京を経由しないんですよ。いろんな意味でね。社会運動も非常にハイカラなものが昔からあるところで、そういう伝統かなと思います。

で、他に栃木ってあるんですが、栃木は農協の職員を立てました。最近…前回の富山でも農協の職員を立てていますが、これは農団協とか農協絡みなんですよ。このときの栃木はもろに農協の職員を立てました。本当に農業のことを考えて、ということなんでしょう。が、故かわかりませんが、その後自民党に移りました、その人は。まあ逆に如何に農協プロパーの人だったかというのがわかりますけれども。

実はあのときの連合参議院の面白さっていうのは、そういう労働組合がですね、労働組合の殻を破ろうとしたんです。特に地方がそうだったんですね。連合が赤い旗から青い旗へ変えて、「十人十色の幸せ探し」っていう形で統一と団結というところから、もっと多様な人々を統合できる運動へという方向を出したんですが、現実には中央も産別もたいした違いはなかったんですが、地方はいきなり連合運動という新しい形をブン投げられてしまった為に、困っていたんですよ、どうしたらいいんだと。しかも分裂があつた時ありましたんで、地方によってはかなりの部隊がいなくなっている事態があるんですよ。従って、地方で、地域で、どうしたら我々はもう一回顔が見える組織になれるかっていう危機感は比べ物にならないです、中央と。それでたまたま選挙があったんで、一つこれをきっかけにして地域へ新しくつながって行こうではないかという動きが、色んなところにあったことは確かですね。ですからそれを見ることでですね、まあ、結構興奮していました中央連合はね、それ見てね。そういう意味では北九州だけではなくて、地方というものをやっぱり一つ大きな視点として見ていないとダメなんだなあということを感じた次第なんですよ。

I ーう) 地方行脚と個性ある地域労働の発見 (中国、関西、北信越、中部、東京、北関東、東北)

それからです、地方周りをし始めたのが。最初は「産別大会めぐり」って言って、無理矢理(笑)。前に見ていただいたあのあほらしい表がありましたよね。あの表で産別には連絡しまくっていたんで、それからおかしなやつっていうイメージは植えつけたんで、また電話して、「すみません、ちょっと出させていただいていいですかね」っていうと「ああ？」みたいな顔されながらも、「まあ、いいですよ」って言ってもらえて大会へ行くんですけども、そうすると大体大会は地方の大きな町ですね。たとえば自治労なんかは1万人ぐらい来るんで、政令指定都市以外はできないんですよ。なぜかって言うと飲み屋がないんで(笑)、飲ませなきゃならないんで、それだけの人々を飲ませられる街っていうのは、やっぱり限られてきます。イギリスのパブをはじめ、労働組合の発祥と飲み屋さんはどこでも深く関係していますから。どうやっているのか御承知かと思いますが、先乗りしているんですね。先乗りして店へボトルを置いているんですよ(笑)。で、一応「こういうお店あります」って地図が入っているんですよ。ただ入っているだけじゃなく、先乗りして呑んでるんですよ、地元が。やっぱりね、組合っていうのは地元の…特に

博多とか行くとね、本当にいざというときの為に何時も種まいていますね。あの人たちはね。やっぱり組合と飲み屋街は…やっぱり大会っていうのは大変な作業ですから、それを支えるのは。そもそも中々地元を離れられない自治体職員にとって、自治労の大会は他の地域を見聞するいい機会な訳です。まじめな話、組織化対策としても大事だったみたいですね。そういうことを横目に見ながら色々回りました。その中で面白かったのがですね、これも今までの我々の常識を覆す話ですが、裏日本ですね、特に北陸です。北信越ですね。先ほども申し上げましたように戦前は日本海側がメジャーだったんです。表日本だったんです。で、富山というのは、戦前から国が新産業都市としてかなり投資していたんですね。裏日本といわれていますけれども当時は向こうが出口だということで、石川、富山、新潟市から南の方、ちょっと上の方までは非常に京阪神とは違う意味で、ユニークな工業あるいは地場産業ですね。地場の中堅ですね。しかも新潟鐵工所ってあったでしょ。倒産してしまったんですが、これ。新潟鐵工所っていうのは新潟市に拠点があったんですが、これはもう、あらゆる物を作っていました。鉄道から、産業機械からなにかから。但し全部ニッチなんで、競争力っていう点では技術しかないんですが、グローバル化でコスト無視ではいられなくなって、結局は倒れてしまったんですが、こういう非常に地場・中堅で強かった理由はひとつはやはり昔からの技能の蓄積ですね。燕三条っていうところが新潟の手前にありますが、ここは世界のフォークやナイフ、いわゆる食器ですね、洋食器の最大の産地です。未だに競争力あります。そういうその…冶金ですね。そういう産業については圧倒的に今も含めて強いんですね。それから富山に行くと、ベアリングですね。車の一番大事なベアリングで、不二越っていう会社があるんですが、これは富山の駅のすぐ隣に大きな工場があるんですが、これも色々紆余曲折有りながらもまだがんばっていますね。こういうの殆ど、今で言うとJAMです。昔の全国金属、全金同盟ですね。全国金属、全金同盟っていうのは高度成長で大企業が重工業を支配する前までは殆どの工業を仕切っていた、地場産業は抑えていたんですよ。それがみんなJCへ移行してしまうんですが、裏日本へ行くとそういう全国金属、全金同盟の世界が見える。もう一つの全国金属、全金同盟の世界というのは後で申し上げる大阪ですよ。中小企業ですよ。

ちょっと行ったりきたりして申し訳ないんですが、こういう地方連合とか地方について色々面白いなと思って見ていたのが、そして書いたのがこの「地方組織の改変」というやつですね。これはですね、これもあほらしい作業第2弾なんですけど、今労働省は止めてしまったんですが、前に『全国労働組合名簿』っていうのがあったんですよ。毎年出している。これは全組織の役員名簿だったんです。三役。で、これを全部洗ってですね、役員の異動を追っかけたんです。特に連合になる時に、総評、JC、同盟の人たちがどういう風に連合へ移って行ったか、名前を追っかけりゃ、特に地方は或る意味連続していますから、つながるんですね。そうするとね、パターンが見えてくるんです。連合になっていくパターンが、地域の中ですね。例えば総評、同盟、JCが、何処がその地域を取って行くかっていうパターンですね。例えば電力っていうのは全国津々浦々で必ずポストを取っていきますよね。後で聞いた話によると、ポストは取るのは会社にも意味があったようですね。やはり電力会社っていうのは地方を押さえるっていうのが労使一体として大事だと思ってたということですよ。

それから、全電通とか逓信とかはやっぱりあの頃非常にならんでいて、特に全電通ですね。取りに行っていましたね。ところが最近取りに行っていないですね。最近ここ10年ぐらやっていないんですけれども、話聞くとNTTになってから、「もうそういうことはいいから」ってなったみたいで(笑)。コストかかりますし、大阪なんかはまだNTTとかがんばっているようなんですけれども、前は全国津々浦々でそういう傾向ありましたけれども、今はやっぱりNTTになって

第2部 研究実施のあらましと成果

からは企業別組合としての動きにシフトしているようですね。

非常に面白かったのはですね、連合ができてからしばらくは出てこないんですが、段々この…JCが出てくるんです。製鉄とかですね…まあ、電機は前から出てきます。全国津々浦々に工場有りますからね。電機っていうのは割合と地域でがんばりますね。いろんな意味があるんだと思いますが、で、製鉄っていうのはご承知のように労働戦線統一を仕掛けたんですが、地域で独立峰だったんですよね。或る意味、北部九州を中心としてそういう総評の地域支配への対抗というところからJCの統一戦線の動きというのは出ているところがあるんですよね。なので、最初は結構傍観しているんです。途中から出てくるんですよ。これはJCや重工業が地方でも取りに来たのかという解釈もできるんですがそうではなかったんです。そうじゃなくってですね、地方から重工業のオフショアリングと言いますが、海外移転が如実に進んでいて、さっき言った様にどんどん縮小されるわけです。東京にいとわからないんですが地方にいけば、もう7万の事業所が3千になるんです。それをずっとみていますから、そうするともう地域で生きていけない限りそういう重工業が生きていけない時代に入っていたわけですね。ですから、7万の頃は地元はそんな関係ねいや、自分たちは羽振り良くやっていたんですが、地域の中で生きていくって切実な環境を感じたからこそ、いままでは自分たちだけでやれていたのがやれないということになって。だって地域の…地方組織っていうのは地域のお世話係ですから、いってみれば。そういう中で生きていくという…そういう意味ではですね、この大原社会問題研究所編『連合時代の労働運動』の「地方組織の再編」というのは、論文はたいしたことないんですが、作業自体は私は面白かったですね。また続けたいと思っているんですが、なにしろ労働省が、これ売るの止めちゃって、聞いたら中ではやっているそうです。だからコネを見つけて内部資料をもらいに行くしかないですねって（笑）いわれちゃったんですが。ということは全国の組合はどうしているんだろうと思うんですけどね。前は必ずありました、組合事務所へ行くとね。大事ですから、誰が役員してるかっていうのはね。

ちょっと話が前後しますが、こういうものをどうやって作っているかっていうのは、厚労省になってから、もっと見えなくなったんですが、労働省の時代は筆頭部局が労政局です。労政局の人は何しているんですかって、労政局の人に聞いたことがあるんですが、「ま、外交官ですな」って言われました（笑）。「どういう意味ですか？」って聞いたら「だって、労働組合の世界も有象無象だし、しかも使用者団体や政府とか色んなところと話をつけなきゃいけないんですから、もう、外交官ですよ。」っていう風に言われました。要するに繋ぎ屋ですね。いざとなれば我々が間に入って繋がなければいけないんだっていう自覚が労政局にはあったらしいんです。これは例えば、竹尾さんはご覧になっていますけれど、NHKの特集で『戦後50年 そのとき日本は』っていうドキュメンタリーが、これ、本になっていますけれどね。三池争議っていうのがあったんですよ。三池争議なんか見るとすぐわかりますが、ホントに労働省が合法非合法すれすれに間に入ってやるんですよ。たとえば…三池の「ホッパー決戦」。労働者2万、警官隊1万が激突する寸前ですね、前の日の深夜に中労委にですね、労働省から電話が入るんです。で、「警官隊出ちゃいましたよ」と。「これ、留めないで大変なことになりますよ。」と。要するに警察行政と、中労委、それと労働行政っていうのは、まだそんなに密接につながってないということになりますよね。官邸からじゃなくて、労働省から入るわけですから、そういう電話が。で、中労委も一応独立機関ですから労働大臣が中労委に動けといえないわけですよ。表立ってはね。そういう非常に…なんていうか、間が切れそうになっているところを、労働省がやるわけですよ。例えばね、こんとき面白かったのは実は福岡県知事は革新知事だったんですよ、あの時。社会党知事

だったんです。ところが一切関与していません。で、福岡県警…福岡県の労働部があるわけですが如何に出先が中央を向いているかっていうことですよ。全く知事がコントロールしてないわけですよ。県警も労働局も。彼らは東京とやっていたわけで、ただ、出先が並んでいただけのことですよ。本当にあのときの県政の動きを見ていると奇妙です。私が知らないだけかもしれませんが。少なくとも三池がらみの話の中で県知事の話は殆ど出てこないですよ。あるいはあの時社会党知事だったという話が余り出てこないってのはね…。極めて興味深いんですが。これはまた、福岡の革新王国の話でしたいと思いますが。そういう、現場で色々労働省が動けた最大の理由は、労働省はご承知のように省庁ですから階層別に採用があるんですよ、まあ、現場採用に近い人たち、この人たちが実は労政局の現場の役員として何時も担当地域をぐるぐる回っているんです。もちろん大会には行きます。その地場の組合の大会。それから地場の組合の役員とも何時も会っています。ともかくあらゆる地場の労働関係者とコネクションを持っていたのがこの人たちです。で、この人たちが報告を全部あげるんです。その報告の中の極めて形式的な部分がああ毎年の『資料 労働運動史』になるんです。『資料 労働運動史』ってこれも売のをやめました、数年前にね。前は腱鞘炎どころでない、手首が折れそうぐらいの分厚い本が毎年出ていましたけれど、あれは最終的には労働省の…今も厚労省に部屋があるらしいんですが職人芸のOBがやるらしいんです、書くのは。それが籠ってですね、書きたいんですがその情報が何処から上がってくるかって言えば、全国津々浦々から上がってくるらしいんです。都道府県の労働局を経て上がってくるんでしょうが、その現場を回っている人たちがいなければ上がってこないんですよ。ですから、組合の大会にはどの組合でもそれなりのところには必ずその人たちの姿があるらしいです。色んな境を超えて。ぐるぐる回っているという。こういうですね、日本の労政のことってというのは殆ど無視されていますね、今まで。業界の人たちは知っていますけれども。厚労省になってからその力は落ちているとは思いますが。まあ、もう一つは、治安…労働問題が治安問題だった時代とセットになっている話ですね。で、我々の頃もそうですが、オウムまでは公安警察がいつも労働を見ていたんですね。八幡製鉄も見られていました。現場の八幡署が何時も見えていました。まあ、ようするにどんな人がいるのかなあと。最近ではむしろオウムとか色んな話で別の方へシフトしているようですけども、なんか話によるとまだ見てるって話ではありますけれどね。ただ、70年代ぐらいまでは非常にリアルに見ていたわけですよ。そういう時代に、多分公安とも話しをしていたんだと思います、その労政の現場担当官はですね。話をしているって言っても情報を取りに行ってるってくらいだと思いますけれど。そういう地方労政の中で、各都道府県に結構ユニークな人がいたんですが、私のこの「労働者に限りない愛情を」というお配りしたものは、山口県ですね。たまたま北九州にいたこともあるんですが、山口県ってというのは今でも非常にユニークです。ってというのは、労福協が非常に元気です。で、労福協—労働者福祉協議会ですね—実際に共済とかそんなことで動いています。で、それなりに影響があります。これは1960年代に山口県、全部いるんですね。かつてのナショナルセンター、+ J Cからなにかから。新産業都市ですから。その時に山口県の労政局の担当官で瀬光って人がいたんです。この人が「これをなんとかしないとイケない」と。こういう風にばらばらになっていたら結局は普通の労働者が何の益にもならないと。この人たちの縛りつめのため、そしてそれを労働者の為にとということで労働福祉行政を一生懸命やったんです。で、できる範囲は決まっていますが、労福協というものを一つの受け皿として、そこへみんなを縛めよう。現在労福協あるいは中央労福協はある意味、なくなった笹森清会長の頃からかなり色々なサラ金問題とかですね、或る意味、かつてであれば絶対付き合わないような人たちと（笑）一緒に色んな

第2部 研究実施のあらましと成果

ことをやっています。でも、その前はあんまり目立ったことはしていなかったんですが、地方へ行くとですね、こういう山口のように一生懸命労福協活動で、ある意味地域労働政治に大きな影響力を発揮できるようになった所があるんですね。ですから、あの…日本の労働運動とか社会運動を見る時にですね、こういう行政…しかも偉いさんじゃなくてですね、現場で…まあ一種の活動家ですわ、或る意味。そういう情報をかき集めながらいざというときには間に入るという意味では、この労働省の活動家というのも一つ大切だなと思ったのが、この「労働者に限りない愛情を」という論文というやつですね…。

次のこの「大阪労働者階級の形成」という論文ですが、これが全国金属の時代の大阪ですね。東淀川です。東淀川は今でも中小企業が多いんだと思いますが、戦前から戦後間もない頃にかけてはほんとに色んな工場が並んでいました。で、何かの拍子にこの「全金横丁」という話を聞いて面白いなと思って、当時は元気だったんですね、中之島図書館まで行ってですね、誰かに相談したんじゃないかと思うんですが、どうしたら横丁をビジュアル化できるかと思って、可視化できるかと思ってですね（笑）、たしか「ゼンリンの地図を見たことありますか」と言われたと思います。ゼンリンの地図ってご存知ですかね、これ北九州が本社ですが、一番細かい地図を作っているんです。はっきり言えば名前が書いてあるんです、地図に。誰が住んでますって、形も含めてですね。ほんとに全部調べまくってそれが技能として蓄積されて。ですからGoogleの日本地図、ゼンリンですよ。ネタ元はね。情報は確かです。ゼンリンですからね。で、ゼンリンの住宅地図っていうのがあるんです。これは何故そういうものが売れるかといえば不動産の鑑定とか評価とか、絶対必要なんですよ。必ず売れるんです、ただし個人が家で買うようなものではないです。図書館には必ずあるんです。多くの場合図書館に見に行くんですよ。結構高いんですよ。情報がとても貴重ですから。その中に地図がありますよね、論文の中に。地図で調べていたら全国金属の大阪地区の議案書を見てその頃のメンバーがわかったんです。メンバーを頼りにそのゼンリンの地図と合わせたら、ちゃんど横丁になっていたんです。これです。ちゃんと横丁を形成していたんですね。本当に向こう三軒両隣みたいになっていたんです。これも最初は一軒だったのがなんかの拍子で色々つながって、広がっていくんですね。たとえばこの辺中小企業で、オヤジは非常に封建的ですね、最初は…あれです、「キューポラのある街」見たことある人いますかね？。毎年私は学生に見せて、来週も見せるんですが、これはね、本当に…今見るともって面白いです。こういうミサイルが撃ち上がる撃ち上がらないっていう時にあれ見るとね…。知ってます？あの話…第一主人公は吉永さゆりですが、第二主人公は在日の人ですよ。あれ、在日映画と言ってもいいですね。そういう意味でも非常に面白いんですが、その中でですね、中小企業の工場で働いていたオヤジが首になるんですが、それを若い組合員がですね、親方に向ってですね、ひどいじゃないかと、助けてやれよというんですね。そしたらオヤジが…首になった吉永さゆりのオヤジがですね、昔かたぎの職人でね、罵詈雑言浴びせる若手に対して「何だその態度は」と。「おやじさんにたいしてその態度はないだろ」みたいなね。「だってこのおっさんは、金払わないで、それで女囲ってんだぜ」とかね。むちゃくちゃなことを言うんですが（笑）。その…「職人っていうのはそういうものなんだ！」って、ホントにね、前近代的な会話と風景と労使関係が見えます。そういうところから、近代的な労使関係へ一步一步進んでいくんですよ、この横丁はね。で、団交まで行くわけですよ。場合によっては最初は「お前なんか出て行っちゃまえー」なんていわれると、行くところない若手の工員を例えば駆け込み寺のようにしてその地域の組合が守ってやって、自分のところの親方を通じて「まあ、そうは言ったってさ」みたいなね。あの、周旋に行くとか。本当にいろんな意味ですね、地域の労使関係を一個一個作ってい

くんですよ。で、こういうところの集会は昔は小学校ですね。学校が講堂を貸してくれたんですよ、組合の大会に、地域の大会にね（笑）。そこへ、高野実が来るんですよ、首になった。総評事務局長を追いやられて全国金属の組織部長になっていた…高野実が来るんです。もう2～3年後にですね。そうすつとみんながビラを貼るんです「高野実 来る！」みたいなね。この全金横丁の、全国金属の、一都道府県の中のさらに地協の、地域の春闘集會に高野実が来るわけですよ。このインパクトは大きい…。今、連合の会長が来ても誰も驚かない…あの頃の高野実の影響力はすごかったと思いますね。ビジュアルにしてもね。あの人、それを意識して中国の人民服を着ていましたから。如何に清廉潔白なイメージをとということで。だから、それが小学校の講堂で大会をやって終わるとですね、みんなでこう、掃除するんです。そういうのがまた書いてあるんですよ、地域の週報みたいのにですね。ですから非常にビビットな世界があったんだということがわかるんですが、それがやっぱり大阪の全国金属の強さであり、全金同盟の強さでもあったわけです。面白いのはこの頃の全金同盟の地元のえらいさんにあつて話を聞いたんですが、「競争関係ってというのはどうだったんですかね」「あのなあ、結局競争やから、競争やったらお互い違いを出さなかったらあかんやろ」みたいな感じで、たいしたイデオロギーの入れあげはなかったみたいなんです（笑）。「お互い競争やで」っていう。そういうノリだったのかって（笑）。ですからJAMができるっていうのは、実はそこの最初の部分さえ取っ払ってしまえば、話一緒ですから。しかも大阪の全金同盟っていうのは総同盟と一緒にあって最初に割れたところですからね。そういう意味じゃ、如何に大阪がそういう中小の世界だったか。ですから、これも関係者にきいた話ですが、ずいぶんパナソニックのトップがこの連合大阪のトップになれなかったですよ。これはそういうことです。つまり大阪っていうのは大企業の街じゃないんだと。中小の街なんだと。労働組合っていうのもそういう考え方を持っていて、もっといやあ…わたしにはわかりません、枚方っていうのを大阪って考えるのかどうかね（笑）。多分大阪にとって大阪っていうのは環状線の中あるいは環状線の周辺ということもあるんでしょう。こないだ京阪に乗って枚方通った時に、「遠いなあ」と思いました、枚方ね。京阪は淀屋橋からは最初は複々線ですね。それが枚方では複々線終わっていますもんね。京阪が複々線を引いたっていうのはあれは大阪の中で引いたんだと思うんですよ。そこから一杯乗ったり降りたりする人いますから。私はこないだ初めて京阪のって「枚方、これは遠いわ」と思って、「大阪じゃないな」という感覚をちょっと持ちましたけれど、まあ、それは皆さんの方が良く解かると思いますが。中央から見ていると「大阪は一つじゃないか」と、大阪府で一つじゃないかと思えますけれど、やっぱりそこはこういう地場中心でやってきたところは大阪市というものがひとつあり、やっぱり大阪市というアイデンティティで労働運動やってきたんだらうなということがこういうことからわかりますね。

I - え) 革新王国福岡と北米大平原radical (nonpartisan, famer labor party, CCC)

こういう話をしているときりがありませんが、次の「革新王国福岡と北米大平原」というところから段々話が飛び上がっていくんですが、福岡にいてですね、初めて地域の労働運動や社会運動と色々接点を持つというか…あの辺でですね、大学教員をしているとですね、そういうところとの付き合いが不可欠になってくるんです（笑）。というのは福岡と北海道だけが戦後の知事の任期が革新の方が長いんです。最近になってダメになりましたけれど10年くらい前までは福岡も北海道も、革新知事の方が長いんです。この2つだけです。しかも北海道と福岡の違いは、北海道は社会党単独なんですよ。ただし北海道の社会党というのはこれまたちょっと複雑でね…。

第2部 研究実施のあらましと成果

ちょっと革新の社会党というのとはちょっと違う…、あそこは明らかにやっぱり「フロンティア」ですよ。ちょっと他のところと違うなと思って…。福岡は社・共共闘ですと来ているわけです。典型的な戦後の革新自治体のやり方で、あの…いつもブリッジになるのが九大の先生たちなんですよ。要するに地元の…特に九大の先生たちは戦前から反ファシズムでやってきている人たちがいるので、地元の知識人が間に入って色々やる…。或る意味戦後の50年代の護憲運動もそうでしたけれども、それがずっと生きていますね。ですからもめると地元の知識人が間に入って、「どうですかこういうことで」と。向坂が三池に入ったのは或る意味特異な例では有りません。彼がたまたま三池に行っただけであって、九大の教員であれば地元のそういう政治に関わるのは当たり前みたいな時代です。北九州でさえ、そうでした。何の専門であろうが、関係ない、政治学でなくてもね。で、そういう土地柄で、革新王国福岡っていうのがいかに他のところと違うかっていうのを色々勉強していくとですね、目が海外に行きます。

たまたま、私は90年代の最初にですね、ちょっと色々事情があってアメリカのミネアポリスというところへ行ったんですね。アメリカの地図を思い浮かべていただいて、真ん中にシカゴがありますよね。五大湖のね。あれの左…ちょっと上がウィスコンシン、さらに上がミネソタという、でかい州ですが、寒くてね…。その上がカナダ、その上がハドソン湾というぼこっと海が入り組んでいるところですね。その上、北極です。ですからこれくらいの季節からもうミネソタは北極からそのまま風が降りてくるんです、ざーっと。零下30度、40度っていう。痛いですよ、こういう風はね。で、そういう日は晴れているんです。寒いと雪が降りません。余りに寒いととてもよく晴れています。ただし外に30分いると頭が痛くなりますし、危険です。凍傷になります。ですからミネソタは…、元々そういう防寒体質になっている人たちですが、小学生とかみんなバスを外で待っているんですよ。だけどもあんまりにも寒いと今日は外へ出るなって天気予報で言いますよね。そんなものはね、みんなわかっていますから、ちょっと外でりゃわかるんですから、あの人たちは何時も零下2～30度なんで、11月に雪が降ると溶けない、4月まで。で、零度…こっちでいう零度、向こうは華氏33度というんですが、Tシャツで出てきますよね。「あったかいな、今日は」って（笑）。そういうところで2シーズンしかないんです。夏と冬。で、春と秋がなくていきなり寒くなっていきなり暑くなるんですね。そういうところでは、もう本当に大規模農業しかないですね、穀物、小麦を作る…。ですから最初からある意味資本主義的な農業になるわけですが、ミネアポリスはその中継地点で、これ真ん中なんです。ここからシアトルからサンフランシスコまでいわゆる高層ビルがないです。あとはもう、大平原とロッキー山脈だけですね。ですから皆さんが行くような米国海外ツアーで、まずサンフランシスコ・ロサンゼルス・シアトル行ったらそのまま、もうシカゴも最近行かないでしょう、いきなりニューヨークでしょう。行くところないんだっていう見方ですよ。地元のアメリカ人も「そんなとこ、何しに行くの」っていう、感じなんです。ところがこの大平原ミネソタの隣にノースダコタっていう、もっと何もありません。で、その上がカナダなんです。サスカチュワンという5時間ぐらい車で国道を走っても対向車がないところなんです（笑）、それとマニトバ、これはもう、前、海だったところなんで、もういたるところに湖や川があって、夏になると蚊がすごいですよね。この辺の蚊はね、痛いです刺されると。とてもそういう特異なところなんです。この辺一体さらにその周辺を含めてですね、カナダ・アメリカを渡るこの北米の大平原地帯、実は社会主義の王国なんです。今でもそうです。ただし、マルクス・レーニンじゃないんですよ。農民運動、労働運動、特に農民運動が強いんです。で、アメリカやカナダはご承知のように州が非常に大きな権限を持っています。まあ、共和党なんかはそれを何時も盾にとって、こな

いども健康保険法に反対しましたよね。連邦が口を挟むことじゃないんだと。全部州が決めることなんだと。実は南北戦争もそれが原因です。奴隷制が良いか悪いかは連邦が言うことではないと。州が決めることだと。そういうことを言うんだったらおれたちは独立するぞって言って、南北戦争になったんですよ。ですから、アメリカっていうのは州が基本です。死刑についてもそうです。実は、いわゆる…もう今は先進国とはみなされないかもしれませんが、かつての先進国の中で国として死刑制度を持っているのは日本だけです。アメリカは州によっては死刑制度がないです。そのほうが多いです。で、州をまたぐと、殺してしまつて州をまたぐと連邦の管轄になるんです。そうすると死刑になるんです。可能性が出てくる。でも、州の中で、死刑のない州の中で何人殺そうが死刑にならないんです。そういう意味ではアメリカは死刑の国と日本で言いますが、そうではないです。カバーしている割合で言えば死刑のない国と言って良いし、何度も復活復活で出るんですが、死刑が復活した州が未だにないですね。で、カナダはもっと強くて、首相がいるんです、州に。権限が強くて、カナダの場合州の国家元首は未だに女王です。イギリス女王。連邦は最近できたんです、あの国は。ですから非常に州の権限が強い分権的なところなんです、そういった北米の大平原の州…カナダの場合マニトバ、サスカチュワン、これNDPというんですが、社会民主主義政党です。これを首相にしています。サスカチュワンに至ってはもう1940年代から今日に至るまで…そうですね、半世紀のうち40年以上、党が握っていますね。それを支えているのは例えばサスカチュワンとかマニトバの場合は協同組合、特に農協です。それからアメリカの場合も、ファーマー・レイバー・パーティーっていうんですが、さっき言ったミネソタっていうのは1930年代から10年以上労農党が知事をとったところですね。ここに「ノンパーティーザン」って書きましたけれど、元々それを最初にやったのはノースダコタで、ノンパーティーっていうのは二大政党に属さないっていう意味です。で、この辺の州の農民たちは19世紀の終わりから東海岸の大資本に全部搾り取られているんです。穀物買うのはみんなそこです。それから鉄道で輸送する時に、鉄道会社をみんな仕切っているのはそこですから。もし東海岸を旅行される時に行ってみるとおもしろいのは、ロードアイランドという、ボストンとニューヨークの間にありますが、そこですね、マンション街—マンションってアメリカではお城のような家を言うんですが—そういう大金持ちのマンションが立ち並んでいるところがあるんです。お城ですよ、ほんとに。

驚くべき富の象徴って言うか(笑)、それ、今はみんな入れるんです、普通の人。ツアーになっていて。如何にすごかったかっていうのがあれをみれば解かりますが。従って彼らからすれば、自分たちが一生懸命作っても全部費用を吊り上げられる、あるいは吊り下げられると終わりなんですよ、そういう値段を決めていたのはシカゴです。ですから未だにシカゴは農産物…あの辺に大きなコングロマリットもありますし…一番相場なんかで危ないのは大豆って言われますけれども、天気によって左右されるんでね、ギャンブルですよ。そういう穀物市場があるのはシカゴですけどもそれは、その一番の生産拠点に近い大都市がシカゴだからなんです、ファーマーパーティーは、あるいはファーマーズムーブメントはそういうものに対抗して自分たちでなんとかコントロールできないかと。このノースダコタっていうのはノンパーティーザンがそのステイト(州)を政府を握って自分たちで銀行を作ったんです。自分たちで色んな農業の施設を作ったんですね。あきらかにこれ、社会主義だと思んですが(笑)、この辺ではそれを社会主義とは言わないんですよ。だけどステイトが全部持ってやっているわけです。で、協同組合も強いしね。で、ミネアポリスは1930年代に、さらに中継地点で交通機関が発達していたり労働者が一杯いたんで労働組合も強かったんですが、1934年、大恐慌の時代から復活してニューディールに

■ 第2部 研究実施のあらましと成果

なった時に、1934年に3つアメリカでゼネラルストライキが起こっています。サンフランシスコ、トレド、それからミネアポリスですね。トレドはタイヤですね。サンフランシスコは港です。港湾ですね。ミネアポリスはトラックです。これがゼネストやったんですね。それぐらい強かったんですが、未だにミネソタのデモクラティックパーティーの名前はDFLって言うんですね。“Democratic-Farmer-Labor Party”って言うんです。合併したんです。その名前が残っているんですよ。こういうなんていうんですかね…いわゆる我々のアメリカの政治観—二大政党で、よくいわれる労働者の味方の政党なんてないんだと。デモクラツッだって同じようなもんだと。違いはコカコーラとペプシコーラの違いぐらいで（笑）…あの、良く言いますアメリカでも。デモクラツッと共和党の違いはペプシかコカコーラの違い位しかない。コーラには違いないと。それに対して明らかにマルクス・レーニンだけじゃないんですが、それよりもっと地べたに密着した農民や労働者の思いを託した政党があって、その伝統が今でも続いていると言っていいですね。そういうことを考えた時に、例えば日本もアメリカもヨーロッパに較べると社会主義後進国とかね、労働運動後進国とか農民運動後進国のように言われますけれども、国でみるとそうかもしれないけれどね、例えば政権とったとか、政策が違うとかね。そうかもしれないけれどもこういう地方や地域の労働運動や農民運動を見た時に、必ずしもそうではない。むしろそういうヨーロッパ中心的な社会運動や労働運動と違う形ですね、パターンがあるんじゃないかという風に思わせてくれたのが、このミネアポリス、ファーマー・レイバー・パーティーとの出会いですね。本も色々有ったりして大変面白かったんですが。

I-お) 既成の時空観念を超えた想像の共同体としての地域労農運動

つまり国…日本の中で福岡を見るとか、アメリカの中でミネソタを見るとかじゃなくて、それだけを2つ、上に挙げてしまっ、つなげたらどうだろうと。国を超えてね。太平洋という大きな枠の中でそういう必ずしも国を通さないでつながってる部分の…なんていうか特徴を色々考えたら、どうなんだろうと。いう風に思い始めたのが…これまた後の話につなげますけれども、この「お：規制の時空観念を超えた想像の共同体としての地域労農運動」。要するにまずは国というものを超えて考えたほうがいだろうと、それから国にはられたレッテルですね…アメリカだって誰もあそこに社会主義があるなんて思ってもみないでしょうし、例えば1930年代から40年代にかけて、ソ連・中国をのぞいて一番共産党員がいたのは多分アメリカだと思います。10万人いましたからね。いわゆる戦後の日本の共産党と同じで「愛される共産党」戦線やっていたんです、人民戦線でね。ですから、あの頃たぶんアメリカでは頭がいいことを証明する為にみんな共産党に入ったぐらいの物があったと思います。日本の戦後もそうでしたよね。あの…頭がいい人は共産党でなければいけないという。社会党の共産党コンプレックスというのはその辺にあると言ってもいいですよ（笑）。学歴コンプレックスだと思います、あれはね。労働者に基盤を置いた、rank-and-file（一般組合員）に地盤を置いた労働運動に基づいた社会党と、要するに象牙の塔の上の方の人たちが仕切った、東大を中心とした共産党との違いだと思います。そういうことを考えると、やっぱりちょっと今までの見方を変えると良いんじゃないかなあと。そういうものをどうやって…、それこそこの講座の眼目でもあるんですが、ちょっと今までと違う労働運動史・労農運動史・社会運動史は書けないものかというのは、この辺から思うようになりました。で、例えばこれ…『資料 長野県労働運動史』っていう、これ2004年まで来ています。1970年代にこの手のものはピークになりました。一部の都道府県はまだ続けています、がんばって。た

だ、これ後でご覧になるとわかりますけれど、もう記録集です。文章はないに等しい。『資料労働運動史』の焼き直しです、地方のね。資料としては非常に貴重ですよ。そういう意味ではね。事実関係が書いてありますから。これ「資料」って書いてあるでしょう。他のあの辺でご覧になるとわかりますけれども、各都道府県の労働運動史も大体これが基本です。これをさらに労働組合版にしたのがこの『ものがたり戦後労働運動史』ですね。これはね、物語ろうとしているんですけども物語ってないです。っていうか今までの話をつなげただけだろうその中でですね、その（配布文献）『地域学』に書いたんですが、青森県労働運動史ってのはおもしろいです。なぜかその座談会が入っている第1巻がないんですが、そこに積んで有りますが、3冊…。

（と）すいません、1巻はですね、国立国会図書館がなぜか1巻だけ持っているんです。

ああ、面白いからだと思います（笑）。

（と）あそこが1巻だけ持っていて、うちが残りがあるっていうのは…

…座談会がすごいんですが、実は1970年代に共産党の議員が出たんです、衆議院議員が。で、この青森県のユニークさは今回も出ましたね。今回青森県の農協は共産党を支持しています。自民党も支持していますけれども、共産党も支持し始めました。つまり、TPPです。非常に解かりやすい（笑）。つまりそれぐらい、さっきも言いましたけれども、東北を馬鹿にしてはいけません。東北はね、或る意味労働運動や農民運動では、むしろもうひとつの世界を作ったと私は思っています。工業がない、大きな農家がないからと言って、どうも日本の労働運動は東北を異端視しますけれども、あれははっきり言ってもう一つの労農運動だと私は思っています。で、この座談会はですね、当時各議員がいたんですよ、社会党・自民党・共産党と。で知事もいました。そのお偉いさんが集まって話をするんですが、実はこの人たちは1920年代のみんな若い頃一緒にその…危ない運動をやっていたんです（笑）。必ずしも共産党ではないんですが、色々な文化運動から労農運動から、活動家として友達だったんですね。あるいは面識はなくてもどっかみんなお互い知っていたんです。ですからこの座談会を読むとですね、その…あいつはどうしたとかね、同窓会です。「えっ、あいつなに、死んだの」みたいなね。それが自民党の議員と共産党の議員が仲良くそういう話をするんですね。ですから、明らかに現住所じゃなくて本籍です。本籍一緒なんですあの人たちはね。現住所が違うんです。東北へ行くとですね、労働運動と農民運動を分けることが馬鹿臭くなってきます。みーんな一つでやってるんです。活動家としてですね。文化運動もやっています。ですからそこに『日本農民運動史』（日本評論社）っていうのを積みました。こんなものは余り知られてなかったと思うんですが、青木恵一郎っていうのは面白い人でね。この青木恵一郎っていうのは長野県の人なんですが昔全農の書記だったんですよ。まあ、労働組合の業界の人は全農と言っても解からないかもしれないんですが（笑）、農民運動っていうのもね…非常に紆余曲折があつてですね、労働運動以上に色々あるんですが、これ元々作ったのは賀川豊彦ですよ。日本の農民運動の原点はね。クリスチャンが作ったんです。杉山元治郎もクリスチャンです。そこから色々有るんですが、青木恵一郎は戦前左派の活動家としてやっていたんですが、戦後間もない頃…これね、前々号の大原社研の雑誌に非常に面白い論文が載っています。この人は…大原社研、お家の事情もあつてずっとこのごろ革新の原点について色々研究されているんですが、まあ、問題関心は何故あの頃の共産党がダメになったかっていうんだと思うんですが、長野は社共の知事出していたんです、あの頃ね。それについての分析で、その中に書いてあるんですが、青木恵一郎っていうのは元々社会党だったんですが、共産党から1回出るんですね。選挙にね。つまり、社共がどうやったら一体化できるか、もっと言えば農民運動がどうやったらもう一回一つになって強くなれるかを考えたんだと思います。で、縷々…その後ずっと

そういう本を書くんですが、その「はじめに」を書いている近藤康雄とかそういう人たちは農林関係で、農林省に近い人たちです。或る意味で。あるいは農学の一番偉い人たちですね、そういう人たちがやっぱりこういうことは大切だと思って端書を書いた。で、これを読んでいるとですね、例えば、労働組合の中に入れられている「全林野」、いま森林労連って言うんですかね。全林野っていうのはこれは面白いですよ。あのね、殆どの場合他の国へ行くと全林野のような組織はないんです。ひとつはこれだけ林業が資本主義に組み込まれている国はアメリカと日本だけといてもいいんじゃないですかね。なぜならば、世界で木造で家を作っているのはいまどき、この2つの国だけです。つまり、大量の木を資本主義的に必要としているのがこの国だけなんです。アメリカ行くと、レンガのように見える家、あれみんな中は木造です。で、ぽこんぽこんってはめてるんですよ。地震がないですから、木造でいいんです。3～4階ぐらいのアパート、平気で木で作っていますよ。日本で考えられないですけどね。それぐらい木が必要なんですよ。ですから、前回言ったようなウォブリーズのように森林で働く底辺労働者がいるわけです。日本の場合はいわゆる入会地という形で戦前は地元の人たちが取ってもいいような状態になっていたり、あるいはそれほど産業として大きな木材会社が仕切っているわけじゃないんですが、むしろ国営とか。つまり、御料地ですから。明治維新のときは御料地、幕藩体制の公共・公有地ですね。戦後は全部これ国のものになっていますから、そういう意味では全林野のような公務員として、入っていくわけですが、まあ、木を売っていたわけですね。この全林野は我々は公務員の労働運動の一部としてみますが、この中から見ると全林野はやっぱり農民運動のひとつとして、特に農業労働者の運動ですね。日本の場合、地主と小作という関係で見ると、農業労働者としてなかなかでないですよ、農民運動について。で、これ、「小作」をどう見るかという問題もあって、実は小作の歴史とかはね、これ本当に難しいです。伊達や酔狂でできる歴史ではないですよ。まあ、日本史の一番の王道だと思います、この土地関係の歴史というのはね。非常に入り組んでいます。ただし、例えば世界で言うといわゆる東側が作ったインターの中で「農民インター」っていうのがあるんです。これは農業労働者を組織化しようとしたものなんですが、例えば今、フィリピンであれなんであれ、農業生産は農業労働者が背負っていますよね、バナナとか。農民っていいながら殆ど会社が仕切って農業労働者にやらせるところがありますよね。例えば、少し高いコーヒーを買おうと。で、農業労働者の時給を上げようという運動がありますよね、コーヒーでね。あれは明らかに農業労働者がどんなに悲惨な目にあっているかというのが前提になってできているわけですが、あの世界の方がむしろ主流だったわけですね。で、その農林インターの指導者はイタリアから出ています。で、イタリアというのはシチリアとか南部はほんとに農業労働者の世界で、イタリアの一番有名な、しかもその人は戦後50年ぐらいは世界で一番有名な西側の、共産党系労働運動指導者だったわけですが、ジュセッペ・ディ・ヴィットリオという人がいるんですね。このヴィットリオという人はパルチザンをやるんですが、反ファシズムの…。元々農業労働者の組織化をやった人なんです。つまり組合として異端なんですよ。農業労働者の組合を作って、そこからイタリアの英雄になって、世界へ出て行った。高野実がヴィットリオを尊敬していましたね。で、総評労働運動ではしばしばイタリアの労働運動の話が出てきますね。そういう、ちょっとこう…もう一つの世界…だけど東北で考えると、そっちが主流なんですよ。そういう、林業。今だに全林野系の主流は秋田・青森ですよ。広大な…今では地球遺産になってますね、ブナ林とか。大量の山林があるわけですよ。あるいは『夜明け前』って読んだことあります？ 島崎藤村の。あれもいい山林史ですよ。全国の山林の歴史っていうのはですね、そういう意味では非常に日本の社会史を見る上で大事なんですが。私は

最近よせばいいのに農民運動を勉強し始めようかと思っています。誰もやっていない、幸いなことに。一時はすごかったですよ、農民史っていうのはね。だけど最近なんか…特に農民運動っていうのはまた別の世界で、いわゆる農民一揆とか世直しとか、明治のいわゆる自由民権運動ぐらまではみんなやるんですが、それ以降いわゆる党派の沼地の中に入ってしまうんで、やらないんですよ。これなんか最後の作品だと思いますね。今、途絶えていますね、完全に農民運動史っていうのはね。だけど今言ったように、ある意味労農運動を勉強したければ農民運動をやらなければわからないなっていうのが、例えばこのアメリカのケースもそうですし、革新もそうですし、日本の地域によってはそうだなあと思うんですが、そんなことを考えさせてくれた、そういう風に至ったのは特にこの1980年代の終わりから1990年代の北九州での経験だなあと、ありがたかったなあという風に思っています。この文献のところ後は青森県の労働運動とかですね、もうひとつこの「裏声で歌え革新」っていうのは美濃部の…。美濃部都政っていうのは面白かったですよね。今の橋下さんとは逆です。橋下さんは北風です。美濃部は太陽なんです。つまりお金がなくなって、都の労働組合に「一緒に新しい東京を作りましょう」って言ったんですよ。だけどそれまでの労働組合っていうのは反合理化闘争っていうのでやらないとだめなんで、戸惑ったんです。太陽なんです。北風には強かったんです。で結局その太陽と付き合うことができずに…。論文の最初に引いたのは丸谷オ一の『裏声で歌え君が代』っていうんですが、たまたまみたらどんぴしゃの箇所があったんでまさにそういうことです。魅力的な女なんだけど、ここで言えばね、非常に差別用語を使って申し訳ないですが、魅力的な女なんだけど危ないから別れたと。別れてよかったなと思ってるんだけどなんか惜しかったなみたいなそういう（笑）そういう思いを労働組合が持っていたのが、多分美濃部都政下だったんじゃないかなと思いますが。その後鈴木保守政権になって、明らかに組合はほっとしています。「あ、これだよな。おれたちが一番やりやすいのは。」北風を吹かせてくれて、あとは裏で交渉して、ちゃんと想定内のところへ落ち着かせるという、典型的な日本の労使関係のやり方ですよ。表ではバンバンにやりながら、裏では着地点を見ろというね。美濃部はそうじゃなかったんです。着地点見えなかったんですよ。ですからもう、特に東交—交通局ですね、都電引っぺがして、大変なときだったんです、あの時。200キロあったんですから。都電走りまくっていた東京が、数年で全部都バスに変わったんですが、全部残ったわけじゃないですから。非常に大変な時に美濃部が出てくる。元々美濃部は組合が担いだんですから。そういう意味じゃ太陽なんです。だけど太陽だからこそわからなかった。ブレアと似ていますね。ブレアときもそうです。ブレア、保守政権から戻して労働組合が期待したんですが、北風じゃなくて太陽だったんです。ブレアっていうのは元々組合関係じゃなくて、協同組合関係、生協関係だったんですあの人。肌合いがぜんぜん違うんですよ。ですからブレアとTUCは仲悪かったですよね。それはやっぱり太陽だったからなんですけど…そういうことを含めて…。最後の『地方社会史・労働運動史研究の現状』これも、雑誌、ここにおいてありますよね。これね、これ私バイブルのようにして今見ているんですが、あの全国の地方労働運動史・農民運動史を全部読んだんです、この人ね。それにコメントつけているんですよ。ここに緑の雑誌がありますけれども…これほんとにそういう意味では為になりますね。で、その最後のアンドルー・ゴードン、ハーバードの先生ですけどこの人は実は地域史をやっていたというのを最近もう一度思っているんですが、この英語で書いてある、『Labor and Democracy in Prewar Japan』、これ大正デモクラシーの労働運動史からの読み替えです。特に南葛という東京で一番労働運動が活発だった今で言う墨田区、それから江東区の辺の労働運動の話をずーっと原資料に基づいて書いていますね。それから最近翻訳が出ました『日本労使関係史 1853-

2010』(2012 岩波書店)。彼の元々は博士論文ですが、これは一応日本の近代労使関係史を総監したものであるということで、或る意味これまでの日本人がやってきた研究に乗っかっているとは言いながらも、京浜の話なんです。で、京浜の労働運動史っていうのはありそうでないんですよ。京浜の特に職場に行っちゃんと調べた労働運動史としてはこれだけじゃないですかね。

【休憩】

何かご質問が有ればどうぞ

(あ) 感想ですが、先週実はお聞きしましたけれども、東淀川のね、全金横丁あるじゃないですか。これ今実は大阪市淀川区なんですけれど、私の住んでいる近所なんです。これね、41頁のところはまだでしょうけれど1964年やから…

武田薬品があるでしょう。あれが一番大きいんですよこの辺でね。武田薬品は独立組合ですからね。

(あ) ええ、真ん中のところに…これが後々新幹線が走って、これ今、枠に囲ってありますけれども…

そうなんですか。ということは新幹線に切られたんですね。下くぐれるんですか？良くあるんですよ。大きな道路や鉄道が引かれるんですが、引きやすいところってあるんですよ。値段が安いとかあんまりわあわあ言われなとか。商店街とか自民党の町内会長ががんばっているようなところはまず通らないですよ。こういうところは通るんじゃないですかね。タイガーってまだ有りますよね。

(い) タイガー魔法瓶は有ります。タイガー計算機はもうない。昔の手回しの計算機。ここから全金大阪地本の副議長が出てるんですわ。去年なくなったんだけどね。そのとき賃金闘争で男女差別賃金やって、全部の票に書くんですよ、全体の賃金を。で、一定の線から下の人を上げる。そしたらやったのは女性差別賃金なんだけれども、守衛さんとか下層に置かれている人たちの賃金も全部上がって、それで組合婦人部、ものすごい権威が上がってありがたいありがたいといわれたという。

で、今会社がないんですか？

(い) ないです。今計算機が要らないじゃないですか。

変えられなかったんですね…。じゃ組合もなくなっちゃったんですね。

(い) ここは活動家が…浜田送風機もそうですし。もう全金のツワモノが一杯出たところで。

非常に面白いのはこれ、下請けがないでしょう。つまり下請け横丁じゃないんですよ。全部違う職種が並んでいるじゃないですか、業種が。だからそれぞれそれなりに作っていたんですよ。やはりこういうのはグローバル化の中できついですよね。これがたぶん、東大阪とか大阪のきつきの一つの象徴なんだと思うんですけども。

(う) あの、この話とは違うんですけども、泉州のほうの繊維っていうのが…これがどこか載っているのはいないですか。

あのね、大阪社会労働運動史は泉州、何時も別枠で乗っていませんか？

(う) なんで聞いたかって言うと、今、公立病院の再編問題で、あの当時あんなに小さい市でも病院ができてくるんですね。それ全部繊維と関係あるんですよ。つまり繊維の労働者をすぐ結核の場合、収容する、職場復帰させる為にね、自治体が自治体病院作るんですよ。今は結構民間病院が入っていますけれど、民間病院を作るだけの力がなくて全部、その…作っていくんですね。だからそれとの関係を…

いやもちろん関係あると思いますよ、労働組合が押していると思いますよ、後ろから。もちろん経営者も…お金の問題ありますから、作れ作れって言うでしょうけれども。やっぱり労使って言うよりも地域の地場産業が一つの大きな機動力になって地域が動くという…。例えばさっき言っている北陸の話でも地場の中堅企業の労働組合が地域の労働組合のトップですよ。要するに地場産業としての影響力だと思えるんですよ。で、面白いのは春闘の時に、いわゆる総評加盟でなくても、地域では地域共闘というのがあったじゃないですか。春闘は時々入ってくる。こういうのが多いのが裏日本とか地場中堅がある所ですよ。地場中堅が柱を作って、だいたいしていませんから、全国金属だって、総評だってね。そうするとそういう全体にわたるようにいつも入っていない人たちも入れると。でも入っていない人たちにとっても、地場中堅がどう動くかによって決まりますから。WIN-WINなんですよ、両方ともいいんですよ。わたしはね、最近春闘を開けて良く言うんですが、春闘政策制度要求を組合だけで話すっていうのはどうももったいないなと思うんですよ。非正規だなんだって言うんだったら、春闘集会に昔のような非連合関係も入れたらいいんじゃないかと思うんですけどね。話を聞きに行ったりね。前やっていたんですよ、こうやって裏日本なんかね。そんな時だけ。

第Ⅱ部 何故中之島図書館には Great Steel Strike が複冊所蔵されていたのか

非白人太平洋運動史 (Trans-Pacific history of non-whiteness movement)

- あ) 運動情報の非対称性 (左右の発展的歴史観に基づく偏知と知盲)
- い) 運動伝播の多様性・複雑性・階続性・雑種性 (our America, their America)
- う) 国別運動史、国際運動史、比較運動史、超国家的運動史、運動の世界史
- え) 運動の空間移動による意味変容 運動精神への感情移入 運動言説と文脈転移
運動伝播インフラとしての世界資本主義 (システムが胚胎する反システム運動)

何故中之島図書館には Great Steel Strike が複冊所蔵されていたのか

では、このグレートスチールストライキの話ですが、グレートスチールストライキ (原題 The great steel strike and its lessons) っていうのは、ウィリアム・Z・フォスターっていう下にでてくる人ですが、この人はアメリカ左翼の親分って言うといいすぎですけど、一番なんていうんですかね、ボス的な存在なんです、必ずしも権力的な意味じゃなくて、キャリアの長さとその多様さにおいて、まあ…好き嫌いはあります。好き嫌いはありますけれども、殆どの人知っている人の一人ですね。この人は元々アイリッシュ…アイルランドからの移民でフィラデルフィアに来たんですが、お父さんがアイルランド独立運動に関わってお尋ね者になって…言わなくっていいことですが (笑) フィラデルフィアを含めてアイリッシュ…今アイルランドよりもアメリカの方がアイリッシュって言いますから、アイリッシュっていうのは非常にアイデンティティが強く、自分たちをアイリッシュとして何時も何時もこう…押し出すんですが、このアイリッシュでフィラデルフィアに来て、まあ、子沢山でですね、教育も受けずに中学生ぐらいからもう働くんですね。最初はまあ、色々な工場の手習いしていたんですが、そのうち船乗りになるんです。それこそ大変な航路で世界中を回ったり、あるいはさっき言った山林労働者ですね、ですから底辺労働者になる。で事実上…“hobo” ホーボーって聞いたこと有る？ 前もお話しましたよね、流れ者労働者、その一群になります。で、結局は体ぼろぼろになりながらシアト

ルの下にオレゴンっていう州が有るんですが、そこのポートランドっていう街に住み着いて、小さい農地を持ってそこでやる…そこでウォブリーズに入り、社会主義運動に関わるんですね。で、それから彼はウォブリーズのフリースピーチ闘争とか人権闘争に関わって結構有名になるんです。ただ、そのとき…前回もお話しましたかね？この「デュアリズムとボアリング・フロム・ウィジン」。日本も含めて、世界の労働運動の中で何時も問題になるのは、主流派の組織に入っている反主流は、主流派が何か自分たちの気にいらぬことをしてきた時にどうするかという…。もっと簡単に言えば、これは社会学でも良く言われるんですが、自分が気に入らぬことが起こった時にその組織に居続けるか、あるいは出るかっていう、そういう選択肢、2つしかないですよ。労働運動もそうです。エクジット（退出する）とボイス（発言する）と社会科学で言うんですが、ボイスっていうのは声を上げるんですね。この2つしかないんですが、労働運動の世界ではこの「出る」っていう、デュアリズム＝二重組合主義、つまりウォブリーズのようにAFLの主流派から出ちゃうんですね。外からやる。それから中で「ボイスする」っていうのは、“boring-from-within” っていうんですが、中から突き上げるんですね。日本のケースで言うと色々な解釈あると思うけど、例えば連合ができるまでの共産党がボアリング・フロム・ウィジンですね。反主流派になる。で、連合ができて、出て行って全労連を作った。これが二重組合主義って言って、向こうはそうは言わないかもしれないけれど(笑)、考え方としてはそういうことです。で、IWWはデュアリズムだったんです。ところがヨーロッパ、特にイギリスなんかでは「いや、そうじゃなくて中のほうにいるべきだ」。フランスなんかはそれで結構成功して、CGTっていう今でも共産党系の労働組合ありますけれど、これはその頃から中から突き上げて、どんどん戦闘化していったんですね。このフォースターっていう人はそっちを提唱して、自分でサンジカリスト同盟っていうのをやってやっていたんですが、第一次世界大戦中ですね、それを実践し始めて、しかもAFLのシカゴの支部の中でオルグになって、まずはパッキングハウスっていう缶詰工場…ご承知のようにアメリカは大きな都市—とくにシカゴには屠殺場があるんです。いたるところから動物を集めてきて、そこで屠殺して缶詰にするんですね。コンビーフなんかみんなそうですよね。アメリカはもっと大々的にやっていて、そこの労働条件というのは最悪です。ほんとに。資本主義の工場システム—フォードシステムって良く言われますよね。自動車産業が最初だって嘘です。最初、パッキングハウスです。まず誰かが切って、ここ切って、次ぎまわしてっていう、ベルトコンベアーが吊るしてある牛をただ動かしているだけで、むしろそういうパッキングハウスの方が先です。そこの組織化をやって結構成功するんです。で、そのときものすごい鉄鋼産業が繁栄していたんですが、1870～80年代から組合をつぶされて、一切ノンユニオンになったんです。そこを、この人は大々的に組織化を始めるんです。で、結構成功寸前のところまで行くんですね。これはまずいと言って連邦が入ってくるんです。で、ストライキをやめさせて結局は失敗するんですが、余りの労働条件の悪さはやっぱりそのことによって皆がわかって、数年後第三者機関が調査委員会を作って、労働条件が改善されます。ですから、グレートスティールストライキの目的は達成されるんですね。しかもその時にイニシアティブをとったのはキリスト教の教会です。だから必ずしも左が突っ張ってやったというよりも、問題提起をした…それこそ派遣村に似ています。皆に問題提起をしてそして政府も動くという。そういうパターンですね。で、この後ですね、この成功をひさげてきたばかりの共産党に入って、そこのリーダーになるんですが、これにはちょっと色々な逸話が有ってですね、ジョン・リードの『世界をゆるがした十日間』というロシア革命のルポルタージュですけれども、あれ書いた人がですね、ロシアに行っていたんですが、フォースターのグレートスティールストライキ、これ自分がやっ

たことを纏めた本です。これをレーニンに渡すんですね。当時ロシア共産党は足場がないわけですよ、他の国にね。で、自分とこの労働組合なんてたいしたことない…農奴の、農民の国ですから。どうやっていいかわからなかったんですよ、正直言って。で、これをモデルにして、反主流派として、統一戦線を張るやり方を考えたという話が有ります。つまりこのウィリアム・Z・フォースターのこの本がネタ本でレーニンを初めロシア共産党のその後の労働運動路線が…統一戦線路線ですね、できたという話もあるくらい影響力があった人で、それからそのアメリカ共産党の創立期、1910年代、1920年代をやるんですが、大変苦勞して、本当に身体を壊してですね、一番盛り上がる人民戦線の時代、この人は一線引いています。むしろこの人は結構典型的な闘争主義的な方ですね、人民戦線のやり方には必ずしも賛成しなかったんじゃないかといわれていますけれども、その前に自分たちの反主流派を一杯作ってですね、それがAFLからCIOという新しい労働組合を作るんですが、これが非常に盛り上がる。そのきっかけ、機動力になったのがこの部隊なんですね。ですから準備したと言ってもいいような人なんですが、その1945年に人民戦線が崩れて冷戦が始まると、前の路線が否定されてこの人がまた引っ張り出されるんですね。で、引っ張り出されてまた闘争主義的にやるんですが、まあ、ご承知のようにアメリカでは冷戦で共産党が復活することはない、この人は1960年代にモスクワで亡くなっています。そういう意味では典型的なスターリニストだったといえますが、ただこの人にはそういう多様な経歴からですね、なんだか良くわからないというイメージが有るんですよ（笑）。さっき言った、現住所は何処なんだろうと。この人、本当はサンディカリストなんじゃないかっていう見方をとっている人たちもいます。ですからそういう意味で非常に面白い人なんですが、この人が書いた「The great steel strike and its lessons」っていう本が中之島図書館に4冊ぐらいあったんですね。で、当時なんでこんな本がこんなところにあるのか。一つは検閲が緩んでいます。それまではまずこんなもの買いません。もう一つは中之島図書館っていうのは別格扱っていか、一番立派な当時の図書館ですので、割合と自由にやれたんじゃないかと。これ、住友がお金を出して作ったんですが、住友は大阪をシカゴにしたかったんですね。で、ずいぶんお金出しています、その近代的な色んな建物作りにね。ですから中之島図書館というのはそういう意味では近代大都市にふさわしい図書館としてそろってくるんですが、じゃ、誰が読んだんだろうと。そういう意味では当時—これですね『大阪社会労働運動史第一巻』「第7章 運動の広がりと対立 1922-1924」、これを読んでいただくと、大阪の状況はわかりますが、大阪は第一次大戦前あたりから急速に重工業の都市として発展してきます。同時に争議も多発してきます。東京よりも経済も発展していますし、運動も発展しています。覚えていらっしゃると思いますが、1921年三菱川崎造船のストライキが有りますよね、ゼネストが。あれ、引っ張ったのは賀川ですよ。賀川豊彦は鈴木文治という総同盟の指導者と仲がよかったんですが、あきらかに鈴木文治よりもラジカルでした。だけでもさらにラジカルな部隊から激しく批判されてですね、賀川は関西労働同盟会っていうのを大阪に作るんですね。これがアナキストとボルシェビキっていう当時の左翼の戦いの舞台になって、もみくちゃになって賀川は1922年、労働組合を退いて農民運動へ移るんです。これが農民組合を作るきっかけになるんですが、当時の大阪というのは、産業的にはかなりアメリカあるいはシカゴに匹敵するような、少なくとも外見的には匹敵するような状況があり、かつ運動状況においても極めて活発な状況にあったので多分こういう本を読む人がいたんだろうと。事実このとき荒畑寒村が大阪にいました。で、日本労働新聞で一書庫に有るので見ていただいたらいいと思うんですが一荒畑寒村が編集していた新聞があるんですが、そこは創刊から1年、2年、3年と続いていくとですね、どんどん話がラディカルになっていくのがわかります。しかもその中の挿

絵がですね、あの面白いのは当時IWWが、アメリカの「The Liberator」などのですね、過激な雑誌に書いていた漫画があるんですが、これがそのまま乗っかってくるんですね。…こういう、いかにもアメリカの漫画でしょ？ だけどちゃんと日本語が書いてあるじゃないですか。訳しているんですよ。だから見ているんですよ。で、勝手に取ったんだと思うんですけども（笑）。これがですね、例えばある時になってくると、明らかにアメリカの現場ではAFLのボスであるサミュエル・ゴンパーズに戯せられている人に対して、賀川の名前が書いてあるんですよ（笑）。つまり舞台は違うけれども同じ戦いをしているんだという自己認識があるんですよ。反主流派として主流派を突き上げている流れがある。つまり殆ど同期化してシンクロナイズしているわけですね。すくなくとも大阪のほうからです。アメリカの方は殆ど眼中にないです、日本で何が起こっているかなんていうのはね。でも大阪のほうは自分たちはアメリカのこの人たちと同じような戦いをしているんだと。で、この写真—グロテスクな写真ですが、これ、この本から抜いたんです。で荒畑はこの本を実は訳しているんです。途中まで。ですから、英語を読んでただけじゃなくて、彼はこの本を日本人に読ませるようにしたんですね。で、実は運動の側だけじゃなくてですね、むしろ押さえる側の方はもっと危機感を持っていて、それがこの間、ウォブリーズの時にお話した内務官僚がああ時に一番良い本を書いていた。つまりウォブリーズもデュアリズムとポアリング・フロム・ウィズインの区別なんか付かないですから、あの人たちは。要は日本にもああいうラディカルな運動が起こるぞという危機感を持っていたからこそああいう本を書いたわけで。日本は明らかにシカゴの様子を見て、これは他山の石ではないというのを、朝日新聞が書いています。ものすごくフォローしています、このシカゴの鉄鋼ストライキについてはね。ですからこの事実がですね、私に非常に色んなことを思い起こさせるんですが。

II-あ) 運動情報の非対称性（左右の発展的歴史観に基づく偏知と知盲）

今言ったようにアメリカは眼中にないんです、日本で何が起こっているか。こういうことって良く有りますよね。日本は知ってるんだけど相手が知らないという。特に後ろから来た国っていうのは良く有ります。先進国は先進国同士あるいはさらに進んでいるほうしかみない。例えばアメリカの運動の拠点、インテリが特にいますから。ヨーロッパばかりですよ、見てるのは。何時も彼らはそういう意味では自己卑下しています。ほんとにね、アメリカのアカデミズムのヨーロッパに対する自己卑下ぶりっていうのは今でもはっきりしています。ですから、ヨーロッパから留学生、殆ど来ません。何でそんな後進国へ勉強しにいかんやならんのかと。アメリカのことを研究するなら行きますけれども。アメリカの留学生っていうのは殆ど非ヨーロッパ人です。それは明らかにアカデミズムの上下関係がお互いにあるからでしょう。同じことがアメリカと東アジアとの関係にも言える。今アメリカから留学生が来るのはビジネスチャンスがあるからですよ。アジアに来るのは。中国語を学ぶ。中国へ行って中国でビジネスをどうやってやったら良いかを学んであって、そんな東アジアの文化を習いに来ているんじゃないんですよ。で、そういう中で運動も同じように…ある種の人種差別に近いですね、そういう意味ではね。劣った人種の人たちのことは学ばないという。運動の世界も非常に冷酷な体制側と同じような意識構造がちゃんと反映しています、そういう意味では。そういう意味ではこっちしか知らないことなんです、こっちしか知らないからと言ってみないというのはどうなんだろうなという思いが有って。じゃあ本当にこっちだけが勝手にしてきたことなのかなというのが、今私には問題意識としてあって。例えばアメリカとの関係で本当にいろんなことが起こっているんですが、例え

ば「Great Steel Strike」をこの時期東京で手渡された人がいるんですね。高野実です。高野実はこのとき早稲田の理工を出て労働運動をやろうとして、大山郁夫という有名な政治学の先生に紹介されて猪俣津南雄という、労農派の有名な学者ですが、この人はそれまでアメリカで片山潜の下で共産党の活動をしていたんですね。で、ヨーロッパの在米社会主義団っていう小さな集団があってそこにいた人で、ほんとはモスクワに行きたかったんですが、モスクワからお前日本に行けといわれて、日本に帰ってきて早稲田の先生をしていたんですが、彼を紹介されて、その高野実が「君は何をしたんだ」と聞かれた時に「僕は労働運動をしたいんです」というと、こともなげにこの本をうずたかく積まれた洋書の山から出されたって言うんですね。高野実の「私の一番大切な2時間」でしたかね、エッセイに書いてありますけれども、その様子がね。ほんと渡されてこれ読めといわれたんです。で、高野は当時英語を読めたのかなと思って、学事史という大学の歴史が書いてある本があるんですが、当時の理工学部のカリキュラムを見たんです。英語載っていましたが、だから読めたんだろうと思いますけどね（笑）。英語を取らなきゃいけないんで辞書があれば読めたと思います。そんなに難しい本じゃないですから。このころから日本でもそういう統一戦線方式が敷かれたというのは、左翼の色々な立場の人たちが認めています。この本が日本の左翼労働運動のひとつのパターンを作ったきっかけになったんだということも、その業界では定説になっていますが、実はそんなに単純な話じゃなくて、それが来た経緯とか、それが渡されてその後どうなったかっていう話をこれからおいおいしていきますけれど、ある意味ここで書いた「運動情報の非対称性」って、これスペースがないんで難しい書き方しましたけれども（笑）、…要するに先に行く人たちは、後ろからついてくる人たちのことなんか関心ないんです。で、後ろから付いてくる人たちも、先に行った人たちが書いたことをまずモデルにしますから、そういう話が乗っからないんですよ。先に書いた人たちの話をそのまま引き写ししますから。だから日本はいつまでも遅れているとか、ここは欠けていたという話になるんですが、そういう中に埋もれてしまう…でも実際にそういう運動が伝播するっていうのは、そんな企業の組織みたいに情報が綺麗に上から下へ流れるんじゃないで、私、天気図だと思っています。どう動くか解からない。あるときジェット気流によって動きが上に行ったり下に行ったりする。その時々事情によって等圧線が色々変わってくる、その中であるときこういう運動はここでは出来るけど、こっちでは出来ないみたいなことがね…起こると思うんですね。蛇足になりますがこないだアメリカで超台風が来ましたよね。ものすごい台風で大変な被害がありました。あれはたまたまジェット気流が見たこともない動きをしたのでああいう風になったんですが、同じようなことは人間社会でもあるだろうなと。ですからその時々天気図のようにして運動の動きを見ないと解からないんだろうなと思っています。

II-1) 運動伝播の多様性・複雑性・階統性・雑種性 (our America, their America)

それからその「伝わり方」もですね、例えば左は左の物を、右は右のものを、あるいはある党派の人はその党派の人をという風に、非常に直線的に我々は見がちですが右が左を学ぶなんて良く有りますよね。宮田義二、鉄鋼労連の。彼の運動原則は彼が共産党時代に培ったものですよ。割らないっていうのも多分統一戦線方式だと思います。鉄鋼労連はそういえば抜かなかった、八幡を割らなかったのもそこから学んだものだと思いますね。ですからその人が、どういう風にそのことを思うかっていうのは、非常に複雑な中で解かるわけですよ。あの、今の人たちはアメリカに対して非常にドライだと思いますけど、われわれぐらいの世代から前の人たちは、アメリ

■ 第2部 研究実施のあらましと成果

カに対して二律背反ですよ。好きなんだけど嫌いなんだ、嫌いんだけど好きなんだという(笑)。複雑な思いがあると思うんですよ。で、それを私はここに「our America, their America」と書いたんです。好きなアメリカは「私のアメリカ」、嫌いなアメリカは「あいつらのアメリカ」と。そういうちょっとアメリカの複雑なところもあるとおもうんですね。

II-う) 国別運動史、国際運動史、比較運動史、超国家的運動史、運動の世界史

なので、運動の流れというの、もうちょっと丁寧に追っていかないといけないんじゃないのかな、と。そうするとさっきから言っている国別の運動史とかね、「国際運動史」って要するに「国際労働運動組織」の歴史ですから、今はね。組織史なんで。それから比較っていても、切り離して比較したら余り面白くないことがあるなあと。いわゆるここで、「超国家的」と書きましたけれど、これは別に「超」国家主義のことではなくて、“trance-pacific”あるいは“trance-national”という、インターナショナルとは違う、国境なんか関係なく色んなものが動くことを伝えたくて言ったんですが。

II-え) 運動の空間移動による意味変容 運動精神への感情移入 運動言説と文脈転移 運動伝播インフラとしての世界資本主義（システムが胚胎する反システム運動）

実際にこの1930年代までに移民が色々、この太平洋内で動いていましたから、この人たちがいる意味「担ぎ屋」になるわけですね。1930年代に特高が一番気にしていたのは何かって言うと、船員が運んでくる、あるいは海岸に流れてくる怪文書です。当時共産党は中国とアメリカに日本向けの資料を送る拠点を持っていました。担ぎ屋が船員です。それは共産党系の担ぎ屋もいたけれども、ただ頼むだけの担ぎ屋もいるわけですから、検閲できませんから、その人たちはね。それから本当に海から流している場合があるんです。で、海岸で「そのうちダンボール行くから、取っついて」って連絡すればいいわけですから。だからそういうのを特高は何時も見ていたみたいですね。つまりそれぐらいのことをして流していたというのをお互い知っているわけですよ。なので、そういう意味では伝播の仕方っていうのも色んなやり方があって、しかもその受け取り方が人によって違うわけですよ。ぜんぜん違うものをみながら、普通そうは思わないだろうというリアクションを起こす人もいるし、インスピレーションというのは色々有るわけですよ。…何処までいってもたまねぎの皮むきで終わらないというのがあるんですが、私としては今までの運動史というのを何とか書き換えられないものかなあと思っているんで、ずーっとこういうことを考えています。

ブレア・A・ルーブル『セカンドメトロポリス』

もう時間ですので終わりますが、この2番目のですね、ブレア・A・ルーブル『セカンドメトロポリス』(Second Metropolis: Pragmatic Pluralism in Gilded Age Chicago, Silver Age Moscow, and Meiji Osaka Blair A. Ruble) っていう本は大阪を考える一運動史だけじゃなくって一色んな意味で面白いです。『セカンドメトロポリス』って本は19世紀から20世紀にかけてロシアとアメリカと日本の都市の歴史なんです。当時ロシアの首都はペテルブルグですね、かつてのレニングラードですね。今レニングラードと言っても誰にもわからない…私にとってはレーニンの町

なんです（笑）、スターリングラードとレニングラードという感覚なんです、ペテルブルグですね。ペテルブルグっていうのはドイツ語です。当時ロシアは西洋かぶれですから。産業的にはモスクワの方が大きかったです。それからアメリカで言うとシカゴです。首都はDCですし、他の金融とかはニューヨークにあったんですが、圧倒的に産業的にはシカゴですね。そして東京に対する大阪ですね。で、運動的にもこっちの方が非常に活発でした。なぜなら首都でないから余り国家の関心が行き届かないんですね。またそれらの都市では、各勢力の力が拮抗しているんです。そういう意味では誰も全体を抑えるほどの力がない。非常に競争的な状況だったということですね。さきほどいったボアリング・フロム・ウィズインの担い手をフォスターは、“militant minority”という言い方をします。戦闘的少数派ですね。こういうものがそれなりに生きながらえるっていうのは、そこそこ街にそういう人たちを食わせる力があるからです。ですからそんな力がなければ反対派なんて生きていけません、組織の中でね。ちゃんと生きていけるだけの底力がその街にあるという、運動基盤があるということですね。で、面白いのはそれとほぼ同じものがこの野武士団というね、野武士組ですね。これ、一説によると荒畑が作ったという話もあるんですが、まあ、賀川を批判したりですね、その後の「ボル派」という共産党の影響が強くなっていく動きの原因になったとか色々言われますが、こういうアメリカと同じようなミリタント・マイノリティがですね、ちゃんとこのとき大阪でも大きな影響力を持つことができたというのは、逆に言うと大阪は運動環境として如何に多元的かつ豊かであったかと、いうことだと思うんですね。

杉原薫・玉井金五編『世界資本主義と非白人労働』（1983 大阪市立大学経済学会）

で、最後にこの杉原薫・玉井金五という、これちょっと話が飛びますが、この玉井金五さんは最近毎年のように新しい本を出すので、あんまり有名じゃないかもしれないですが、この本は良いですね…これね、1983年でしょう、玉井さんたちが大学院を出てこういう学究で飯を食い始めた頃ですね、この本は要するに労働市場を今言ったようなある種の人種とか、階級とは違う要素一階級的ではあるんですが一ちょっと西洋と非西洋とか、そういうものをいれて考えて、非白人労働市場ということ考えたんですね。要するに世界の労働市場というのはこの時期特に世界資本主義の形成時期においては、白人である欧米人が一番上において、さらにその下の移民たちがここにいて、一番下にはそれこそ黒人とかアジア人とか移民とか底辺労働者がいるんだと。彼らはこの後これを大阪で実証するんです。これが『大正・大阪・スラム』という本ですが、要するに大阪の中にこういう構造があると。白人労働者というのは別名「特権者」ですね。今で言う正規労働者ですわ。でこの下に色んな人たちがいる。つまり、非正規ですね。で、非正規の多くを形成していたのが被差別の人たちであり在日の人たちであり、まあスラムであったと。だからそのこの人たちは大阪を世界史という巨大な中に入れようとしたんですね。こないだ私初めて玉井さんにお会いしてですね「あれはよかったですね、最近どうなんですか」って言ったら「もうやってないよ」と（笑）。まあ、30年前の話だもんなと。ぜひ見ていただいて…話は難しいんですが熱気が伝わってきます。今までの見方をひっくり返してやろうという。この杉原薫さんという人はこのときね、ロンドン大学かなんかにいて、そこへ後で玉井さんも留学するんですが、イギリスで割合とそういう勉強していたからなんだと思います。その後大阪大学に来て在日について書いたりしていますけれども。私は原点のこれが一番良いと思うんですが、例えばこういう非白人労働みたいなコンセプトで入れていくと、今までのそういう我々が常識で見ているような労働

第2部 研究実施のあらましと成果

運動史とか運動史がちょっと違って見える一つの試みで、とても尊敬している本なんです。

最後にちなみに私はこれが一番面白いと思っているんですが。ウィリアム・Z・フォースターは日本では左翼のベストセラーです。日本語の本としてはね。1950年代ですね、彼が出した本がことごとく大月書店から翻訳されているんです。

(お) 私は学生時代に読みました。

(し) あ、そんなに有名でしたか。『三つの国際ナショナルの歴史』。

(お) それと『アメリカ合衆国共産党史』とね。

(し) そうですね、それはあれですか、党員の必読書ですか？

(お) いや、そんなことはない、私は党員じゃなかったから(笑)。

(し) あのね、私が調べたのは大月書店から出ています。で殆どの大学に今言った『三つの国際ナショナル』『アメリカ合衆国共産党史』『アメリカ史』…ただしこのアメリカ史というのはアメリカ大陸史なんです。ものすごい早いです、そういう観点は。この10年、20年、アメリカではそういう見方をするようになりましたが、こんな見方しているのは、日本の本ではこのころ見たことないですね。それから『黒人の歴史』を書いているんです。これ実は1960年代に遅れて出ています。それからね、私が一番好きなのが『世界労働組合運動史』という2冊の本ですね。世界の労働運動の話が書いてある。これ皆ね、塩田庄兵衛が訳していますから。まじめな話、これがない大学図書館はちょっと危ないと思った方が良いでしょう。学問的に。もう全部入っています。で、複本で入っています。今の(お)さんの話によるとちょっとでもリベラルな人は読んでいたということですか？

(お) まあ、左翼はっていうことだと思います。大阪市立大学は。

(し) 当時の左翼は今のリベラルぐらいの裾野があったと思うんですが。大阪市立大学は読んで当たり前ですか。驚きました今、タイトルがすらっと出たので。半世紀前の本ですよ。学術書ですからね。これはちょっと名前を伏せてエピソードに書かせていただきます(笑)。…ですから、このウィリアム・Z・フォースターは日本では有名は有名なんですけどね。なぜ、その時に時代遅れで本国ではダメだった彼の本が、日本でこんなに訳されているのか。非常に面白いなと思っているんですが。キーワードは私は人種とか民族だと思っているんですよ。当時民族独立とか反米闘争に左が燃え上がっていた頃で、それにはうってつけの文献だったんだと思うんですね。アメリカではこの頃この本は見向きもされない。内部文書みたいな扱いされて。日本だけじゃないですかね、こんなに売れたのはね。これも一つの例ですね…今言った「いままでの普通の組織史や運動史では捉えられない現象」ですね。キリがないのでここで終わっておきます。

質問あればどうぞ

(と) 今日はいっぱい話が出たので補足が必要かと思うのですが…例えば「片山潜がアメリカで」って言われてふんふんって解かるかどうか…『世界をゆるがした10日間』の作者はジョン・リードです。ジョン・リードはニューヨークの当時最先端のボヘミアンであったというようなことがすっとわかるかどうか…。

(し) ジョン・リードは『レッズ』という一ツタヤで借りられます—ものすごい長い映画があるんです。この映画をみると当時のアメリカの運動状況というか時代状況が良くわかります。…「アカ」という意味です。これが出たのがレーガン政権期です。これを作ったウォーレン・ビーティーという人が脚本・監督・主演何でもやるんです。同時に必ず相手女優と結婚して(笑)。

この人は『俺たちに明日はない』というインディ映画をつくるんですが、そのギャング映画は、コードで当時絶対写してはいけないという殺人場面、最後FBIに撃ちまくられる場面で終わるんです。ハリウッドでできなかったんでインディペンデントなんです。反骨野郎ですね。別にアカとかでなくて。『レッズ』は学生に見せると飽きていました（笑）。内容は偏っています。これを見るとフォスターの本の背景なんかわかるかもしれません。

(と) 参考文献を挙げましょうか。でも全部読むのは大変だと思います。

最初から私が言っているように、これはあくまでも私が自分の研究歴を回顧するようなものですので、お分かりになる必要はまったくありません。私でさえもあやふやなところではありますから、信用すると危ない部分も無きにしも非ずなんです。私がこういう話をしている時に、ぜひ皆さんに思っていたきたいのは「そんなことしていいの」と思っていたらそれで十分です。そんな考えかたしていいのと。とにかく皆さんの今までの常識をはずしていただく為にこんな話をしているわけで、知ってる知らないは全然関係ないです。今までこう書いてあるから、とか、これはこういう理解だといわれているけれどというそういうものに対する呪縛をといていただきたい。研究はチャレンジです。当たり前だと思っていることにチャレンジするのが研究ですね。我々の業界で良く言う、Why-Questionを作れというんです。研究する時にWhat-QuestionとかWhen-Questionとか事実関係はやらなくて良いと。チャレンジしろ、なんでそうなのと。当たり前だということにチャレンジすることが研究ですね。日本ではそれをする黙ってろになるんですが。それさえ感じていただければ十分です。

(と) あと、ちょっとだけ。今日のレジュメの(オ)の「規制の時空観念を超えた想像の共同体としての地域労農運動」と書いておられるんですけど、キーワードで「想像の共同体」という言葉が出てきます。これは直接労働運動史には関係ないんですが、ベネディクト・アンダーソンという人が書いた有名なナショナリズムの起源について書いた本があってそのタイトルが『想像の共同体』なんです。ナショナリズムやグローバリゼーションを考えると必読文献の一つです。最近これの新装版が出まして「定本 想像の共同体」というのが出まして、割と読みやすい。『ベネディクト・アンダーソン グローバリゼーションを語る』という新書版も出ていて、『想像の共同体』の解説本でもあります。これはアンダーソンが日本に来た時に講演した内容が書いてあります。直接は労働運動史に関係ないけれども教養として知っておいていいんじゃないかなと。

(し) この人は専門が東南アジア史なんです。東南アジアの研究をしている時にそういうことに思い至ったようなんですが、本の最初に何が書いてあるかといえば中国とベトナムが戦争していたときで—この人は左翼というかアナキストです—「なんでインターナショナリズムの社会主義国が戦争するのか」と。ナショナリズムがどんなに強いかということに彼は思い至って、左翼でさえなんでナショナリズムに引っかかってしまうのだろうという、そういうところからナショナリズムの起源という。で書いてある話は今までの固定観念を全部ひっくり返すような話です。面白い本ですが「想像の共同体」の「想像」というところからわかるように、コミュニティというのは今日の前にあるんじゃないで、頭の中にあるんですよ。だから隣にいてもコミュニティの関係になれない人もいれば遠くにいる知らない人とコミュニティになれるんですよ。場合によっては天国にいる人になれることもあるわけですよ。頭の中の問題だと。どうやって頭の中で知らない人を自分の仲間だと思うかということについて、色んな装置があったという考え方ですね。一番彼が強調するのはコミュニケーションツールですね。印刷物です。まだインターネットの時代じゃないんで。いかに出版というものが皆を一つに纏める上で大事だったかという

第2部 研究実施のあらましと成果

ことを書くんですが。…この本は20世紀の名著に入るんじゃないですかね。

(と) こういうことが頭に入っていないと、戦前の左翼運動がなぜグローバル化の中で展開されたかっていうのが解からない。先生が大阪の社会運動史といいながら話がすごく広がったのが…特に戦前の左翼、共産党の人たちは日本革命といいながらそれは世界革命の中で考えていたわけで、日本共産党は「日本」共産党という名前じゃなかったし、それは世界共産党の日本支部だったわけですから、元々結党されたときは。そういう風なことがこのベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』を読んでいるとわかるんじゃないかなと思いました。

(し) 私はそんなことは思ってもみなかった(笑)。これなんですよ。話している本人と聴いている本人は別なんです。これレセプションセオリーって言うんですが、今までの図書史というのは書いた人の視点でずっと書かれていたんです。2～30年前から読書史というのが出てきたんです。読み手のほうです。どうやって読者が形成されてきたかというね。この本がどう読まれてきたかというね。私がどう言ったかはいいんです。皆さんがどう思われたか。

(と) 質問は先生にされてもちろん結構なんですけど、メーリングリストに投げてもいいし、参考文献もお調べしますので、こんなこと聞いていいのかなとか思わずに、どんどん聞いてください。

大阪社会労働運動史 第3回 講義録 (2013年1月23日 於:エルライブラリー)

私のほうから…責め立てるつもりは全くないのですが、皆さんの中からどういう研究をするのか、そろそろ情報を共有してもいいのではないかという声も上がっていますので、今日はもちろん結構ですが、次回あたりから少しずつそういう情報共有をしてもいいかなと思っています。ただしそれも必ず言えよではなくて、言える人から言えよという考え方で、それから一度言ったら変えちゃいけないということも有りませんし、自分でそういうことをするつかえ棒程度に思ってもらって結構ですので、そろそろ何をお書きになりたいかについて、時々お考えいただければと思います。次回あたりから、もしそのことについて話してもいいとお考えなら、少しの時間で結構ですので、こんなこと考えていますということをお話いただければと思っていますので、ちょっとお考えいただければと思います。

それからこれも受講生の中から前に上がった声ですが、皆さんそれなりに労働運動や社会運動に現在も関わっていらっしゃる方も一杯いますし、そういう意味で、今何を考え、しているのか、ということについても一度共有する機会が有ってもいいのではないかという声もお聞きしています。私もそうだと思います。これについてはまた、この授業でというよりは日をまた変えて、ひよっとしたら論文を持ち寄って皆で読みあうような、1日とか1泊2日の合宿みたいなものも、夏ぐらいにはあっても良いのかなとおもいますので、せっかく一緒に勉強している仲ですんで、色んなことを少しずつ共有したり議論したりですね、お互いに知恵を貸しあうようなこともあっていいかなとは思っていますが、これも皆さんのお考え次第ですんで、一応それだけ申し上げておきます。

第Ⅰ部 労働運動史再訪——私的研究遍歴

●米国新運動史と「記憶の組織化」

A、「60年代」活動家の「延長戦」→

学匠的活動家（もう一つの米国の発掘）→

公共的歴史家（もう一つの米国の名誉回復）

B、始まりのE・P・トムソン『イングランド労働者階級の形成』（旧左翼史への挑戦）→

ジェームズ・グリーン『歴史があなたのハートを熱くする』→

アンドリュー・ゴードン『日本の労使関係』

労働史から民衆史へのハワード・ジン『民衆のアメリカ』

上からの歴史、下からの歴史、オルグ史

C、日本の対応例 — 自由民権運動史 色川大吉『明治精神史』（1964）

I部のほうはいつものように私がしてきた研究の途中経過を逐次お話させていただきます。1990年代真ん中ぐらいに私がアメリカの労働史と出会った頃のことをお話したいと思います。

II部については、いわゆる昭和10年前後、1930年代の世界的には人民戦線といわれた統一戦線の時代の大阪の動きと、実はそれが太平洋を越えたアメリカの動きとつながっていたという話をご紹介します。以上が今日のお話の大きな内容です。

第Ⅰ部 労働運動史再訪——私的研究遍歴 / ●米国新運動史と「記憶の組織化」

A、「60年代」活動家の「延長戦」→ 学匠的活動家 → 公共的歴史家

アメリカ新運動史と「記憶の組織化」ということですが、労働史=Labor Historyといいますが、興味深いことに日本では例えば歴史家、あるいは歴史学会の中でこの「労働史」という言葉は殆ど聞かれません。現在も聞かれません。過去も聞かれません。ただヨーロッパ、イギリスまたはアメリカではこのレイバー・ヒストリーというのはかなり早い段階から言われています。そういう雑誌もあります。ここにお持ちしましたがこれ『Labor History』という、現在も出ています。で、1960年にアメリカでこれが出されたんですが、もともとイギリスではもう少し早くこの手の雑誌が出ていましたし、現在はこのほかに『International Labor and Working Class History』という、要するにアメリカやイギリスだけでなく、いろんな国の労働史を掲載するような雑誌も出ています。今から申し上げるように、かつてほどの盛り上がりは今、世界中レイバー・ヒストリーっていうのはありません。ありませんが、依然としてこういう雑誌が出ているということですね。これはお返ししますが。

数年前にアメリカで新しく出た『Labor』という雑誌があるんですね。“Studies in Working Class History of the Americas”っていうことで、これは今から申し上げる '60'sですね。アメリカの団塊の世代で、アメリカの場合 '60'sというのはもう少し厳密に言うと、ベトナム反戦とか学生運動やヒッピーをやった人たちのことを指します。そういう意味では活動家系の学者さんたちが集まって、数年前にもうそろそろおれたちも引退だと、最後に一発面白いことやったろうやないかと（笑）いうことで、今お返ししてる『Labor』は、既存のものは面白くないなど、新しいのを作ろうということで作ったんですが、中を見ていただくとただの研究論文だけじゃなく

て、今どんな活動をしているのという報告をしあうような部分もあったり、最近ではここに集まる人たちが「労働運動はこれからどうしたらいいんだろうね」ということを皆で書きあって本を出したりしています。もうみんな60、70の世代なんですけど、まだ '60'sの心意気とスタイルを維持している人たちが、アメリカには結構いるということですね。もともと、なぜこれを「New」というか、という問題があるんですが、この「レイバー・ヒストリー」というのは、もともとは制度史—組合の組織の歴史とか、労使関係の制度の歴史とか—そういうものが主流でした。これは皆さんにとっては釈迦に説法だと思いますが…あの一、「制度」っていうものは、実は経済学においては、割合とややこしい問題であります。つまり、自由なマーケットに何処まで人為的な操作をすべきなのかというのは、色々議論があるんですね。制度っていうのは、ある意味マーケットに指を突っ込む話ですよ。例えば労働者と経営者が個人で契約を結ぶんだから、労働市場はもうそのままいいんじゃないですか、と。なぜそこに労働組合なんか作るんですか、と。あるいは、なぜそこに労使関係の制度を入れるんですか、なぜそこに労働基準の制度を入れるんですか、という議論が当然出てくるわけですね。従ってその制度を研究するというのは、ある意味、市場っていうのはそのままではいけないんじゃないですかと。それなりに手を入れないといけないんじゃないですかという、一種の市場に対する政治、あるいは社会の力を加えていく、そういう考え方がこの「制度史」には入っているわけですね。アメリカの場合そういう考え方が出てきたのはいわゆる20世紀の初めぐらいです。当時“Progressivism”という「進歩主義」という言い方をしましたが、1870年代ぐらいから20年間の間、アメリカはものすごい勢いで経済発展をします。この経済発展は本当にやりたい放題の経営者と、それに対してどんどん労働条件や経済条件が悪化していく労働者の闘いの日々でもあって、“Gilded Age”—なぜそういう言い方をするのかわからないんですが—この時代のことを日本語で「金ぴか時代」といいます。要するに一見大金持ちになった人たちもいるけれども、華々しく見えるけれども実態はひどかったよね、と。そういう意味で薄っぺらという意味も入っているのかもしれない。皆さんご存知なら教えていただきたいのですが、とにかく格差が広がり、無法状態が続き、労働者と経営者のぶつかり合いも非常に暴力的でした。1886年、そんな中で、8時間労働制の運動が始まります。それまでは10時間12時間当たり前だったんですが、これではダメだと、8時間労働制運動が起こって割合と成功するんですが、1886年にシカゴでこの運動が広がった時に、当時無政府主義者、アナキストと言われた人たちが爆弾を投げるんですね。当時そういう暴力的なテロ行為はかなり頻繁に行われていまして、警察官に爆弾を投げて何人か亡くなるんです。これ「ハイマーケット事件」といわれています。

ハイマーケットというのは“hay”馬の飼料ですね。何処の町でもハイマーケットという駅が今でも有ります。昔交通機関が馬ですから、馬の飼料を取引するところが何処にでもあるわけですね。日本で言えば魚市場みたいなものです。そのハイマーケットで爆弾事件が起こって、結局そのまま実行犯が捕まらないんですが、当時のシカゴの保守派の政治家が、「そういうことをそそのかした人がいる、それも同罪だ」ということで5人ぐらい捕まるんですね。パーソンズという非常に有名なアジテーターがいたんですが、彼なんかは筆頭で「彼が先導した」と。彼は実は隠れていたんです隣のウィスコンシン州に。

ところがどんどん自分の仲間が捕まって、彼が捕まらなるとまた新たな人が捕まるとなって、彼は出てくるんですね、自分から。で、余りにも無茶じゃないかと。教唆をしたからと言って、その人に罪をかぶせるのは、とか色んな大きな議論になるんですが、結局彼らは絞首刑になります。これが非常に有名なハイマーケット事件なんですけど、この数年後にアメリカ労働総同盟、

AFLの会長のゴンパーズという人が、このことを我々は世界で覚えようと。我々の労働運動で犠牲になった人たちがいるから、この人たちのことを覚えようと言ってこれからは5月1日、この人たちの思い出す日を作ろうと言ったのがこれがメーデーです。ですから興味深いことにメーデーは全世界中で祝いますが、アメリカが発祥なんですね。ところがアメリカでメーデーはしません。アメリカの労働者のお祭りは9月の第1週の月曜日、学校が始まる前の月曜日なのですが、「レイバーデー」と言います。このレイバーデーがどうしてできたのかいさつがわからない…どうもメーデーに対抗して作った節もあるようで、アメリカではメーデーは祝わないんです。レイバーデーなんですね。で、それも別に行進をしたり集会なんかありません。どちらかという初夏休みが終わるな、スーパーの大安売りがあるとかそういう意味なんですが、社説は一応それっぽい話は出します。出しますが、最近面白いのはその社説の中で、「アメリカは元々メーデーを言い出したのにやらないね」と。「世界はやってるぞ」というようになってきて、なんかアメリカも考え方が変わってきたのかなと思います。お話ししたかったのはメーデーの出発点になるような乱暴な時代があったのがこの1870~80年代で、アメリカはこの頃世界の資本主義のリーダーになっていくんですね。膨大な資本蓄積と、強力な資本家とそれをバックアップする政府の体制ができてくるわけですが、しかしこれは余りにも社会としてひどすぎるということで、20世紀の初め頃から進歩的知識人や専門家が、もうちょっと社会を制度的に生き易いようにしようという中で、この「プログレッシビズム」が出てくるんですが、これが労働組合の組織を作ったり、あるいは労使関係の制度を作ったり、そういう「市場に制度を入れていこう」ということを言い始めます。この頃からレイバー・ヒストリーというようなあるいはレイバーというものを研究することが始まるんですね。繰り返して言えば古いレイバー・ヒストリーは制度や組織の話、これに対して「新労働史」“New Labor History”というのは先ほども言いましたように、'60'sの活動家の「延長戦」一闘いですね。学生運動やベトナム反戦やヒッピーを初め新しい生活スタイルを始めた人たちが20代の後半から30代になってきて、もう一つのアメリカを我々は作ろうとしたけれども、こんどは我々はそれを歴史の中で探して行こうと。そういうことで続々と皆が大学院生になって、もう一つのアメリカの姿を掘り下げる作業を一齐に始めます。そのきっかけになったのがこの(B)の「始まりのE・P・トムソン」という、これですね。

B、『イングランド労働者階級の形成』→『歴史があなたのハートを熱くする』→『日本の労使関係』

これ信じられますか？2万円ですよ？…誰が買うんだって思いますが(笑)。実際には厚さで言うと1/3、普通に買えるペーパーバックで何てことない本なんです。なぜか細かく訳していくと日本語だとこれぐらいになっちゃうんですよ。ところがこの本が出たのが1960年代の真ん中です。日本で翻訳が出たのが2003年、半世紀近く、日本が一番遅いと思います。翻訳好き、横文字好きの学者が一杯いる日本でなぜかこの本は、世界中でこの本を知らない歴史家はいないくらいバイブルに近い本なんです。なぜか日本では英語で読んでいる人がいても、翻訳が出なかったのが2003年に出たんですね。

このE・P・トムソンという人は新左翼ですね。イギリスのニューレフトです。要するに労働者階級は党が指導するんだという古い左翼の考え方に反発した人たちですね。なにか党が「労働者階級とは誰か」「労働者はどうすべきか」を教えるんだという古い考え方に反発すると同時に、労働者階級を制度史から見るような、たとえばこの時代ならいくらぐらいの賃金をもらってこういう生活をしている人という風に客観的に決めてしまうことにも反発したんです。この人が

言い始めたのは、労働者階級というのは、自分たちが労働者階級だと思えばそれが労働者階級なんだと。もう少し言うと、どうやったら自分たちは同じ仲間だねと思うようになるかといえば「あいつらとは違う」という、敵を発見して初めて自分たちは仲間だと思うようになる。ここで彼の言葉で言うと“Them and Us”という、「やつらとおれら」という関係ですね。これができるんだというのをこの『イングランド労働者階級の形成』という18世紀から19世紀にわたる、チャーチスト運動というイギリスの原始的では有りますが労働者階級の運動があって、それを事例にしてそういうことを言ったんですね。これはみんなたまげました。スターリン批判が1956年ですが、依然として党というものに対するあるいは前衛党に対する、昔の言葉で言えば「物神性」と言いますが、盲目的な崇拜は依然として強く、かつ労働者階級に対して自然発生的に自分たちで思うものだというのは考えてもみななかったんですが、当時の'60'sはそういう気持ちに非常に共鳴したんですね。難しい言い方をするとこの考え方は今日も残っていて、この講座の最初に私が言ったマルクスの「我々はしたいことは何でもできる。だけれども時と場所は選べない」という話の中でちょっとお話ししましたが、例えば労働者階級とは何かって言うことは時代と場所が変れば全部違うんだと。その時代と場所の力関係の中で、常に色んなものが定義しなおされるんだという考え方ですね。そういう考え方が今日も残っているわけですが、その一つの事例であるということもできると思います。ともかくこのE・P・トムソンの『イングランド労働者階級の形成』というものが非常に欧米で衝撃的な影響を与え、各地で自分もこういうものを書いてみたいという流れが起きて、アメリカで何人かの人がそれを始めるんですね。言ってみれば今まで無視されてきた普通の人々の歴史を掘り返すという意味では、この本は決定的な影響力を与えた。どうやって色んな場所の色んな時代の労働者たちが、自分たちを労働者として自覚し組織をつくり運動を起こし何をしたか。当時、こういうことが言われました。ある時期のある街で働いている労働者のある運動を書けばこれで博士号が取れると（笑）。それぐらい、山のように事例が出てきました。その中でいわゆる'60'sが「こんなに事例があるじゃないか」と。アメリカって言うのはビジネスの国、大文字の国、偉い人たちが歴史を作る…我々もそういう歴史に慣れ親しんできましたよね。良く昔中学生の頃冗談で言っていたのは、歴史の教科書をお互い暗記しますよね、万里の長城を作ったのは誰かって言えば、「秦の始皇帝」って答えるのが正解ですよ。わからないと良く我々は「労働者だろ」って言ったんですよ（笑）。それは×なんです。このニューレイバー・ヒストリーでは○なんです。労働者が作ったんですよ。つまり「歴史を作るのは王様でもなければ資本家でもなくて、労働者である」そういう考え方ですね。名前を知っている方もいらっしゃるかもしれませんが、ベルナルト・ブレヒトという有名な左翼の詩人がいますが、バベルの塔を作ったのは誰だっという詩を書くんですね。色々歴史的な建造物や偉大なことがあるけれども、みーんな忘れてると。覚えているのは秦の始皇帝であり、レイなんとかであり、だけれどもそうやって皆が忘れてる間に、次の建造物を作り労働者はまた流浪の旅を続けるという有名な詩があるんですが、これをもじってニューレイバー・ヒストリアンが1990年代に教科書を作るんです。アメリカの教科書はものすごい分厚いんですよ。『イングランド…』ほどではないですが、あれよりも大判なんです。みんなこうやって教科書を抱えて勉強するんですが、結局は偉い人の話であることに対して、労働者を中心に、どういうことをアメリカの労働者が経験してきたかという教科書を書くんです。この題名が“Who Built America”というんですね。つまりアメリカを作ったのは誰だっというブレヒトの考え方ですよ。そのニューレイバー・ヒストリアンたちが非常に広がって、草の根レベルにも広がって、(A)の最初は「もう一つのアメリカの発掘」ということで、“Intellectual Activist”っていう言い方をする人も

いますが、まあ「知的活動家」っていうのも語弊があるのでここでは「学匠」という学者という意味の訳をつけましたが、メシ食わなきゃいけないんで大学の先生はやってますが、その多くの人が実際の運動に関わったケースが多い。その一つの典型がこのジェームズ・グリーンという人で、私がかたまま知り合ったんで、この人が書いた“Taking History to Heart : The Power of the Past in Building Social Movements”という、こんな短いタイトルを私が『歴史があなたのハートを熱くする——労働運動をよみがえさせなければ 忘れてしまった闘いの過去を思い出せ』ものすごい長い題名にしたんですが、要はそういう考え方ですね。アメリカと日本の極めて面白いコントラストは、新しい国であるアメリカほど歴史を大切にするんですね。戻ろう戻ろうとするんです。古い国の日本ほど歴史を忘れますよね。いつもいつも新しいものを見つけて、次はこれ、次はこれだと。アメリカの場合は「昔はどうだっただろう」とか、「本当は私たちはどうだったんだろう」という風に原点回帰するんですね。アメリカの労働組合の力が一番ピークだったのは1960年代の真ん中です。例えば政治的に1960年代の真ん中は、ほぼ彼らが支持した法案は議会を通りました。民主党が圧倒的多数を握っていたということもあって、組織率も非常に良かったです。それが1970年代に入って段々落ちてきて1980年代にはレーガンが出てきて、大体アメリカの労働運動の歴史は1980年代から暗転することになっています。このいわゆる '60'sが学者になり始めたのが、この1970年代の後半から80年代にかけてですね。ですから政治的には非常に向かい風の時に彼らは「いや、今はそうだけれども、こういう時代もあった、こういうこともできた」ということを掘り返して、言ってみれば自分たちを奮い立たせ運動をバックアップしようとしたわけですね。そのひとりがこのジェームズ・グリーンという人だったんですが、この本は彼が歴史を学ぶことがどんなに運動にとって大事かということ、色んな組合の活動家とか地域の活動家と一緒にやってきたかという話…またお話しいただければと思いますが、そういうことが書いてあります。で、日本の組合含めて、世界の組合皆そうなんです、組合の指導者というのは、特にアメリカの場合ビジネスユニオニズムと言われるように、労働者からお金ももらって労働者の代わりに交渉をしてやり、労働者にいい労働条件をあげる、つまり仕事としてやっているわけですね。外からガチャガチャめがねかけた兄ちゃんが入ってくるのをすごく嫌がるんですよ。昔からそうです。夢のようなユートピアばかり言って、結局やつらはおれたちをかき回して、経営者から何も取らないじゃないかと。社会運動として入ってくる人たちを労働組合のプロの人たちは今でも嫌がります。この頃はもっと嫌がっていました。ですから結構大変な経験をせざるをえないわけですね。ただ、そういう運動に対してやっぱり末端の人たちは飽き足りない。あるいはそういう民主主義が欠如しているような状況に対して、憤りを感じる組合員もいるわけで、そういう下からの運動というのをこの頃から…この頃だけじゃないんですが、周期的にどの国にも出てくるんですが。このニューレイバー・ヒストリアンたちが、沈滞していく労働運動の末端に働きかけながら「今は大変だけれどこういう時代もあったし、こういうことをやったらまた可能性はあるよ」ということを問いかけるわけですね。ここには書いていませんが、また触れるかもしれないんですが1995年にアメリカ労働総同盟AFL-CIOの執行部が変わります。ニューボイスという人たちの執行部が出てくるんですが、専門的なビジネスユニオニストのやり方に決別をしようとい応ってですね、もっと色んな人の声を組合の運営の中に入れようということを書いた執行部です。それらは実はいきなり出てきたんじゃなくて、言ってみれば「記憶の組織化」をしてきた '60'sや、それに共鳴した草の根レベルの人たちがじわじわと色んなところに広がって、それぞれの組合の執行部の意見を変え、それが最終的にナショナルセンターまで行ったと。残念ながらその後、同じような組織の争いの中で、ニューボイスは衰えていって、

■ 第2部 研究実施のあらましと成果

AFL-CIOもご承知のように分裂してしまうんですが、'60'sの「記憶の組織化」は1995年のニューボイスチームによってそれなりの広がりや成果として示す。これが1990年代の真ん中あたりではっきりしてくるんですね。

ここにアンドルー・ゴードン『日本の労使関係』が有りますが、ゴードンというのはハーバードの歴史学の先生ですが、今60前ぐらいですが、1980年代に日本に留学して、珍しいことですが労使関係論・労使関係史をやるようになるんですね。いくつもいくつも本を書いて非常に高い評価を受けるんですが、このアンドルー・ゴードンという人は今や近代日本史の世界のリーダーですね。彼が数年前に出した教科書はいち早くみずす書房から翻訳されて、各国語に翻訳されています。今近代史の先生になっていますが、この人の学問的なふるさととは労使関係や労働運動史になります。去年出たんですが、これは実は彼の博士論文なんですね。かれは法政の大原社会学研究所の二村先生に大変世話になり、色々研究して、その二村先生がリーダーになってこの本を翻訳したんですが、この中に自分はE・P・トムソンの本を読んでこういう本が書きたいと思ったらしいんですね。ただアンドルー・ゴードンの労使関係史や労働運動論は、どちらかというとそれほど運動運動した本ではなくて、制度や組織を説明することにもかなり力を入れています。というのは、イギリスやアメリカの話と違って、英語で書いても日本の話は殆ど知らない人が読めますから、どうしてもそういう説明をせざるをえない。いきなり細かい話をしてもわかりませんから。そういうこともあるんでしょう、必ずしも彼が日本のニューレイバー・ヒストリーを作ったという評価を、彼自身も望まないかもしれませんが、例えば日本の労働史を海外でひっぱってきたアンドルー・ゴードンも実はE・P・トムソンに大きく影響され、それを日本で実践したいと思ったということは興味深いなど。先ほどもいいましたように2003年になってやっとこの翻訳が出てきた。つまりなぜか日本ではニューレイバー・ヒストリーやレイバー・ヒストリーが、まともにやられてこなかったという裏返しでもあるんですね。これについてはまた(C)でお話しますがもう少し労働史のお話をさせていただくとですね、ハワード・ジンという名前を聞いたことありますか？これは'60'sでは有名な活動家なんですが、この人はレイバー・ヒストリーというよりもピープルズ・ヒストリーという表現を使うんですが「人民の歴史」という。それこそ労働者の歴史だけにこだわらず、普通の人々が何を考えてきたか、何と闘ってきたかというそういう巨大な本を書きました。翻訳が出ています、明石書店から。明石の本は自立するのが多いですが、それでも2冊本です。原著はそうでもないですが、日本語に訳すとなぜか長くなるんですね。これは言ってみればアメリカの民衆史なんですが、この当時もう少し視野を広げると、こういう言い方をされていました、「今までの歴史はトップダウン・ヒストリーだ」と。上から目線ですね。さっき言った万里の長城は秦の始皇帝が作ったというような見方ですね。ビッグネーム・ヒストリーです。それに対してこのニューレイバー・ヒストリーを含めてボトムアップ・ヒストリーです。下からの歴史ですね。これが対抗軸として上がってきてニューレイバー・ヒストリーを初めとして、この後ソーシャルヒストリー、社会史という分野が広がってきます。今やこの社会史の中にニューレイバー・ヒストリーも入れられている感もありますが、これに対して、実は余り広がらなかったんですが、去年なくなったアメリカのE・P・トムソンといわれる3人のうちの1人のデイビッド・モントゴメリーという人がいるんですが、この人が「オルグ史」—確かに下からの歴史もいけれども、そういう人たちが一緒になっておれたちはこういう風にしたんだといって運動を起こすときは、必ずオルグがいると。働きかける人がいるんだと。この人のことを書かないと解からないよと。彼はそれで20世紀前半の歴史を書くんですが、これはかなり賛否両論があって、余り評価は高くなかったんですが、私は大変この見方は面白い

など思っておりまして、必ずしもこの後に続いている人がいるわけじゃないんですが、この「オルグ史」という観点も大事だなと思っています。

C、日本の対応例 — 自由民権運動史 色川大吉『明治精神史』（1964）

日本の対応例ということなんですが、先ほど言いましたように日本ではなぜかレイバー・ヒストリー、労働史、ましてや新労働史という言葉も広がらなかったし、学者も余り熱心ではなかった。一つは労使関係の人が一生懸命やっていたということもあって、何も歴史家が出て行かなくても…戦後の名だたる労使関係の本ってというのは、制度史であると同時に非常にすぐれた労働史の本でもあります。組合ということに限ってでは有りますけれども。ですからそういう必要もなかったのかなと思うのと、前もいいましたが、1970年代をピークに—今日もやっていますが—日本の世界に名だたる特徴は、行政が税金を使って労働運動史を編むんですね。『大阪社会労働運動史』はその典型ですが。こんなこと世界中の何処もしていません。こんな分厚い本を書いたり、これほど網羅的なことをしている。各都道府県もかなり巨大な本ができています。神奈川のなんて、腕が折れるかと思いましたよ。分厚いですよ。…最近面白いのは沖縄が続々と出すんですね。沖縄労働史というのを沖縄県が出すんですが。この流れは止まっていはいないんですがピークは1970年代の真ん中かなと。私は一つは革新自治体の影響があると思います。それが減ってきたのはそういうことへの関心がなくなってきたのかなと思いますけれども。確かに学者が書いている場合もあるんですが、官僚が書いている場合が多いです。そのネタ本は労働省が作っていた『資料 労働運動史』です。極めて制度史であると同時に事実がズーッと書いてある。これは労働省のキャリアではない、労働組合課の各都道府県の公務員の人たちが、本当にこまめにデータを集めてそれを積み上げた—それ自体大変私は意義があると思いますが—そういう意味では記録集に近い。中には非常に良く色んなものに目配りしている。例えば『青森県労働運動史』なんてのは、東北に典型的な労働者—大都市、東京や大阪の工場労働者みたいな人は殆どいないんですね。そういうところでは労働組合史と言っても実際には、やっていた活動家は農民運動もやっているし社会運動もやっているし文学運動もやっているわけです。従ってそういう人を中心に追っかけていくと、非常に豊かな運動史になるわけですね。『青森県労働運動史』は本当にいい本だと思って、復刻したらいいなと思うんですが、そういう本も中にはあります。ですから名前として「労働史」や「新労働史」というのはないんだけど日本にもこれだけの大変な蓄積があるということは、もう一度我々は思い返してもいいなと思っています。

同時に労働者の主体性に関心を持って、あるいは普通の民衆の主体性に関心をもって運動史を書いた人がなかったかという、わたしは多分この「自由民権運動史」ですね。始まりはおそらく色川大吉という非常に有名な政治思想史の研究者ですが、この人の『明治精神史』これあたりが出发点かなと。時あたかもトムソンの本が出たのと同じくらいですが、この『明治精神史』は改訂に改訂を重ね、最近また岩波から出ているみたいです。この人は多摩にあった豪農—労働者じゃないです—の蔵にあった資料を出してきて、自由民権時代に地方のそれなりの農家の若い人たちが、自分たちで勉強をして憲法草案を作っていたと。この人たちも自分たちが歴史の主人公だと思って色んな活動をしていたんだと、いうことを掘り出すんですね。この自由民権運動史というのは最近も検索かけますとまだみんな一生懸命やっています。かつてほどの…「自由民権百年史」というのが10年ほど前にありましたが、あの頃の組織立った動きはないですが、まだやっていますね。ですから日本の場合、ある意味意識的に下からの歴史、あるいはオルグ史を意識的

第2部 研究実施のあらましと成果

にやっているのは、この自由民権運動史なのかなと思ったりはします。これは皆さんの方が良くご存知で、ご意見もお持ちかと思いますが。そういうことを考えたのは1990年代の真中にアメリカでニューレイバー・ヒストリーというものに出会った経験ですね。そういうものがない日本を振り返った時に、それはなぜなんだろうと、あるいはないんじゃないかと違う形であるんじゃないかなと。今日に至る『大阪社会労働運動史』との出会いもこの頃から有りましたし、なかったわけじゃなくて別の形であったんだということもわかりましたし、そういう意味で他の国でやっていることを通して、もう一回自分の国を見た時に、見えてきたものがあったという意味では、非常にいい経験だったなど。でなければ行政が作っていた、ここの運動史も含めてですね、なんだろうとまだ思っていたと思います。余りこのことについていろいろ言う人も今もいませんし、学問的な対象としてこういう作業が評価されていることも殆ど聞かないんですが、アメリカでは最近“Public History”という言葉が良く使われます。この“Public History”を「公共史」と訳してしまうと何か良くわからないんですが、歴史というのは一部の人が書くとか一部の人が独占するとかじゃなくて、皆のものであり、皆が作るものであり、書くもんだらうというそういう理解だと思えますね。したがってアメリカでは最近よく言われるのは“No more Ph.D.”「博士号もちもういらぬ」と（笑）。むしろマスターぐらいで色んなところで、地域で自分たちの歴史を掘り起こす人たちが、色んな仕事をしながらやったらいいじゃないかと。面白いのはアメリカには各地にNational Parkとそこで活動する人たちがいます。かつては自然の保存ですね、歴史的記念物とか建物とか。最近この人たちの中に運動系の人が出てきて、ここで昔争議があった虐殺をされたと。ついてはその記念碑を建てよう、とか。この駅でこういう人たちがこういう運動を起こしたから記念碑を建てようとか。建物や場所じゃなくて起こった事件や行為に対してそれを保存するという。そういう動きもパブリック・ヒストリアンの中では、広がっているようで、ハーバードとかMITとか有名な学校よりも、州立大学State-Universityこういうところでこういう人たちを育成しようという学部も多いようです。日本もさっきから言っているようにパブリック・ヒストリーがこれだけあるし、もっともっと広がればいいし、実はこの講座もそういう思いを込めた一環でも有りますし、皆さんもパブリック・ヒストリアンなんだと考えていただいてもいいのではないかなと思います。

第Ⅱ部 太平洋運動史の中の大阪社会労働運動史

●港南統一戦線と太平洋人民戦線運動

- A、猪俣・高野と野坂、そしてブラウダー・フォースターを繋ぐ線
- B、宿題としての総評とモデルC I O
- C、C I O伝説——ニューディール伝説の労働版

第Ⅱ部 太平洋運動史の中の大阪社会労働運動史 / ●港南統一戦線と太平洋人民戦線運動

A、猪俣・高野と野坂、そしてブラウダー・フォースターを繋ぐ線

今日の話は『大阪社会労働運動史』戦前編の下巻で一杯載っていますんで、ぜひまたご覧になるといいかと思いますが、始まりは坂野潤治…この人は本当に色んな本を書いていて、日本の近代史、現代史では大変有名な人なんです、この人が2004年に『昭和史の決定的瞬間』という本

を筑摩新書から出すんです。この人は何時も既製の歴史観に対してある種のチャレンジをすることが上手な人で、同時にやっぱり歴史は繰り返すというか、現実を見る時に歴史から学ぶことは大きいよねっていう意識を持ってやられている方で、出す本出す本非常に学ばせていただくことが多いんですが、ここにも書きました「逆流としての軍国主義化説」という。我々は実は当たり前のように思っている昭和史の見方というのがあって、いわゆる日本が戦争へ行くのは昭和に入ってからだんだんグラデュエーションじゃないですけども、なるべくしてなったんだという、ある種の「必然」的な見方をしていますよね。教科書でもそういう教え方をされますし、特に1936年、37年っていうのが、一種のスプリング・ボードで一気に進展する。満州事変の1931年に対して、盧溝橋事件以降政治体制も大きく変る。

ただこの人がいっているのは、じゃあ1936年に何があったか知っていますかっていうことで、1936年の総選挙、これが非常に面白いんですね。実は1930年代から始まって、いわゆる無産者政党的選挙での戦績はむしろ良くなるんですね。特に大阪がそうなんです、民政党が当時段々支持を失っていく中で、社会大衆党を含めて、無産政党的が1937年の選挙で大阪市・大阪府、あるいは大阪選出の国会議員でぐんぐん伸びていくんです。大阪では事実上民政党的に取って代わる勢いで、社大党的が勢いを伸ばして行きます。ただし社大党的の成長がイコール反軍国主義、あるいは反ファシズムなのかというと、そうではない。結局社大党的は軍の刷新体制に対して賛意を示すわけですね。結果として無産政党的が軍国主義化にさおを指すということがあったわけですが、それはそんなに簡単に起こったわけではないだろうと。それが坂野さんの出発点で、1937年の暮れに、「人民戦線事件」というのがあったのを覚えていらっしゃるでしょうか。これは突如として特高が全国で千人を超えていたか…何百人の人たちをいきなり捕まえるんです。もうすでに共産党的はもちろんのこと、バリバリの左翼の人たちは捕まっていますから、捕まったのは大学の教員とかリベラルな人たちがかなり含まれたんです。一斉検挙は多分これが最後だと思います、戦時中はですね。捕まえた理由として特高は「彼らはアメリカ共産党的と共謀して、日本で人民戦線を作ろうとした」というのが、罪状なんです。で、これで捕まった荒畑寒村は後で彼が書いている『寒村日記』の中でこれはでっち上げだと言っているんです。こんなことはなかったと。ところがこの坂野さんはあったと。私もたまたま別のところから調べいくと、あったと言っていると思いますね。

坂野さんはこのあと、色んな話を紹介する中で、要は社大党的を含めた無産政党的と民政党的が連合して、特に軍の中のよりリベラルな人たちと一緒に手を結べば少なくとも元老院を含めてまだチャンスはあったと。あの道へ行かないで。どっちかっていうと決定権を握っているのは軍の首脳部や元老院のトップレベルの人たちの話になるので、そっちの方を追いかけて。この本はどっちかっていうとそういうトップダウン・ヒストリーなんですけど、この中で彼も紹介しているんですが、当時共産党的の野坂参三がアメリカにいるんですね。アメリカから国際通信という日本語の宣伝誌を送りつけます。送るって言っても船員に渡したりですね、船員に沖合いから流してもらって海岸につけるとか（笑）非常に原始的…つまり郵便物で出せませんから、もう。検閲から何から。色んなつてを伝えて日本にそういう通信を送って、既に党自身が解体状態に有りますから、たまたま手にした活動家がそれを読むというような状況の中で、彼は日本で人民戦線をすべきだと。無産政党的やそれにつながる人たちは元老院やそういう人たちと結びつけてやるべきだということを書くんですね。そのことを坂野さんは証拠に上げて、人民戦線の動きはあったらうと。

で…ここに『労働雑誌』は今ありますか？…私はこっちの『大阪社会労働運動史』を読んでい

て、—これはご専門の方もいらっしゃると思いますので後でその話をさせていただいてもいいと思います—1936年にですね、「港南の統一戦線」という、港南…大阪の大正区のあたりで、実際には全労系と総同盟系—全労と総同盟というのはかつての同盟に連なる、歴史的には賀川・松岡駒吉という名だたる戦前の日本の労働運動家が連なった主流派中の主流組織が日本労働総同盟ですから、そこから何度か分裂します。最初に分裂したのは全評という共産党系が分裂するんですが、その次に全労という、これは必ずしも共産党系とは言えなくて、むしろ色んな人たちが集まっている、活動家が多いと言っていると思います。総同盟は典型的な組合役員中心というか、トップダウン的な組織なのに対して全労はどちらかというと、下からの盛り上がりで重心がかかっているとところがあって、色んなことをするんですが、この分かれたはずの2つ（全労系と総同盟系）が、港南で合同しようとしています。実はその後ろには共産党系の人とか、在日の人とか、あるいは被差別の人とか、いろんな活動家…消費組合とか、色んなネットワークの中でこの動きが起こるんですが、この動きを刺激しかつフィードバックしながら全国の動きにつなげようとしたのが猪俣津南雄らのグループです。戦前の労農派ってわかりますか？戦前の左翼の研究者の中で「講座派」と「労農派」というのがありました。講座派が日本共産党の主流派なんですが労農派というのは戦後社会党につながる人たちです。違いは何かというと色々あるんですが、講座派というのは日本はまだ社会主義革命の段階ではないんだと。封建主義的状况なので、まずは民主主義革命だと。要するに日本の資本主義がどういう段階にあるかということを見た時にそういう風に唱えた人。労農派はそうではなくて、日本はもうそれなりに成熟した資本主義だから社会主義革命だといったわけですが…簡単に言うとね。それが日本資本主義のあり方を巡って論争したりするんですが、この労農派というのはある意味、非共産党系のグループの集まりで、色々な人たちがいたわけですが、そのなかに猪俣津南雄という。早稲田の政経学部の農業経済学の先生でしたが、第1次共産党の結成で検挙されて首になってしまいました。早稲田というのはそういうのに染まるとすぐに首になるところです（笑）。高野実という弟子がいました。高野実は当時理工学部の学生だったんです。この高野・猪俣は1920年に…ちょうど猪俣は実は、片山潜在NYで作った一前にちょっとお話ししたかもしれません—「在米日本人社会主義者団」という、日本人移民集団のなかで小さい研究会をNYで作っていたんですね。片山潜在というのはアメリカ共産主義とかコミンテルンという、その後のモスクワを中心とした共産主義運動に深くコミットした人で、それを日本人の間でも広げようと思って、NYを一つの基地にして、周囲の人々を集めて、そういう団を作った。そこからモスクワに行った人もいたり、日本に帰った人がいたりしたんですが、この猪俣という人は非常に苦労した新潟出身の人で、俳句なんかも非常に良くやった人なんですが、この人が早稲田の学校に入って安部磯雄とか大山郁夫に可愛がられてですね、ゆくゆくは農業経済の先生になって欲しいなとあって、ウィスコンシン大学というシカゴの隣のウィスコンシン州の有名な大学の経済学部に入るんですが…ここからは本当かどうか…、非常に言葉でも苦労したし、なかなか皆と打ち解けない中である女性とであったと。それはポーランドから来たアナキストだったというんですが（笑）。その女性と付き合い始めたのが、彼が左へどんどん変化して行くきっかけだったという…本当かどうか知らないんですが。彼は卒業してからもっと勉強したいと言ってNYへ行って、段々片山潜在のグループにも入っていくんですね。実際にはかなりそれなりの使命を持って日本へ帰ってきます。彼はどうも元々はモスクワへ行きたかったらしいんですが、関係者から「君は日本へ帰りなさい」と。日本へ行ってやりなさいということで早稲田へ帰ってくるんです。先生をやるんですが、さっき言ったように日本共産党の結成に関わって、首になっちゃうんですが。

その頃高野実という1950年から1955年、総評の事務局長をやった、日本の労働運動の中で最もカリスマ性のある、有名な指導者の一人ですが、彼が当時理工学部の学生で社会運動や政治運動をやりたいと。大山郁夫という早稲田の非常に有名な政治学者、後にアメリカに亡命しますが、彼に相談したら「ちょうど帰ってきたところだから猪俣君に会いなさい」と言って、紹介状を持ってきたらしいんですね。高野実は自分の自伝の中で「運命の2時間」と言っていますが、会った時に非常に感銘を受ける話をされて、アメリカの労働運動がどんなことをやっているかというのを説明してあげるんですね。そこから二人の師弟関係が始まるんですが、余り細かい話はしませんが、ここから二人は日本の特に戦前の左から右まで非常に広い動きがある中で、非常に興味深い運動をいくつもします。彼らの一つの目標は、やっぱり日本で統一戦線を作ることだと。猪俣津南雄の面白いところはこの人は農業経済で、日本の左翼の研究者の中で、農業に一方ならぬ関心を示した人なんですね。それから中国革命に対してもかなり早い段階からその可能性について言っていた人で、そういう意味では余り主流ではありませんでした。ユニークでは有りませんでしたけれども。ただ、そういう大きな統一戦線を作って、日本の左翼を盛り立てて行こうという考え方では、この猪俣・高野は一致していて、彼らが1935年にこういう『労働雑誌』という雑誌を作るんです。

これ今からお話ししますけれども、当時一般大衆の間で有名な雑誌に『キング』という雑誌があったんです。総合雑誌よりももっと砕けた、漫画があつたり俳句があつたり、いっても時事問題もあつたりして、これの労働者版を作りたいと。で、作ったんですね。本当にこれ面白いんです。色んな話を書いてあつて読者を労働者に設定していますから、労働者が普通親しんでいるものを使って、労働運動とか農民運動の話をするんですね。昔の農民一揆の話とか、講談を使つたり本当に工夫をしています。これの対極が当時あつた『改造』という、総合雑誌ですけども、左翼の学者が書いたり読んだりする雑誌で、対照的です。較べていただくと良くわかります。変な話ですが、学生に読ませて較べさせたら面白いことに気が付いて「先生、『改造』じゃなくて『労働雑誌』にあるものがあります。」「なんだね」「コンドームの宣伝が『労働雑誌』に非常に多い」と。やっぱり『改造』にはコンドームの宣伝は載せないですよ（笑）。労働者にとって産児制限というのは非常に大きな問題であつたと同時に、子沢山による貧困の問題もあるわけで、やっぱり『改造』と『労働雑誌』は違うということを経験は上手く捕らえたとおもうんですが。これは実は日本で統一戦線を作るための雑誌として作ったんですが、これの最初の方で加藤勘十の訪米っていう記事が出るわけですね。加藤勘十って名前聞いたことありますか？奥さんが加藤シヅエ、参議院議員になりましたが、昔は華族の奥さんで途中から加藤勘十の奥さんになったんですが、加藤勘十は学卒では有りますが労働運動の活動家で、特に炭鉱労働の活動で有名で、別に彼自身はそんなにラディカルではない、研究肌でもないんですが、とてもいい人らしくて（笑）、いろんなことに対してやってみようという乗りやすい人でもあつたと（笑）。当時アメリカの労働者は既に反日でした。ご承知のように早い段階からモスクワは日本の共産主義運動に関してはあきらめていました。中国共産党あるいは中国革命を盛り立てる為に日本を使うという方針を立てていたので、アメリカもそういう態度でいたので、早い段階から日本の中国への侵略は非常に激しい批判を浴びせ、かつボイコット運動とか、日本の労働者に対しても非常に冷たかつたわけです。この環境を何とかしたいということで、加藤勘十をアメリカへ送ってはどうかろうということを、この『労働雑誌』がはじめるんですね。面白いのは全国で座談会をしたりして、加藤勘十にアメリカへ行って聞いてもらいたいことを募るんです。面白いのは大阪だったと思いますが、被差別部落の労働者が「先生、アメリカには黒人がいて彼らも差別されているらしい」と。「ど

うも、おれたちと似たような環境にあるらしいので良く聞いてきてくれ」と。ことほどさように、非常に興味深いアメリカへの関心の持ち方を皆がしていたということも解かるんですが。加藤勘十がアメリカのAFLの中の「失業者連盟」という組織があるんですが、これは言ってみれば組織内反対派です。言ってみればアメリカ共産党系の反主流派です。とくに一般組合員ランクアンドファイルの人たちが主になっていた組織なんです、これが、招待の母体になるんですね。加藤はこの招待でシアトルからアメリカに入国しようとする—アメリカの西海岸は非常にアジア人に対して労働組合が差別した時期でした—ともかくこういう日本の労働組合の役員なんか入れるなど。シアトルの“Teamsters”トラック労働者の組合の委員長が入れさせないんですね。で、留め置きになっちゃったところで、ここから面白いんですが、その報告をきいたYMCA—ご存知ですよ。大阪YMCAって有名ですが—このYMCAのアメリカ人の幹部とキリスト教会の「フレンド派」ってご存知ですか？—「普連土学園」ってありますが、これはクエーカーといわれるぐらい非常に厳格なかつ超リベラルな、差別に対してのものすごく批判的な教派なんです、この日本のフレンド派の人たちが連名で、アメリカのプロテスタントのトップに直談判をするんですね。これが結局政府に働きかけて入れるんです。実はこのアメリカのプロテスタントのトップも後で、共産党と関係が深かったといわれるんですが、どうも後ろにチラチラと共産党の影が見えるんですね。但しさっき言ったように日本では共産党は壊滅しています。猪俣と野坂は顔見知りです、元々。で、猪俣も高野も共産党とは関係がないんですが、彼らは自分たちを共産党以上に共産的な人間だと自覚していたんですね（笑）。そういう大文字のCではない小文字のcの人たちが結構いて、そういう人たちは自分たちで色んな連絡網を持っていた。加藤勘十がそうやってアメリカへ入って色んなことをやって、歓迎を受けたり講演をしたり、あるときNYだったと思いますが、アメリカ共産党書記長のブラウダーに紹介されるんです。で、ブラウダーに紹介された時に突如そこに野坂が現れます。これは実は何十年も経った後で加藤勘十が暴露するんですね、この話を。で、暴露した時に野坂とたまたま同席したらしくて「野坂君、もうあの話をしてもいいよね」って声をかけたらしいんです。実はこの時にあんたが出てきたっていう話をするんですね。野坂はご承知のように中国から帰ってきますよね、戦争が終わってね。延安にいますがその前はアメリカにいました。アメリカは当時コミンテルンの中で対アジア戦略の拠点だったわけですね。多分ブラウダーの元で色々やっていたんだとおもうんですが、—ここからは色々な資料…モスクワに行かないと解からないし余り興味もないので、推測ですが—どうも、日本には共産党組織はなかったけれども、小文字のcで色んな左翼の運動をしていた人たちと、野坂やアメリカの運動をしていた人たちの間にそれなりのネットワークがあって、というのはアメリカの共産党の中には「日本人部」がありました。日系移民やあるいは漁船や海運で働いている人たちがやっていたこともあって、どうもネットワークがあって…。1935年人民戦線がコミンテルンのデイミトロフという人から「これからはこういうやり方で行こうね」という声かけが始まります。それまで共産党は「社民主要打撃論」といって、社会民主主義政당을攻撃していました。これが結局はドイツでヒトラー政権を生み、色んなところで左翼の分裂を招き、ファシズムの台頭を招いているという判断から、ここはもう左翼で大同団結しないとだめだと。これが人民戦線戦術な訳ですが、これをアメリカでまずやろうとするわけですね。で、これをやったのがこのブラウダーという書記長で、実は日本の方がちょっと早いんですが、この加藤勘十の訪米は1935年です。『労働雑誌』が1935年6月に出て1936年には『転換期のアメリカ』という加藤勘十の本が出るんです。この『転換期のアメリカ』にはアメリカの左翼運動、農民運動、労働運動色んな運動の話が出てくるんですが、事細かに書いてあるんですね。まだアメリカが人民戦線

を本格化させる前の段階の話が書いてある。それ自体非常に興味深いんですが、帰ってきてから加藤勤十が何をやるかという、この総同盟と全労が合同しさらに社大党へ合流するという流れの中で、必ずしも社大党が全部を入れないので、残った人たちを集めて組織を作って、左派の運動をより左翼のポジションから後押しするというような動きを、加藤勤十が代表になってするんですが、結論から言えば私は日本でもそういう人民戦線の動きがあったんだろうなと。ただこれがコミンテルンからの言われるままの指示でやったというよりは、そういう世界の情勢を見て「よし、これは日本でもやったらう」と思って、連絡がつけられるところでは、中には共産党系の人もいたし、コミンテルンとつながっている部分もあるけれども、かなりフリーハンドな部分も含めて日本でやろうとしていたのは確かじゃないのかなあと、というのが私の今の推測なんです。

B、宿題としての総評とモデルCIO

この、坂野さんが、じゃなぜ日本では人民戦線が上手く行かなかったのか色々書いてあるんですが、一つはやはり民政党とアメリカの民主党との違いで、1933年にルーズベルトが大統領に就任し、民主党が労働者階級に門戸を開いて労働組合の結成を認め、労働組合をバックアップするようなポジションを敷いていくわけですね。1936年の選挙でルーズベルトは実は危なかったです。というのはニューディールで、かなりアメリカ政府としては異例な強大な権限を使って、市場の再建をしようとしたんですね。これがことごとく違憲判決を食らいます。連邦政府はそこまではできませんよという違憲判決を食らって、財界からもかなり激しい批判をあげて危なかったんですが、この危なかったルーズベルトを救うのが労働組合なんですね。救われたルーズベルトはここから思い切り労働者と一緒になって色々なことを始めます。この情勢の中でアメリカ共産党は当時AFLの中に反主流派の別組織を作っていたんですが、これを解散して中に入れてしまいます。実はAFLの中には皆ボスがいるわけですが、その中で「かといって今のまま、昔ながらの専門的なビジネスリーダーで組合をやっとられんな」と。当時のアメリカの労働組合というのは本当に細かく縄張りが細分化されていて—“jurisdictions”（管轄権）というんですが—その殆どが“Craft union”という業種別・職能別ですね。この時期には世界最大の鉄鋼産業を持ち、世界最大の自動車産業、世界最大の電気産業を持つという、大量生産型の工場が軒並み並んでいてこれが殆ど手付かずだったんです。これを組織化しなければダメだということで、産業別組織を作ろうと言い出したのが炭鉱労働組合のルイスという人なんですが、この人が「共産党員をオルグに使ったらいいじゃないか」と。こてこての反共だったんですが、鄧小平みたいな物言いをする人で、鄧小平は昔「黒猫でも白猫でもねずみを取るのがいい猫だ」といったんですが（笑）。ルイスは「誰だろうが俺が手綱を握ってれば、犬がもってきた獲物は俺が取るんだからいいんだ」といったんですね。要するに主流派と反主流派はそこで利害が一致したというか。で、出てきたのがCIO：“Congress of Industrial Organization”です。

このCIOの研究は実はアメリカでは山のように出てくる…本当に労働運動の安心して語れる成功物語の数少ない例ですね。色々批判する人はいますが、破竹の勢いで組織が増え、大量生産型の工場が軒並み組織化していった。0からあつという間に何百万の組織を作ったところなので。ただ残念ながら日本ではこの本しかないんです。『アメリカの社会運動—CIO史の研究』。筆者の長沼秀世という人は有名なアメリカ史の人なんですが、若い頃から書き溜めていたものを集めてこういう本にしたんですね。これだけ体系的なCIOの本は、日本では後にも先にもこれだけです。そういう意味で非常にクラシックな制度的な組織的な話が書いてある本で、ニューレ

イバーヒストリーの前に書いたものが多いです。ただ日本ではこの本しかないんですが、例えば占領軍の人たちの中にはニューディーラーと呼ばれる人たちが—ニューディーラーとはニューディールの中で育った専門家で、占領軍ですから色んな政策分野やいろんなバックボーンを持っていた人たちが入っていたわけですね。アメリカは1932から1940年までニューディールをやるわけですが、そこから急ハンドルを切ってきます。事実上改革はそれで終わります。特に1940年代の後半になると冷戦ということもあって、非常にニューディールの成果が中途半端に終わると同時に、逆流というか今までやってきたことも改正されたりします。特にタフト・ハートレー法って聞いたことありますか？このアメリカのタフト・ハートレー法っていうのは今までの組織化に対して膨大な制限をかけました。それから共産主義者を排除するような条項を入れて、左翼分子を一まあ、赤狩りですね。で、実は日本に来たニューディーラーの人たちにはアメリカでできなかったことを日本でやるんだと。かなり日本の民主化に対してドライブをかけた人たちが多かったのも事実であります。そういう意味では—マイケル・ムーアってご存知ですか？アメリカのドキュメンタリー映画作家ですが、彼の『キャピタリズム マネーは躍る』っていう映画をご覧になったことありますか？あれご覧になると最後は非常に泣かせるんですが、「我々はあの時ルーズベルトが生きていたらもっと行けたのに、途中で死んでしまって途中で止まってしまった」と。「ところが、イタリアや日本を見ろ。我々がやろうとしたことをみーんなやってるぞ。何で我々にできないんだ」という嘆き節で終わるんですが（笑）。確かに日本ほど簡単に労働組合が作れる国はないですよ。2人いればいいんだから。で、届ければ国のサービスが受けられるという。そういうのもニューディールの一つのやり方です。マイケル・ムーアが一番気にしていたのは当時の話題であった健康保険ですね、国民健康保険、社会保障ですね。こういうものができたじゃないか、ということで当時のニューディーラーたちがやりたかったことを日本でやろうとして、その一つのモデルがこのCIOで、それを日本の新しい労働組合に期待したのが、名前を取った「産別会議」だったわけですが、冷戦の開始と共産党の方針転換もあってこれは失敗するわけですね。その後総評ができるわけですが、この総評を作った時に当時総同盟のリーダーだった高野は、一見アメリカの言うことを聞いた振りをして—といわれますが—まあ、新しい組織を作ってこれを反共組織にするんだというアメリカの意図を、一応聞いた形で総評を作るんですが、彼は元々戦争が終わった段階で巨像のような統一労働組合を作ろうとして、一杯色んな人を集めて、荒畑寒村も含めて集めて、試みます。

C、CIO伝説—ニューディール伝説の労働版

結局5年たってやっと総評という形でできたわけですが、それもできて間もない間は色々分かれて行きますが、CIOが当時あったような多くの人々にとって希望を与える労働組合であった。CIOの場合、鉄鋼とか自動車とか電機とか、一杯色んな人たちが組合に入るわけですが、入った人たちの多くは最近来た移民の2世代目です。最近来た移民の人たちは多くは労働組合にも入れてもらえませんでしたし、労働状況も悪かった。二世の人たちは生まれた国の人ですから、そういう状況に対してなんでおれたちはこういう差別を受けているんだと。同じ白人ですけれども、当時南欧や東欧から来た人たちは白人扱いされませんでした。そういう人たちが本当のアメリカ市民であることを立証する上で、このCIOにはいるというのが一つの存在証明だったんですね。だから「君は鉄鋼産業だから鉄鋼労組に入りなさい。／君は自動車産業だから、自動車労組に入りなさい。その上がCIOですよ。」「いやいや、俺はCIOのバッジが欲しいんだ。」とみんな

いうんですね。CIOというのは、自分が新しい市民として認められた証であるかのような。そういう希望を与えたわけです。で、実は総評も最初の数年間はそういうムードがありました。有名な話ですが、総評の組織局に電話がかかってきて「どうやったら総評に入れるんですかね」ときかれたんですが、中には牛乳配達のおヤジが電話してきたって言うんですね（笑）。で、「お宅経営者ですから、ちょっとうちには」って（笑）断わるんですが、「いや、ぜひおれはそういうの入りてえなあ」って電話してくるわけですね。それは総評に入ることが新しい戦後民主主義の証であり、新しい日本国民としての証であるという、どうもそういうムードがあって、非常にCIOとよくにているなあと。

で、ここに色々書きました。「新労働史研究とCIOの再会」と書きましたが、新労働史の人たちがこのCIO—最初の1930～1950年代のCIO本というのは一杯あるんですが、これは非常にたたえる本かけちょんけちょんにけなす本か、どちらかなんですね。あんまりアカデミックに書かれた本はなくて、関係者が書いた本が多かったんですが、1990年代から続々と、ちょうど私がこの新労働史に出会ったころから本が出始めるんですが、巨大な例えばロバート・ジーガーの『The CIO 1935-1955』、身も蓋もない題名ですが、ほんとに良くできた本ですし、それからネルソン・リヒテンシュタインの『The Most Dangerous Man in Detroit: Walter Reuther and the Fate of American Labor』ウォルター・ルーサーっていうのはUAWっていう自動車労組の有名なカリスマ的な指導者です。彼は最後のCIOの会長になるんですが、そのCIOが評価されるころはこの最後に書きました「階級的人種交叉連合」という。それまでアメリカの労働運動は黒人を決定的にどかしてきました。入れませんでした。これに対して門戸を広げるだけではなくて、黒人の公民権の問題と労働者のより良い生活の問題は切っても切り離せない。だから黒人に対して「一緒にやりませんか」と。「我々はあなた方の公民権運動も支援するけれども、我々の組合に入って一緒に生活を良くしませんか。」と。一種のニューディール連合といわれる、黒人の部隊と労働者の部隊が手を組んで戦後の民主党の改革路線を支えるという、その要になったのがこのUAWです。もちろんトップダウンなので色々批判は有ったんですが、興味深いのはUAWのウォルター・ルーサーを見て「ああんりたいな」と思ってアメリカで勉強した人がいます。自動車総連を作った塩路一郎さんですね、日産ですけども。この人はウォルター・ルーサーに非常に興味を持って、アメリカのハーバード大学のトレードユニオン・アカデミーっていうところについて、勉強するんですが、塩路さんについては色んな議論があると思いますが、少なくともアメリカのレイバー・リーダーを仰ぎ見て日本でもこういうことを思った人がいるということは事実で、実は彼だけではないです。興味深いのはそういう人はどっちかっていうと同盟系の人が多いですね。私の感覚では同盟とCIOが似ているとは思えないですが、同盟っていうのはAFLの方に近いと思うんですが、同盟系のリーダーになぜかCIOのリーダーに詳しい人が（笑）他にも何人もいて、この辺も面白いなと思うんですが。ネルソン・リヒテンシュタインの本はそういう本です。

それからそれがなぜ1990年代に出てきたかというのと、このスティーブ・フレイザーとゲアリー・ガースルの『The Rise and Fall of the New Deal Order: 1930-1980』—フレイザーとガースルはニューレイバーヒストリアンの2代目ですね。この本は、レーガンが出てきて、アメリカの労働運動と公民権と民主党が手を組んでっていう形が組めなくなって「一体あのニューディール時代はなんだったのか」って振り返る本なんですね。ですから1990年代私がニューレイバーヒストリーに出会った頃、CIOはもう一回ここで見直されているんだなと—CIO伝説と書きました。この頃AFL-CIOに革新的執行部のニューボイス・チームが出てきたあと、それに飽き足

第2部 研究実施のあらましと成果

らないグループが組織分裂して新しいナショナルセンターをアメリカに作るんですが、彼らがその時に言ったのは「今のままではアメリカの労働運動はまた数が減ってしまうし、新しい組織化をしなきゃいけないんだ、あのCIOのように」と言って、CIOを持ち出すんですね。だから、CIOというのはアメリカの労働運動にとってかけがえのない成功体験なんだなあと、思っています。

最後にここに書きました「日本の労働運動伝説は？」なんなんだろうなあと。総評とか戦後革新論とか戦後民主主義論とかは1970年代までは、例えば清水慎三さんなんかが一生涯懸命書いておられますし、学問的に色々やった方もいたんですが、1980年代以降途絶えましたね。まだ、やってらっしゃった方が生きているということもあったでしょうし、学問的に研究の方法論もまだ整備されていないということもあると思います。思いますけれども、前半でお話したようなニューレイバーヒストリーの成果を入れて、総評論とか戦後革新勢力論がそろそろ書かれてもいいのかなと思う、この10年ぐらいなんです。私自身もどうしたらいいのかなと、わかりませんが。

そろそろ纏めますと、坂野潤二さんの本を一つのきっかけとして、大阪が中心であった日本の人民戦線運動があり、それは実は太平洋を越えてアメリカの動きと連動していたと。ただ、連動というのは上から指令に従って動いたというよりは、草の根レベルの人たちが色んな情報交換をしたり自分で考えたりしながらやった。労働者の自主的な部分も十分あったらいいのかなというのの一つ。

それはアメリカではCIOという成果を出したんだけど、日本は数年後途絶えてしまった。ただ興味深いのはCIOが1955年にAFLと一緒になるんですが、このときのCIOはAFLと殆ど似たような組織になっていました。つまりCIO自体は事実上終わっていたということですね。アメリカでCIOあるいは人民戦線統一路線を目指したときのような大きな動きが衰えたら、まるで日本にそのまま逃げてきたかのように、今度は総評という組織が一つの興隆を示すというのは、おもしろいなあと。そういう意味でCIOと総評を若干つなげてお話させていただきました。

ご質問あればどうぞ

今日のことは『大阪社会労働運動史』下巻をめくっていただくと、いろんなことが書いてあります。何本もある『大阪社会労働運動史』で1冊って言ったらこの巻ですね。(他は)本が悪いんじゃないくて、運動が面白くない(笑)。この時代の運動が一番面白いですね。あとは1950年代かな。特に1936年に「南地芸妓のストライキ」っていうのがあるんですが、南の芸者がストライキするんですよ。信貴山に籠るんですね。そこへおなじみさんが色々なお土産を持っていくんですね(笑)。そこへ外国の記者が聞きに来るんですね。如何にもフジヤマゲイシャのイメージのかなと。同じ時期にアメリカでもデパートの女の子たちが座り込みストライキやるんですね。本当に労働運動が華やいでいた時代—非常に不謹慎かもしれませんが—という気がしますね。

(わ)「階級的人種交叉連合」について、命名の動機は。「階級的人種」とは。

(し)日本もそうなんです、アメリカで1930年代CIOが盛り上がった時に、黒人に対してあるいは黒人自身が「もう人種問題はいいから、我々は労働者としてがんばっていこう」というのに対してやっぱり「そうやって解消できる問題ではないだろう」と。黒人問題は黒人問題、労働

者問題は労働者問題ということがあるだろう。だからと言って喧嘩する必要はない。実際は黒人の大多数は労働者なんだから2つの問題をきっちり認識しながら一緒にやれるところはやる。ただ実際には傾向として、人種問題を階級へ解消してしまう。もっと言うと左翼の中には、人種意識が強すぎるのは昔の言い方で言う「プチ・ブルジョワ」って（笑）、君の階級意識が足りないからだということが言われたわけですね。でもそういう問題ではないだろうと。なぜならアメリカの労働問題は人種意識を使って労働者の分裂を常に常に導いてきたところがあって「君たちは黒人とは違うから、少しだけいい待遇をしてあげるね」と言って、白人が黒人を差別する場合がありますとか、移民と手を組まないという構造があって、労働運動が広がらない部分があったんですね。実はこれは日本の水平社の歴史を見ても同じように出てくるんです。水平運動はアナボル論争という、できた時に階級意識優先主義の人たちと、必ずしもそうでない人たちと分かれてやっていたんですが、主流派は階級意識優先主義の人たちで、部落の問題はとりあえず労働者が天下をとれば何でも解決するんだと、後回しにしてきたんですね。だけどもそうではないだろうと当事者は感じていたし、同じことは在日の人も感じていた。これもなかなか日本では議論がされにくい。例えば水平運動史の人たちも一杯本を書くんですが、この人たちはなぜか労働運動にあまり関心がないんですね。というか非常に批判的です。自分たちを排除する側にあったのが労働運動だという意識が非常に強いです。

ただこの『大阪社会労働運動史』でもう一つ強調したいのは、かつて全国金属で椿繁夫さんという人がいらっしやっただのを覚えておられますかね？この人が戦前に始めた関西労働組合総連盟という組織があったんです。これはめずらしく在日の人・被差別部落の人の問題を前面に立て、しかし労働者として一緒にやっていくんだという運動をした一小さい組織でしたが。日本でも「階級的人種交叉連合」を考えた人がいたんだと。ポイントは「階級に解消されない問題」が労働運動にあって、そのことが労働運動に困難を招いたことも多かったのかなと。

(ら) 黒人労働者から「もう人種問題はいい」という声が出るような具体的なことはあったんですか。

(し) 当時1930年代、ハーレムやアメリカの知識人層には、そういう議論をしていた人が一杯いました。それに対抗したのがデュボイスという黒人の知識人で、南北戦争のときを思い出せと。あの時結局白人労働者は黒人だからと手を組まなかった。それを思い出せと言って『Black Reconstruction in America』という再建期の経験の本を書いて、黒人問題を階級へ解消しようとする黒人への批判をするんです。同時にだからと言って労働運動に背を向ける必要はない。黒人は黒人で、ちゃんと労働組合と手を結ぶべきだが、人種問題があることを忘れてはいけなと言ったんですね。公民権のときもマーチン・ルーサー・キングがいますが、彼も最初は人種一本でした。その間はアメリカもOKだったんですが、1968年にメンフィスで暗殺されますが、彼がなぜそのときメンフィスにいたかという、メンフィスでは清掃労働者がストしてたんです。彼はその頃から人種と階級問題を結び付けようとしていたんですが、その瞬間にドンとやられたんですね。その後たいまつを拾うようにケネディの弟が大統領選に出るんですが、彼も暗殺される。ウォルター・ルーサーも同じ方向へ行った時に、なぜか飛行機事故で死ぬんです。アメリカでは建前として人種問題は解決しなければというが、これが階級問題と一緒になるかならないかが歴史的に非常に重要であって、なった瞬間にそういう悲劇を生むということが、アメリカ史のパターンなのかなと。

(や) その人種は黒人だけですか。ユダヤ人は。

■ 第2部 研究実施のあらましと成果

(し) いえ、いろいろ。人種と言っても肌の色ではなくて、いわば政治的な発明で、誰かを排除したい。アメリカは法の前の平等、民主主義が建前ですが、皆で分け合うよりは自分がとりたければ誰かを排除しますね。そのときの理由として出してくるのが多くは人種なんですね。この人たちは同じ分け前を得る資格はないと、その理由を黒人とか黄色人種とか。ユダヤ人もかつてはそうでした。今白人とされている南欧や東欧の人もホワイトとは言われなかったんです。最初から白人はいなくて“becoming white”って白人になるんですね。E・P・トムソンもそうで、階級も最初から労働者階級の人はいないという考え方ですね。自分たちが労働者であると自覚して初めて労働者階級が生まれると。すぐれて「運動」の問題ですね。どうやって皆がそう思うようになるか。ならせるか。だから「オルグ史」が大事になってくる。運動史である場合、もちろん上から命じて思わせることはできないけれども、どうやってそういうきっかけを作るかが「運動」において大事で、そういう働きかけをする人々も大事なのかなと。多くは偉い人ではなくて末端の活動家の行為の問題ですね。

8. いまこそみんなの水づくり労働運動に向かって

全水道 2013春闘討論集会（田町交通ビル於 2012年12月9日）

1. みんなの水づくり労働運動とは

あ) 水づくり運動の触媒

水を巡る全ての利害（関心）関係者を、
生産者対消費者の契約関係（サービス・プロバイダーと顧客の関係）から、
持続可能な共生社会としての地球づくりへの共同参画者の連帯関係へ
組織し直す

「水でつながる みんなの絆 未来につなごう “水循環”」2012政策標語

い) 従来への労働条件闘争、産業政活動、組織化、政治活動等運動枠組の遡及的見直しの必要性

2. 全水道労働運動の伝統

あ) 自らの歴史を学び大切にす「風潮づくり」（京都水労76第4回労研）

い) 水基本法に至る道

より良い未来を願う人々の思いを引き受ける労働運動の覚悟を水づくりで実践

- ・ 第1回水道事業研究全国集会（水研）（1959年1月）
- ・ 日教組教研集会（1951年11月～
再軍備・逆コース政策と対決し平和と民主主義の教育の在り方問う）
- ・ 水道事業研究集会綱領
 1. 水道事業の民主的体制を確立する
 2. 水道労働者の実践行動を通じて平和国家の建設に寄与する
 3. 水道事業に対する住民の認識を高め、住民との結合を強める
- ・ 第1回全水道労働運動研究全国集会（1973年5月）
- ・ ブルーウォーター作戦（1972年）
- ・ 合成洗剤追放全国集会（1974年）
- ・ 水道法改正（1977年）水のシビルミニマム（市民社会の総合生活基準）
- ・ 水の総合立法提起（87年）
- ・ 水基本法制定基調水環境を守り水道労働者による労働の尊厳の向上（97年）
- ・ 『全水道結成60周年記念 全水道の歩み』

う) 「大衆的通年労研体制、労研活動家の育成、職場労研の通年化・活発化」

開かれた地域労研づくりと水づくり職場委員、水づくりオルグ、水づくりマイスター、水づくりサポーターの育成（英国のJob Shop Steward（技能継承・職業訓練・能力開発）に関する組合代表委員）

■ 第2部 研究実施のあらましと成果

3. 水づくり労働運動の共同参画者という観点からの非正規の組織化

- あ) 連合組織化方針（全ての労働者の組織化）
- い) 組織化の一環としてのキャンペーン

4. 水基本法の共有運動へ（消費者、農林業、環境、公衆衛生、女性、水弱者）

- あ) 水基本法への道自体が既に共有化運動

5. 教育文化運動

- あ) 「家の光」「農文協（農山漁村文化協会）」
- い) 「教宣」の再生

6. 水ビジネスのグローバル化と水づくりのインターナショナルリズム

- あ) 水基本法への道における国際労働運動の影響（PSI国際公務労連）
- い) 欧州市民発議機構（ECI：European Citizens Initiative）の「水は人権」キャンペーン

同様の試みは2013年2月に予定されている徳島地区労に於ける講演でも検討する所存である。

9. なぜいまなお総評なのか

徳島地区労 講演会 (2013年2月)

1. 総評とは何か

- あ) 組織としての総評 権力と向き合う労働運動 総評・社会党ブロック
- い) 文化としての総評 心と向き合う労働運動 総評エートス

2. 市民社会と運動文化

- あ) 市民社会とは何か—最大多数の最多様幸福 (ライフチャンス)
- い) 運動文化とは何か—市民社会の領域を広げる集合的自己実現運動
- う) 市民社会の原動力—階級的人種・性差交叉連合としての労働運動

3. 総評文化の継承発展

- あ) 戦後民主主義と戦後日本人—地球市民社会形成への日本的貢献
- い) 「失われた20年」と日本人の彷徨—戦後日本人の次世代育成
- う) 総評文化の今世紀的課題—ダイバーシティ (多様な世界多様な日本)

10. 連合大学院に期待する人材育成

第2回連帯社会シンポジウム（社会運動と人材育成—連合大学院がめざすもの）
（2014年4月21日於日暮里ホテルラングウッド）

1. 日本と世界の社会運動史における画期的事件：「小さく産んで大きく育てる」、でももう大きい

- あ) 労働セクター、NPOセクター、協同組合セクターの連携による共同人材育成事業
- い) 労働セクターと社会運動セクターの合流の世界的傾向
（米国AFL-CIOの門戸開放、労働問題へのコミュニティ・オーガナイズिंगの適用とそこへの労働セクターの参入）
- う) 期待される農協、中小企業協同組合の参加とそれが持つ巨大なインパクト

2. 零からの出発ではなくアクティベート（再起動）：お宝を蔵から出す

- あ) 協同セクターの古い歴史
源流としてロバート・オーウェンと賀川豊彦
グローバル・レーバー、グローバル・コープという運動史
- い) 人間が持つ社交機能
コミュニケーション能力は今に始まったことか或いは就活の専売特許か。
- う) 本籍・現住所という考え方（たまたま今はそこ、でも元を質せば）

3. アクティブ・ラーニング、サービス・ラーニング：変えながら学ぶ

- あ) 地域展開と大学・教育機関の巻き込み
- い) 拡大春闘・政策制度（生活困窮者自立支援法、地域ケアの拡大、6次産業）

4. 民主主義のリテラシー（読み書き算盤）と良く生きるためのスキル（生活習慣）

- あ) 立身出世の限界とシビック・エンゲージメント（実践的市民社会教育）というライフ・スタイル（もう一つの生き方・暮し方、物の見方・考え方）
- い) 古い革袋に新しい酒を盛る
カール・ポランニー（自然と仲間に依存する生活過程、社会あつての経済）
ソースタイン・ヴェブレン（人を喜ばすのに一所懸命、製作者本能）

こんにちは。ただいまご紹介いただきました、早稲田大学の篠田と申します。本日はよろしくお願いたします。

お手元に1枚刷りのA4サイズのレジユメがございます。これに従って、これから1時間ほどお話をさせていただきます。おつき合いいただければ幸いです。

今日はこの後、これがメインイベントなわけですが、この連合大学院の設立に中心的一かか

わった先生方が、今後どういう方向でこの大学院を運営していくのかについてご議論いただきますので、私は前座ということで、応援団と言うとおこがましいですが、連合大学院のファンとしての期待の言葉を、述べさせていただきたいと思います。したがって、ファンですので非常に無責任な、ある意味、大風呂敷な話になってまことに申しわけありませんが、そういう強い思いを持っているファンの1人の言葉だということで、お許しいただければと思います。

最初に、「日本と世界の社会運動史における画期的事件」と書かせていただきました。

実は、連合大学院設立の関係者の方々からは、よく「小さく生んで大きく育てるので」とお聞きしております。今は法政大学の大学院の一部であるけれども、これからどんどん大きくしていく。全国的に展開するということもあるのかなと思いついておりましたが、私は、既に十分大きいんじゃないかなと思っております。それは、先ほど中村先生もご指摘になりました、労働セクター、NPOセクター、協同組合セクターが連携して共同で人材育成をするという、このこと自体聞いたことがない。こういう構想それ自体が、もう既に大きいのではないのかなと思っております。

ではなぜこういう構想が生まれたのか。世界の労働運動や社会運動の様子を見ておきますと、これは日本だけのことではなくて、やはり最近になって、どこの国も同じような問題意識を持ちつつある。ここに「労働セクターと社会運動セクターの合流の世界的傾向」と書きましたが、一つは、労働組合、あるいは労働運動が世界的に大きな困難に突き当たっているという現実がございます。これは、もう皆さんもよくおわかりのことかと思えます。その一方で、いわゆる社会運動の中でも、伝統的な、あるいは歴史の長い大きな組織は、協同組合セクターにせよ、他の社会運動にせよ、やはり大きな転換期に迫られているという状況がございます。

それに対して、ここ20年ぐらい、新しい形の社会運動がそこかしこに起こっている。運動スタイル、あるいは運動を構成する人々、こういうものが、今までの先ほど申し上げました老舗とは違う中身でもって、非常に活気にあふれている。ただ、実はこの活気にあふれた新しい社会運動は、それはそれで課題がある。じゃあ、現実の社会に対して、あるとき大きく注目を浴びたりインパクトを与えることはできるんだけれども、継続的にいい社会にしていこうとする場合にどうしたらいいか。これは、当然新しく出てきたものですから、なかなか社会を継続的に変えていく制度的な手ごかりや組織的な影響力がなかったり、いろいろな問題はあります。そういう意味では、新旧の社会運動が手を携えてやっていかなければならないという状況がやはり見られます。

ここに書きました「アメリカのAFL-CIOの門戸開放」という話ですが、AFL-CIOというのは、アメリカにおける連合のカウンターパートであります。ここが今年の1月に大会を開きまして、画期的な決議をいたしました。それは、これから我々は社会運動と手を携えながらやっていくんだと。その象徴的なやり方は、いわゆる執行委員会に、組合以外の例えば環境保護団体とか女性団体とか、アメリカですので移民団体とか、あるいは学生の団体とかを、執行委員のメンバーとして入れていく。これは前代未聞だと思います。組織の外の人たちが、重要な意思決定にかかわるということですね。と同時に、お互いの経験を交流するために、人材育成を中心にして、共通のさまざまな運動基盤をつくっていこうということも決められました。

この動きはある意味で連合大学院のそれと連動しています。ここに「労働問題へのコミュニティ・オーガナイズングの適用とそこへの労働セクターの参入」と書きました。先ほどから中村先生、あるいは古賀会長のご指摘にあったような、前回のこの連合大学院シンポでは、ゲストスピーカーとしてガンツさんという、現在、ハーバード大学のジョン・F・ケネディ公共政策大学院の先生をされている方をお呼びになりました。この方はもともと、今から40年、50年前です

ね、1960年代に、アメリカでは特に西部で膨大な——現在も膨大な数がいるのですが——農業労働者がいます。そのほとんどが、中南米からやってきた新しい移民の方ですね。その方々が、大変困難な労働条件のもとで働いていた。それを解決しようと立ち上がった組合指導者に、移民の人たちの一人だと思いますが、チャベスという人がいたのです。この人が新しい農民組合をつくって、今までの労働組合とは違うような新しいやり方を駆使して、注目を浴びました。

そこで用いられた運動手法が、いわゆるここで書いてあるコミュニティ・オーガナイズング。一言で言えば、地域のあらゆる人々をつないで、そして、地域の人々が抱えている問題を、あらゆる資源を使って、あらゆる方法を使って解決していくという、極めて大胆な運動方法でもあるわけですが、このコミュニティ・オーガナイズングを開発し、そしてその中で一緒にトレーニングを受けてきた人、それがガンツさんであります。

アメリカではこのコミュニティ・オーガナイズングが、最近20年ぐらいの間に非常に幅広く浸透してまいっております。特に労働組合の退潮と反比例するように、その動きは労働問題の分野でも盛んになっています。日本でもこれと似たような状況が出てきていますね。非正規労働者とか労働組合にカバーされない人々の数が多くなり、またその問題がそのままにされている中で、新しい社会運動の人々がそこへ入って、いろんな手助けをするようになっております。必ずしも今までの労働組合、労働運動とそういう人々は、手を取り合うことは多くなかったのですが、事ここに至って、両者が、今申し上げましたような連携をするという時代に入っております。

この連合大学院の試みも、そういう意味では、同じような新しい問題、あるいは、これまでお互いになかなか協力ができなかった人々が、この現実を打開するために手を取り合い、とりあえず人材育成から始めていくという、日本においても画期的な事件であるとともに、世界においても画期的な事件ではないかなと思っているわけであります。

ところで私は「協同セクター」とここに書きました。協同セクターというと、ともすると協同組合セクターのように理解されることが日本では多いのですが、私は、とにかく人がお互いにつながり支え合ってよい社会をつくろうと思っている人たちは皆、協同セクターだと思っております。英語でコオペレイティブ・コモンウェルスですね。コモンウェルスというのはそれ自体が共同体ですが、コオペレイティブというのは、日本ですとやはり協同組合になります。英語で言えば、手を取り合って、支え合ってという意味ですね。そういう非常に幅の広い言葉として、私は理解しておるところであります。

たとえ協同セクターを協同組合というふう考えたとしても、日本には、ほかに農協という巨大な協同組合セクターの一員がいるし、それから、これは意外に外部では、あるいは内部でもそういう自覚が浸透しているかどうかわかりませんが、日本の中小企業は膨大な協同組合の集積であります。いわゆる1950年代に生協、農協、あるいは労働組合についてのさまざまな法律ができましたが、その中で、中小企業等協同組合法というのが49年にできております。これが、いわゆる中小企業の協同組合を支える基礎の法律になっているのです。ご承知のように、その後の55年体制、与党、野党、さまざまな関係の問題から、中小企業や農協と労働組合や協同組合の間に亀裂が入る、あるいは一緒にやるのが少なくなっていますが、50年代の当初は、皆同じ協同セクターの一員として、さまざまな法律が整備され、また連携があったわけですね。

ですから、これは追々やられていかれることだと思いますが、この連合大学院、あるいは労働とNPOと協同組合セクターの連携の中に、農協、中小企業という、言ってみれば日本の農村と日本の都市部の根底において支えている2つのセクターの協同組合の方々も合流することを、私は期待を持って考えております。

じゃあ、そういう新しい連携で何をするのかということが2番目なのですが、ここでは、「零からの出発ではなくアクティベート（再起動）」と書きました。皆さん、例えばクレジットカードとかいろんなカードを申し込まれると、それが来たときに、一度使ってくださいと、一度使うとそのカードは使えるようになりますとか指示がありますね。そういうときに英語ですと、アクティベートというふうに言います。

あるいは、この中では、最近の雇用レジームとか福祉レジームという、研究者の間での雇用問題や福祉問題についての議論にお詳しい方もいらっしゃると思います。今、雇用問題の中で一つの注目されている議論が、どうやったらより多くの人々に雇用の機会を与えられるのか、そして、その雇用の機会やトレーニングの機会を与えることによって、みずからの生活を改善していく。そのときに、アクティベートという言葉が使われることがあります。失業している人が仕事につけるようになる。あるいは、家事労働をしている人々が、何らかの形で社会の労働世界に参入するようになる。一言で言うと、ここに書きました、眠っているものを再び使えるようにする、もっと簡単に日本語で、「お宝を蔵から出す」と書きました。

連合大学院の試みについても2つの点でこれは言えると思います。今申し上げましたように、連合大学院のセクター間連携、それ自体は新しいし画期的なことだと思うのですが、私は、似たようなことはずっと昔からあったと思っております。というのは、今でこそ、ここで連携する労・NPO・協同というセクターに分かれています、それらはもともとは一つだったのです。

後でまたお時間があれば詳しく話をしたいと思いますが、例えばロバート・オーウエン、イギリスの代表的な協同組合、労働運動などさまざまな運動を初めに起こした人と言われています。この人は、最近では人事労務の始祖、あるいは社会的なアカウントビリティ、説明責任、会社のコンプライアンスとかそういう問題の始祖とまで言われるようになっていきます。彼はもともと人事労務担当で、工場に入ってからいろんな活動を広げていった人で、最初から労働側の人というわけではありませんでした。彼はまた児童教育の始祖でもあります。19世紀の前半まで、子供は学校に行かないのが、ヨーロッパでさえも当たり前です。お金持ちの人は除いてですね。もう小さいうちから働いて当たり前です。子供をしつけるというのは、力づくでやるのが当たり前です。つまり、非常に劣悪な環境の中で、今で言えばとても許されないような環境の中で、子供は生きていたのが当たり前の時代の中で、彼は世界で初めて幼稚園をつくり、そういう力によらない児童教育というものを始めたところでも有名な人でもあります。彼は、要するに、今いろいろ社会運動の中で分かれているものを、一身で体現してきた部分があるわけですね。

あるいは日本のロバート・オーウエンと言ってもいい賀川豊彦という、この方の名前は、もうここにいらっしゃるほとんどの方がご存じだと思いますが、実は賀川豊彦は、日本以上に世界で知られた人でありました。とはいえ日本でも労働運動、協同組合運動とそれぞれの運動分野で有名ではある訳ですが、それらをつないで巨大な、例えばロバート・オーウエンもそうですが、協同社会の運動家、あるいは思想家というふうに、総合的に理解されていないところがあります。この人はたいへんなキリスト者でもあります。というか、彼は基本的にキリスト教から出発して、キリスト教にまた帰ってくるわけですね。ところが日本のキリスト教会において、賀川豊彦の評価はまた複雑です。

私は以前学生と賀川豊彦について勉強したことがあるのですが、彼が非常におもしろい質問をしました。なぜこれだけの人が忘れられているのだろうと。確かに今の学生は賀川豊彦のことを知りません。もっとも今、賀川豊彦のことを知っている人も、申し上げましたように、彼について体系的な理解はあまりしていません。確かにそれぞれの分野では昔そういう人がいたねという

話がありますけれども、全体として理解されないのはなぜだろうと。我々が行き着いた答えは簡単であります。大き過ぎたということですね。大き過ぎて捉えがたい。どの人にとってももてあましてしまうがゆえに、賀川豊彦にせよロバート・オーウエンにせよ、その目指したものがいかに大きかったか、あるいは、目指したときに、いかに今日ばらばらになっているものの全てを包み込むような大きさがあつたかということを感じるわけでありまして。したがって、そういう意味で言えば、こういう連携自体が今に始まったことではなくて、もともとそうだったんだということを出すことも、一つ大事ではないのかなと思います。

それから、アクティベートする2番目の事柄として「人間が持つ社交機能」と書きました。連合大学院における人材育成の一つの目的は、人々をつないでお互いに支え合えるような関係にしていく運動や組織の担い手を育てる、あるいは育て方を考えることだと思います。この組合用語で言えばオルグ、別の言葉で言えば活動家など、いろんな言葉があると思いますが、こういう人々を育てるのは、特別な技能やスキルを持った特別の人をつくるようなイメージがありますが、私はそうは思っていません。人間は皆、多かれ少なかれそういう機能やスキルや才能を持っている、もっと言うと本能として持っている、そういうふうに思っています。

法政大学でキャリアデザイン学部というのがあります。それを事実上つくった人に川喜多喬という私の大好きな先生がいますが、この方が書いたキャリアデザイン学部の教科書の一つに『人材育成論入門』という本があります。これはたいへんおもしろい本です。ありとあらゆる人生についてのこと書いてあるのです。とてもじゃないけど、狭い経営学の教科書におさまり切りません。一度読んでいただくと先生の語り口にとりこになられる方もいらっしゃると思います。そんなに厚くないですし、高くないですし、それから何よりも、教室や図書館で読む本よりは、寝る前に2、3ページずつ読むといい本だと思います。

要するに彼は、人材育成というのはどういうことかということ、人が人になることだと思っているみたいですね。人が人になるというのは、人というものが持っているものを、あるいは持っている才能や本能を生かすことだと思います。彼は実は1970年代、まだ経営や人材育成の問題を本格的に研究する前に、社会思想や社会運動についてのいろんな欧米の議論を総覧し、もうほんとうに博覧強記という、何でも知っているというこの言葉は彼のためにあるようなものだと思いますが、社交主義という考え方——ここに書きました社交ですね、人と交わって社会をつくる——について、たくさんの論文を書いています。これは多分、当時社会主義で世の中が騒がしかった時代に対する、一種の彼なりの、何ていうのですか、風刺であると同時にチャレンジだったと思います。そこで彼は、要するに人間は、交わり合ってお互いの力を引き出し合い、そして、その交わり合うことそれ自体をもって喜びとしてきたことを強調した。

G. D. H コールという、これも、労働運動の方では今や忘れられていますが、イギリスでは大変有名で、学者であり作家であり、労働運動家であり社会運動家という多彩な人なのですが、この人は、労働運動あるいは社会主義とは、人と人との関係の質を高めることであると喝破しています。労働者の物質的な条件を上げる話は本質的ではない、人が人とお互いにどんなにいい関係をつくれるか、それが問題だというふうに喝破していますが、川喜多さんも同じようなことを言っていたのではないのかなと思います。

最近よく聞く「コミュニケーション能力」ですね、特に学生などは就活などでそういうことを気にしますが、私は、それぞれの仕方ではありますが、人間の本能として人はコミュニケーション能力をもともとみんな持っていると思っています。それは何も就活のときだけに必要になったり、あるいはビジネスの上で必要になったりするものではなくて、家族の中でも友人の中でも、

そして夫婦や恋人の間でも当然大事なものであって、それは、先ほども言いました、人が人としてあるためにはどうしても考えなければいけない能力であるし、皆、備わっていると思います。こういうみんなが持っているコミュニケーション能力、あるいは社交能力をその人に合った形でどうやって引き出すのか。あるときはオルグとして、活動家として、それを引き出す側に回るかもしれませんし、逆に引き出される側に回るかもしれない。私は相互のもので、それこそ様々な社交の積み重ねの中で培われるものだと思っています。

最近、よく授業でこういう言葉を使い、ほんとうかねというふうに学生から疑いの目で見られるのですが、ほんとうに学生に学ばされます。最近、意図的に僕のかわりに勉強してねと言って課題の本を出したりしますが、学生と勉強していると、自分の知らないこと、あるいは考えてもみなかったことをたくさん言ってくれます。その気になって聞いていると、ほんとうに学ばされます。そういう意味では、オルグしているほうがオルグされている、働きかけているほうが働きかけられている。これが多分、運動のダイナミズムではないかなと思っています。

最後のところですが、今の2のところをまとめて言いますと、物事を本籍と現住所とに分けるといいんじゃないのかなと思います。先ほどから言っています様に、運動にせよ人にせよ、それぞれの分野に今分かれていますけど、それはたまたま現住所がそこだけであって、本籍はもとも一つでしょう。たまたまそこにいるから、その現住所の条件が、今お互いを分かたせているかもしれないけれども、本籍を考えれば一緒なんじゃないのかなと。運動にしても人にしても、そうではないのかなと思っています。

3番目ですが、ここからは教育のあり方、あるいはこの連合大学院に期待するプログラムの内容について、少しお話をしたいと思います。「アクティブ・ラーニング、サービス・ラーニング」という言葉ですが、ほとんどお聞きになったことがないと思います。アメリカで言われ始め、最近では日本の大学でも時々使われるようになりました。アクティブ・ラーニングはご想像どおりです。「現場で学ぶ」ですね。「何かにかかわって学ぶ」です。これは、そういう言葉を使わなくても、どこの大学でも最近ではほんとうに多くなりました。ボランティアをする。あるいはインターンシップをする。ただ、どうしても行きっ放し、行かせっ放しで終わるケースが多いです。特にインターンシップですね。

そうではなくて、どうやってその中で自分が学んだことを振り返られるか。早稲田大学には、平山郁夫ボランティアセンターという、ボランティアを専門にするセクションがあります。これは、3・11以降たくさんの学生を定期的に送り出し、あるいはたくさんの学生が、そこでボランティア活動を自分たちで企画して、継続的にやっています。最近そこで新しくできたプログラムがありまして、「体験の言語化」といいます。体験したことを自分の言葉にどうやったらできるかを考えるプログラムですが、では自分の言葉にするというのはどういうことかという、その人が、例えば「僕はここへ行ってこんなことをして、おもしろかったよ。悲しかったよ。うれしかったよ」では、その体験の意味が他の人に伝わらないだろう、ではどうしたら一人一人の体験をほかの人と共有することができるか、例えばこういう問題なんです、こういう考え方が背後にあるんですというのりしろをつけることによって、学生同士が、ああ、自分たちは同じようなことを考えて、それぞれの場所で頑張っているんだなと思えないか、言ってみれば連帯ですね、そういう相互理解をつくれる表現にどうしたら習熟することができるかを考えることです。

サービス・ラーニングもご想像どおりです。サービス、つまりボランティアとか地域貢献とか、自分が学んだことを使って地域に貢献する。何でもできます。例えば会計学を学んだ人は、アメリカなんかでは、ちょうど先週が確定申告の締め切りになりましたが、その前になると、地

域で確定申告の無料相談コーナーを設けるわけですね。そこで、自分が学んだ会計の技法を使って相談に乗る。法律でもできます。法律相談もできますし。それから理科系でも、当然、地域におけるいろんな、自分が知っているITの話から土木の話に至るまで、いろいろ使えるわけですね。つまり、学んだら、それを使って社会に貢献してみろと、これがサービス・ラーニングの基本であります。

日本では、前に申し上げたように、やらせることは結構しているのですが、それを学びの場として体系化することがまだできておりません。最近やっと、このサービス・ラーニング、アクティブ・ラーニングについての教育的な体系化というものが意識されつつありますが、これからの課題だと思います。私はぜひこの連合大学院で、こういうアクティブ・ラーニング、サービス・ラーニング、もうもちろんお考えだと思いますけれども、釈迦に説法なんだと思いますが、一言で言えば、社会を変えるために学ぶというよりは、変えながら学ぶ、学びながら変える、そういう機会を多く持てればいいのではないかなと思っております。

そのためには、教室はこの法政大学という東京の市ヶ谷にありますけれども、現場は日本全国至るところにあり、世界中至るところにあるわけで、少なくとも各都道府県、あるいはそれぞれの関係組織の支部があるところで、連合大学院をそっくりそのまま真似るのではなく、それぞれのやり方で同じような教育機会を設けたほうがいいのではないかと思います。そういう現場に近いところでやる。そこには、できれば大学をはじめとした現地の教育機関を巻き込むと、もっといいだろうなど。小・中・高、若い人たちも巻き込みながら、ボランティアでもいいですし、地域貢献でもいいですし、例えばそういうことを企画することで学ぶ。いずれにせよ連合大学院でサービス・ラーニング、アクティブ・ラーニングを取り入れるのには、いろんなやり方があると思います。

もう一つは、ここの「拡大春闘・政策制度」という、これも労働組合の方々じゃないとおわかりにならないと思いますが、今年は安倍政権のおかげで春闘がクローズアップされました。学生に聞いても、春闘を知らない学生は多いですし、それなりの大人の方でも、どうでしょう。これが1950年代から始まっている。55年と言われていますが、プレ春闘がその前から始まっているので、既に60年以上の歴史を持つ。こんな制度は世界のどこにもありません。今年の賃上げがどうなりそうかということ、前年の12月頃からああでもないこうでもないという新聞が報じてくれ、組合に入っていようがまいが、毎年年初から一斉にみんなが労働条件について、何らかの形で話し合っているところなど他のどの国にもありません。

長い歴史の中で、「もういいんじゃない?」とか「やめようか?」とか、そういう話はありませんでしたが、やめませんでした。最近、多分、春闘が一番ありがたがっているのは、経営側じゃないかと思います。自分たちの思いを一斉に伝えやすいということで、それが何を意味するかはいろいろまた議論のあるところですが、今年のように、とにかく全国民が経済的な再離陸をするためにこれがどうしても必要なんだという、ある種のコンセンサスの中で、それまで「いやー、無理ですね」と言っていた大どころが皆、ほんぽんとベアを上げてくるわけですね。

ご承知のようにベアという言葉も、ほとんど今、新聞記者の人も知りません。「何ですか、それ。熊ですか」と言う人もいるかと思いますが、もちろんベースアップの略であるわけですが、それはどういう意味か。つまり、一番下を底上げします。要するに家の床下を上げるわけですから、一旦上げた床下は、ずっとそのまま上がりっ放しになるわけですね。大変なコストがかかる話です。ボーナスのように1回限りで終わる話ではない。相当のことを話さないと、相当のことを考えないとできない決断です。

もちろん労働条件といっても賃上げだけではない。いろんな話を実はしています。最近私は、ある労使関係の雑誌で始めた連載があります。「議案書を読む」という、物好ききわまりないと言われているが、組合の大会の議案書を読んでその感想を綴るのです。実際議案書はおもしろいです。そこにしばしば肉声を書いてある。組合員の思いが書いてある。あるいは、その組合のダイナミズムが書いてある。例えば春闘のときの様子が、ドキュメントのように書いてあるんですね。「ここで副委員長泣き崩れる」とか、「号泣」とか書いてあるのです。その一言で、思いが非常にわかりやすいですね。それで、「経営側はしばしの沈黙」とか、もうほんとうに写真や動画を見るような醍醐味もあります。最近議案書を書記長や委員長が1人で書いていらっしゃる場合もあるというお話も聞きますが、組合の実情を組合員にいかにつたえるかで、皆さんたいへんご苦労なさっておられることだろうと思います。

そういう議案書でハイライトはやはり春闘なのですが、その要求の内容も多彩です。と同時に春闘に託す組合と組合員の思いも見えます。例えば、仲間がどうしても介護や出産で離職しなきゃいけない。ほかにいろいろあるけれども、今年はこれが一番大切なんだと。このことを解決することが、今年の春闘の一番大きなことなんだと。これも非常に、何か胸を打つものがあります。ああ、そういうふうに、やっぱりみんなお互いにいろんなことを考えながら、じゃあ、春闘で今年は何を問題にしようかという、そのプロセス自体が連帯なんだなと思ったりします。

ですから、物好きだなと言われますけど、私は今、議案書をひもときながら、本当におもしろいなあと思って読んでいるのですが、そんな中で、さまざまな人々の思いを、どうやったらみんなが共有できるようになれるかということを試行錯誤するのが春闘だということを確認するにつけ、春闘というのは連帯社会をつくる大変なインフラなんだなあと改めて感心する訳です。と同時に、これを労働組合や経営者だけではなくて、もっと多くの人々が共有していいのではないかという思いもつづります。介護の問題、あるいは生活の問題、教育の問題などは、協同組合セクターの方も当然一緒に議論していいのになあと思ったりします。実際どうして農協は春闘をしないんだろうとずっと思っていました。

実は米価から健康保険の保険料まで、わたしたちの生活に関わる色んな値段は、それぞれのスケジュールにしたがって、それぞれの団体が交渉しています。例えば医療の価格を決めるポイントですね、どういう医療を受けると何点で幾らになるというものですが、前は厚生省と医師会の他に、いろいろ団体がプレッシャーをかけていて、密室では決められなかった。今どうなっているか、詳しくは知りませんが、前ほど社会的に議論している感じがしませんね。

自分たちの生活に関わることを幅広くいろんな当事者と社会的に問題にしていくといえ、私は1953年の総評大会を思い出します。たまたまその大会は日比谷公会堂で行われていて、その前に厚生省があって、その厚生省の前で、今日で言うハンセン氏病ですね、昔、らい病と言いました。大変な差別問題でもあったわけですが、その人たちが抗議のために座り込みをしていた。そこで総評が、うちで大会しているからおいでよと、演壇に立たせたのです。それで、あなたがたの問題をしゃべってよと。ちゃんと第3回の大会の議事録に書いてあります。記録してあります。いい話だなと私は思いました。

当時は当時でそういう雰囲気があったんだと思いますが、私は、今もそういうことでいいんじゃないのかなと思うのです。国民春闘という言葉がありますが、それならば、労使だけではなくて、各方面の方々が、みんなそのときに自分たちの問題を一齐に語り合う。ぜひそれを地域で取り組んでいただければなと思います。

もう一つは、政策制度要求という、これも、連合になってから毎年やっているものがありま

す。これの大きな問題はトップダウンということです。上で決めたことがおりてきて、下へどうでしょうと。極めて抽象的で、どう読んだって悪いと思わない話なのですが、がゆえに議論にならない。それは、結局は霞ヶ関や永田町に圧力をかけるという話になってしまうのですが、今日ほど我々の生活に政策が影響することはないわけですよ。しかもそれは、それぞれの地域によって影響の仕方が違う。だったら、下から政策制度要求を、それぞれの地域の中でできるだけたくさんの人々を集めて議論した方がいい。マニフェストとか、最近では選挙のときにいろんな人々を集めて候補者について意見交換する試みがありますが、政策制度要求もその要求づくりのところから、あるいは、これは自分たちでできるよねと、政治家さんをお願いしなくたって行政をお願いしなくたって自分たちでできるよねと、もっと自分たちでできるようにしてくださいというお願いがあってもいいと思います。

この間、ある組合の研修会に行ったときに、今、組合で何がしたいですかという質問をしたら、ある人が、自分の家の前の道を広げてほしいと言ったんですね。その時これほどすばらしい政策制度要求の出発点はないなと思いました。なので思わず、それ、組合に出したらいいじゃないですかと言ってしまいました。何で広げたいのか、そこから議論が始まります。ほかのうちだっただけで広げたいかもしれない。じゃあ、何で広げたいのか、どういう問題があるのか。そこからまちの問題が上がり、まちづくりの話になり、都市計画の話になりというふうに広がっていくわけですね。でも、最初は、うちの前の通りを広げてほしい。これはとても大事な一歩ですよ。そういう一人一人の思いをどうやってつないでいくか。これが、春闘にせよ政策制度要求にせよ、もっとたくさんの人たちがその時に集まって、議論し合う場にしていただけたらなと思っております。

今みんなで話し合う場所とテーマには事欠きません。そこに書きました生活困窮者自立支援法というのができました。これはどうやったらみんなでお互いに地域で支え合って生きていけるかという枠組みです。困っている人を困っていない人が支えるという一方通行ではなくて、ある人は、ここでは困っているけどそこでは困っていない、別の人は、そこでは困っていないけどここで困っている。お互いにいろいろ、でこぼこがあるわけですよ。じゃあ、一緒にやればいいじゃないですかと。支える人、支えない人というのではなくて、お互いに社会を構成している、自分たちのかけがえのない地域をつくる構成員として、お互いに支え合って自立することができないだろうか。それを促すのがこの法律であります。

あるいはもっと端的に、これから高齢化社会の中で地域ケアの問題が今以上に重要になってきます。これも、みんなで一緒にやらないとできない話なわけですよ。

それから、最近、6次産業ということが言われます。1次産業、2次産業、3次産業が連携を組んで、1、2、3で6です。これも連帯経済の一つでしょう。これは、協同組合とか労働組合のほうではあまり言われませんが、例えば商工中金とか中小企業関係の雑誌を見ますと、もうそういう話ばかりです。どうしたら中小企業と農家が支え合っているか。いま中小企業と農家の間では連帯経済の事例が山積されているのではないのかなと思っております。

あと時間も10分余りになりましたので、最後の4番目ですが、じゃあ、何でこういうことを考えたり教育をするのか。ここのところですね。ちょっとややこしい話で申しわけないのですが、「民主主義のリテラシー」、あるいは「良く生きるためのスキル（生活習慣）」と書きました。私は基本的には、今、連合大学院がやろうとしていること、あるいは連合大学院を通じて多くの人々が学ぶであろうことは、大げさに言うと、これからの我々の生き方、暮らし方、物の見方、考え方を変えていくことだと思っています。

「立身出世主義の限界」と書きました。アメリカでは、大学バブルの崩壊という言い方があります。大学へ入れれば給料が上がり、みんなが安定して暮らしていけるというのは、幻想だったと。もうそういうふうにはなっていない。あるいは、自分が一生懸命勉強していい大学に入れば何とかなる。アメリカで一番一生懸命勉強しているのはアジア系の人たちですが、最近、親、周囲がかけるあまりのプレッシャーで精神的に相当きつくなって、ついに学校側が親も呼んで、どうしたらいいだろうとみんなで考えるようになっていきます。そりゃそうですね。競争をどんどん詰めていったら、そんなにもつわけがない。しかも、勝てる人は一部であり、いわゆる格差社会の中で、もう最初からスタートラインが違うわけですから、いくらやっても、どうしようもないところに来ている。日本人は立身出世主義が好きですけども、私は日本も含めて、世界も含めて、そういう立身出世主義という、近代ずっとやってきた生き方、暮らし方、あるいは物の見方、考え方は、もうほんとうに限界に来ているだろうなと思います。

実はこの20世紀の間に、それ、もうやめようと、そうじゃない別の生き方、つながり支え合っでやっていこうよということを、何度も、どこの国でもやってきました。ただ、今日に至って、やっぱりそれはお蔵入りされています。だめだったとは言わない。お蔵入りされているわけです。20年ぐらい前にこの手の話を、もう少し露骨な言葉で話すと、学生は引いていました。またかよと。もういいよ、だめだったじゃないといった感じでこちらを睨むか、冷めた視線を送ってきました。最近こういう話をする、今の学生は、別の社会をめざした20世紀の歴史を全く知りませんから、「すごいですね、それ。そんなことできるんですか」みたいな、非常に新鮮なリアクションを起こしてきますね。

そういう意味では、我々がやろうとしているのは、自分一人で一生懸命頑張ったらい生活ができるということを否定はしないけれども、頑張ることは否定しないけれども、それだけが人生であり、それだけが幸せの道ではないということに、もう少し気づいていいかもしれないし、気づいたほうがいいのではないのかというメッセージを、多くの人達に送ることかなと思っています。

これもアメリカの話で申しわけないのですが、ご承知のように、アメリカは格差社会が極限に達している部分があります。それから、マイノリティーというもともと差別を受けている人たちが多し、それから、最近またどんどん移民が入ってきて、この人たちがなかなか自立できない。地域に行けば、この人たちがほんとうに大きな困難を持ち、かつ、それがコミュニティの問題になっているわけですね。何とかしなきゃいけない。

それで、ここに書きました「シビック・エンゲージメント」という、これはサービス・ラーニングの次と言われていますが、小さいときから地域の問題にかかわり、その地域の社会を変えていくという癖をつけさせたほうがいいのだと。それはもう、生き抜くためのスキルだという考え方に基づいた教育学習方法です。ところが日本は特にそうですが、今まではどちらかというと、そんなことしちゃだめ、そんな運動なんかしてたら将来に影響するよ、みたいな。あるいはそんな本読んじゃだめ、あるいは、そんな人とかかわっちゃだめみたいな話があったかもしれません。

ただ、もともとアメリカというのは、そういう異端なもの、あるいは現状を変えようとする存在に対して抵抗感は少ないです。あの社会は、何かを変える、違いをつくることに最上の価値を置く社会ですので、僕はこうしたい、おかしいと思う、まずこれを言うこともすごく評価されるし、尊ばれる。そしてだったら変えてごらんと機会を与えられる。そういう人にはどんどん、お金を含めて支援が来ます。なので、若干日本と現状は違うかもしれませんが、しかし、それを

■ 第2部 研究実施のあらましと成果

もっと普通の教育の中に入れていこうという傾向は、もともと無意識にやっていたところがあるのですが、最近は意識的にやっていこうという部分もあります。

ですからこれからわれわれが、それぞれがみんなとつながり、支え合って生きていくべきなんだと思えば、当然、小さいうちからやっていくべきでしょうし、そういうメソッドやスキルもつくっていくべきだと思います。これはある意味、小中学校の方に課題としてあるのかもしれませんが、例えばこういう教育をこれからやっていこうとすると、何でこういうことをするのか、何で運動や活動を支える人々が必要なのですかと言われた場合に、私は、そういうふうにしなないと、もうみんなやっていけない時代が来るのですと、これはもう、生きていく上で不可欠な、特に市民社会で生きていく上で不可欠なスキルですと、答えるつもりであります。なので、そういう意味では、この「民主主義のリテラシー」、あるいは「良く生きるためのスキル」、つまり選択の問題ではなくて、多くの人々にとって身につけねばならない問題だと思っています。

それは、最後に、大学院ですのちょっと大学院っぽいお話をしますと、要するに、市場社会、あるいは市場という、マーケットというものが全てではないのだということが、ここリーマンショック以降言われて、その中でよく挙がってくるのが、このカール・ポランニーという人の『大転換』という本で、訳本があります。最近、新訳まで出ました。アメリカの再版の扉は、スティグリッツという、ノーベル経済学賞をとって、日本にもよく来る人ですが、本がどしどし売れている人ですが、前書きを書いています。この本はまず、経済活動というのは自然と仲間に依存する生活の過程であり、したがって、社会から遊離した経済などあり得ないんだと、社会あつての経済なのだと言います、そして当時第二次大戦直後ですが、これからどうやってもう一回社会の中に経済を埋め込むかが問題なんだと主張しています。まさにこの連合大学院が目指している社会のありよう、あるいは連帯経済、連帯社会を表現している言葉だと思います。

あるいは、ソースタイン・ヴェブレンという、これも大変なアメリカの経済学者ですが、この人は製作者本能という言葉を使っています。これも一言で言うと、人を喜ばすのに一生懸命になる本能ですね。それこそ、この間の朝の連続小説じゃないですが、おいしいものをつくって、みんなから「おいしいね。ごちそうさん」と言われて、よかったと思う。これは本能だと。だから、人はいいものをつくろうとするんだと。物づくりもそういう考え方ですね。そして彼は興味深いことに、機械が一旦は人間のこの製作者本能を弱めるが、後に今度はボランティア活動などでその本能は蘇ると予言します。確かに両方とも人を喜ばすことですね。彼はこれを19世紀の終わりからずっと言い続けています。

これについては、日本労働文化財団の理事である稲上毅先生という人が、最近『ヴェブレンとその時代』という、質量ともに巨大な本を書きました。ちょっと歯ごたえのある本を読んでもいいと思われる方は、チャレンジされるといいのではないかなと思います。ポランニーもヴェブレンもアメリカで書いていますが、もともといろんな理由で移民してきた人です。カール・ポランニーは中央ヨーロッパ、ハンガリーから移ってきました。ソースタイン・ヴェブレンも、一家は北欧から移ってきました。したがって、アメリカというところは非常におもしろいところで、我々はどうしてもアメリカを一面的、一元的に見てしまいがちですが、そういうところではなくて、いろんな考え方が錯綜しているところでもあります。

別にまねる必要は全くないと思います。ただし、アメリカの社会のおもしろいところは、いろんな考え方があると思っていますので、簡単にお蔵入りしないのです。誰かがいつも蔵から出しっ放しにしておくわけです。お店を広げるところまで行かなくても、あるよというふうにならずとしているのですね。

日本の場合、残念ながらお蔵入りするケースが多い。そして、お蔵から出されないことが多い。そういう意味では、我々は歴史を学び、そして、先ほどからずっと申し上げております本籍、現住所、もともとそういうものだったんじゃないのか。特に自信を持つことだと思うのですね。日本は発想がいつも右肩上がり、明日は今日よりもいいと思っています。過去は今日よりも悪いと思っています。経済は右肩上がりが終わったのに、社会についての物の考え方は、いつまでたっても右肩上がりです。

アメリカは逆でして、最初が一番よかったと思っています。どんどん悪くなっていると。早くあのよかったところへ戻らなきゃいけないと思うのがアメリカの社会であって、この辺、性格だなと思いますが、そこまではやらなくてもいいけど、日本はもうちょっと、かつてはこういうことがあった、ああいうことがあった、いろんな人がいろんなことをやってきた、そのことをやっぱりリスペクトし、思い出し、僕はこの人の跡に行きたい、私はあの人の現代の後継者になりたいと思えるようなことがあってもいいのではないのかなと思っています。

いろいろ申し上げました。連合大学院に非常に期待するファンの言葉として、お許しいただければと思います。ご清聴、どうもありがとうございました。(拍手)

はじめに 労福協とわたし：一致する運動の発想、構想、戦略

I. 選択的原点回帰という運動発想

A. 労働運動、いつの？どこの？

- ・いくつもの労働運動
- ・どの労働運動を思い出すのか
- ・もう一つの労働運動という労福協運動の気概

B. 四半世紀前からの宿題

- ・「連帯の再興」
- ・「人と人との豊かな関係を創造することこそ、組合が追求すべき本質的な課題であろう。職場において、地域において、組合員が他者との有機的な関係の中で生きることができるよう援助することが求められている。そのためにも、組合はこれまで以上に外部との多元的な関係の構築を迫られているといえる」（『世紀末の労働運動』207頁）
- ・多元的連帯追求する労福協運動

C. 労働運動における社交主義と文化（価値観、暮らし方）形成の伝統

- ・絆的労働による高質の人間関係をめざした労働運動
- ・労働者の社交本能と社交能力を開花させた労働文化運動
- ・戦後日本の連帯文化育んだ「心をつくる労働運動」
- ・草の根の連帯文化再構築めざす労福協運動

II. 労働運動と協同組合が結ぶ連帯社会という運動構想

A. 連携促す労働、協同セクターの転換期

- ・労働運動の社会化（非正規労働問題）
- ・協同間（農・生、農・中小）、労協（労福協）間協力の進展

B. 蘇る連帯社会構想

- ・ロバート・オーウェンの場合
- ・賀川豊彦の場合

C. 先進事例

- ・社会的金融としての労金、労済の先進性
- ・社会的労働運動の米国的転回（マイノリティ、女性、環境、若者）

III. 労福協の運動戦略

A. 過去10年の成功

- ・「ネットワーク」の「コーディネーター」
- ・「国民の共感の得られる社会運動」
- ・「地域にねぎした顔の見える活動」

B. 今後10年の課題

- ・「国民の共感の得られる社会運動」の体系化
- ・「地域にねざした顔の見える活動」の日常化
- ・「ネットワーク」の「コーディネーター」の進化
- ・連帯社会教育・活動としての共同春闘のコーディネーター
社会と地域に開かれた春闘
- ・連帯を促進する共同政策制度要求のコーディネーター
生活困窮者自立支援制度、地域ケア

C. 日本型社会組織セクターの再興をめざして

- ・国家、市場、共同体、家族の架け橋（社会への埋め込み役）
- ・より大きな輪に向かっての働きかけ
- ・地域に応じた輪の形

篠田 ただいま、ご紹介いただきました早稲田大学の篠田と申します。本日はよろしくお願いたします。特別講演1というふうにお書きいただきましたが、あくまで、この後、ございます特別報告の前座というか、露払いというか、そこまでできればいいですけども、そのようなつもりでお話をさせていただければいいと思っております。

私のプロフィールの隣に、レジュメを付けさせていただきました。これに沿いながら、1時間半、はもうないと思いますんで、80分ほどお付き合いをいただければと思います。

「労働運動と協同組合運動が結ぶ連帯社会への可能性」と、この研究集会のテーマ、そのものを引っ張った後に、副題として、「なぜいま労福協が大事なのか」と書きました。ここがきょうの私がおもっても言いたいことでもあります。皆さま方は、当然、労福協は大事だと思っておられると思います。私もそう思っています。ただひょっとしたら、皆さま方と多少ともその理由が違うかもしれません。そういう意味では、外にいる人間が皆さま方の活動をどういうふうに見ているのか、なぜ、皆さま方の活動を大事だと思うのかというのを、たまにお聞きいただくのも、研究集会としては面白いのではないのかなと思ひまして、そのようなお話にさせていただきました。

最初に、労福協と私ということで、「一致する運動の発想、構想、戦略」と書きました。簡単に、小学生の子にも分かるような言葉で言えばいいものを、こういう商売柄、わざと分からなくするのがわれわれの商売の秘訣のようなどころがありまして、本当に、四字熟語、二字熟語が並んで申し訳ないんですが、一言で申せば、私の考え方や私の思っていることとよく似ているというのが、ここで言いたいことでもあります。

最初に、選択的原点回帰という運動発想と書きました。自分でもこう書いて、今更ながら、なんともわかりにくいなと思うんですが、こういうことなんです。

よく言いますね、労働運動の原点に帰ろう、あるいは、なんとか運動の原点に帰ろうと。あまのじゃくの私は、いつもそう言われると、どの労働運動の原点に帰るんですかと。そういうことをいつも考えてしまいます。

私も、齢55になりました。このネタは今、授業でやってもまったくうけないんですが、この皆さんの顔を見てると、ひょっとしたらうけるかなと思って、一つ言いますが、私の生年月日は、山口百恵とまったく同じであります。多少、ご協力いただいてありがとうございます。これ、授業でやるとシラーとした、ほんとに、不気味な空間が浮き上がるんですが、誰だ？ それ

は、というぐらいのことになります。私たちのころ、山口百恵、森昌子、桜田淳子、この3人は崇められていた存在でありまして、その実力ナンバーワンの山口百恵と……。私は彼女が明け方に生まれたということまで調べたことがあります。生まれたのも横須賀で、私、渋谷だったんで、それほど遠くはないというふうに、強弁したこともあるぐらい、とても誇りに思ってたんですが。

そういう年代で、かれこれ、労働運動、労働組合について、興味を持ち、それなりに勉強してきて、30年。途中、アメリカで勉強したり、あるいは、いろんな地域の労働組合や労働運動をああでもない、こうでもないと見聞きしてまいりました。その思いからすると、一言で言うと、労働運動は1つではないと。これ、別に労働運動に限りません。なんでも、時と場所が変われば、その意味は変わるわけですね。当たり前のことです。昔強かったものが弱くなるのであり、昔正しかったものが間違えになる、そんなことはよくあることで。そういう意味では、どこ行っても、どの時代でも、まったく同じもの、大事にしなればいけない、人間の生きる道というものはありますけれども、それほどいつもいつもすべてが同じなわけではない。労働運動も当たり前であります。で、そういう意味では、私は、その労働運動にはいろいろなものがあるよなど、いつも思っております。

では、どの労働運動を思い出すかというところでもあります。労働運動と労働組合運動は違うというふうに、違うと言うと言い過ぎですね。労働運動イコール労働組合運動とは、思わない方がいいと思っているのが私の考え方です。お聞きになった方もあるかと思いますが、労働組合の世界では、特に研究の世界では、それこそ、神様のように崇められている人がいます。ウェッブ夫妻という、イギリスの19世紀の学者であり実践家であり、イギリスの労働運動、あるいは労働党、そういう労働者の運動を作るのに多大な貢献をした人で、ご夫婦は『産業民主制論』という巨大な本、翻訳がずいぶん昔から出てます。寝るときに非常にいいぐらいの厚さで、枕になるんですが。ほんとに、バイブルですね、労使関係、労働組合についての。

この人達が、あるいは似たようなことを言ってる人もイギリスにはいるんですが、イギリスの労働運動とは、労働組合運動と、労働党ですね、政党、そして、女性運動。この場合、女性運動はほとんど協同組合運動なんですね。この3つが一緒になって、イギリスでは、労働運動というんだと言っております。なぜか、海外、特に日本ではこの残りの2つがどいてしまって、労働組合イコール労働運動というふうになってるんですが、確かに、イギリスではそうだったんだろうなと思います。

それはイギリスに限らず、実は日本もそうだった。私が、この講演のお話をいただいたときに、皆さんもお持ちですよ、「10年間の連帯と協同」と副題のついた『結成60周年記念誌』という冊子、これで勉強しなさいというふうに与えられて勉強しました。労福協運動の出発点は1949年、中央物体協の形成であると。つまり、このときに労働運動は、労働組合運動とこの中央物体協、つまり、労福協運動の両輪で動いてたということですね。賃金だけでは食べていけない、いろんな福祉がなければ生きていけないという状況の中で、労働組合が、もう一つの柱を作りあげます。もちろん、そのときには、労働者政党、社会党であったり、共産党であったり、あるいは、保守政党の中にも協同組合に大変興味を持っている政党がありました。そういうところと連携をしながらということで、実際には、イギリスの先ほど言ったウェッブの3本柱とよく似たような形で出発しているわけですね、戦後の労働運動は。

そして、戦前も似たような状況でした。戦前から、生活協同組合についての本があるんですが、この本をひも解いてみますと、よく出てくるのが、これらの生活協同組合を担っていたのは

労働者であると。つまり、生活協同組合、特に、戦前の場合は、日本の労働者が自分たちの生活を支えるために、そして、自分たちの生きる場所、あるいは仲間を支えるために、協同組合をやってきたという歴史があるわけですね。事実、皆さんの地域でいろんな歴史をひも解いていただきますと、活動家の方は、ほんとにいろんなことを幅広くやっていたことがお分かりになると思います。

これも多少蛇足になりますが、皆さんの都道府県もそうだと思いますが、1970年代に、各都道府県の労政部、行政がその県の労働運動史、分厚いやつですね、これをいっぱい出しています。今でも出してるところがあります。これが大阪であります。『大阪社会労働運動史』という、これはもう、空前絶後、世界で冠たるもんだと思います。1冊が1,000ページ前後で、今、9巻までできてます。驚くべき物量ですね。しかも、今、名前で言ったように、社会労働運動で、すべての運動が全部書いてあるんですね。大阪というところは、戦前、日本でもっとも経済社会の活況を呈したところであり、労働運動にせよ、社会運動にせよ、大変活発なところでありました。しかも、お互いによく手をつなぐ、絆（かみしも）を脱ぐとよく言われますが、その所属はあんまり関係ない、問題が解決するんであれば誰とでも手をつなぐ。

一見、意外なんです、あるとき、青森の労働運動史を読みました。これも結構分厚い本であります。2冊本なんです、1巻本の後ろの方に座談会というのがありました。戦前、いろんな活動をしてた人たちが集まってるんですが、一人一人、全員、現在の所属政党が違うんです。県知事は自民党であり、当時国会議員、青森は初めて、その後もありません、共産党の議員もいました、社会党の議員もいました、民社党の議員もいます。それが、自分たちの戦前の若いころの話を楽しそうにやるんですね。同窓会です。一番盛り上がったのが、自民党の県知事です。もう、何々君、今はどうしてるのかなとか、そういう、これ、座談会なのかな？ それとも、OB会の飲み会なのかな分からないノリで、とても楽しげに話をしていました。

つまり、みんな、昔は一緒にやってたところが多かったんですね。私はよくこれを、本籍、現住所と分けます。本籍は皆一つで、現住所はたまたま分かれてるけれども、いつでも一緒にやる用意はあるはずだということなんです。私は、そういう意味では、この労福協というのは、現在、もう一つの労働運動を思い出させようとしてるんだらうなと思っております。つまり、もう一つの労働運動を作るのではなくて、もともとそうだったでしょ？ と。もともと、日本の労働運動は、労働組合だけではなくて、労働者福祉運動であったり、協同組合運動であったり、幅広い人々と手をつなぎながら自分たちの生活を支え、そして、何よりも、きょうのお話のもう一つのポイントなんです、豊かな人間関係を作る、支え合い、絆、いろんなことがあります、そういう生き方、暮らし方を社会に広げる運動、それをしてきたのが日本の労働運動であり、そのことを思い出そうではないかと。これが私の、労福協さんがおやりになっていることではないのかなというふうに思っているしだいあります。

実は、似たようなことを、まだまだ若い28歳ぐらいに、まだまだ髪の毛が長くて真っ黒な時ですが、たまたま書いた本、名前はおどろおどろしいんですが、『世紀末の労働運動』という、この本で最後のところに書いたんですね。若い身空で世の中まだまだ分からないときに、こんなことよう書いたなと思うんですが、恥ずかしいですけど、ちょっと読ませてください。「人と人の豊かな関係を創造することこそ、組合が追及すべき本質的な課題であろう。職場において、地域において、組合員が他者との有機的な関係の中で生きることができるよう、援助することが求められている。そのためにも、組合は今まで以上に、外部との多元的な関係の構築を迫られている」。別に胸を張っているわけではありません。実は、最近読み直すまで忘れてたぐらいなんで

すから。でも労福協さんがしていることはこういうことですよね？

そして、労福協さんが、今、おやりになっていること、あるいは日本の労働組合運動も求められていること、あるいは日本の社会が、今求められていることこそが、私が、たぶん、こういう研究や勉強を始めて以来、関心を持ち続けていたものであります。『世紀末の労働運動』を出してまもなく、「連帯の再興」などという、おどろおどろしいタイトルの論文を雑誌の『世界』に書きました。当時、90年代の初頭ですが、すでにいろんな絆が緩み始めていた時であります。それをなんとかもう一度つなぐために、そういう連帯というものを社会にもう一回つくるために、労働運動が何かできないのだろうか。当時、連合ができた時代です。私は、素朴に、この連合がそういうことに何かを果たしてくれるのではないかと、だから、連合という名前を付けたのではないかと。組合の世界から言えば、組合同士が連合するということだったのかもしれませんが、当時、私はこの連合というのは、社会全体のいろんな人と、労働組合が連なるために、そういう名前を付けたのかなというふうに思ったぐらいであります。

25年、たちました。今、たぶん、連合さんも似たようなことを考え始めているのではないのかなと確信するしだいあります。それは、あしたのシンポジウムの中でもお話が出るのではないかと思います。今、申しあげました労働組合運動、例えば、世間では、賃上げをしてるのかしていないのか、いくら、ことは上がったのか。労働条件、かなり、物質的な、数字が表れるところをよく強調されます。もちろん大事です。もちろんそれを外すことはできません。しかし、それだけではないだろうと。もう少し言うと、そういう労働条件が上がるということが、何に基づいて、あるいは何と一緒になければならないかというふうに考えたときに、それは、やっぱり、より充実した人間関係の中で働き、あるいは生き、暮らし、そしてその中で自分たちの労働条件や生活条件が上がっていくということが前提なのではないのかなと。

それがCの「労働運動における社交主義と文化（価値観、暮らし方）形成の伝統」というふうに書きましたが、この辺、はっきり言えば、私の話は、この労働組合、労働運動の業界では、いつも違和感を持たれるところであります。まあ、それは、いいんじゃないの？と言われることが大変多いですが、果たしてそうだろうか。特に、私は戦後の日本の労働運動について大変興味を持っているんですが、この国の労働運動は、つい最近まで、一度たりとも、戦後46年の社会党政権以降半世紀、自分の近い政党が政権を握ったことがありません。にもかかわらず、大変大きな存在感を持ち、かつ、人々の生き方、暮らし方、物の考え方に、多大な影響をもたらしたというふうに思っております。

それはもちろん時代が変われば風化していくのですが、たまたま私の大学院生が、今調べていることがあります。いわゆる、自己責任論。大変、今、多くはびこっております。よくお話が出るところであります。この自己責任論というのは、ひょっとしたら、労働組合や労働運動が弱くなったことと関係があるのじゃないだろうか。彼が今、調べてるのは、1950年代、1960年代、1970年代の自己責任論がどういうふうに語られていたか。それと、80年代、90年代、2000年代の自己責任論がどういうふうになっているか。これを比較したいというふうに言うんですね。私もよく分かりませんが、そう言われるとそうかもしれないなど。つまり、労働運動は何をしてたかという、繋がり支え合う人々の心を作ったかどうか。永田町に自分の旗を立ててなかったかもしれない、けれども、人の心に旗は立ててたかもしれない。それは、いろいろなやり方でそういう考え方をみんなが持つようにしていただろうと。ここで社交本能とか社交主義と書きました。社交、人と人が交わる、そしてその交わる中で社会ができるということですね。付き合いで、一言で言えばね。そういう付き合いを作る場所を、実は労働運動というものは、毎日毎日、

いろんな形で作ってきたのではないのかなと。

したがって、ことしは何パーセント引き上げた、ことしはこの合理化をこれだけ止めた、数字になるものだけではなくて、いつでもそういう機会を提供する、そういうきっかけを作る、これはある意味、数字になりません。だけれども、それを経験したり、見たりすることによって、人々が、ああ、なるほど、おれたちはつながってるんだと。

例えば、私の大学にも組合があります。私も組合員であります。早稲田大学は、一時期、組合大学と言われるぐらい、組合の影響力が非常に強かった時代があります。今ではなかなかそういうことは言えないんですが、しかし、今でも、春闘が近くなれば職場集会をやります。集会っていったって、数人です、集まるのは。けれども、そこで一緒になっていろいろ話をしていると、明らかにいつも見ている同僚の顔が違って見えます。いつもは教授であったり、助教授であったり、講師であったり、あるいは学部長であったり、平の教員であったりするわけですが、そこでは同じ仲間なんですね、職位や役職は関係ないんです。そうすると、ああ、この人はこんなことを考えてたのか、ああ、この人、結構、組合みたいなことにも興味あるんだと。

つまり、日頃、聞けない話が聞けたりするわけですね。日頃、自分とこの人が遠いと思っていたときに、ああ、結構近いじゃないかと思ったりする。もう一つの世界が見えたりするわけです。べつにその集会で、その議論で、何か格別、われわれの条件が変わることはありませんが、そういう機会が定期的に持たれることの大事さというのは、私は本当に、最近、ヒシヒシと感じるしだいあります。

多少、昔話にもなって申し訳ないんですが、実は、日本の労働運動、特に、50～60年代にかけては、われわれのポピュラーカルチャーなんて最近は言いますが、娯楽に大変大きな影響を与えました。皆さんの中に、ご覧になった方もいらっしゃるかと思いますが、1961年、ブルーリボン賞、いわゆる、日本の映画でもっともたくさんの人たちが観て、いい映画だという評価を得た賞をもらったものに、『キューポラのある街』という映画があります。吉永小百合の事実上のデビュー作であります。ちなみに、吉永小百合はうちにとっては、名誉総長のようなものです。冗談じゃなくて、ちょっと吉永小百合って言った瞬間に、われわれは気持ち特別になるっていうか。例えばいつも怖い顔をして、すごく難しい話をしている経済学の教授が、あるとき、おれは、実は、吉永小百合と同じところに学校にいて、彼女が夜、図書館にいるのを知ってたから、よく行ったんだみたいな話をされると、どういうことなんだろう？ と思ったりもしますが。

この作品は埼玉県に川口市という、鋳物工場が立ち並んでいるところの貧しい家庭の女子中学生の話であります。たぶん、地元のビデオ屋、DVD屋さんで借りれますんで、ぜひ、ご覧になっていただけるといいと思いますが、完璧な労働映画です。労働組合が前面には出ていません。微妙に出ているんですが、別に労働組合の傘下の映画ではないんです。でも人はどういうふう生きるべきかに労働運動の考え方が反映しています、特に、若い世代にですね。これに顔をしかめるのは、親の世代です。連帯に生きるのが、その吉永小百合たちの若い世代なんですね。最後もある意味、ハッピーエンドで、これから、私たちは手をつないで頑張って生きていくんだと。まさに、高度経済成長はその後続くわけですけれども、そういう意味では、ああ、そうやって手をつないで、みんなで頑張ってやっていこうと。そこに、それなりに労働組合が存在感を示しながら描かれているところを見ると、やっぱりこの時代、労働組合、あるいは労働運動というものが、われわれの生き方、暮らし方に大きな影響を与えている。

つまり、今で言えば、AKB主演の映画に、労働組合は大きな存在感を示しているということです。役割的に言えばですね。今のAKBに関心を持つのは、はっきり言えば、一部の人と言っ

てもいいですね。私、一度も、真剣に見たことも聞いたこともないし、メンバーの名前も知らないです。よく言われる、今は、それぞれの好きな分野にそれぞれの人々が特化して楽しんでいる状況があるわけです。『キューポラ』のころは、老若男女、みんな映画を観ました。国民的娯楽であります。その国民的娯楽の中で、もっともみんなが観た映画が労働運動の影響を受けたものであったということですね。

あるいは、歌の世界もあります。われわれが、実は、こういう日本語で、日常会話で、歌を歌うようになったのは、1960年代からです。最初の曲は『こんにちは赤ちゃん』です。きょうはもう自信を持って、これ以上、なんの説明もしなくていいと思います。この歌がなんであるかをですね。他言を要しませんが、これ、授業だと、かけたりなんかして、大変なことになるんですが、必要ないと思います。永六輔という、まだ頑張っている作詞家を作った、彼が初めて、普通の日常会話で歌詞を作って歌にしたんです。

ところが、その前兆があります。それが、歌声運動であります。労働組合が全面的にバックアップしていました。この歌声運動は、しばしば外国の歌、ソ連とか中国とかも入ってましたが、アメリカの労働歌も入ってました。『線路は続くよどこまでも』という曲がありますね、あれ、メジャー調なんです、本当はマイナーだったらしいです。暗い歌です。なぜならば、あれはもともとは、鉄道を建設する労働者の辛い毎日を語る歌なんです。線路は続くよ、どこまでも、おれたちは働かなきゃいけないという。これ、ガラリと、労働歌として、むしろポジティブに語られてるわけですね。それで日本に入ってきた。

それまで日本人は人前で歌なんか歌えません。お父さんたちは、浪花節をラジオから聴いている。それを一人でうなるぐらいです。日本で初めて、皆が一緒になって人前で歌を歌うようになったのが、歌声運動であります。当時、労働組合、組織率で4割近くありました。特に、全国津々浦々にあった鉄道とか郵便とか自治体とか、とにかく、いたるところに組合があり、その人たちがこういう運動をしてたわけです。つまり、地域にこういう文化を伝えてたわけです。

なぜ、こういうことが広がったか、簡単な話であります。当時、男女が一緒に、公然と何かを一緒にすることはほとんど有り得なかったのに、ここでは公然とできたわけですね、若い人たちが。とても貴重な娯楽の場所であり、とても貴重な新しい生活文化の場だったわけですね。そういう歌声運動が前身にあって、その後、歌謡曲が出てくるわけですが……。ちなみに、いずみたくという作曲家を覚えている方もいらっしゃると思います。この人は、歌声運動出身であります。歌声運動出身の人は歌謡界には結構多いのではないのでしょうか。

そして、これも非常に興味深い話なんです、われわれ、3・11以降、リバイバルした曲がありますね。永六輔の『上を向いて歩こう』なんです。この『上を向いて歩こう』、なんか、失恋したときの歌のように聞こえますが、永六輔、これ、自分で書いてます、これ、何の歌か、60年安保に負けた歌です。あの労働運動が深く関わった60年安保闘争に負けた後、泣いちゃいけない、頑張らなきゃいけないっていう歌なんです。ですから、あれをもう一回、グーグルっていただいて、ユーチューブとかを見ていただいて、歌詞を見ていただくと、ああ、そうかと思えます。幸せは空の上なんです、もう一回頑張ろうと。そういう、普通の歌謡曲の中に、その時代の、みんなが、とにかくこれはいけないことだからみんな頑張ってそれは止めさせて、別の社会を作ろうよとした運動文化がその歌詞の中に入って、そのまま、われわれの心の中に残って、そしてまた、3・11のような状況になったときに復活したわけですね。

そういう意味では、日本の戦後の労働運動が、私たちの生き方、暮らし方にどれほど大きな影響を与えたかというのは、いわゆる、経済条件だけではなくて、生活文化も考えてみるべきだと

思うんです。私はここでは労働文化というふうにあえて言ったり、連帯文化と言ったりしていますが、日本の労働運動は確かに、霞が関や永田町に旗は立てられなかったけれども、全国のあらゆる人の心の中に、旗を立てることができた。その旗が、立たなくなった、旗がしおれてしまったときに、ひょっとしたら、自己責任論という話が忍び寄り、そして、広がっているのではないのかなということ、今度、学生と一緒に考えたいと思っています。そういう中で、労福協は、私はもう一度、私たちの心の中に、つながり、支え合って生きていくという旗を立てようとしているのではないのかなというところで、2ページ目にいきたいと思いますが。

「労働運動と協同組合が結ぶ連帯社会と運動構想」、この労福協が今めざしているもの自体も、私は大変賛同すると同時に、ある意味、タイムリーな話だなというふうに思っておるわけであり。その、タイムリーなというのは、この10~20年ぐらいの現代の日本を考えたときにであります。

一つは、こういう連携を促す、労働セクター、協同組合セクターの事情があったらうと。労働運動の方で言えば、これは皆さんもよくご承知の労働運動をもっともっと開いていかなければいけない。日本の労働運動の特色である、労働組合運動の特色である、企業別組合をもう少し開いていかないといけない。それは、非正規労働者問題によって、大きく問題提起され、いろんな形で内外から指摘をされ、認識としては、今、日本の労働組合運動は、そういう立場に立っていると思いますし、春闘なんかでも、そういう方向に向けての取り組みはなされているかと思えます。

ただ、もう一方の方で、協同組合の方はどうかというと、実は、協同組合の方もこの10~20年、大きな転換期にあったと私は思っております。一つは、農業協同組合であります。農協は今、非常に大きな曲がり角に来ました。ある意味、戦後作ってきた農業協同組合のシステムをひょっとしたら、解体しなきゃいけないところにまで、今、来ている部分もあります。日本の協同組合の歴史は非常に長いです。特に、農業協同組合は。戦前は、農村の問題を解決するために、国家が、協同組合というものを活用してやったところもあり、非常に大きな存在感を持って、そのまま民主化した形で戦後も引き継がれたので、ある意味、単なる経済協同組合機構という問題に留まらない。日本の農村社会の根底に関わるシステムの問題だと言ってもいいと思います。

しかしそれは、きのう、きょう自覚されたことではなくて、農業協同組合自体がすでに70年代ぐらいから大きく自覚を始めた部分であります。大きく言うと、その当時は言い過ぎかもしれませんが、一部の人たちが自覚をし、それが広がっていった。70年代、どういう時期かというと、日本が米を作らなくなった時期であります。実はそのときに、じゃあ、私たちは誰なんだ？

と、農民が思ったわけですね。農村住民ってということなわけ？ っていうことになったわけですね。じゃあ、私たちが私たちであるっていうことは、どうやったらそれは自覚でき、認めてもらえるの？ っていうところから、実は、日本の農民が自分たちで自分たちの農業を始めた。これがいわゆる、今日に至る有機農業、自分たちが作りたいものを作りたいように作る。そしてそれを、感謝して食べてもらえる人たちを探す、そういう運動が始まりました。

ある意味でいうと、それが今日に至って、例えば、ファーストフードに行けば、きょうのハンバーガーのレタスはどっから来てるかみたいなことが全部書いてあるわけですね。もちろん、多少とも商業ベースにはなってますけれども、自分たちが精魂込めて作った、こういう作り方がいいと思っていたものを、ぜひ、消費者の人に食べてもらいたいという思いで、今、こういうシステムができるようにまでなったわけです。この間、いろんな環境問題の意識が高まったり、いろんなことがありました。でも、これは、言ってみれば、日本の農家や農業が、もう一回、自分た

第2部 研究実施のあらましと成果

ちを見つめ直した結果、どうしたらもう一回、みんなと一緒に、自分たちの農業を立て直すことができるのかということから始まった運動であると思います。

そういう歴史に、もしご興味があれば、農協セクターには非常に興味深い文化センターがあります。一つは、家の光協会という、これは後でお話申し上げますが、賀川豊彦という、労働運動と協同組合運動にとっては、絶対に忘れてはならない人が、非常に尽力して始めて、戦前の農村文化運動、つまり、農民の心を作る運動です、その組織ですね。今も、農協にはあります。

もう一つは、農山漁村文化協会です。農文協と略称しますが、ここのサイトに一度入っていたら、おびただしい量のさまざまな本と雑誌、特に教育関係ですね、農業教育とか、あるいは環境教育とか、これからの社会がどうあっていくべきなのかということについて、本当にたくさんのお本が出てますが、残念ながら、これは、ツタヤとか普通の大きな本屋さんに行ってもなかなか手に入りません。彼らは、自分たちでネットワークを持って、そういう本屋さんじゃないところにまで、販路を広げて、つながってやってるんですね。そういう意味では、農協セクターも、実は、70年代から、あらためて、農民の心を作る運動を始めている。それが、最近では、いわゆる6次産業といわれる。この6次産業は、1次産業、農業ですね、2次産業、製造業、3次産業がサービス業であります。1、2、3足して、6次になるんですね。つまり、農家と製造業者と消費者が一緒になって、あるいは売の人が一緒になって、何かできないか、新しい協同の試みであります。

実は、日本の協同組合セクターというのは、3つあります。一つが、こちらにも今、参加なさっている生活協同組合セクターですね。もう一つが、農業組合セクターです。ここには漁業協同組合も入りますし、林業も入ります。もう一つ、巨大な協同組合セクターがあります。あまり、外部からはそういうふうには認識されていないところもありますが、中小企業なんです。中小企業の多くは、協同組合の下でやっています。これは、同じ1949年、日本の労働福祉運動が始まり、いろいろな労金法とか、そういうものができたと同じころに、中小企業の協同組合の法律ができてます。ご承知のように、日本の企業の9割以上の数が中小企業です。労働者の圧倒的多数が中小企業で働いています。

つまり、日本は、冠たる協同組合企業の国なんですね。もちろん、協同組合型の企業というのは、いろんな形があります。この場合は、経営者がお互いに、経営するために必要な資源を共有するための協同組合なので、厳密に言うところ、協同組合企業と言っていいかどうかは分かりませんが、少なくとも協同セクターの一員ではあるし、大変な大きな力を地域では持っているのは、皆さんもご承知だと思います。この協同組合を基礎とした、中小企業と農協が、今、本当にいろいろな6次産業を中心にして、協力関係を積み上げています。

ちなみに、中小企業関係の雑誌を図書館とかでご覧になってください。こういう話ばかりです。もう、日本では大企業というのが規模としてはどんどん小さくなり、むしろ、日本の企業は中小企業であるというふうな、経産省なんかも言うようになって、中小企業に対する再評価の動きがここ10年ぐらい強まっていることもあります。あるいは、先ほどからお話があるように、地域が崩壊する危険がある中で、もう一回、中小企業という、地域に密着した存在に注目が集まっているということもあります。

そして、労働者福祉協議会、労福協の動きがあります。これはもう、わざわざ、私がここで言うことはないと思いますけれども、そうした、協同組合セクターの中での新しい展開というものが、この労働運動と協同組合を結ぶ連帯社会の運動構想の背景にあるだろうと思ってます。

次に、「蘇る連帯社会構想」ということですが、先に賀川豊彦の話をお話させていただきます。こ

れも、私の学部生が放った秀逸のクエスチョンなのですが。彼に、ちょっと賀川豊彦、調べてもらえないかな？ って言って課題を与えました。1カ月して、彼が全集とかいろんなものを読んで、帰ってきました。そして、放った質問がこれであります。どうしてこんなすごい人を、みんな忘れたんですかね？ この一言であります。私はその瞬間、もう、君、来なくていいから、Aあげるから、君の勉強、終わったと。もう、ほんとに、その質問もらっただけでいいからって言いそうになりましたけど、もうちょっと頑張っただけでいいからって言って帰したんですが。今賀川豊彦を考える上で最高の質問だと思います。

労働運動においても賀川豊彦は、特に、同盟系においては、今日も、賀川豊彦を本当に尊敬し、忘れないようにしています。農業協同組合もそうであります。生協ももちろんそうあります。これも、きょう、幸いにもご説明しなくてもお分かり頂ける方の話なんですけど、大平正芳が亡くなった後に、首相職を継いだ、鈴木善幸という、自民党の総務会長をやらしたらナンバーワンと言われてる人がいました。この人が首相をやらなければならなくなったんですが、岩手県出身であります。漁業界、特に、漁業協同組合のチャンピオンであります。戦後の漁業協同組合を大きくしたのは、彼のお陰と言っていいと思います。ご承知のように、岩手県は漁業が大変盛んであり、昔から、漁業協同組合が強かった。彼は賀川豊彦を尊敬して漁協の世界に入った。そして戦後間もないころ、初めに選挙に出たときには賀川が関係していた社会党で出ました。その後、いろんな関係で自民党に移ったわけですが、一番リベラルで、社会党に近いと思われるような、宏池会にいたところはさもありなんと思えますけれども、このように賀川は本当に幅の広い人たちに影響を与えた。

そして、彼はクリスチャンであります。彼は徹頭徹尾クリスチャンですね。聖書にはいろんなことが書いてありますが、教会に行くと、必ず、お祈りをみんなで斉唱して捧げます。その中に、「御国を来たせたまえ」と書いてあります。御国というのは、神の国ですね。どこへ？ 今です。この、今のわれわれの社会の中に、神様が思う社会を作ってくださいと。作らせてくださいと。賀川豊彦を導いたのはこれですね。どうしたら、御国を、今の自分が生きている社会にもたすことができるのかと。だから、もうその一点ですから、なんでもやれるわけです、必要なことはですね。だけれども、なぜか忘れられている。

彼が、さらに1カ月後に出してきた答えがあるんですが、これも、大学院に行く？ ってもう少しで言いそうになりましたけれども。あの人、大き過ぎたんですよ、大き過ぎるから、それぞれの現住所の人たちが受け止められなかったんじゃないですかね？ という答えでした。確かにそうだろうなと思います。この賀川豊彦が、実は最初に、神戸の貧民窟に、今で言うと、ソーシャルワーカーとして入ったのが、100年前であります。

そこで、賀川豊彦にゆかりのある運動体が、賀川豊彦献身100周年ということで、数年前でしたかね、大々的に連携しながらやりました。ほぼ、労福協さんのこの組織体に参加している人たちが全部並びましたけれども、他にも並びました。農協さんも並びました。そして、一昨年ですかね、国際協同組合同年という、国連が定めた記念年を祝すために、史上初めて、日本の協同組合セクターが全員並びました。中小企業も並びました。農協も並びました。ここの労福協にいらっしゃる方々の組織も並びました。初めてだと思えます。これも新しい大きな転換期ではないかなと思えますけれども、つまり、賀川豊彦が考えた、どうしたら御国がこの世に来るか、どうしたら人々が自分勝手なことをやめるか。キリスト教は基本的にはこの一言です。人のことを考えなさいです。自分勝手をしなさんなっていうことですね。人とつながって、人のことを考えて、人と幸せを共にする、これがキリスト教の原点です。そういうものを作るための協同組合が、賀川豊

第2部 研究実施のあらましと成果

彦にとっての協同組合なんですけど、まさにそういうものが、今、求められているんだろうなと思います。

そして、ロバート・オーウェン。これはちょっと説明しなきゃいけないと思いますが、19世紀の前半に生きた人ですが、もともとはイギリスの工場の労務管理を任された人なんですけど、当時のイギリスに限らず、工業国では、子どもは本当に働くだけが使命だ、そしてそのためにはどんなに暴力的にしつけてもいいから、やらせなきゃいけないという、今から考えるととても信じられないような状況の中で働いていて、その子どもたちに学校を作った、幼稚園の創始者と言われています。それに始まって、彼は、理想の社会、つまり、人々が手を携え、支え合って生きれる社会を作るために、自分たちの理想の村を作ったり、あるいは労働組合を作ったり、あるいは協同組合を作ったり、言ってみれば、賀川豊彦のイギリス版。逆に言うと、賀川豊彦は日本のロバート・オーウェンというふうに言われる所以でもあるんです。

彼のそういう巨大な構想、実は、この中で、私、きょう、レジユメを見ながら、はあーって思ったのは、皆さんお持ちの51ページですね。これ、高木先生の話をするのはどうかと思うんですが、51ページに「お祭りから始めよう」と書いてありますね。要するに、つながり、支え合う社会をもう一回作る、その最初はお祭りから始めよう。ロバート・オーウェンは、本当にそうしました。ソーシャルフェアという、フェアはお祭りですね、ソーシャルフェアというのを作って、いたるところでそれをやって、楽しく協同を学んだんですね。いろんな娯楽もあります。いろんな催しもあった。まさにお祭りであります。高木先生がそれを意識して書いたのかどうか分かりませんが、こんなところにもロバート・オーウェンがひょっこり顔を出しているんだなと思ったんですが。そういう意味では、ロバート・オーウェンとか賀川豊彦が考えた、協同社会というものを、私たちはもう一回見直すべきときに来ているのではないのかなと思います。

そして、何を隠そう、労福協のメンバーの活動が連帯社会の再建にさらに大きな貢献をしたと思います。これを今、皆さんの前で申し上げる必要はまったくないと思いますが、この10年間の歩みを読んでも、大変いろんなことをされてきた。その中であえて申し上げるとすると、労金、労済の、ここで書いた「先進性」ですね。社会的金融と書きました。本来、金融は社会的でなければいけないはずなんですよ？ だけれども、リーマンショック前後を含めて、金融というのは、むしろわれわれの認識の間では、社会的ではない存在というイメージがありますが、その中で、労金、労済は、どうしたら社会のために、金融という機構が役割を果たせるのかということで、ずっと長い間、試行錯誤を続け、さらに、今回、近年においても、重要な試みをされていると思いますが、そのこと以上に私が興味深いのは、そのことに、他の金融機関が気付き始めたということですね。自白はしていませんが、明らかに真似してるなと思うケースがあります。

東京に、城南信用金庫という信用金庫があります。ここが、環境投資というプログラムを始めました。つまり、環境にいいものを作る、あるいは仕事をする、商売をするのであれば、安く投資しましょうと。これは、岩波のブックレットになりましたけれども、信用金庫というのは、もともと地域の、特に中小企業をはじめとした地域社会に貢献することを目的としてできたわけで、ある意味、当たり前と言えれば当たり前かもしれないんですが、それがそうやって、岩波のブックレットになるぐらい、特異なものとして評価されるという辺りが、必ずしもそうでなかったということだと思うんですが。こうした、新しい金融の社会貢献、あるいは社会的な在り様を求める姿は、他にもいろいろ見られると思います。それは自主的にやってる部分もあれば、やはり、社会が金融というものをもっと社会の役に立ててもらわないと困るという、やっぱり、プ

レッシャーをかけてることだと思っんですね。

それは、やはり、労金、労済が、そういうことを続けてきた、そして、現在も非常に大きな役割を地域で果たしているということが不可欠の要素ではないのかなと思います。労済さんにしても、地域でそういうことをしていく中で、ある意味、似たような問題意識を類似業界に促してきた。例えば生保業界ですね、生保業界はご承知のように生保レディという、日本で得意なやり方ですが、女性の方々が顧客を回って保険を売り、メンテをするわけですが、最近、生保業界、特に、労働組合さんが、これを強調するんですが……。結局、地域で回っている、金融のヤクルトレディみたいなもんですね。ですから、震災のときにも、特に、支払いの問題もありましたけれども、実際にこの地域にはこの人たちがいたはずだということ覚えていて、そこをいろいろ回ったりしているんですね。明らかに、生保が地域に生きる、社会の中で生保という産業をもう一回埋め込み直すというふうに、意識的にやっているんだろうなと思います。私はそういう意味では、信用金庫と同じように、そうした、社会的金融という流れ、労金、労済が作ってきた社会的金融という流れに合流する動きがあるだろうなというふうに思っております。

もう一つ、ここに、アメリカのことをちょっとご紹介しました。これはわれわれの業界で、結構話題になったことなんですが、ことしの初めに、AFL-CIOという、連合のアメリカのカウンターパートですね、ここが大会を開きました。いくつも決議が出てきたんですが、その中で、驚くべき決議が出ました。連合で言うと、中央執行委員会に、他の団体の代表を入れるっていうんですね。他の団体っていうのは、例えばマイノリティーですね、NAACPという全米有色者協会という人権運動、市民権、公民権運動を頑張ってきたところですが、それから、環境団体、女性団体、青年団体などの代表を中央執行委員会に入れて、議論に加わってもらうと。言ってみると、外部監査なんてもんじゃないです。自分たちの労働運動の行く末を、そういう人々と一緒になって決めるっていうんですね。非常に大きな波紋もよびました。そこまでしなきゃいけないのかと。

それをしようとした大きな理由は、日本と同じであります。労働運動をもう一回、社会の中に埋め込み直す。そして、自分たちと問題を共有する人々と手を取り合う。それを非常に象徴的にやるために、たぶんそういう中央執行委員会に入ってもらおうという、劇的な方策を取ったんだと思いますが、ポイントは、どうやったら労働運動をもう一回、社会の中に埋め込み直すことができ、そして、社会の中で手を取り合って、一緒に問題を解決することができるか、そういうことだと思っんですね。そういう最近のいろいろな流れを見ていきますと、この労働運動と協同組合が結ぶ連帯社会という運動構想が今、起きているというのは、必ずしも、労福協さんが特別だというよりは、労福協さんが時代の流れを引っ張っている、あるいは、時代の流れの中にしっかりといる。そして、労福協さんは一人ではない。変わってるように見えるかもしれないけれども、一人ではない。非常に多くの仲間たちが、お互いに、まなごしを向けあっている状況があるのではないのかなと思っております。

最後の、このⅢの「労福協の運動戦略」という、ここはある意味では、おまえに言われる話ではないわという、余計なお世話かもしれないんですが、ファンとして、なんかそういうことを言ってるなということで、ちょっとお聞きいただければと思いますが。先ほどから申し上げていますように、過去10年、私は成功していると思っんですね。高木先生のご報告の中でも、過去10年は成功したと言っておられます。この10年間の歩みを拝見しても、3つの柱、下からいきますと、地域に根差した顔に見える活動、それから、国民の共感の得られる社会運動、そして最初のネットワークのコーディネーター。前二者は最後の存在が前提なのは明らかです。労福協さんはこの

間、このネットワークという言葉とコーディネーターという言葉を非常に強調されています。要するに労福協運動がやろうとしていることは、本来、労働運動が担うべきだった、1ページ戻っていただくと、私が、いみじくも、奇跡的に分からない中で直観的にいった、こういう多元的な連帯を作る、サポーターというか、きっかけ作りというか、そういう人間をもう一回……。新しくじゃないんです、前はいたはずな、そういう人たちを、もう一回、この社会で増やしていこうよということではないのかなと。

そしてこういう人達を増やしていく中で大事なのが、こういう国民の共感が得られる社会運動であり、地域に根差した顔の見える運動であろうと。国民の共感が得られる社会運動も、地域に根差した顔の見える運動も、いずれも、いろんな人たちと一緒にやっているというのが、特徴なわけですね。これは、ほとんど、労働運動や労働組合運動がこれまで付き合いなかった人たちとやっているのが、特徴的です。ここからはむしろ、この後の特別報告のお話をお聞きいただくべきところだと思いますが、新潟さんにしても山口さんにしても、さまざまな人々と、それこそ、さまざまな分野で、一緒にいろんなことをしている。例えば、26ページ、新潟さんで言えば、下に5カ年計画のところ、NPO専門家集団との連携、ウイングの拡大。ウイングの拡大というのは、要するに、付き合いを広げていくということですよ。そして、次の29ページを見れば、人材育成、発掘というわけですが、これは、要するに、そういういろんな人と一緒にいろんなことができる、コーディネーターを作ろうということなんだと思います。

それから、山口さんにしても、34ページ。一番下に、「専門家との連携、ネットワーク」ですね。実は、一番近いところにいるはずなのに、これまで、労働組合が、付き合いなかった中に社会福祉があります。あるいは、社会福祉協議会があります。ここは、実は、それこそ、福祉ですから、本来、労働運動の歴史から言えば、ど真ん中にいていいところなんです、ほとんど付き合いこなかった。一つは、企業別組合なので、企業内福祉で賄えたからです。必要がなかった。だけれども、もはや、そういう状況にはない中で、こういう社会福祉の領域で、これまで付き合いのなかった方々と一緒にやっていく、あるいは、先ほどから申し上げてます、福祉を通じて中小企業セクターも接点になりだした。あるいは、ちょっとページは忘れましたが、この山口、新潟の中で触れられてあります自治会という、これも大切な組織であります。

戦後、自治会はいろんな紆余曲折を経ました。戦前は自治会というのは、ほんとに地域で圧倒的な力を持ってましたし、ある意味、ちょっと閉鎖的な、ちょっと力関係を感じるような部分もありましたが、最近の自治会は、ほんとに地域のために、いろんなことをするところになっています。そして、地域によっては、この自治会なしでは、事が運ばないような、特に福祉の面でそういう状況にもなってます。実は労働組合は1950から60年代、あるいは70年代も、労働版自治会を作ろうとしていました。ただ、なかなかうまくいかなかった。実際自治会自体とは、むしろ競合関係にあったんですが、後で報告があると思いますが、最近、労福協さんの一部では、自治会さんと一緒にやるようになってきている。活動の内容や活動の領域を考えると当然だと思います。

そういう状況の中で、例えば、今後10年、どうしたらいいかということを考えたときに、ここに書きました、ほんとにおこがましい話ですが、国民の共感の得られる社会運動、いろいろ多重債務の問題、消費者行政の問題、いろいろやってこられました。そろそろ、もう少しパッケージにしてもいいのかなと。ちょっとこの辺、難しいんですが。つまり、今、喫緊の問題として、多重債務があった。ローン地獄の問題があった。それはやっぱり国民の共感が得られるという意味では、非常に重要であり、したがって、そういうものを時々に応じてやっていくということも、とても大事だと思います。

私、ラジオ聞くのが大好きなんですが、いつも研究室では、朝から晩までTBSが鳴り響いてるんですが、最近、多いのは、弁護士事務所のコマーシャルですね。多重債務問題を解決しますよっていうコマーシャルです。明らかに、この労福協の運動があったから、目ざとい弁護士さんたちが、これいけるでっていうことで、ガンガンに、今、商売してるわけですね。助かるわけですから、多くの債務者にとっては。いいことなんですが、こんなところにも労福協さんの運動が影響力を示してるなと思うわけですが。その多重債務の問題が、じゃあ、どこから来ているのか、どうして多重債務になるのか、そういうふうに、少しずつ少しずつ問題を広げていったときに、雇用や福祉、その他生活全般とも関連した問題がでてくるかもしれない。体系化というのはそういうことです。一点張りで、今、大事な問題を取り上げて社会に訴えていく、ここも大事ですが、それをもう少し、すそ野を含めて他の領域とつなげながら、多重債務にならないためにはどうしたらいいのか、いろんな問題が、サポートの問題としてあると思います。そういう、少しすそ野を広げる、国民的な運動というものも、考えていいのかなと。これは、あくまで、それぞれの地域で、状況に応じてやればいいことだと思うんですが、そういうふうに思ったりします。もう一つは、地域に根差した顔の見える活動の日常化ということで、これもすでにやられていて、日常化している地域もあると思います。これをどういうふうに、いつもいつも、ああ、あの人たちがまたやってるなというふうに見えるようにするか。最近、よく使われる可視化っていう言葉がありますが、別に、日本には人知れず微笑まんという美学があります。おれが、おれがと前に出ていって、やってるよというの、どうも、格好悪いと。私はいい美学だと思っていますし、なるべくそうしようと思ってるんですが。しかし一方で、この地域に根差した顔の見える活動ということをやっている以上、やはり、可視化の問題もあるだろうなと。これは何も自分達だけで地域で活動することじゃなくて、いろんなところに顔を出すことなのではないのかなと思ってます。最初から何か大きなことを一緒にやろうということではなくて、それこそ先ほどのお祭りにもありました、いろんなところに労福協さんの人たちが関わる、あるいは参加する。そこからいろんな関係が始まっていく。それが「地域に根ざした顔の見える活動の日常化」ということではないのかなと思っております。

中小企業にせよ、農協にせよ、まだまだそれほど大きなお付き合いがあるわけではないと思いますが、いずれは、この大きな協同セクターと一緒にやらなければいけない問題、あるいは、自治会にせよ、社会福祉協議会にせよ、一緒にやらなければならない問題がもっとも増えてくると思います。そういう意味では、それこそ、その地域のコーディネーターとして、いろんなところに顔を出す機会があると思います。

このコーディネーターをなぜ、あるいは、ネットワークをなぜ、労福協がやるべきなのか、あるいは、労福協がやれるのか。これはやっぱり、日本の労働組合の一つの特異な立場、歴史の特徴があると思います。会社のことが分かる、企業のこと分かる、地域のこと分かる、いろんな働き方の問題も分かる。実は、労働組合ほどいろんなところと接点を持っている、別の言い方すると、のりしろがある組織は日本ではないんです。逆に言うと、これほどののりしろを持って、それこそ、多角的にやっている他の人たちってというのは実はないんです。

ですから、私風に考えれば、ネットワークのコーディネーターになるというのは、皆さんが問題を一人で解決する必要はないんです。何か問題が来たときに、ああ、これだったら、この人とこの人とこの人がよく分かってるな、この人のところに話を持っていけばなんとかなるかなという、頭の中で、いつも何かあったときに自分で青写真が描けるかどうかなんです。青写真が描けるときに、自分の頭の中に、ポンポンポンとその問題についての関係者が浮かぶかどうか

んです。その浮かんだときに、じゃあ、ちょっと電話をしてみて、あるいはちょっと訪ねてみて、こんなことがあるんだけど、なんかできないかね？ と。いつでも話が持っていける、いつでも何か一つきっかけを作れる、それがネットワークのコーディネーターであり、コーディネーターであるためには、ネットワークが広がらなければいけない。その1つのチームができれば、チームが問題を解決するんです。ですから、ここでのコーディネーターは、チームを作る、一種のきっかけを作ればいい。プロモーター、あるいはプロデューサー、もう今どきの若者はそういう言葉を言うと格好いいんで、そう呼んでもいいと思いますけれども。自分で青写真を描いて、あるいは、他の人と相談しながら、一緒に青写真を共有して、解決の一つの形を作る、そして、それを実行にうつしていく。したがって、多くの人が今度は、あの人のところに行けば、誰か紹介してくれるよというふうになる。

私は、30年前、労働運動の研究を始めたときに、北九州大学というところにいました。八幡製鉄所があるところですね。いわゆる、モノカルチャー、製鉄しかないところです。そして、製鉄業が斜陽になったところで、たちまち、失業問題が社会問題に直結していました。今の日本を25年前に先取りしていました。失業すると、家族が崩壊する、若者の行先がない、地域が崩壊する、そういう状況が北九州には目に見えておりました。そのとき、いろいろ数えたんですね、労働組合の数、労働組合の役員の数、結果として分かったのは、当時の全国市町村津々浦々には、数路地かに1つ、あるいは数地区に1つかは、必ず労働組合に関わっている人がいる。もし、その労働組合にいる人の家が、まるで交番のように、夜、ポッと目印になる明りを灯して、なんかあったらここ来てねと、そういう存在だったら、絶望に打ちひしがれた人が、最後に見出す赤い火を、その組合の人の家に見て、コンコンと戸を叩いて、助けてくださいというような存在になったら、どんなに素晴らしいだろうなど。何も知らないから、こんなことを考えるんだと思いますが、思ったときがあります。でも、今、私は、それは決して夢ではないと思います。労福協さん、あるいは労働組合、あるいは他の協同セクターと一緒になれば、その暗闇の中の赤い灯は、必ず付けることができるだろうなど。

そういうものを促進するために、この「最後の連帯社会教育活動としての共同春闘のコーディネーター」あるいは「連帯を促進する共同政策制度要求のコーディネーター」という話をしたいと思います。ことしの春闘、いろいろ議論があります。なにも保守政権にあんなにバックアップされなくてもいいのではないかとか、あれは一種の褒め殺し、つまり、労働組合にとってはかえって迷惑な話じゃないかなとかいろいろあると思いますが、私はそうは思いません。春闘というのは、それこそ、戦後の労働運動が、戦後の心を作る労働運動が、制度として残した最大の遺産だと思っています。

毎年ある時期に、全国民が、自分たちの生活労働条件について語り合う国など、一つもありません。それを60年近くも続けてる国なんて一つもありません。むしろ、保守政権は、その遺産を利用したと言った方がいいと思います。実際、今、春闘を一番利用しているのは経営者だと言われています。自分たちの問題提起をどうやったら、幅広い人たちに受け止めてもらえるか、むしろ、彼らの方がはるかに春闘の真価を理解し、利用している。もうこうなると、労働組合のものだからとか、誰々のものだからとかじゃなくて、これを国民の共有財産、公共財産だと考えた方が、私はいいと思います。

その中で、できるだけたくさんの人たちに春闘に関わってもらうことが大事ではないのかなと。なぜならば、企業の労使関係だけでは、私たちの生活労働条件は決まりません。実際に、春闘は、これで中小企業のがもうそろそろ終わります、そうすると、どうなるか。今度は、公務員

がそれに準拠します。同時に、価格決定の基盤部分で交渉が行われます。日本の価格の決定は、今はそうでもないんですが、昔からトヨタ自動車と新日鉄の鋼板の価格交渉から始まると言われています。そこが日本の価格の一つの目印と言われて、これが6月に行われる。そして、夏になると、いわゆる、最低賃金の交渉が始まります、春闘の結果に基づいて。その最低賃金は、今日は生活保障の額にリンクします。

つまり、春闘の結果が、すべての人の収入に反映するようにシステムが出来上がってるわけですね。だとしたら、たくさんの人に来てもらったらいいだろうと。たくさんの人に来てもらって、春闘を開いて、みんなでいろんな議論をする。昔はそういうところがありました。奥さんたちを招く、地域の人たちを招く。それこそ、昔は労働会館なんかなかったんで、学校の講堂でよく、春闘集会やっていました。誰が入ってもいいんです。ですから、そういう催しを、労働組合の側からするとなかなかできない、それができるのは、呼びかけられるのは、たぶん、労福協さんだと思います。いきなり春闘を労福協かと戸惑われる場合には、政策制度要求があります。この、政策制度要求については、労福協さんも主体的にやろうとおっしゃってるわけですね。

今、連合運動で一番頭が痛いのは、この政策制度要求だと思います。保守政権になって、要求が通らないからではありません。なかなかそれが組合の中で共有されないからです、運動にならないからです。なぜならば、上から下りてくるからです。一番末端の地域から問題が上がってきていない。もちろん、上げてくれと言ってるんでしょうけれども、上がってない。むしろ、政策制度要求は地域からということであれば、それこそ、労福協さんが一番いい場所にいるわけです。連合サイドで言えば、政策制度要求は今、春闘の中に含まれます。ですから、政策制度要求から周囲の人たちと話し合いを始めて、これは政策の問題、これは企業内の労使関係の問題、これは地域の雇用の問題、そういうふうにいるいろいろ広げていけば、話をする人々たちが増えてくるのではないのかと思います。

どうも、春闘と言われると、あるいは、政策制度要求と言われると、取った、取られた、成功した、失敗した、どうもその分捕り合いの話で語られることがあると思いますが、私は、ここに書きました、社会教育だと思ってます。つながり合って、支え合って生きていくということを実感するいい機会ではないかと思っています。先ほど、最初に申し上げました。私の職場で、職場集会でいろんな話をする。学校の話の別の角度からする。そうして、いつもと違う人たちとのつながりを見つける。そういう貴重な場として、私は、春闘であり、政策制度要求というものを特に地域においてはやった方がいいのではないのかと思います。

そういう意味で、私は、労福協さんのネットワークの中に、ぜひ、学校を入れてほしいと思います。特に、小中高ですね。その小中高にどういうふうアプローチするかは難しいですが、やっぱり、早い段階から、ボランティアを含めて、一緒に何かをする、連帯社会の経験をさせるという意味では、それこそ、学校も実は求めてるんですね、そういう機会を。それはまあ、日教組さんが間に入ってもいいと思いますけども、とにかく地域の社会教育の大事なパートナーとしての学校と関係を持っていただきたい。大学もそういう中に含まれていいとは思いますが。学校との関係というものも、あるいは幼稚園も含めて、お考えいただけるといいのではないのかと思っております。時間があと数分になってまいりました。

最後の、「日本型社会組織セクターの再興をめざして」という、また大きな話になりますが、今、実は、私は、連合総研という、連合のシンクタンクで、社会組織研究、そういう委員会に入っております。この社会組織というのは、英語で言うとアソシエーション、なかなか日本語に訳しにくいですが。ともすると、やはり日本では今大きくゆらいでいる部分ですね。ありとあら

■ 第2部 研究実施のあらましと成果

ゆる社会組織です。労働組合も入ってくるし、協同組合も入ってくる、地域の組織も入ってくる。そういうものをどうやったら、再建することができるのか。私は具体的に、連帯社会という言葉を表示するとすれば、そうした社会組織が自分たちの問題を自分たちでいろんな形で協力し合いながら解決できる、もちろん、政治にもお願いをすることがあるし、他にもいろんなやり方があると思いますが、とにかく、社会組織が一緒になって、つながり、支え合って、問題解決を地域からしていく。それが連帯社会の一つの形ではないのかなと思っています。それは、それこそ、地域に応じて、いろんな形があってしかるべきであろうと思います。それを「地域に応じた輪の形」というふうに書いたわけですが、この仕事に今大きく貢献できるのは、その立場から言って、あるいはロケーションから言って、あるいはその潜在的なものを含めた持てる力を考えれば、私は、労福協ではないのかなと思うしだいがあります。これが、この私が最初に申し上げました、労福協と私、私がなぜ労福協を大事だと思うかの結論であります。

長い時間ご清聴ありがとうございました。

12. なぜいまロバート・オウエンなのか

連合総研 月刊誌『DIO』（2014年1月）

天の助け

原稿依頼というのは時に天の助けである。考えていることを前に進めたい時に、寄稿テーマという形でその絶好の機会を与えてくれる。最近有難くもそういうことが多い。今回もそうだ。例えば本誌編集部から頂いた課題は次の通りである。

「海外の古典をとりあげ、現在および次世代の労働組合リーダーたちにとってどのような重要な示唆が含まれているのかを明らかにし、忘れがちな労働運動の理念をあらためて再確認することを目的とする。とりあげる海外の古典は、オウエン『オウエン自叙伝』、ウェッブ『産業民主制論』、シュトゥルムタール『ヨーロッパ労働運動の悲劇』である。これらはそれぞれ、約150年前、約100年前、約50年前の著作であり、これらをつなぎあわせると、労働組合の盛衰の動きがみえてくる。それぞれの時代に指摘された問題点は、現代において解決されているのか、解決されていないならば現代の労働運動や労使関係に何が必要であるのかを明らかにすることとする。」

この中で筆者に与えられた課題図書がロバート・オウエン『オウエン自叙伝』（原著1857年）（五島茂訳、岩波文庫、1961年）である。

オウエンとは誰なのか

オウエンとはいかなる人物か。彼には自伝の他に内外で沢山の伝記、評伝、研究書がある。その中で宮瀬陸夫『ロバート・オウエン一人と思想一』（誠信書房、1962）には、「オウエンの業績」という頁があり、そこではこう記されている。

ロバート・オウエン（1771～1858）はイギリスにおける偉大な社会改革者にある、協同組合の先駆者、すぐれた実業家、工場改革者、労働組合の指導者であり、合理的宗教家である、教育の先駆者であった。

これを土方直史の『ロバート・オウエン』（研究者 2003）によって補足しよう。社会改革者であるオウエンだが、1848年に『共産党宣言』を著したマルクス、エンゲルスは、自分たちを「科学的社会主義者」と称する一方、それまでに社会主義者であるオウエンにサン・シモン、フーリエを加えて「ユートピア社会主義者」と呼んだ。オウエンは、その後労働党が社会主義と労働運動を繋ぎ、穏健かつ漸進主義的な改革路線で今日まで異彩を放つイギリス社会主義の父とも呼ばれる。この穏健かつ漸進的な社会主義の大事な構成要素が協同組合運動であり、この点でもオウエンは父と呼ばれる。

第2部 研究実施のあらましと成果

だが彼が最初に名声を得たのは、イギリス産業革命の時代にスコットランドの大紡績工場主として、そこで働く児童を含む労働者たちの労働・生活条件の改善に尽力する経営で成功を取めた博愛主義的工場経営者としてであり、それを社会改革として敷衍したのが彼の生涯でもあった。工場立法、児童・成人教育、工場厚生福利施設などを世界で初めて整備した点からは、その後の福祉国家やモラル・キャピタリズム、そして日本の経営やアメリカのウェルフェア・キャピタリズムなど人間主義的な経営モデルを遠望できる。またその公明正大な経営手法は彼を「コーポレート・ガヴァナンス」の先駆者とも呼ばせる。

さらに彼は人間の可能性を閉ざす元凶として宗教を否定したが、彼が訴えた新しい社会観が広く受け入れられれば、すべての人々を最高の幸福で永遠に祝福する社会が間もなくやってくるという種の「千年王国」を唱えた点で、宗教家であった。一方ニュー・ラナークの実験工場村やアメリカでの理想主義的なコミュニティづくりに邁進した点は、人間は家族や隣人と繋がり支え合って初めて人間たりうるというコミュニタリアニズムの考えの祖ともみなされる。これらのオウエンの偉業の根底に、人間の性格は環境が形成するという性格形成論があり、その考えに基づく彼の全人教育的な壮大な教育構想とその実践があった。

『オウエン自叙伝』が語るもの

実は『オウエン自叙伝』は、主にこの多彩なオウエンの前半生しか物語られていない。また訳語や文体が現代的ではないため決して読みやすいとは言えない。さらに英語の自叙伝はそんなものなのかもしれないと思っではみても、卓抜した自己を強調する文章の山はやはり鼻に付くこともある。けれどもそれはその時代彼がいかに特別であったかを思い知ることでもある。

その意味でこの本は、否定的に描かれる部分を含めて、オウエンを取り巻く人々に注目して読むと、そのまま産業革命が起こった頃のイギリスがどんな社会で、人々はどんな暮らしをしていたかが活写された良質な社会史であることに気づく。例えば彼が世界初の幼稚園をつくった当時の社会で、大半の子供は寝食以外の時間働くのは当たり前で、子供は親を含めて大人の体罰でしつけられると考えられていた。それと同時に独学で育ったオウエンの奇抜な考えが、当時の欧州の王侯貴族を含めいわば雲の上の人々の間にやすやすと受け入れられる様子は、その後発展する学校社会というものが、いかに人々の頭と心を閉ざすものであったかに思い至る。

こうしたオウエンの多面性が発揮される過程を見ていると、今日様々に分岐したあるべき社会に関する議論は、やはりどこかでそれらが由来するところにもどって考える必要があると思うと同時に、それらの議論は、最初は身近で小さくとも、またたとえどんな結果になろうとも、とにかくやってみるといって個々の実践の積み重ねを伴って初めて力になるというのがわかる。それに気づくと、例えば労働運動のことを考えるなら、時には時代がつくる思考のしがらみから自由になることが大事だと感じる。

なぜオウエンがうれしいのか

ではなぜ、このオウエンの話をするのが天の助けなのか。実は筆者は一昨年、全労済協会2012年度公募研究「絆の広がる社会づくり」で、「協同社会運動の主体形成を促す史的視野の研

究：新たな協同社会運動史教育を目指して」と題して調査研究を行う機会を与えられた。働く人々に、これまでも又これからも皆で繋がり支え合って共に生きてゆく社会の主人公である事を、思い起させることができる運動史教育のありかたを考えること、それが研究の目的である。そこで日本の労働運動のみならず他の社会運動や他国のそれらにも目を配りながら、試行錯誤を重ねつつその歴史の伝え方を考えた。

その試行の機会の一つを、世界で空前絶後の質量を誇る『大阪社会労働運動史』の編纂刊行を続ける大阪社会労働運動協会が、大阪社会労働運動史講座という形で与えてくれた。一応講師は小生だったが、最後に提出頂いた研究論文を含め本当の先生は、多様な各自の仕事や生活の中でそれぞれに協同社会の実現をめざした経験を伝えてくれた受講生だった。そういう一人一人の運動経験が結び合って社会運動や労働運動は成立するという事を、「小さな物語が繋がり支え合う大きな世界の労働運動」と題して、日米の運動史の中で長々と綴った。このもう一つの貴重な試行の機会を与えてくれたのが、同じく大阪で長く労働調査運動を実践してきた国際経済労働研究所であり、その機関誌『Int'lecowk』である。2つが大阪にあることは偶然ではない。大阪は日本の近代資本主義が形成した最大の生活空間であり、そこに生起する様々な問題を多様な運動が縦横無尽に手を携えて解決してきた日本の協同社会運動のメッカである。

「協同社会」というと日本では協同組合運動用語のように思われるかもしれないが、筆者としては、英語圏の労働運動や協同組合運動が19世紀以来一緒に目指した、そして日本でも呼称は違ってもそれに近い考え方を少なからぬ人々が持ち続け、いずれも最近再び注目されるようになってきた“Cooperative Commonwealth”の意味で使っている。労働運動や協同組合運動も含む運動間交叉連合（Cross-movement Coalition）あるいは社会的自治（Associationalism）が重要な役割を果たすこの運動伝統は、近年例えばイギリスでは保守の「Big Society」や労働の「Blue Labour」といった構想の中で表現されている。また今『生活経済政策』で連載している「組合時評」で触れたごとく、アメリカではAFL-CIOの人権、学生、環境、女性団体との融合という形をとっている。さらに日本ではこの間、全国の労働福祉協議会や連合地域協議会が、この間働く人々の様々な生活ニーズに対応するワンストップサービスやライフサポート事業、さらには雇用可能性が低い生活困難者のパーソナル・サービス事業に関わる一方、先の参院山形では労農+環境連帯が垣間見られた。これらの動きから、成立した生活困窮者自立支援法や今後広がる地域包括ケアシステムの展開の中で、生活支援者の重要な担い手として労組、農協、生協が協働して関わる可能性もある。

ちなみに筆者は四半世紀前に『世紀末の労働運動』という大げさなタイトルの本を出した時、その末尾でこういうことを書いていた。「今日の組合運動の閉塞状況は、運動の主体における想像力の欠如に大きく起因しているともいえる。組合の本義に忠実であろうとする気持ちが、ともすると組合についての既成概念への囚われとなり、表面的には拡大する活動領域への事後的な対処に追われる反面、内面的には「ここまですべきなのか」という気持ちにさいなまれる。しかし組合運動のあるべき姿を過去にさかのぼるならば、その肥沃な思想的土壌にこそ思いを巡らすべきであろう。そもそも組合とは、近代の渦中において、社会のあるべき姿を模索する数々の思想的営為の所産の一つとして、この世に生を受けたものである。だとするならば、人と人との豊かな関係を創造することこそ、組合が追求すべき本質的な課題であろう。職場において、地域において、組合員が他者との有機的な関係のなかで生きることができるよう援助することが求められる。そのためにも、組合はこれまで以上に外部との多面的な関係の構築を迫られているといえる。」

第2部 研究実施のあらましと成果

ブレなくてよかったことをひけらかしている訳ではない。恥ずかしながら、最近までこんなことを綴ったのをすっかり忘れていたが、上記のことを書いたり見たりするうち、その親しみを感ずる所以を考えて試しに旧著の頁をめくり、この下りを再発見した次第である。そういう筆者を知って知らずか、本誌編集部は労働運動が労働組合運動とその支持政党のそれに特化していく半世紀前ではなく、また労働運動が労使関係制度に埋め込まれていく一世紀前ではなく、労働運動が協同社会運動であった一と半世紀前にそれを推進したロバート・オウエンの自叙伝を勧めたのである。うれしいではないか。

オウエンの労働運動と日本の労働運動

ここでオウエンが推進した協同社会運動としての労働運動と日本の経験との繋がりについて考えてみたい。

オウエンがニュー・ラナーク工場での博愛主義的経営に成功し、工場改革や性格形成学院などの教育改革や協同的コミュニティの建設に乗り出す頃から、イギリス各地で労働者の間に協同組合が作られるようになり、その指導者たちの中にオウエナイトと呼ばれるオウエンの社会改革構想に共鳴する人々が多く含まれるようになる。この場合の協同組合は生産協力と公平分配を主とする労働者協同組合で、オウエンが唱えた貨幣交換に替わる労働交換の考え方に基づく労働券（現代の地域通貨や時間券の先駆）の発行、自家ブランドの販売（現代のコープ商品）、学習機会やレクリエーション活動を盛り込んだバザールと呼ばれる協同知識普及の文化活動を展開した。

この運動は、オウエンが理想のコミュニテユイづくりで渡米した1820年代後半に連合組織を結成しその代表者会議で、「みんなは一人のために、一人はみんなのために」という労組、協組でお馴染のスローガンを採択するとともに、先の労働券制度を発展させた労働公正交換所を設立する。そしてこの頃から彼らはオウエンが目指した労働者救済から労働者自立のための労働運動を展開するようになる。1832年の議会改革で普通選挙権導入が拒否されると、労働者たちは労働世界の主人公たらんと結集する。農業労働者組合の弾圧を契機に、当時まだ未分化だった全国の労働組合、協同組合、労働者政治結社が瞬く間に結集し、協力組織を含めると100万人というイギリス最初の労働運動全国組織である全国労働組合大連合ができる。その中で建築工を中心に手工業職人たちはストライキや自営の職業活動を進め経済的な独立を図ろうとし、その勢いは農村にまで広がった。この大連合は短期間で消滅するが、すぐにより整備された形でオウエナイト率いる万国全階級協会に発展した。

万国全階級協会はイギリス伝統の職人、宗教、地域などの生活文化に根差した下からの結社文化を、組織内に民主的に吸収すべく様々な工夫をこらした。会員候補制、地方支部内のクラスと呼ばれる班組織とその民主的運営、会費制、社会宣教師という巡回有給オルグ、オウエナイトの啓蒙・宣伝活動を兼ねた文化情報の組織的提供とそのための教育、娯楽、実利を結び合わせたソーシャル・フェスティバル、そうした活動を常時行うための会館建設やそこでの独自の冠婚葬祭行事や労働讃歌を含む会合儀式の導入などで、会員の積極的な組織関与を高めると同時に、当時の支配的な文化に対抗する新たな価値観に基づく労働文化、すなわちソーシャルな文化の可能性がめざされた。

このオウエナイトたちの労働運動づくりを学びながら、筆者は1950年代の日本のそれを思い出した。いうまでもなく1950年に労組の全国統一組織として総評ができた訳だが、50年代に形成さ

れるその組織運動スタイルはまた、今日の連合に至る日本のナショナルセンターの雛型ともなった。だがこの時期同時に協同組合運動も一部は労働運動と連携しながら発展していた。47年農協法、48年生協法、49年中小企業等協同組合法がそれぞれ成立し、いずれにも「共済事業」が挿入された。53年には労働金庫法も成立する。51年全国労働金庫協会、日本生活協同組合連合会、54年全国農業協同組合中央会設立。54年労働者共済生協が大阪で設立、火災共済事業を開始。57年全国労働者共済生活協同組合連合会設立。一方、49年総同盟、産別会議、全労連、各産別、日本協同組合同盟などの団体が設立した労務者用物資対策中央連絡協議会は50年労働組合福祉対策中央協議会、57年労働福祉中央協議会、64年今の中央労福協に改称する一方、各都道府県地方労福協は、52年大阪を皮切りに順次結成される。この中の多くが大阪が発祥なのが目立つ。そして労働文化の運動組織として55年に国民文化会議ができる。

こうした労働運動と協同組合運動を結び、そこに働く者の新しい協働文化を創造しようする動きの中で、戦前からそれに取り組み、労働運動、農民運動、協同組合運動、社会的キリスト教運動の父と呼ばれる日本のオウエン賀川豊彦の存在は大きかった。そして2009年、賀川豊彦献身100年を記念してこれらの組織は連携して各種の記念事業を催した。それは翌年の国際協同組合年事業に繋がり、それまで疎遠の感もあった労働運動、協同組合運動の関係も再び近づきつつある。

これから日本は以前に増して、繋がり支え合って生きねばならない状況がすべての人々の生活の隅々に出てくる。近年様々な生活空間で不可欠な存在となっているNPOと協力しながら、労働運動と協同組合運動がどこまで連帯社会の再建に貢献できるか。いま日本のオウエナイトの力が試される。

【渡りに船】

「来年は春闘が始まって60年。かつては組合のない職場の労働者にとっても無関係ではなく、春闘で自分の給料も上がるという共通認識のもとに、国民が共有するシステムの一つだったと思います。しかし、今はどうでしょうか？労働組合の外にいる人々の目に春闘はどう映っているのか。その変遷と、これからの進むべき方向などについて、先生のお考えをご寄稿いただければと存じます。」

「渡りに船」とはこのことだ。本誌編集部からこの原稿依頼メールを受け取った時の感慨だ。丁度筆者も頂戴した題名の言葉通り、「国民・市民目線から」春闘を考えていたからだ。それにしても編集部は、筆者がそんな異色の春闘論を考えているのをどうして知っているのだろう。誰もそんなことは言わないし、筆者もそんなことを口にし出したのは最近なのに。もしかしたら組合関係者も同じことを考えていたのかもしれない。そうだ、連合は「すべての働く人たちのための労働運動」を謳っていたではないか。と言う訳で、以下は筆者の「国民的・市民的春闘」論である。

【驚きの春闘】

この頃春闘について話す機会があれば口癖の如く繰り返している。毎年同じ季節にマスコミが次年度の賃上げ予想をし、労使交渉の行方を半年近くフォローし、その結果国民の大多数が自らの労働、生活条件について、何らかの形で語り合い、少なくとも思いをはせる国は、そうはないと。ましてやこの国民的年中行事が60年も続いているところは、滅多にない。しかも労働組合の組織率が20%を切っているのに。だから春闘は俳句の季語である。どこの国で労使交渉が詩的モチーフになっていようか。

この日本の全国的労働条件決定機構は、賃金の他にも様々な国民の勤労生活における公平公正の実現に関わる。確かにヨーロッパのような産業大の労働協約が殆どなく、多くの労働正義実現が個別労使の私的自治に委ねられる春闘には、その問題解決能力に大きな課題が残されている。だが男女間や世代間、そしていわゆる「正規」「非正規」など異なる働き方の間の不均等待遇が益々問題となる中、そうした問題を皆で論議する機会が、こうやって毎年季節の到来とともに与えられることにはやはり驚きを隠せない。

【「官製春闘」？】

今年の春闘は「官製」と呼ばれた。首相官邸はアベノミクス成功に必須と積極賃上げを求めて春闘に介入した。本来労使自治の交渉事を、官邸主催の政労使会議に方向付けられ、あまつさえそこで約束した賃上げの「公約」実施を春闘後に役所が調べ、「通信簿」のごとく公表すると凄まじい。だから官製春闘は、官製賃上げである。ただ政府が春闘に介入するのを「官製」というなら、それはこれが初めてではない。

1970年代前半に大幅賃上げが続くと、75春闘では福田首相が当時の相場形成役である産業と相

和し、相場を「看視」した。以来、春闘は日本のミクロ、マクロ経済に組み込まれ、国家は常に春闘動向に関心を払ってきた。また1964年の池田首相と太田総評議長の会談で決まった人事院勧告の民間準拠は、この「組み込み」の嚆矢と言える。

【公共的春闘】

だが政府が関与したから、春闘は国民のものになったのではない。春闘は日本のあらゆる人々の労働と生活のありように影響を及ぼすから国民的なのである。春闘はこの国の立派な公共財なのである。この春闘の公共的性格は、賃上げが稀になり「春闘終焉」と言われ出した21世紀に入ってむしろ強まった。高度成長期の春闘が大幅賃上げの時代であり、低成長時代のそれが賃上げの上限規制を特徴とするならば、21世紀に入ってから春闘の役目は所得のミニマム規制である。賃上げは必ずしも全国民には及ばない。だが所得の下限は最低賃金と生活保護制度によって全ての国民を対象とする。

この間企業内交渉は、定期昇給とそのカーブの維持、「パート」や「非正規」を含む企業内ミニマム賃金の設定と引き上げに重点が移った。同時にこの間企業内賃金水準の下限に実質的に影響するようになった最低賃金は、生活保護の水準を下回ってはならない。だから夏の中央、地方の最低賃金審議会は労使と公益委員による春闘後半の山場である。

こうして春闘はすべての人のものとなった故に、政労使のみならず消費者や産業、業種、職種、雇用関係、年齢、性などが複雑に絡み、そこでの力関係は以前に増して多層的重奏的になった。この錯綜した春闘の利害関係の中で、誰がどのように議論をリードし、決定に影響を及ぼすのか。「官製」春闘論は改めてそのことを考えさせる。

【経営春闘】

この点で、低成長期以降、とりわけ今世紀に入ってから春闘を最も有効活用したのは、経営側だった。低成長期以降企業を越えた一斉大幅賃上げが困難になるに従い、20世紀末には労使共に春闘見直し論が盛んだった。だが経営側が最も嫌がったのは、支払い能力を軽視した一斉大幅賃上げである。賃上げが事実上一般的ではなくなれば、経営側には敢えて自ら春闘を強制終了する必要はない。

確かにこの間、低成長期以降「ものわりのよい」労組は、経営側の主張を広く受容してきた。だがそれは従業員の意思でもあった。別言すれば、毎春闘を通じた従業員への経営的教育宣伝活動の結果でもある。春闘は経営側にとって自らの主張を社内や産業界、果ては社会に浸透させる伝声管でもある。だとすると、問われているのは、こうした政府や経営側とは異なる労働側の春闘観であり、それに基づくイニシアチブの発揮ではないのか。

【暗い夜道は怖いから皆でお手々繋いで】

従来春闘における労働側のイニシアチブをめぐる議論は、賃上げの多寡によって計られることが多かった。だが21世紀の「公共的」春闘の使命はミニマム規制であり、かつての賃上げ論は通用しない。実は前述した20世紀末の春闘見直し論の際、労働側が春闘を継続した理由は、それが労働者の重要な社会的発言機構であり、日本の民主主義の礎と再確認したからである。

いうまでもなく労使関係とは「産業民主主義」なのだが、従来企業の中に閉じこもり、有組合企業の正社員の枠に囚われがちなそれを社会的にしたのは春闘である。春闘発足当時、旗振り役の労組指導者はそれを「暗い夜道は怖いから皆でお手々繋いで」と称した。60年代以降の春闘相

■ 第2部 研究実施のあらましと成果

場の波及効果は、「護送船団」と揶揄されたタイトな経済秩序のお陰で、一定程度国民各層に及んだ。だがそれがなかった発足当初の春闘の波及効果は、当時の政治状況を反映した労働運動の激しい国民運動と、それがもたらす日常的な労働者の体験共有とネットワークに支えられた。それは政府や経営側の秩序形成からある程度自律した、勤労国民独自の春闘のインフラ形成だった。

【開かれた春闘】

この50年代から60年代前半にかけての春闘のインフラ形成は、その後政府・企業が主導した政治経済レジームに依存する春闘が最早期待できない現代の国民的・市民的春闘とそこでの労働のイニシアチブを考える上で示唆的である。実際今日のミニマム規制を使命とし、無組合、中小企業、非正規、女性の労働者にも目を向けた「公共的」春闘の定着の背景には、こうした政府、企業から自律した春闘再起動の問題意識を段々と共有し、その具体的な可視化に努力した労働側の歩みがある。だとするならば、労働側の課題は明らかだろう。それは春闘をこれまで以上に社会に開くということだ。

そこで提案だが、連合は従来の要求、交渉、獲得という運動サイクルの中に、これまで以上に多様な利害関係者（ステークホルダー）を交えた公開討論会（フォーラム）の機会を組み込んだらどうだろう。従来の春闘には、「主力産業」「大企業」「正社員」「男性」といった雇用就労上恵まれた者（労働貴族）にそうでない者への配慮と責任を求める（ノブレス・オブリージ）ある種の「前衛」思考があった。そこにはまた前者を最善とした雇用序列が存在した。だが今日は当事者主権の時代だ。多様で異なる困難を抱えた人々同士が、相互の得手不得手を組み合わせて問題解決する、或いはその機会が与えられるべき時代だ。

このフォーラムは、多様な雇用就労者に加えて、経営、福祉、教育、家庭、環境、人権、コミュニティなど「働く」ことに関わる様々な領域から、行政や政治、企業や協同組合、NPOや団体の人々を集め、今多くの人々が願っている繋がり支え合って働ける社会のために出来ることを話し合ってみたらどうだろう。日本の市民社会は、人々の胸に問い、心に迫る問題提起には反応できるまでに成熟している。市民春闘というものが成立する条件が整いつつある。そしてこういうフォーラムは、多くの問題の解決が迫られている地域レベルで行うべきである。

【地協春闘タウンミーティング】

以下はこのフォーラムの具体的構想である。目標は全国の連合地協組織300での実施だ。実際には47の地方連合単位での実施から始まろうが、そこで止まっては市民に届かない。

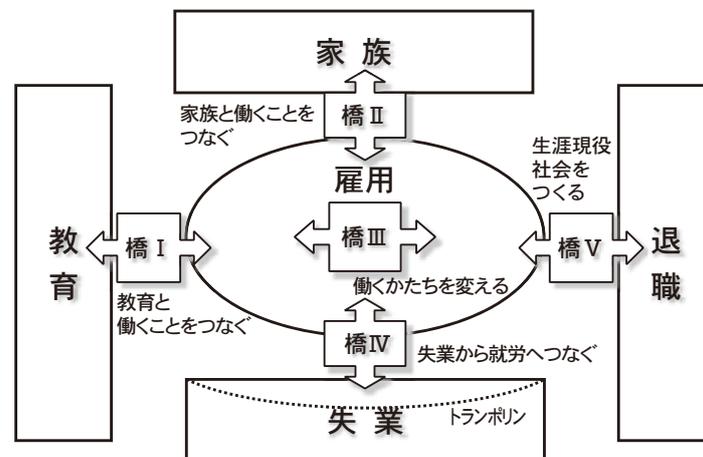
参加者だが、最初から地域住民全体を巻き込むのは大変だ。漸進主義で、組合員の家族、親族、友人、近隣から参加者を広げればいい。とはいえ現実には組織代表の会合から始めるのは止むを得なからう。労組のみならず労金、労済や生協などが加盟する労福協の協力は必須だ。日頃交渉や協議、共同行動などで関係を培った経営団体や社協などの社会福祉団体、そして行政からも人を呼びたい。教育機関者も欠かせない。経営側も経営者協会、商工会議所、商工会、業界団体、中小企業団体と様々だ。消費者団体も欠かせない。障害者団体も不可欠だ。町内会や婦人団体、PTA、各種の世代組織、そして雇用、福祉、人権関係のNPOなど地域の関係者は言うまでもない。こうすると春闘タウンミーティングは地域の社会組織会議にも見えてくる。そのこと自体には尚議論を要するが、昨今叫ばれる中間団体の再活性化には繋がろう。

このミーティングのプロセスをどう地域住民と共有するか。多元的なコミュニケーション・

チャンネルを生かしたい。地元メディアとの協力、調査やアンケート、ヒアリングやインタビューの実施、そして何よりソーシャル・メディアの活用は当然だ。近年蓄積されてきた熟議民主主義の知恵も働かせたい。

ではそこで何を話すか。とりあえずは連合の安心社会構想に基づく政策制度要求を議題にしてみてもどうだろう。以下の図が出発点になるが、それぞれの橋を人々がその意思さえ持てば、自由に渡れるようにするには、具体的にどんな政策課題があるのか。例えば「教育費の自己負担を軽減し、実践的な生涯教育を提供し、公的職業訓練を充実させていく」「保育サービスを質的・量的ともに充実させ、すべての子どもたちが、生まれた家庭の経済状況が困窮していても、基本的な認知能力の習得や就学機会を保障する」「障害をもつ人々や高齢者を就労に結びつける支援体制を整える」「雇用保険の改革や雇用保険と生活保護の間をつなぐ給付金付き職業訓練などのいわゆる第2のセーフティネットの整備・充実などによって、訓練や教育を受けている期間の生活を支える」ことなどを、各地の実情に合わせて参加者共通の政策にし、その実現を共同で目指すかを、出来るところから話し合ってみたらどうだろう。連合の「政策・制度 要求と提言」にはそれぞれの橋について、更に詳細なメニューが列挙されているので、非常に参考になる。そうなる所そこには当然地元の議員や首長にも参加して貰わねばならないだろう。それは陳情というよりも、互いの識見と説得力が試される有権者と政治家の間の大事なコミュニケーションの場となる。

困難を取り除き、働くことに結びつく参加保障
＝5つの「安心の橋」を架けるということ



そのためには参加者、特に参加組織の政策理解と市民生活からの政策発想の陶冶が必要になってくる。特に労働側で言えば、各地協の管轄市町村の政策に関する理解が前提になる。そのため地協の政策委員会にはパワー・アップとスキル・アップが求められる。同時に広範かつ多様な視点の摂取も必要だ。そこで政策諮問検討機関を設置し、そこには従来の構成産別代表役員ではなく、自薦他薦で一般組合員から政策専門委員を募ったらどうだろう。更に他団体からのアドバイザーもアソシエイトとして参加を要請したら如何だろう。こうした委員のダイバーシティにより、各産別の得意な政策情報もより客観化され、議論により有機的に資するものとなる。

ではこのタウンミーティングはいつするか。通常政策制度要求は、春闘が一段落した夏から翌々年の夏までの2年サイクルで行われる。ただこれは中央の日程であり、しかも現在地方の政

■ 第2部 研究実施のあらましと成果

策制度要求活動は、事実上自主活動である。もちろん地方によっては、以前からこの活動を活発に展開しているところもあり、春闘交渉時期ともリンクしている。だがやはりこれからは、全国津々浦々で春闘交渉と有機的に連携した政策制度要求活動が望まれる。なぜならば要求活動を受けた自治体の政策対応次第で、労使交渉の内容も影響を受ける可能性があるからだ。

そこで望むらくは、次年度春闘議論と同期化して秋にやりたい。それはこれも従来中央主導型の春闘交渉議論に、ローカル・イニシアチブを組み入れるきっかけになるからである。そしてこの議論の結果が、翌年早々参加者が同意した共同の政策集となって、多様なメディアを通じて地域で周知され、自治体や関係団体とのラウンド・テーブルのような協議機関が設けられれば、ベストである。さらに地域春闘が佳境に入る4月にもう一度やりたい。これは議論というよりは、先の政策協議のアップデートである。最後に締めは夏である。もちろん内容は今年度の総括と次年度への引継ぎだ。こうして春夏秋冬各季に1回ずつやり、それを同期化する既存の地域における企業内企業外の労使交渉と有機的に結びつける。

もちろんこのタウンミーティングを定着させるのは容易でない。地域によってバラツキもあろう。けれどもやはり5年くらいで一応の形は整えたい。連合の300地協もこれくらいで目鼻が立った。無理だと思う向きもあるかもしれない。そういう方々には是非各都道府県が発行する分厚い『労働運動史』をひも解いて欲しい。特に50年代後半から70年代前半までだ。その時代毎月ひっきりなしに行われる運動イベントでは、参加組織に偏りがあるとはいえ、地域組織は地元の人々を集めて何らかの共通の意思表示をする術には長けていたし、その活動量はすさまじいものがあった。確かにそのスキルとパワーは落ちたかもしれない。だがカラオケの持ち歌もそうであるように、運動のレパートリーというものは、そう簡単に失われるものではないし、少しやれば思い出してくるものである。大事なことはそれが自分たちの地域民主主義の伝統であり、自分たちはその後継者であるという気概を持つことだ。国民・市民目線から見た現代春闘の焦点は、この地域春闘の再起動にある。

〈執筆略歴〉

篠田 徹（しのだ とおる）

早稲田大学社会科学総合学術院教授

1959年東京都生まれ。早稲田大学政治学研究科博士課程中退。北九州大学法学部専任講師、早稲田大学社会科学部助教授、ハーバード大学ライシャワー日本研究所客員研究員などを経て現職。

主な著書に『世紀末の労働運動』（岩波書店、1989年）、共編著に『労働と福祉国家の可能性—労働運動再生の国際比較』（ミネルヴァ書房、2009年）ほかがある。

協同社会運動の主体形成を促す史的視野の研究
：新たな協同社会運動史教育を目指して

2016年4月

発行 ■ 一般財団法人全国勤労者福祉・共済振興協会
〒151-0053 東京都渋谷区代々木2-11-17
ラウンドクロス新宿5階
TEL: 03 - 5333 - 5126
FAX: 03 - 5351 - 0421

印刷 ■ 太平印刷株式会社

全労済協会「公募研究シリーズ」既刊報告誌

(所属・役職は発行当時です。)

④⑤ 『東日本大震災における緊急雇用創出事業の意義と効果の検証』 2016年3月

関西大学社会安全学部教授 永松 伸吾

- 東日本大震災の発災後、政府は緊急雇用創出基金事業として、被災者を災害対応や復旧・復興のための事業に雇用するプログラムを用意した。本研究では労務データとインタビュー調査により、どのような人々が緊急雇用に従事したのかを明らかにして、同事業の評価を試みた。そして、今後の巨大災害に向けた雇用対策のあり方について考察した。

④④ 『異世代ホームシェア事業を基軸とした地域パートナーシップ構築に向けた実践的研究』 2016年2月

福井大学大学院工学研究科准教授 菊地 吉信

- 本研究は、高齢化が進む日本社会における高齢少人数世帯の孤立問題について、高齢世帯が持つ空き部屋を有効活用する「異世代ホームシェア事業」に着目し、海外の事例を中心に調査し日本の特に地方都市での展開について検討した。また、日本で実際に異世代ホームシェア事業をパイロット事業として行い、システム構築に向けた課題を明らかにした。

④③ 『東日本大震災以降の子育てネットワークの形成過程 ～子育ての「現在」を問い直す～』 2015年12月

熊本大学教育学部講師 増田 仁

- 本研究は、災害時の子育てに焦点を当て、東日本大震災以降の子育てネットワークの在り方を実証的に検討し、分析した。具体的には、関東から避難した人、しなかった人、福島県の仮設住宅で生活を営む人にインタビューを行い、災害時にそれぞれの立場で形成される、子どもを契機とした新たな子育てネットワークについて考察している。

④② 『若者のキャリア形成における社会関係の役割 ～女子大生の将来展望と重要な他者～』 2015年8月

立命館大学教育開発推進機構講師 土岐 智賀子

- 本研究は、女子大学生を対象にインタビューを行い、彼女たちの大学生という職業キャリア探索期における社会関係の特徴と将来展望、キャリア形成に関する重要な他者との出会いの場について調査した。そして、若者に対する適切な自立支援と社会的な絆のあり方、ソーシャル・キャピタルの醸成機関としての教育機関の可能性を考察している。

④① 『職場の絆と企業人の意識転換による生活習慣改善とうつ病発症予防の試み』 2015年7月

東京大学大学院教育学研究科教授(健康教育学分野) 佐々木 司(研究代表者)

- 本研究は、社会全体で問題となっているうつ病について、企業の「常識・文化」を転換することで、勤労者相互の理解と協力による生活習慣改善を進め、うつ病予防を促進することを目的としている。具体的には、日常生活での適切な運動、睡眠、休憩・休息などの習慣が抑うつ症状と有意に関連することを明らかにした上で、企業・勤労者への健康教育による生活習慣改善とうつ病予防効果を検証した。

④① 『ソーシャルビジネスによる震災復興モデルの創造 ～志の連鎖に基づく協同社会の提案～』 2015年6月

宮城大学事業構想学部教授(副学部長) 風見 正三

- 本研究は、東日本大震災で顕在化した東北地方における社会課題(生活環境の整備、地域産業・雇用の創出)を解決するための「震災復興モデルの実証研究」である。
行政主導の震災復興事業だけでは地域の持続的な発展は難しく、これまでの研究に裏付けられた、地域主体の「ソーシャルビジネス」・「コミュニティービジネス」の視点から、真の豊かさを実現するための地域経済循環モデルの具現化を提示するとともに提言している。

③⑨ 『絆の広がる社会づくり：地域連携型高齢者ケアを目指した多職種連携のための協議会活動を促進する要素と求められる施策』 2015年4月

特定非営利活動法人日本医療政策機構研究員 窪田 和巳（研究代表者）

- 東日本大震災の被災地の保健医療システム復興に向け、「石巻医療圏健康・生活復興協議会」が構築した「多職種連携モデル」に注目し、関係者へのインタビュー調査から実態を把握し活動を促進する要素を明らかにした。その上で、多職種連携によって地域住民の生活を支えるための3つの施策を提言している。

③⑧ 『大震災後に長期集団避難生活を送る成人の社会的絆の再構築と精神的健康に関する研究』 2015年3月
東京医療保健大学教授 廣島 麻揚（研究代表者）

- 東日本大震災により避難生活を余儀なくされている人々の精神的な健康状態について、保健学の観点からアンケートを用いた実態把握を行っている。その上で、避難生活者の精神健康度の向上に向けて、心身ともに健康的な生活が送れるよう住民向けのプログラム解決が必要であると提言している。

③⑦ 『雇用形態の多様化時代における企業外部労働力の包摂に関する研究』 2014年10月

静岡大学人文社会科学部法学科准教授 本庄 淳志

- 労働者の雇用形態が多様化し、労働者派遣に代表される雇用のアウトソーシングが進む中で、同一職場内での別企業の労働者をいかに法的にも包摂し、労働条件の適正化を図っていくのか、労働者派遣制度の沿革や派遣法の改訂の課題、そして個別法、集団法の裁判判令を踏まえて分析する。

③⑥ 『「おしゃべりパーティ」によるコミュニティの再建』 2014年9月

就実大学経営学部講師 加賀美 太記（研究代表者）

- 日本型生協の特徴であった「班」活動が、社会環境の変化から後退していく中で、班に変わる新しいコミュニティの可能性として注目されているのが、「おしゃべりパーティ」である。本研究はパーティ実施生協の訪問調査や組合員へのアンケート調査などにに基づき、パーティの課題と展望を明らかにする。

③⑤ 『再生可能エネルギーと地域社会における絆づくりに関する比較研究』 2014年3月

法政大学人間環境学部教授 西城戸 誠

- 東日本大震災以降、エネルギー確保の重要性や需給の逼迫などに急速に関心が寄せられている。本研究では、「市民出資型再生可能エネルギー事業」が地域に対してどのような波及効果を及ぼしているのか、地域主導型の内発性を重視した「コミュニティ・パワー」の事業展開に着目した。多様な国内事例を取り上げ、事業をとりまく課題や方策を提言する。

③④ 『2011年東日本大震災下の中小企業再生と雇用問題

～広い社会的支援と阪神淡路大震災との比較の視点から～』 2014年1月

研究代表者：岩手大学人文社会科学部教授 田口 典男

- 東日本大震災の被災地の復興には、壊滅的な被害を受けた地元中小企業の再生と雇用問題が最優先の課題である。本研究では、復旧過程で浮かび上がった産業構造上の問題、今後の復興を担う地域の若者の就労の課題、企業再建のための幅広い支援活動等を調査した。また、阪神淡路大震災の復興取り組みとの比較により、本震災の特徴と課題を提言する。

③③ 『住民自治を基盤とする地域医療システムと自治体病院の再編

～北海道釧路市の救急医療システムの改革と市立釧路総合病院の経営再建～』 2013年11月

北海道医療大学看護福祉学部専任講師 櫻井 潤

- 近年、医療をめぐる問題として、夜間救急における医師不足や病床不足による受入不能の問題等がたびたび報道され、誰もが当事者になりうる状況にある。本研究では、釧路市の救急医療システム改革と市立釧路総合病院の再建に向けた取り組みを検証し、地元組織の主導性と住民自治に基づく公民協働が鍵となる持続可能な地域医療システムについて提言する。

全勞濟協會